

一般国道9号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

平ノ前遺跡

2019年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会



平ノ前遺跡全景（北東から）



平ノ前遺跡全景（南から）



金銅製歩搖付空玉

序

現在、一般国道9号の大田市久手町刺鹿から大田市静間町間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、大田・静間道路を平成24年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、文化財保護法に基づいて必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、大田・静間道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成28年度から平成29年度にかけて実施した大田市静間町に所在する平ノ前遺跡の調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では、弥生時代の水路や古墳時代の建物や水路などの遺構が見つかり、当時の海浜部における拠点的な集落遺跡の一つであることがわかりました。

本報告書がふるさと島根県の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成31年3月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 鈴木 祥弘

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成 28 年度から一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しています。本書は、平成 28 年度及び平成 29 年度に実施した平ノ前遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

今回の発掘調査では、静間川河口の氾濫原に展開する弥生時代前期末から後期前半にかけての灌漑水路や、古墳時代後期から終末期にかけて営まれた集落跡が発見されました。また、出土した大量の遺物の中には、金銅製歩搖付空玉など希少な遺物も出土しており、古墳時代には、祭祀が行われたと考えられます。

これらの調査成果は、島根県の歴史を明らかにする上で欠くことのできない貴重な成果であり、本書が地域の歴史や埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、静間まちづくりセンター、地元住民の皆様並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例　言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 28 年度および平成 29 年度に実施した一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、大田市静間町地内に所在する平ノ前遺跡の成果をとりまとめたものである。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成 28 年度　現地調査

〔事　務　局〕 萩 雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）、今岡一三（調査第一課長）

〔調査担当者〕 伊藤 智（調査第一課文化財保護主任）、園山 薫（同嘱託職員）、伊東 豊（調査第一課臨時職員）、幸村康子（同臨時職員）

平成 29 年度　現地調査・報告書作成

〔事　務　局〕 萩 雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聰（総務課長）、池淵俊一（管理課長）、今岡一三（企画幹）、守岡正司（調査第二課長）

〔調査担当者〕 大庭俊次（調査第一課長）、園山 薫（同嘱託職員）、内田律雄（同臨時職員）、坂根健悦（同臨時職員）、米田美江子（同臨時職員）

〔報告書作成担当者〕 伊藤 智（調査第二課企画員）、福田市子（同臨時職員）

平成 30 年度　報告書作成

〔事　務　局〕 植 真治（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聰（総務課長）、守岡正司（管理課長）、深田 浩（調査第一課長）

〔担　当　者〕 大庭俊次（企画幹）、伊藤 智（同調査第一課調査第一係企画員）、園山 薫（同嘱託職員）、角森玲子（同臨時職員）、片寄雪美（同臨時職員）

3. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々、関係機関から御指導、御協力をいただいた。（五十音順、所属・役職は当時）

〔指導者〕

大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、柳原博英（浜田市教育委員会文化振興課文化財係長）

笛生 衛（國學院大學神道文化学部教授）、中村唯史（島根県立三瓶自然館調整監）

野島智実（大田市教育委員会社会教育課主任）、花谷 浩（出雲市市民文化部学芸調整官）

松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘所長）、米田克彦（岡山県古代吉備文化センター総括主任）

〔協力者〕 静間まちづくりセンター

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、島根県教育委員会が平成 28 年度はトーワエンジニアリング株式会社に、平成 29 年度は石見銀山建設株式会社にそれぞれ委託した。

出土遺物の分析委託については、炭化材、木片の AMS 測定については、株式会社加速器分析研究所に委託して分析結果を第 5 章第 1 節として掲載した。小玉の分析については、独立

行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所田村朋美氏に依頼して、分析調査を実施し、調査結果を第5章第2節として掲載した。

出土遺物の保存処理については、金銅製歩掛付空玉及び、SD05で出土した一部の木器、木製品について、公益財団法人大阪市博物館協会に委託して実施した。

鍛冶関係遺物については、たたら研究会穴澤義功氏のご教示を得た。輸入陶磁については、NPO法人アジア考古学研究所田中克子氏のご教示を得た。金銅製歩掛け付空玉については、関西大学文学部准教授井上主税氏のご教示を得た。

金銅製歩掛け付空玉の実測については、島根県古代文化センター松尾充晶氏の協力を得た。

5. 採図中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系X軸方向を指し、座標系のXY座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
6. 本書で使用した第2図は国土地理院発行の1/25,000地図を使用して作成したものである。
7. 本書に掲載した写真は、伊藤智、大庭俊次、園山薫が撮影した。金属製品のX線透過撮影については、島根県立古代出雲歴史博物館に依頼して実施した。
8. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、調査担当者が行い、遺物・遺構の浄書は整理作業員が行った。
9. 本書の執筆は、第1章及び第2章を大庭が執筆した。第3章は、伊藤と大庭が執筆した。第4章及び第6章については、伊藤と園山が執筆した。文責の詳細は、文章末に氏名を記載して示した。第5章は、自然科学的分析として依頼原稿で構成した。全体の編集は伊藤が行った。
10. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡 例

1. 本文、図版中の表に用いた遺構略号は次のとおりである。
SI：竪穴建物、SB：堀立柱建物、SD：溝、SX：墓、その他の遺構、SK：土坑、P：ピット
2. 本文、採図、写真図版中の遺物番号は一致する。

松本岩雄 1991 「出雲・隠岐地域編」「石見編」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社

松山智弘 2000 「小谷式再検討・出雲平野における新資料から」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相・大東式の再検討」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

田迎昭三 1981 「須恵器大成」角川書店

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

島根県古代文化センター 2015 「益田市内における古墳の調査 金山古墳・鶴ノ鼻古墳群・北長迫横穴墓群」

岡田裕之・土器検討グループ 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究 -古代山陰地域の土器様相と領域性-』 島根県古代文化センター

柳原博英 2010 「石見国の須恵器生産と出雲產須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究 -古代山陰地域の土器様相と領域性-』 島根県古代文化センター

太宰府市教育委員会 2000 「大宰府坊路XV -陶磁器分類編-」

国立歴史民俗資料館 1993 「日本出土の貿易陶磁-西日本編-」

中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

島根県古代文化センター 2006 「島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成」

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 調査の経過	6
第1節 平成28年度の調査	6
第2節 平成29年度の調査	6
第4章 調査の概要	9
第1節 調査区の土層	9
第2節 調査区設定	11
第3節 調査区の遺構	11
第4節 検出した遺構	19
竪穴建物	19
掘立柱建物	28
溝状遺構	38
土坑	113
炭溜り	117
ピット	120
第5節 包含層出土遺物	121
第5章 自然科学的分析	168
第1節 平ノ前遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	168
第2節 平ノ前遺跡出土小玉の自然科学的調査	172
第6章 総括	174
第1節 主な遺構	174
第2節 主な遺物	177
第3節 遺跡の変遷	179
第4節 まとめ	184

挿図目次

第 1 図 平ノ前遺跡の位置	1	第 37 図 SD05（新）出土遺物実測図(8)	50
第 2 図 平ノ前遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第 38 図 SD05（古）北側実測図	52
第 3 図 平ノ前遺跡の位置及びトレンチ配置図 ..	7	第 39 図 SD05（古）南側実測図	53
第 4 図 平ノ前遺跡遺構配置図	10	第 40 図 SD05（古）水利施設実測図(1)	54
第 5 図 建物跡及びピット配置図(1)	12	第 41 図 SD05（古）水利施設実測図(2)	55
第 6 図 建物跡及びピット配置図(2)	13	第 42 図 SD05（古）水利施設実測図(3)	56
第 7 図 平ノ前遺跡南東壁土層図(1)	14	第 43 図 SD05（古）水利施設実測図(4)	57
第 8 図 平ノ前遺跡南東壁土層図(2)	15	第 44 図 SD05（古）礫溜り実測図	58
第 9 図 平ノ前遺跡北西壁土層図	16	第 45 図 SD05（古）出土遺物実測図(1)	59
第 10 図 SI01 実測図	20	第 46 図 SD05（古）出土遺物実測図(2)	60
第 11 図 SI01 出土遺物実測図	21	第 47 図 SD05（古）出土遺物実測図(3)	61
第 12 図 SI02 実測図	22	第 48 図 SD05（古）出土遺物実測図(4)	62
第 13 図 SI02 出土遺物実測図	23	第 49 図 SD05（古）出土遺物実測図(5)	63
第 14 図 SI03 実測図	24	第 50 図 SD05（古）出土遺物実測図(6)	64
第 15 図 SI03 出土遺物実測図	25	第 51 図 SD05（古）出土遺物実測図(7)	65
第 16 図 SI04 実測図	26	第 52 図 SD05（古）出土遺物実測図(8)	66
第 17 図 SI04 出土遺物実測図	26	第 53 図 SD10 出土遺物実測図	68
第 18 図 SI05 実測図	27	第 54 図 SD17 実測図	70
第 19 図 SI05 出土遺物実測図	27	第 55 図 SD17 土器溜り B 群遺物出土状況図 ..	71
第 20 図 SB01 実測図	29	第 56 図 平ノ前遺跡 4 ライン土層図	72
第 21 図 SB02 実測図	30	第 57 図 SD17 土器溜り B-1 群出土遺物実測図(1) ..	75
第 22 図 SB03 実測図	31	第 58 図 SD17 土器溜り B-1 群出土遺物実測図(2) ..	76
第 23 図 SB04 実測図	32	第 59 図 SD17 土器溜り B-2.B-3 群出土遺物実測図 ..	77
第 24 図 SB05 実測図	34	第 60 図 SD17 土器溜り B-4 群出土遺物実測図 ..	78
第 25 図 SB07 実測図	36	第 61 図 SD17 土器溜り B-5 群出土遺物実測図 ..	79
第 26 図 据立柱建物出土遺物実測図	37	第 62 図 SD17 土器溜り B-6 群出土遺物実測図 ..	80
第 27 図 SD05、10 実測図	40	第 63 図 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(1) ..	81
第 28 図 SD05、10 土層断面実測図	41	第 64 図 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(2) ..	82
第 29 図 SD05（新）実測図	42	第 65 図 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(3) ..	83
第 30 図 SD05（新）出土遺物実測図(1)	43	第 66 図 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(4) ..	84
第 31 図 SD05（新）出土遺物実測図(2)	44	第 67 国 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(5) ..	85
第 32 図 SD05（新）出土遺物実測図(3)	45	第 68 国 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(6) ..	86
第 33 図 SD05（新）出土遺物実測図(4)	46	第 69 国 SD17 土器溜り B 群出土遺物実測図(7) ..	87
第 34 国 SD05（新）出土遺物実測図(5)	47	第 70 国 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(1) ..	90
第 35 国 SD05（新）出土遺物実測図(6)	48	第 71 国 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(2) ..	91
第 36 国 SD05（新）出土遺物実測図(7)	49	第 72 国 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(3) ..	92

第 73 図 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(4) ... 93	第 111 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 層) (5) ... 128
第 74 図 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(5) ... 94	第 112 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 層) (6) ... 129
第 75 図 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(6) ... 95	第 113 図 出土遺物実測図 (第 IV ~ VII、IX 層) (1) 131
第 76 図 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(7) ... 96	第 114 図 出土遺物実測図 (第 IV ~ VII、IX 層) (2) 132
第 77 図 SD17 土器溜り A 群出土遺物実測図(8) ... 97	第 115 図 出土遺物実測図 (第 IV ~ VII、IX 層) (3) 133
第 78 図 SD17 土器溜り C 群出土遺物実測図(1) ... 98	第 116 図 出土遺物実測図 (第 II 層) (1) 134
第 79 図 SD17 土器溜り C 群出土遺物実測図(2) ... 99	第 117 図 出土遺物実測図 (第 II 層) (2) 135
第 80 図 SD17 土器溜り D 群出土遺物実測図 ... 100	第 118 図 出土遺物実測図 (出土層位不明) (1) .. 136
第 81 図 SD17 出土玉製品実測図 101	第 119 図 出土遺物実測図 (出土層位不明) (2) .. 137
第 82 図 SD17 出土遺物実測図(1) 102	第 120 図 出土遺物実測図 (出土層位不明) (3) .. 138
第 83 図 SD17 出土遺物実測図(2) 103	第 121 図 出土遺物実測図 (出土層位不明) (4) .. 139
第 84 図 SD04 実測図 106	第 122 図 出土生産関係遺物実測図 (鍛冶) 141
第 85 図 SD04 出土遺物実測図(1) 107	第 123 図 出土生産関係遺物実測図 (玉作) (1) .. 142
第 86 図 SD04 出土遺物実測図(2) 108	第 124 図 出土生産関係遺物実測図 (玉作) (2) .. 143
第 87 図 SD13 実測図 109	第 125 図 平ノ前遺跡周辺地形図 181
第 88 図 SD13 出土遺物実測図 109	第 126 図 平ノ前遺跡遺構配置図 (弥生時代) 182
第 89 図 SD06、07 実測図 110	第 127 図 平ノ前遺跡遺構配置図 (古墳時代前期~後期: 6 世紀後半) 182
第 90 図 SD06 出土遺物実測図 111	第 128 図 平ノ前遺跡遺構配置図 (6 世紀末~7 世紀前半) 183
第 91 図 SD14 実測図 112	第 129 図 平ノ前遺跡遺構配置図 (7 世紀後半以降) 183
第 92 図 SD09 実測図 113	
第 93 図 SD01 実測図 114	
第 94 図 SD01 出土遺物実測図 115	
第 95 図 SK01 実測図 116	
第 96 図 SK12 実測図 116	
第 97 図 SK05 実測図 117	
第 98 図 SK05 出土遺物実測図 117	
第 99 図 SK02、07 実測図 118	
第 100 図 SK07 出土遺物実測図 118	
第 101 図 SD11、12、炭溜り 1・2・3 実測図 .. 119	
第 102 図 ピット 316 実測図 120	
第 103 図 ピット 316 出土遺物実測図 120	
第 104 図 ピット出土遺物実測図 121	
第 105 図 出土遺物実測図 (第 VII 層より下層) (1) 123	
第 106 図 出土遺物実測図 (第 VII 層より下層) (2) 123	
第 107 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 層) (1) ... 124	
第 108 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 層) (2) ... 125	
第 109 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 层) (3) ... 126	
第 110 図 出土遺物実測図 (第 VI、VII 层) (4) ... 127	

表目次

第 1 表 大田静間道路事業予定地内の埋蔵文化財 包蔵地 2
第 2 表 出土土器観察表 145
第 3 表 出土石製品観察表 160
第 4 表 出土玉製品観察表 162
第 5 表 出土獸骨観察表 163
第 6 表 出土金属製品観察表 163
第 7 表 出土鍛冶関係遺物観察表 163
第 8 表 出土木製品観察表 164

写真図版目次

- 巻頭図版 1 平ノ前遺跡全景（北東から）
- 巻頭図版 2 平ノ前遺跡全景（南から）
金銅製歩搖付空玉
- 図版 1 1. SI01 完掘状況（煙道除く）（東から）
2. SI01 窟断面（北東から）
3. SI01 窟調査状況（北東から）
4. SI01 遺物出土状況 奥に SI03（東から）
5. SI01 煙道縦断面（南東から）
- 図版 2 1. SI02、SI05 完掘・SI05 周辺検出（南から）
2. SI02、05 検出状況（南から）
3. SI02 完掘状況（北から）
4. SI02 炭範囲、遺物出土状況（東から）
5. SI05 西側完掘状況（東から）
- 図版 3 1. SI03 完掘状況（北から）
2. SI04 完掘状況（南から）
- 図版 4 1. SB01 完掘状況（南から）
2. SB02 完掘状況（西上から）
- 図版 5 1. SB02 完掘状況（南から）
2. SB03 完掘状況（南から）
- 図版 6 1. P64(SB04) 半裁状況
2. P64(SB04) 完掘状況
3. P77(SB04) 半裁状況
4. P77(SB04) 完掘状況
5. P86(SB04) 半裁状況
6. P86(SB04) 完掘状況
7. P91(SB04) 完掘状況
8. P94(SB04) 完掘状況
- 図版 7 1. SB04 完掘状況（南から）
2. SB04 完掘状況（西から）
- 図版 8 1. SB05 完掘状況（南から）
2. 据立柱建物群（西から）
- 図版 9 1. SB07 完掘状況（西から）
2. P1(SB07) 半裁状況
3. P1(SB07) 完掘状況（東から）
4. P1(SB07) 柱根
5. P5(SB07) 半裁状況
- 図版 10 1. SD05 南側検出状況（南東から）
2. SD05（新）北側上層遺物出土状況（北西から）
- 図版 11 1. SD05（新）北側上層遺物出土状況
2. SD05（新）出土桶（東から）
3. SD05（新）出土線刻石
4. SD05（新）北側下層遺物出土状況（南東から）
- 図版 12 1. SD05（古）南側調査状況（南東から）
2. SD05 トレンチ A 土層断面（南東から）
- 図版 13 1. SD05（古）北側完掘状況（南から）
2. SD05（古）北側水利施設（北から）
- 図版 14 1. SD05（古）矢板、杭列 1（北から）
2. SD05（古）矢板、杭列 2～6（南東から）
- 図版 15 1. SD05（古）矢板、杭列 2・3（西から）
2. SD05（古）矢板、杭列 2 部分（南東から）
- 図版 16 1. SD05（古）矢板、杭列 2～5（北から）
2. SD05（古）矢板、杭列 4（西から）
3. SD05（古）矢板、杭列 5（南から）
4. SD05（古）矢板、杭列 4・5（南から）
- 図版 17 1. SD05（古）矢板、杭列 3～5（北から）
2. SD05（古）矢板、杭列 2～6（北から）
3. SD05（古）出土壺
4. SD05（古）礫溜り（東から）
5. トレンチ B (SD05 部分、SD10) 土層断面
- 図版 18 1. SD05（古）北側、SD10 北側完掘状況（南から）
2. SD05（古）南側完掘状況（西から）
- 図版 19 1. SD17 南東壁土層断面（北西から）
2. SD17 4 ライン土層断面（南西から）
- 図版 20 1. SD17 調査風景

2. SD17 大木周辺調査状況
- 図版 21 1. SD17 金銅製歩搖付空玉出土地点周辺（西から）
 2. SD17 出土金銅製歩搖付空玉（西から）
 3. SD17 出土勾玉
 4. SD17 出土竈、甕（北東から）
 5. SD17 遺物出土状況（北から）
- 図版 22 1. SD17 南側遺物出土状況（北から）
 2. SD17 調査終了状況（北から）
- 図版 23 1. SD04（南から）
 2. SD04 出土木製品①（南から）
 3. SD04 出土木製品②（南から）
- 図版 24 1. SD06 遺物出土状況（東から）
 2. SD06、07 完掘状況（南東から）
- 図版 25 1. SD01 完掘状況（南から）
 2. SD01 東側落ち込み（北東から）
- 図版 26 1. SK01 周辺炭溜り遺物出土状況（南西から）
 2. SK01、炭溜り 1～3 検出状況（西から）
- 図版 27 1. SK01 完掘状況
 2. SK02 完掘状況
 3. SK05 完掘状況（南東から）
 4. SK07 完掘状況
 5. P316 完掘状況
- 図版 28 1. S101、02 出土遺物
 2. S101 出土遺物
- 図版 29 1. S102 出土遺物
 2. S103、04 出土遺物
- 図版 30 1. S103 出土遺物
 2. S104、05 出土遺物
- 図版 31 1. 据立柱建物出土遺物
 2. SD05（新）出土遺物(1)
- 図版 32 1. SD05（新）出土遺物(2)
 2. SD05（新）出土遺物(3)
- 図版 33 1. SD05（新）出土遺物(4)
 2. SD05（古）出土遺物(1)
- 図版 34 1. SD05（古）出土遺物(2)
- 図版 35 1. SD10 出土遺物
2. SD17 上器溜り B-1、B-2 群出土遺物
- 図版 36 1. SD17 上器溜り B-1、B-2、B-3 群出土遺物
- 図版 37 1. SD17 上器溜り B-4、B-5、B-6 群出土遺物
- 図版 38 1. SD17 上器溜り B-5、B-6 群出土遺物
- 図版 39 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(1)
- 図版 40 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(2)
- 図版 41 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(3)
 2. SD17 上器溜り B 群出土遺物(4)
- 図版 42 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(5)
 2. SD17 上器溜り B 群出土遺物(6)
- 図版 43 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(7)
 2. SD17 上器溜り B 群出土遺物(8)
- 図版 44 1. SD17 上器溜り B 群出土遺物(9)
- 図版 45 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(1)
- 図版 46 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(2)
 2. SD17 上器溜り A 群出土遺物(3)
- 図版 47 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(4)
- 図版 48 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(5)
 2. SD17 上器溜り A 群出土遺物(6)
- 図版 49 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(7)
- 図版 50 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(8)
 2. SD17 上器溜り A 群出土遺物(9)
- 図版 51 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(10)
- 図版 52 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(11)
- 図版 53 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(12)
- 図版 54 1. SD17 上器溜り A 群出土遺物(13)
- 図版 55 1. SD17 上器溜り C 群出土遺物
- 図版 56 1. SD17 上器溜り C 群・D 群出土遺物
- 図版 57 1. SD17 上器溜り B 群出土金銅製歩搖付空玉
- 図版 58 1. SD17 出土玉製品
 2. SD04、06、13 出土遺物
- 図版 59 1. SD06 出土遺物
 2. SD01、ピット 316、ピット出土遺物
- 図版 60 1. SK05、07 出土遺物
 2. ピット出土遺物

- 図版 61 1. 第VII層より下層・第VI、VII層出土遺物(1)
- 図版 62 1. 第VI、VII層出土遺物(2)
- 図版 63 1. 第VI、VII層出土遺物(3)
2. 第VI、VII層出土遺物(4)
- 図版 64 1. 第VI、VII層出土遺物(5)
2. 第VI、VII層出土遺物(6)
- 図版 65 1. 第VI、VII層出土遺物(7)
- 図版 66 1. 第VI、VII層出土遺物(8)
- 図版 67 1. 第IV～VII、IX層出土遺物(1)
- 図版 68 1. 第IV～VII、IX層出土遺物(2)
2. 第IV～VII、IX層出土遺物(3)
- 図版 69 1. 第IV～VII、IX層出土遺物(4)
2. 第IV～VII、IX層出土遺物(5)
- 図版 70 1. 第II層出土遺物(1) (内)
2. 第II層出土遺物(1) (外)
- 図版 71 1. 第II層出土遺物(2)
2. 第II層出土遺物(3)
出土層位不明遺物(1)
- 図版 72 1. 出土層位不明遺物(2)
2. 出土層位不明遺物(3)
- 図版 73 1. 出土層位不明遺物(4)
2. 出土層位不明遺物(5)
- 図版 74 1. 出土層位不明遺物(6)
- 図版 75 1. 生産関係遺物（鍛冶）
- 図版 76 1. 生産関係遺物（玉作）(1) A面
2. 生産関係遺物（玉作）(1) B面
- 図版 77 1. 製鉄関係遺物（玉作）(2) A面
2. 製鉄関係遺物（玉作）(2) B面
- 図版 78 1. 捩立柱建物、SD05（新）出土遺物
(1)
- 図版 79 1. SD05（新）出土遺物(2)
- 図版 80 1. SD05（新）出土遺物(3)
- 図版 81 1. SD05（新）出土遺物(4)
- 図版 82 1. SD05（古）出土遺物(1)
- 図版 83 1. SD05（古）出土遺物(2)
- 図版 84 1. SD05（古）出土遺物(3)
- 図版 85 1. SD05（古）出土遺物(4)

- 図版 86 1. SD17 出土遺物(1)
- 図版 87 1. SD17 出土遺物(2)
- 図版 88 1. SD04 出土遺物(1)
- 図版 89 1. SD04 出土遺物(2)
- 図版 90 1. 第VII層より下層・第VI、VII層出土遺物
2. 写真掲載のみ出土遺物(1)
- 図版 91 1. 写真掲載のみ出土遺物(2)
2. 出土金属製品X線透過画像

本文写真目次

- | | |
|----------------------------------|----|
| 写真 1 平ノ前遺跡周辺航空写真 | 18 |
| 写真 2 平ノ前遺跡 SD05(古) 桁抜き取り作業 | 68 |

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ主要幹線道路である。このうち、島根県大田市周辺では急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が多発しやすい状況にある。通行止め時には大幅な迂回が必要となるなど、日常生活及び経済活動に必要な交通機能が損なわれ、主要幹線道路としての機能に支障をきたしているところであった。こうした状況のもと交通混雑の緩和及び災害時の緊急連絡道路を確保するために、大田市久手町から大田市静間町に至る延長5.0kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成24年度から「大田・静間道路」として事業着手されている。

この計画・事業化にあたり、平成25年2月8日付け国中整松調設第106号及び平成26年2月19日付け国中整松調設第94号で国土交通省から島根県教育委員会に対して事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受け島根県教育委員会は大田市教育委員会の協力の下、2度の分布調査を実施した結果、6箇所の遺跡と39箇所の要注意箇所を確認し、平成26年5月13日付け島教文第159号で国土交通省に回答した。

これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で適宜協議が行われ、事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な検討を行ってきた。事業の早期推進と調査体制を強化するため、島根県教育委員会は大田市教育委員会と協議を行い、大田市が国道9号の交通状況改善のため早期の開通を働きかけてきた地元自治体として調査に協力することとなった。それを受け、大田市教育委員会は平成26年度に4箇所の試掘確認調査を実施した。その結果に基づいて平成27年4月に文化財保護法第94条第1項に基づく発掘調査実施の勧告が行われた。大田市教育委員会は栗林B遺跡及び鯛淵遺跡の発掘調査を実施して、すでに報告書が刊行されている。

平成27年度から調査は本格化し、島根県教育委員会は22箇所の試掘確認調査を行って、7箇所の遺跡を確認した。この中に平ノ前遺跡や静間城跡が含まれており、平ノ前遺跡においては、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターおよび大田市教育委員会によって分担して試掘確認調査が実施



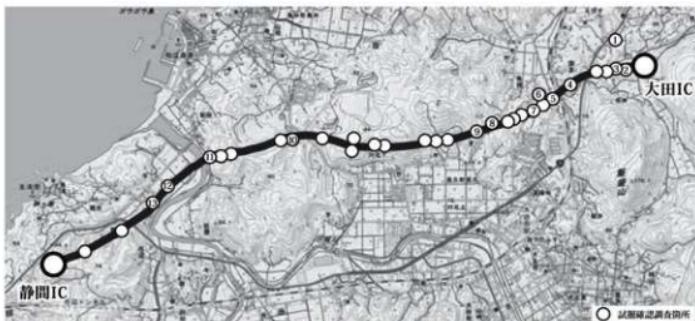
第1図 平ノ前遺跡の位置

された。この事例確認調査の結果に基づき、平成28年3月10日付け国中整松一官第277号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対して平成28年3月10日付け島教文財第120号の111で島根県教育委員会教育長から記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

上記の法的手続きを基づいて、島根県教育委員会では平成28年度から事業予定地内の発掘調査を開始することとなり、本書掲載遺跡である平ノ前遺跡と静間城跡の2箇所の発掘調査と3か所の試掘確認調査を実施した。文化財保護法第99条第1項による通知は、平成28年5月6日付け島教理第99号により埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて提出した。

現地調査終了後、平成29年2月17日付け島教文財第969号により、島根県教育委員会教育長から松江国道事務所長あて終了報告を提出した。

平成29年度は、文化財保護法第99条第1項による通知を、平成29年9月15日付け島教理第276号により埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて提出し、発掘調査を実施した。現地調査終了後、平成30年3月30日付け島教文財第192号の20号により、島根県教育委員会教育長から松江国道事務所長あて終了報告を提出した。



No.	遺跡名	所在地	種別	調査
①	諸友大師山横穴IV号穴	大田市久手町	横穴墓	平成29年度
②	奥市井遺跡	大田市久手町	集落跡	平成28年度(大田市教育委員会)
③	諸友越峠遺跡	大田市久手町	集落跡	平成28年度(大田市教育委員会)
④	諸友西横穴墓群	大田市久手町	横穴墓	-(平成29年度試掘確認調査)
⑤	栗林B遺跡	大田市久手町	散布地	平成27年度(大田市教育委員会)
⑥	栗林C遺跡	大田市久手町		-(平成26年度試掘確認調査)
⑦	栗林A遺跡	大田市久手町		-(平成26年度試掘確認調査)
⑧	尾ノ上遺跡	大田市鳥井町	集落跡	平成29年度
⑨	御堂谷遺跡	大田市鳥井町・長久町	集落跡	平成29年度
⑩	桜田遺跡	大田市長久町	横穴墓	平成29・30年度
⑪	觸測遺跡	大田市静間町	集落跡	平成27年度(大田市教育委員会)
⑫	平ノ前遺跡	大田市静間町	散在地	平成28・29年度
⑬	静間城跡	大田市静間町	城跡	平成28年度

第1表 大田静間道路事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

島根県大田市は、東西に長い島根県のほぼ中央に位置し、南には国立公園三瓶山や大江高山の火山群があり、北は日本海に面している。三瓶山と大江高山火山群の間を流れて日本海に注ぐ三瓶川や静間川の河口に沖積平野が認められ、海岸部には砂丘が発達している。

平ノ前遺跡は、大田市静間町の静間川河口付近の左岸に位置する。標高約5mの低地にあって静間川の氾濫原に形成された沖積平野の一角を占め、静間城の丘陵の東斜面に接して展開する。

静間川の河口は、江戸時代に付け替えられたものであり、それ以前は鳥井方面に注いでいた。当時の河口付近の流路について詳細な検討はなされていないが、和江と鷺ノ巣境界付近に河口が存在したものと推測される。しかし、弥生時代は海侵がなく、現在とほとんど変わらない地形であったと考えられる。平ノ前遺跡は現在の河口からも若干の距離があり、河川流路と遺跡との位置関係は現在とほぼ変わらないものと考えられる。一方、静間川右岸を最西端とする鳥井丘陵では、鳥井南遺跡や御堂谷遺跡など弥生時代前期以来多様な遺跡が展開する。

旧石器・縄文時代

大田市域では旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていないが、平成26年度に発掘調査が行われた中尾H遺跡（4区）では、縄文時代早期から草創期に遡る可能性のある尖頭器が出土している。今まで大田市域は三瓶山の厚い火山灰層に覆われているため旧石器時代の遺跡を検出することは困難だと考えられてきた中で、今後、資料の増加が期待される事例といえる。

縄文時代の遺跡もまだ少ないものの、近年の調査量増加に伴い遺跡の発見も急増している。中尾H遺跡では上記の尖頭器の他に多量の縄文土器も確認されており、後期が中心を占めるが、前期・中期に遡る土器も含まれていた。この他に線刻によって絵を描いたとみられる石器や、大型石棒なども認められ、当時の精神世界を垣間見ることができる資料として注目される。

弥生時代

弥生時代になると遺跡は増加する傾向にある。静間川下流域の平野部には前期の土器が見つかった土江遺跡や八日市遺跡などが存在している。平成28年度に発掘調査が行われた栗林B遺跡では前期の河道2本が検出され、河道内から環状杭列が確認されていることから、周辺に集落が営まれていたことが想定されている。中期になると鶴山遺跡で土器が確認され、鳥井南遺跡では弥生時代中期から古墳時代後期にかけての大規模な集落跡が発見されている。弥生時代の遺構には、焼失住居が含まれているほか、塩町式土器が多数出土していることから、備後北部との交流が推測される。また、後期の竪穴建物からは鉄製鋤先とともに多量の土器も出土している。本書で報告する平ノ前遺跡においても前期末から後期前半の灌漑水路を検出しており、鳥井南遺跡が所在する鳥井丘陵を中心としてその東西の沖積平野は、周辺他地域に比べて、最も早く弥生社会に入った地域といえる。

古墳時代

古墳時代の集落跡としては、平ノ前遺跡、鳥井南遺跡、市井深田遺跡などが知られている。本書所収の平ノ前遺跡では、前期から後期にかけての大型建物を含む集落跡と灌漑水路、金銅製歩掛け玉等が出土する祭祀跡が検出された。鳥井南遺跡では人形や武器形、鏡、玉などの祭祀に関する土製模造品が出土していることが注目される。市井深田遺跡は丘陵部に営まれた古墳時代後期から古代の集落跡で、竪穴建物や掘立柱建物を建てた加工段が多数見つかっている。

また、古墳時代の大田市域は、石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯として知られている。特に多く分布しているのは波根湖周辺の丘陵部であるが、海に面した静間町でも平山横穴や近藤浜横穴、柿田立目後横穴群などが存在している。古墳としては垂水古墳の他に鳥井南遺跡でも規模は小さいものの、横穴式石室を有する古墳が数基確認されている。

古代

平安時代になると静間郷の地名がみられる。現在の大田市のうち、静間町と五十猛町、大屋町、あるいは、静間町と大屋町を併せて石見国安濃郡の北西部に静間郷が設置され、後に邇摩郡に入る。

古代の遺跡としては、市井深田遺跡の他に鰐渕遺跡などが知られるようになる。平ノ前遺跡でも漆付着土器や墨書き土器なども確認されており、上述した古墳時代と併せて古代においても静間川下流域で重要な位置を占めていたものと推測される。鰐渕遺跡は平ノ前遺跡同様、静間川下流域に所在しており、柱穴群や溝などが確認されている。遺物には刻書・墨書き土器や土馬、漆付着土器など、官衙的な特色をもつ土器も含まれていた。その立地から古代の交通や河川管理上に必要な地方官衙的な役割を担っていた可能性が高いと考えられており、静間川対岸に位置する平ノ前遺跡と併せて静間川下流域の古代の様相が解明されることが期待される。市井深田遺跡では海岸部では類例の少ない造り付け壺を持つ竪穴建物も発見されており、古代における山間部と海岸部の交流を窺い知ることができる資料といえる。また、中尾H遺跡（1・2区）からは「二斗一升二合」「石口」と読める木簡が出土しており、海産物のカメノテを貢献する際の荷札木簡と推定されている。この他に円面鏡や平安時代初期の須恵器が出土した八石遺跡など、大田市域に官衙に関連する遺跡が多数存在することは注目されよう。

中世・近世

中世においても、邇摩郡の中に静間郷の地名がみられ、現在の大田市静間町と五十猛町、大屋町を合わせた地域と推測されている。戦国期になって石見銀山の開発が本格化すると、銀山の支配を巡って大内氏と尼子氏が争うことになり、大田市東部では各所に山城や砦が築かれた。平ノ前遺跡周辺では稲用城が築かれている。また、平ノ前遺跡西側の小丘陵には、平成28年度に調査された15世紀後葉から16世紀前葉の山城である静間城跡が所在する。

近世に入ると、静間川河口では前原家による静間鉛の操業が開始され、明治末まで稼業されている。現地には金山彦を祀った祠の跡が残り、周辺の家々では石垣などに鉄滓や炉壁の破片が転用されている様子が窺える。

【参考文献】

角川書店 1991『角川日本地名大辞典 32 烏根県』

島根県教育委員会 1997『島根県中近世城館分布調査報告書（第1集）石見の城館』

島根県教育委員会 2013『門遺跡・高原遺跡1区・中尾H遺跡』

島根県教育委員会 2014『市井深田遺跡・荒横遺跡・鈴見B遺跡1区』

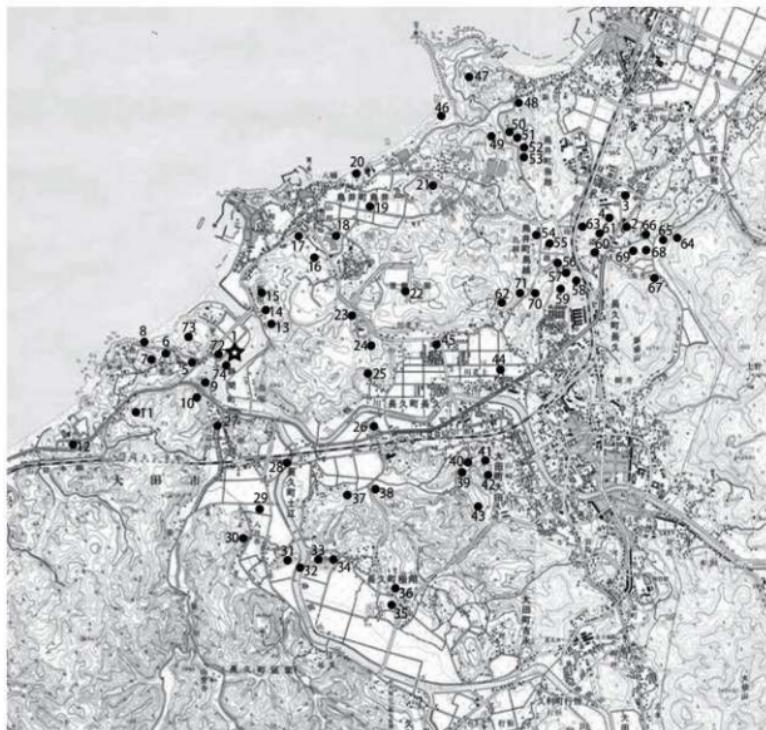
島根県教育委員会 2017『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』

島根県教育委員会 2018『静間城跡』

大田市教育委員会 2016『栗林B遺跡』

大田市教育委員会 2017『鰐渕遺跡』

大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 狼段原地区-』大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集



1. 平ノ前遺跡 2. 諸友大師山横穴墓IV群1号穴 3. 諸友大師山横穴墓I~III群 4. 二中横穴墓群
 5. 平遺跡 6. 近藤平遺跡 7. 垂水古墳 8. 近藤浜横穴墓 9. 柿田立目後横穴墓群 10. 竹下忠紀宅後横穴墓
 11. 垂水遺跡 12. 銚東遺跡 13. 鮎渕遺跡 14. 静間鉢 15. 渡瀬遺跡 16. 西鳥井遺跡 17. 山根遺跡
 18. 上山根遺跡 19. 北沢遺跡 20. 伝地山古墳 21. 大平横穴墓群 22. 鳥井南遺跡 23. 桜田遺跡
 24. 鳥井西遺跡 25. 淨土寺遺跡 26. 八石遺跡 27. 笹川遺跡 28. 土江遺跡 29. 八日市鉢
 30. 八日市横穴墓群 31. 第二八日市横穴墓群 32. 八日市遺跡 33. 稲用城 34. 稲用下遺跡
 35. 大迫横穴墓 36. 延里遺跡 37. 天主山横穴墓 38. 大道横穴墓 39. 宮の奥遺跡 40. 宮の奥横穴墓群
 41. 鶴山遺跡 42. 亀山横穴墓 43. 貝狼城跡 44. 中島遺跡 45. 野井神社遺跡 46. 大平A遺跡
 47. 石弩城跡 48. 追A遺跡 49. 追B遺跡 50. 追山田西横穴墓群 51. 山田横穴墓群 52. 追横穴墓群
 53. 追C遺跡 54. 烏越B遺跡 55. 中祖遺跡 56. 烏越C遺跡 57. 栗林C遺跡 58. 栗林B遺跡
 59. 栗林A遺跡 60. 諸友西横穴墓群 61. 山田庫夫宅裏横穴墓群 62. 御堂谷遺跡 63. 烏越A遺跡
 64. 市井深田遺跡 65. 中尾H遺跡 66. 中尾横穴墓 67. 市井遺跡 68. 奥市井遺跡 69. 諸友越畠遺跡
 70. 諸友西ヶ迫遺跡 71. 尾ノ上遺跡 72. 網引原遺跡 73. 平山横穴墓 74. 静間城跡

第2図 平ノ前遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章 調査の経過

第1節 平成28年度の調査

平成28年5月12日に調査着手し、平成28年12月13日まで調査を実施し、終了した。調査面積は3100m²である。

発掘調査は、旧水田の表土部分を重機により掘削して除去し、遺構面の検出、包含層掘削を実施した。近世以降の包含層もしくは擾乱層を除去した後は、山側である調査区の南西付近はピットなどの遺構が検出されたため、遺構の調査を開始した。川側である北東部は弥生時代から近世の遺物包含層が確認され包含層掘削を実施した。調査区の南西側では、建物跡と考えられるピットが多数確認され、最終的に5棟の掘立柱建物が検出された。遺物も多く出土しており遺跡の性格を検討するために9月12日に大橋泰夫氏、9月28日に花谷浩氏の調査指導を受けた。10月15日には静間城跡と合同で現地説明会を実施し、100名の参加を得た。また調査区の堆積状況を確認するために10月25日に中村唯史氏の調査指導を受けた。10月17日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。掘立柱建物を検出した下層にも遺構面が確認されたため、部分的に下層の調査を開始した。弥生時代の水路、古墳時代の建物、水路、などを確認して12月13日に調査を終了した。

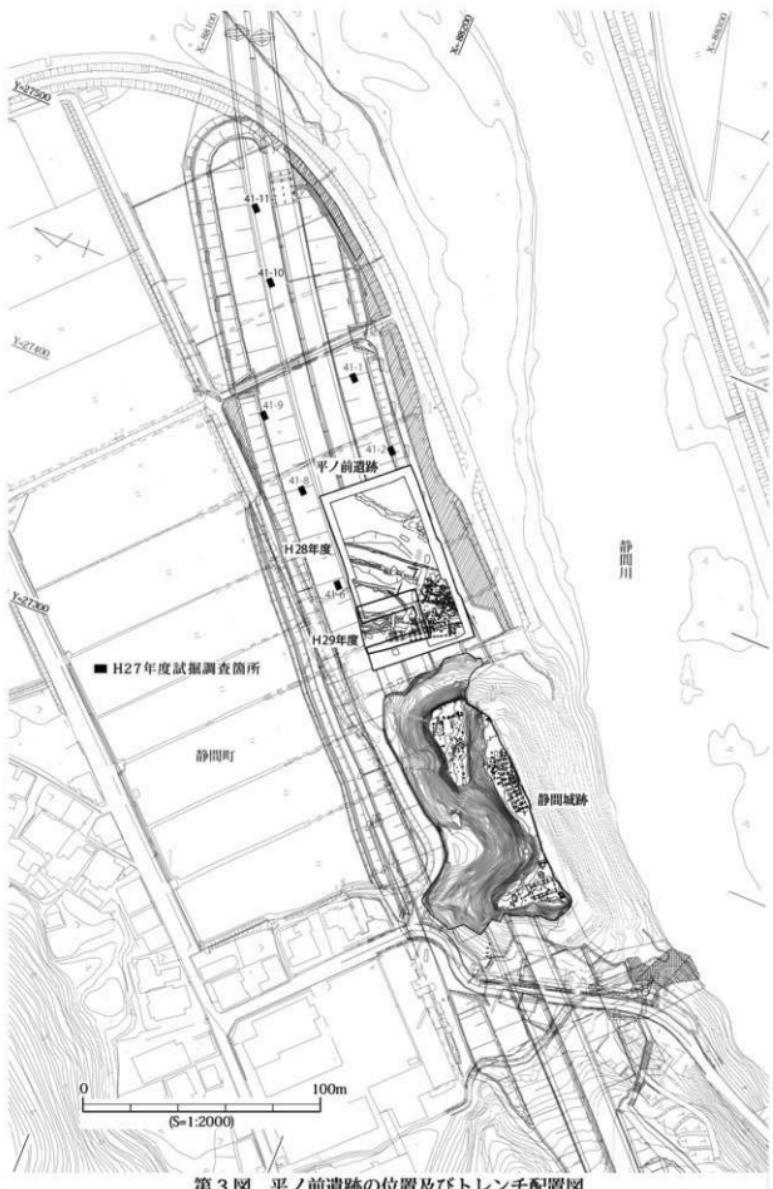
遺構図の図化に当たっては、主にコンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE（サイト）V」を用いて測量し、出力後補正を行った。また、出土遺物についても必要なものは遺跡調査システムで出土位置を記録した上で取り上げた。その他の遺物は、グリッドを設定して土層を確認しながら取り上げた。調査状況や遺構検出状況の記録写真、遺物の出土状況写真については、原則として35mm一眼レフデジタルカメラで撮影し、必要に応じて6×7判の中型フィルムカメラによる撮影も行っている。また、ラジコンヘリにより、調査状況及び周辺の主要地形や風景を取り込んだ空中写真撮影を行った。

第2節 平成29年度の調査

平成29年10月25日に調査着手し、平成29年12月28日まで現地調査を実施し、終了した。調査面積は520m²である。

発掘調査は、旧水田の不透水層まで重機を使用して除去し、遺物包含層を人力によって掘削した後、遺構検出を行って、検出した遺構の出土状況の記録をとりながら遺構掘削へと手順を進めていった。すでに、前年度調査区は、本体工事のための広大な排土置き場とされ、現地表上にうずたかく台形状に排土が積まれていた。このため、調査区はこの排土と静間城跡にはさまれて非常に水はけが悪い状態となっており、隣接する調査区外に沈砂池を深く掘って排水を促進しようとしたが、冬に向かう当地の不天候には間に合わず、遺構掘削中度数の水没に見舞われ、非効率な調査となった部分は否めない。

調査の結果、前年度の続きの遺構である弥生時代の水路と古墳時代の建物及びピットを検出した。土層堆積状況については、調査区北西壁面に主要遺構（水路と遺構の基盤となる層）の断面が表れており、これに沿って先行するサブトレーナーで下部の状況を確認しながら遺構検出及び掘削を行った。この間、平成29年12月6日には遺跡の古地形及び地質状況について、中村唯史氏に調査指導を受けた。河川の活動によって運び込まれた約7万年前に起きた三瓶山噴火の際の火山噴出物が



第3図 平ノ前遺跡の位置及びトレンチ配置図

静間川河口付近の氾濫原に堆積し、これが遺跡の基盤となっていること。調査区内の水路の検出レベルが4～5mとすると、静間川の水流を引き込むためには、相当遡った地点から分岐して流路を整備する必要があったのではないかということ。出土した石材、遺構の構築に使用された石材とも安山岩、デイサイト、流紋岩など遺跡周辺で産出されるものであり、遠くてもせいぜい刺庭や川合で産出されるものが混じっている程度であることなど指導を受けた。平成29年12月22日には、松本岩雄氏の総括的な調査指導を受け、流路の水利遺構の見方や記録の取り方について、また、各遺構から出土した遺物の観察から詳細な遺構の時期比定について指導があった。平成29年12月25日には、ラジコンヘリにより、水利施設を残した状態で調査状況及び周辺の主要地形や風景を取り込んだ空中写真撮影を行った。12月28日までに完掘して調査を終了した。

調査の記録に当たっては、平成28年度と同じ手法を用いた。

この後、遺物整理作業は、現地調査と並行して行い、平成28年度分については、平成29年度から本格的な報告書作成作業を開始した。遺物・遺構図面のトレース、写真画質その他調整、レイアウト、原稿執筆編集作業等については主にAdobe社製のCreative Cloudを用いてDTP方式で行った。

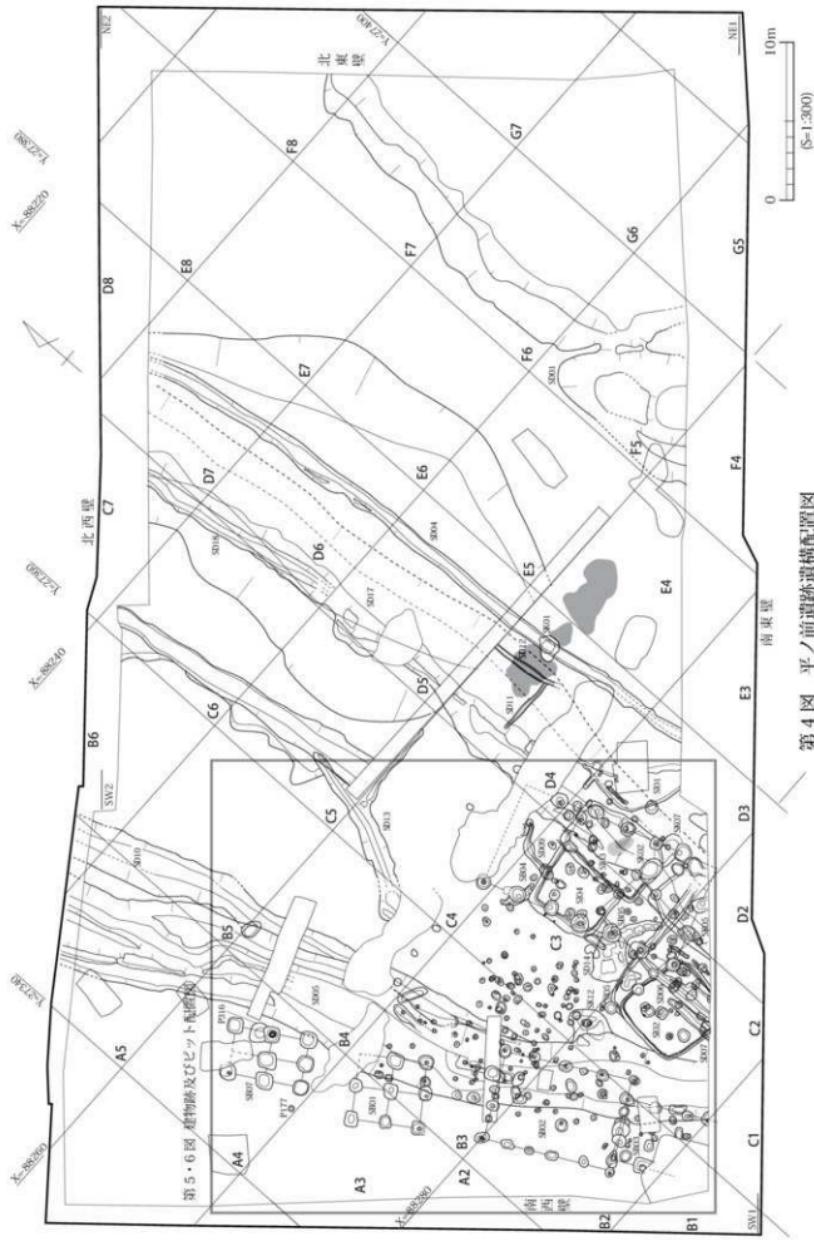
第4章 調査区の概要

第1節 調査区の土層

平ノ前遺跡は、標高約30mの静間城跡の立地する丘陵裾から広がる平坦面に位置しており、調査区の東側は静間川が日本海へと流れている。基本層序は、山側では丘陵部を形成している黄褐色粘質土を基盤としており（第8図XV層）、調査区の南西部ではその上に約7万年前の三瓶山火山堆積物の二次堆積層が堆積していると考えられる（第8、9図XIV層）。この基盤層上に、弥生時代の水路（SD05、10）が構築されている。しかしグリッドC-Dを分ける南北ラインあたりから東は後世の河川による影響と人為的な地形の改変の影響が多かったと考えられる。とくに古墳時代後半期（5世紀後半～7世紀後半頃）には、土石流や洪水砂の堆積や人為的な掘削や盛土による地業が行われたことにより、比較的短期間に大幅な地形変化があったと推測される（VI～XI層）。その後近世には全体を平準化するような地形改変が実施されたようで、南西の標高が高い部分は削平され、川側には盛土（第7～9図II層）が確認される。最終的には圃場整備が実施され、調査前の水田面となっている。

南東壁土層図（第7、8図）をさらに説明する。調査区北側に堆積しているXII層には、わずかであるが弥生時代前期頃と考えられる風化した遺物が含まれているので、弥生時代に形成された層と考えられる。古墳時代の水路（もしくは河道）であるSD17の土層は、下層に第XI層が堆積する。その上に洪水砂である第X層が堆積している。その後、水路として機能していた上層には第VII層が堆積する。SD17が埋まった後、第VIII層及び第X層を基盤として第VII層が堆積している。第VII層を基盤として古墳時代後期の竪穴建物が造られる。この層は炭化物を多く含む層を含んでおり、この時期に炭化物が生成される作業が近くで行われていたことが推測される。その上に第VI層が堆積している。この層はSI01、SI03、SI04、SD04、SD06や鍛冶関連の生産活動が開始された時期と対応していると考えられる。VI層は遺物や黄灰色粘質土塊を混合する部分があり、整地層に相当すると考えらえる。VII層及びVI層は、これを基盤とする遺構に重複するものがあることから、本来はさらに細別できようが、部分的に断続する層位もあったことから掘り込み面を確定し得なかった。第VI層を基盤として掘立柱建物SB04が建てられたとみられ、第VI-1層（黄褐色土）はSB04建設時の盛土であったと考えられる。また、第VII-33層は古墳時代後期から終末期にかけておきた土石流もしくは洪水による堆積と考えられる。第V層は12世紀前後の土師器を包含する層で、SD01に対応していると考えられる。なお、調査区北側の第IX層は弥生時代に堆積したと考えられる第X層の上に堆積しており、古墳時代後期の遺物を含んでいる。古墳時代後期に起こった土石流や洪水によるものと考えられるが、南側で確認される第X層の堆積と同時期であったかは不明である。

北西壁土層図（第9図）は基本的に南東壁土層図に対応している。ただし、上述のSD17上層の堆積としていた第VII層は、北西壁土層図ではSD17の堆積として確認しきれなかった。北西壁土層図における第VII層の堆積の最初の段階か、もしくは第VII-9層を途中で切るように北側に立ち上がる層境が本来どこかにあったと推測される。よって、北西壁土層図の第VII層はSD17上層が堆積する前後の時期に堆積した層と考えられる。土層の堆積状況からは、幾たびかの水害の痕跡と、水害後に形成された堆積部分を基盤とした建物や水路の構築など、人々の活動の痕跡がうかがえる。



第4図 平ノ前遺跡遺構配置図

第5・6図 植物跡及びヒツト類の分布

第2節 調査区の設定

重機掘削終了後の調査区は、ほぼ真西から真東に向かって緩く傾斜している様子が確認された。

グリッドの設定にあたっては、世界測地系の第III座標系に基づき、座標軸を合わせた一辺 10 m の区画（グリッド）とした。東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字として規定して、各グリッドは区画の南西交点のアルファベット及び数字をもってグリッド名とした（例：C3、D4）。

また、遺構に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げを行った。

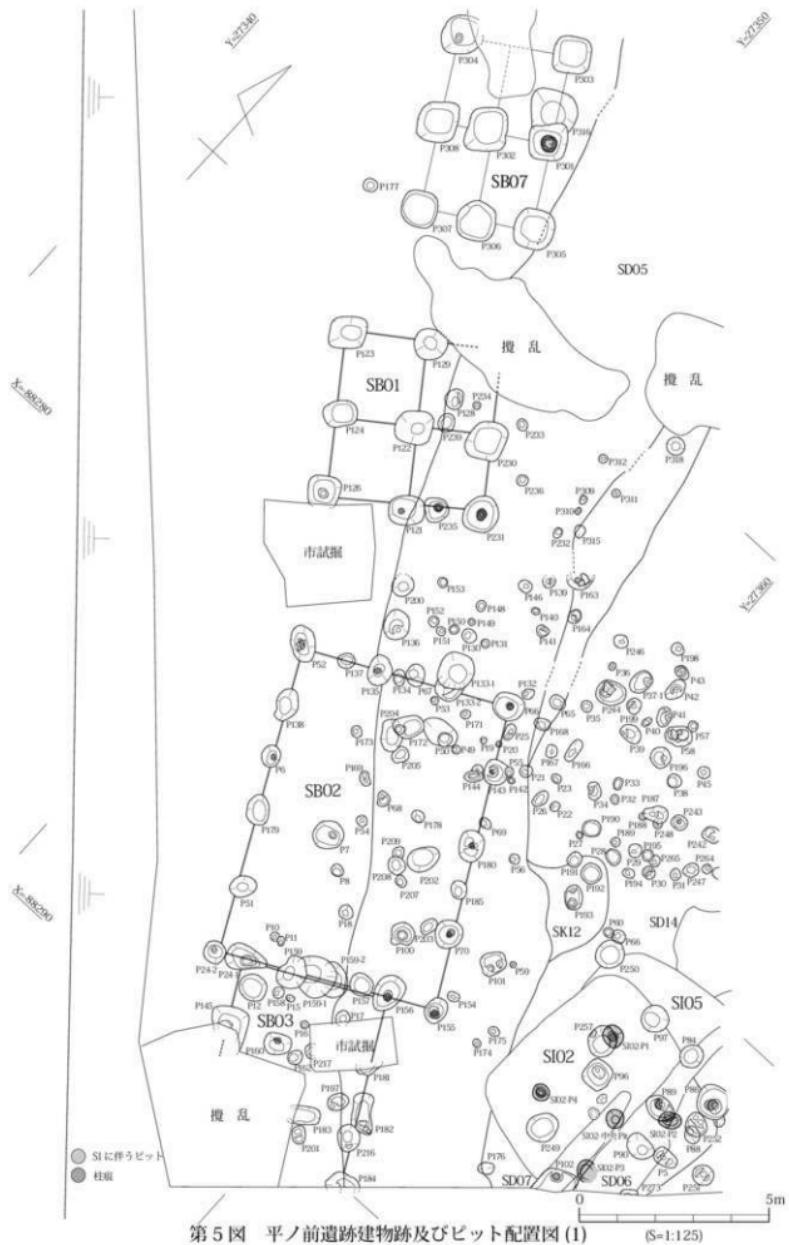
第3節 調査区の遺構

調査区内では、竪穴建物 5 棟、掘立柱建物 6 棟、溝状遺構 12 条、土坑 5 基、炭溜り 3 か所、ピット約 200 基を確認した（第4図）。その他、現代の擾乱が調査区内の数カ所で確認された。特に B4 から E4 グリッドにかけて幅約 3 m の規模の擾乱が約 30 m の範囲にわたって断続的に確認された。

調査区南部（C2、C3、D2、D3 グリッド周辺部分）では重層的に遺構が集中していることが判明した。土層図の観察や遺構・遺物の検出状況などから、静間城が築城されている丘陵の裾部分は古くから土地の利用があったことが推測された。遺構が重複する調査区の南部は丘陵裾部分の中でも比較的標高が低かったため、後世の削平をあまり受けずに残った結果、遺構が集中する部分となったと考えられる。第1節調査区の土層で説明したとおり、古墳時代後半期だけでも複雑に地形が変化していると考えられ、正確に遺構面を設定するのは困難であった。ただし、遺構が集中する調査区南部では、調査の便宜上、掘立柱建物群及び多くのピット群を検出した面を第1検出面として、それ以下の弥生時代の溝や古墳時代の竪穴建物及び溝（SD17など）を確認した層位すべてを広義の意味で第2検出面とした。

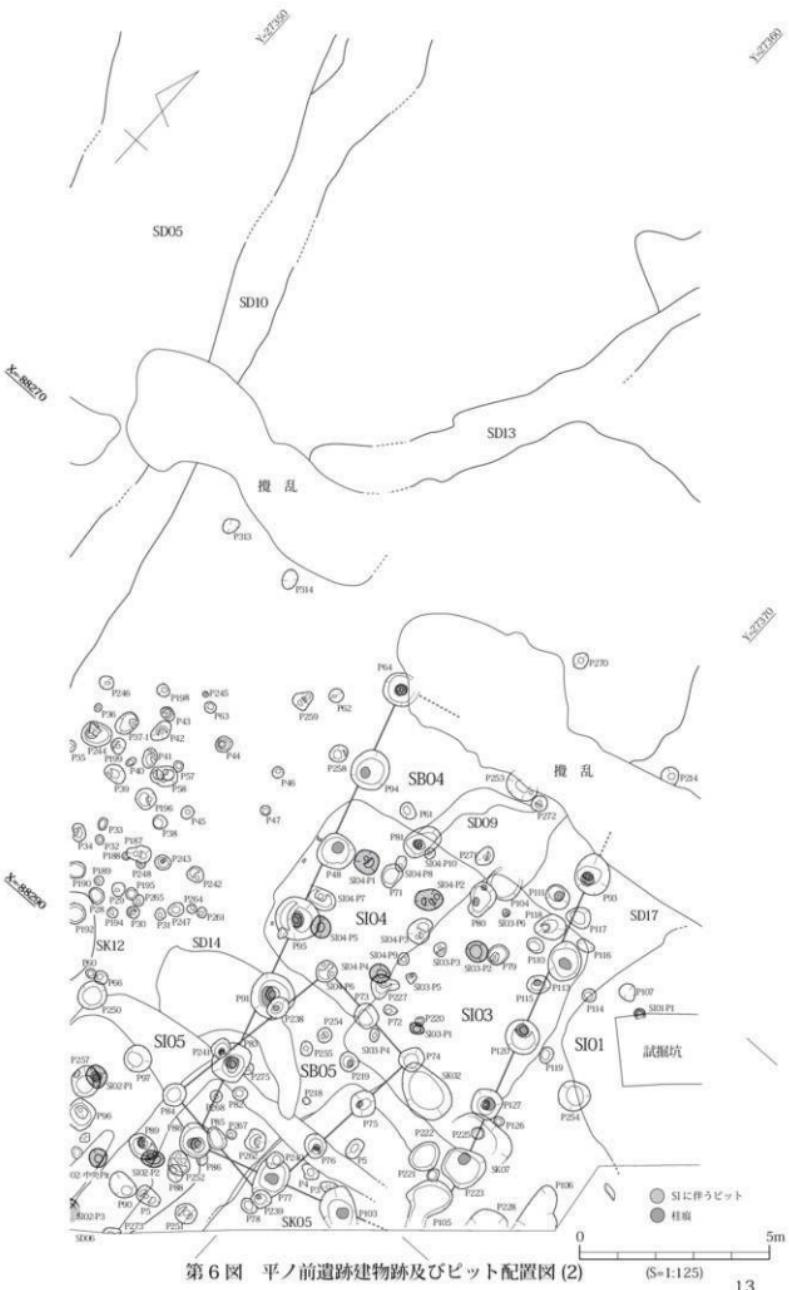
第5、6図は、調査区南部周辺の建物及びピット配置図である。第1検出面の 6 棟の堀立柱建物は、調査区の南西側に東西 40 m × 南北 30 m の範囲内でまとまりをもって確認される。総柱建物と梁行 3 間の建物は主軸方位も近似しており、SB01～03・07 はほぼ同軸上に並んでいる。SB03 及び SB04 の柱穴配置から、さらに調査区の南側に建物が展開する可能性が高いと考えられる。

堀立柱建物や竪穴建物に伴わない多くの柱穴は第1検出面のピットである。しかし、B2、B3 グリッド付近で検出されたピットは基本的には基盤面（第XIV層）上での検出であり、当時の掘り込み面が後世に削平されたことを考慮すれば、掘立柱建物が立っていた時期よりも古い時期（例えば竪穴建物と同時期など）のピットが含まれている可能性も十分考えられる。ただし、これらのピットには出土遺物がほとんどなく、時期特定までにはいたらなかった。

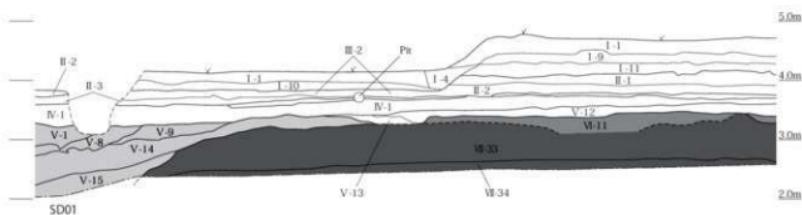
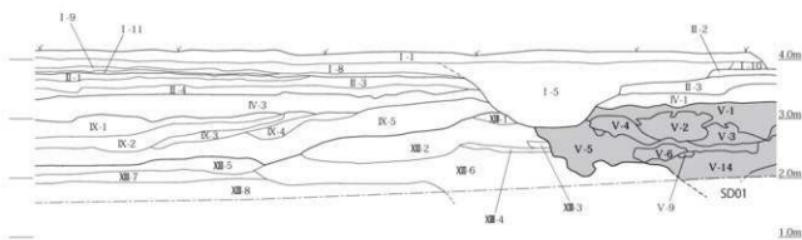
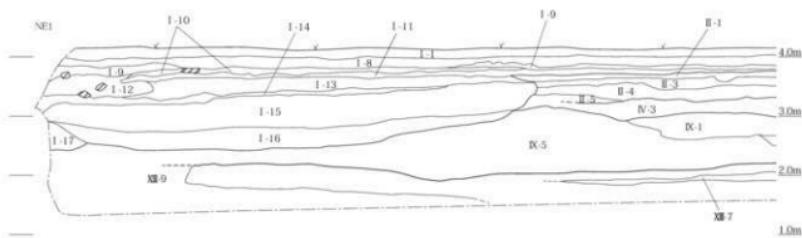


第5図 平ノ前遺跡建物跡及びピット配置図(1)

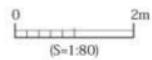
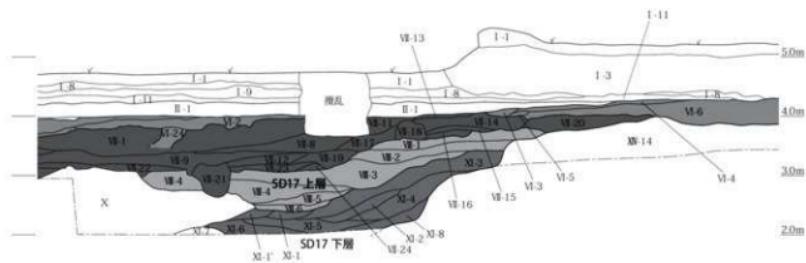
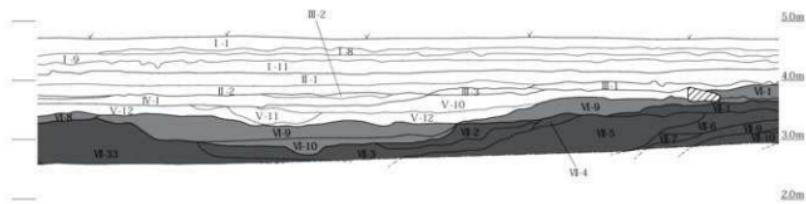
(S=1:125)



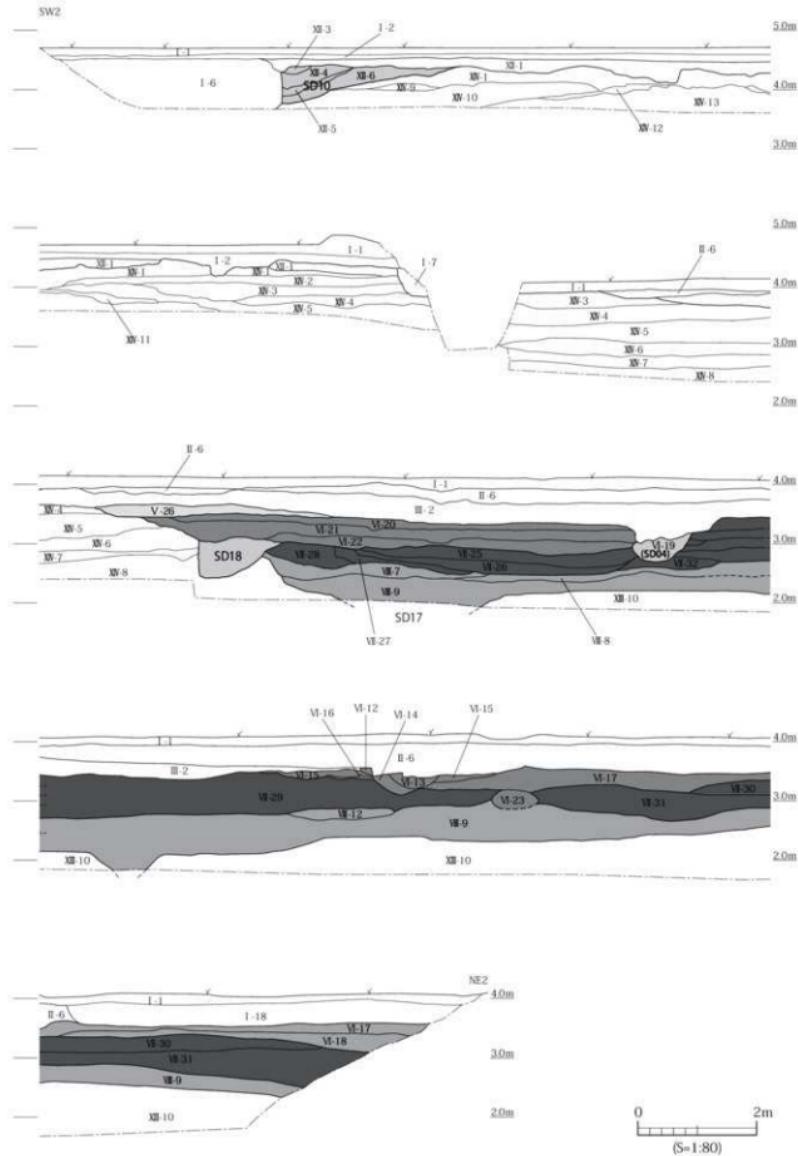
第6図 平ノ前遺跡建物跡及びピット配置図(2)



第7図 平ノ前遺跡南東壁土層図(1)



第8図 平ノ前遺跡南東壁土層図(2)



第9図 平ノ前遺跡北西壁土層図

近江川流域の 耕作土	I-1. 黒褐色土 (現代水田耕土)	VII-12. 黑灰褐色土
	I-3. 黄褐色混合土 (耕作土)	VII-13. 噴灰土
	I-4. 茶褐色土 (旧耕作土)	VII-14. 噴灰褐色土
	I-5. 灰色土 (旧耕作土)	VII-15. 黄褐色土
	I-6. 灰褐色土	VII-16. 邪灰褐色土
	I-7. 茶褐色土	VII-17. 噴灰褐色土
	I-8. 噴灰褐色土	VII-18. 噴灰土
	I-9. 噴灰褐色土	VII-19. 黑灰色土
	I-10. 噴灰褐色土 (白色土ブロックに砂土を混入する)	VII-20. 噴灰褐色土
	I-11. 黄褐色粘質土 (淡水田耕土)	VII-21. 噴灰褐色土
	I-12. 噴褐色混合土	VII-22. 黑茶褐色土 (燒土あり)
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	I-13. 黑褐色土ルート質土	VII-23. 黑灰褐色土
	I-14. 噴褐色砂質土	VII-24. 黑色砂質土
	I-15. 噴灰褐色粘質土	VII-25. 噴灰褐色砂礫層 (噴灰色粘質土を含む)
	I-16. 噴灰褐色砂質土	VII-26. 噴灰褐色土ルート質 (木質を含む、有機物を含む、やわらかい)
	I-17. 噴褐色粘質土	VII-27. 噴灰褐色砂礫層 (砂礫に噴灰色粘質土と有機物を多く含む)
	I-18. 黑褐色土	VII-28. 噴灰褐色砂礫層 (噴灰色砂礫を砂質に含む、有機物を多く含む)
	II-1. 黑褐色粘質土 (軽石粘合む)	VII-29. 茶褐色質土
	II-2. 黑褐色粘質土 (B-I に噴褐色粘を多く含む)	VII-30. 噴灰褐色質土
	II-3. 黑褐色粘質土 (軽石粘合む)	VII-31. 茶褐色粘質土
	II-4. 黑褐色粘質土 (鉄筋の褐色を部分的に含む)	VII-32. 噴灰褐色砂礫層 (シルト～細砂、やわらかい)
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	III-1. 黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックを混合)	VII-33. 噴灰土 (砂礫層とシルト層が混融する)
	III-2. 黄褐色粘質土 (黄褐色を含む)	VII-34. 噴灰土
	III-3. 黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックを多く混合するが黒褐色的)	VII-1. 黑灰褐色土
	IV-1. 噴灰褐色粘土 (小輕石粘合む)	VII-2. 噴灰褐色土
	IV-2. 黑灰褐色土	VII-3. 黑灰褐色土
	IV-3. 茶褐色土	VII-4. 白灰色砂質土
	V-1. 噴灰褐色粘土	VII-5. 淡黑灰色土
	V-2. 噴灰褐色砂質土 (鐵之か)	VII-6. 灰色砂質土
	V-3. 噴灰褐色砂質土 (砂シルト)	VII-7. 黑褐色粘質土
	V-4. 噴褐色砂質土	VII-8. 黑褐色土
	V-5. 黄褐色粘質土 (茶色ブロックを含む。上からの纏風か)	VII-9. 黑褐色土
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	V-6. 青灰色粘質土 (茶色ブロックを含む。上からの纏風か)	VII-10. 黑褐色土
	V-7. 青灰褐色粘土	VII-11. 黑褐色土
	V-8. 黑褐色土	VII-12. 明黑褐色土
	V-9. 黑褐色土	VII-13. 黑明灰褐色土
	V-10. 黑褐色土	VII-14. 黑褐色粘土
	V-11. 黑褐色土	VII-15. 黑褐色土 (鉄、土源あり)
	V-12. 黑褐色土	VII-16. 淡黑褐色土
	V-13. 黑褐色土	VII-17. 淡黑褐色土
	V-14. 黑褐色土ルート層	VII-18. 黑褐色砂質土
	V-15. 黑褐色土裸層	VII-19. 黑褐色粘土
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-1. 黄褐色土	XI-1. 黑褐色土
	VI-2. 黑褐色土	XI-2. 噴灰褐色土
	VI-3. 黄褐色シルト	XI-3. 黑色粘土
	VI-4. 噴茶褐色土	XI-4. 噴灰褐色土 (鉄、土源あり)
	VI-5. 茶褐色土	XI-5. 噴黃褐色土
	VI-6. 噴黃褐色土 (黄色ブロックを含む)	XI-6. 噴黃褐色砂質土
	VI-7. 黑褐色土	XI-7. 黑褐色砂質土
	VI-8. 黑褐色粘質土 (褐色臭味)	XI-8. 黑色粘質土
	VI-9. 黑褐色粘質土 (ラミナあり)	XI-9. 噴灰褐色砂礫層
	VI-10. 黑褐色土	XI-10. SD005
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-11. 黑褐色粘質土 (ラミナあり)	XI-11. 噴灰褐色粘土
	VI-12. 淡灰褐色砂礫層	XI-12. 茶褐色砂質土
	VI-13. 噴褐色粘質土 (砂礫を非常に多く含む)	XI-13. 噴褐色粘土 (ラムト)
	VI-14. 噴褐色粘土	XI-14. 噴褐色砂質土
	VI-15. 淡黄灰褐色土 (自然堆積か)	XI-15. 噴褐色砂質土 (ラムト)
	VI-16. 噴赤褐色砂礫層 (ところどころに茶色土を含む。遺物を含む)	XI-16. 噴褐色砂質土 (ラムト)
	VI-17. 噴褐色砂礫層	XI-17. 噴褐色砂質土 (ラムト)
	VI-18. 黑褐色土	XI-18. 噴褐色砂質土 (ラムト)
	VI-19. SDD04	XI-19. 噴褐色砂質土
	VI-20. 噴灰褐色砂土 (締まってい)	XI-20. 噴黃褐色粘土 (シルト～細砂、締まっている)
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-21. 噴灰褐色砂土 (締まってい)	XI-21. 噴淡灰褐色粘土 (シルト～細砂)
	VI-22. 噴灰褐色砂土	XI-22. 噴灰褐色砂礫層
	VI-23. 黑褐色土 (ビットリ土)	XI-23. 灰色砂質土
	VI-24. 黑褐色粘質土	XI-24. 灰色砂質土 (きめ細かい)
	VI-25. 黑褐色土	XI-25. 淡黄褐色粘土 (粘土～シルト、締まっている)
	VI-26. 黑褐色土	XI-26. 淡黄褐色砂質土 (粘土～シルト)
	VI-27.	XI-27. 淡黄褐色砂質土 (シルト～砂)
	VI-28. 灰茶褐色土	XI-28. 淡黄褐色砂質土 (シルト)
	VI-29. 噴茶褐色土	XI-29. 黄褐色砂質土 (有機物を含む)
	VI-30. 噴黑褐色粘土	XI-30. 噴茶褐色砂質土 (シルト～細砂、シルト付近に噴灰土 (有機物) を含む)
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-31.	XI-31. 噴灰褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-32.	XI-32. 噴灰褐色砂質土 (シルト)
	VI-33.	XI-33. 噴褐色砂質土
	VI-34.	XI-34. 淡灰褐色粘土
	VI-35.	XI-35. 噴褐色粘土
	VI-36.	XI-36. 噴褐色砂質土
	VI-37.	XI-37. 噴褐色砂質土
	VI-38.	XI-38. 噴褐色砂質土
	VI-39.	XI-39. 噴褐色砂質土
	VI-40.	XI-40. 噴褐色砂質土
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-41.	XI-41. 噴褐色砂質土 (粘土～シルト)
	VI-42.	XI-42. 噴灰褐色砂質土 (5～20 mmの砂礫を含む)
	VI-43.	XI-43. 噴灰色シルト層 (シルト～細砂)
	VI-44.	XI-44. 噴褐色土
	VI-45.	XI-45. 黃褐色土 (地山)
中 耕 作 土 (近 江 川 耕 作 土)	VI-46.	XI-46. 黃褐色砂質土 (細砂、マンゴン、歯分を多く含む。旧表土)
	VI-47.	XI-47. 黃褐色砂質土 (シルト～砂)
	VI-48.	XI-48. 黃褐色砂質土 (シルト)
	VI-49.	XI-49. 黑茶褐色土 (有機物を含む)
	VI-50.	XI-50. 噴茶褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-51.	XI-51. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-52.	XI-52. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-53.	XI-53. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-54.	XI-54. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-55.	XI-55. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)
	VI-56.	XI-56. 噴褐色砂質土 (シルト～細砂)



写真1 平ノ前遺跡周辺航空写真 (1947年10月3日GHQ撮影)

出典：国土地理院ウェブサイト
(<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=1181442&isDetail=true>)

第4節 検出した遺構

竪穴建物

S101（第10図）

D3 グリッド、調査区の南西側に位置する。古墳時代後期の溝SD17が埋没した後の標高3.7m(第2検出面)で検出した。当初、包含層(VI層)を東側から掘り下げている段階では遺構を確認できず、掘削中に竪跡を検出したことから、精査した段階での検出となった。

西壁と南壁の一部が残るが、試掘坑や掘削によって遺構の半分以上を欠いているため全容は不明である。基盤層を30cmほど掘り込んだところへ黒褐色土(7層)を埋め、敷土としている。その上面が標高3.5mの床面で、平面図はこの床面での状況である。西壁沿いに幅15~20cm、深さ6cmの溝が長さ1.7mほど見られ、その近くで赤褐色の焼土痕を検出した。また、試掘坑に切られる形で小ピット(P1)を検出した。

西壁に造り付け竪が設置されている。掘削によって壊された部分があるが、現状で幅約40cm、西壁までの奥行約50cmを測る。竪は石組みで、7層を掘り込んだところへ砂岩質の石(高さ20cm、奥行18cm、厚さ8cm)を置き、黄褐色土(5・6層)で固定して造っている。しかし、竪は破壊が進み、左側に石組みの石1個が残存するのみである。右側は崩れた5・6層が残るだけであった。焚口部分から壁に向けて焼土痕が続いている。やや窪んだところに灰(4層)が2~4cm堆積している。壁から外に向けて長さ1mほどの煙道が延びている。煙道の断面形は径30cmの円形をなし、炭や灰を含む黒色土(9層)が堆積する。煙道内の炭化物を探取し¹⁴C年代測定した結果、AD591~656年という値が示された(第5章第1節)。

竪近くで土師器壺と紡錘車が、南東隅辺りで須恵器壺や土師器甕、土製支脚などが出土した。

出土遺物(第11図)

1~4は須恵器である。1は竪内から出土した壺蓋の口縁部で、弱い稜をもつ。石見3期に相当する。2は壺身の口縁部で何箇所かの欠けが確認される。この欠けはかえりと受け部の同じ位置にみられることから、人為的に打ち欠いた痕と考えられる。⁽¹⁾石見3期。3・4は壺身である。3は最大径13cmを測り、立ち上りが高い。4はやや扁平で、最大径12.5cmを測る。いずれも石見4期に相当する。

5~9は土師器である。5は丸底から体部が内湾気味に立ち上がる壺で、内外面に赤彩が施される。

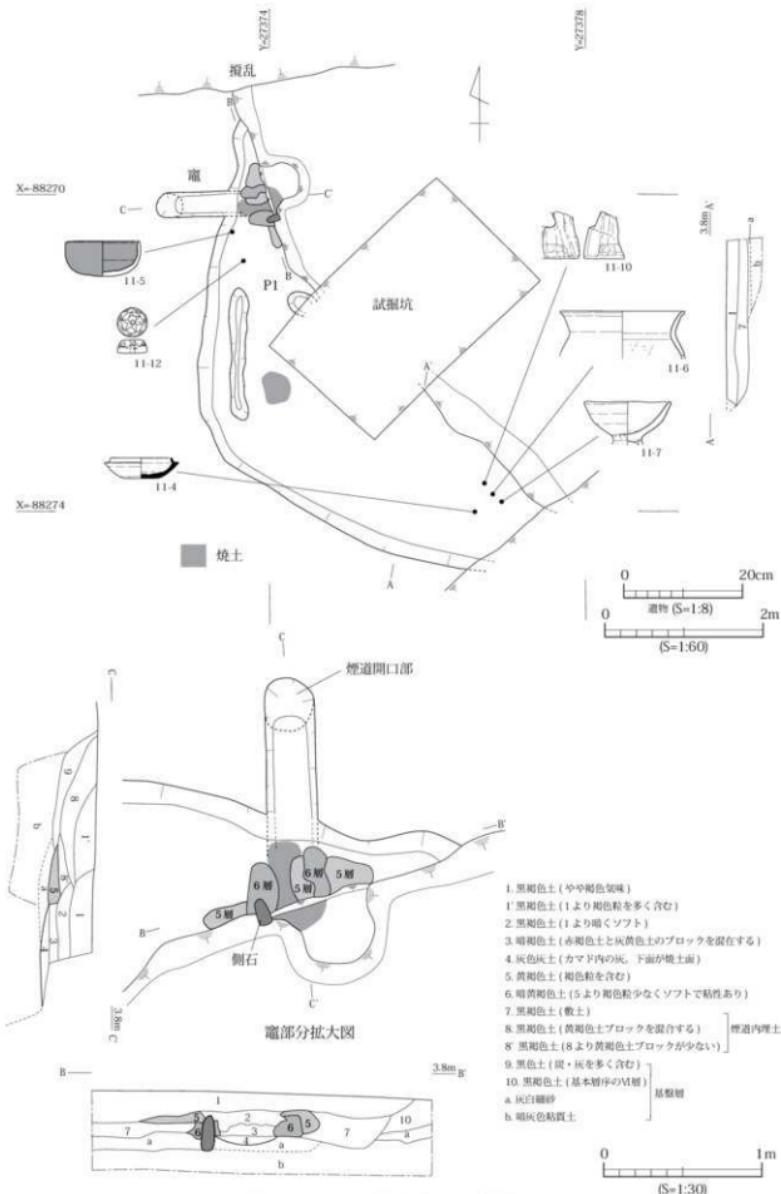
6は口径20cm弱の甕である。頸部は緩く屈曲し、口縁は弱く外反する。7は高杯または低脚杯の壺部である。器壁は厚く、体部は内湾気味に逆「ハ」の字状に立ち上がる。脚との接合部に指なで痕が見える。破断面の様子から脚は斜め方向に開くようで、低脚杯の可能性がある。8・9は甕の底部である。8は底径7.2cmの小型品で、径7mmの横渡し用の孔が穿たれる。

10は土製支脚の底部破片である。底が抉られ、復元径2cmほどの孔をもつ。

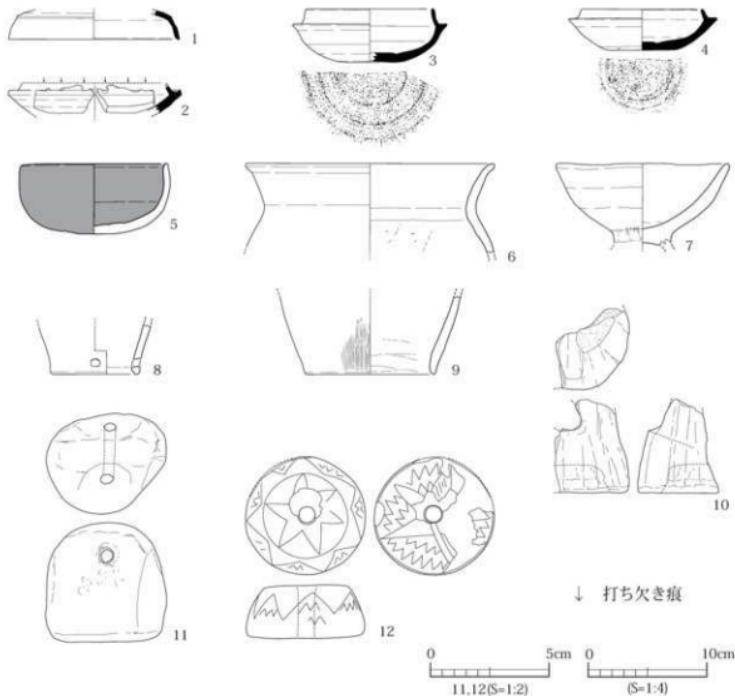
11は分銅形をした土錘である。上部には紐通し用と思われる径5mmの孔が穿たれる。

12は石製の紡錘車である。星形と鋸歯文を組み合わせた文様を刻む。

出土遺物は石見3期のものも含むが、概ね石見4期の範疇に収まるものと考えられる。



第10図 平ノ前遺跡 SI01 実測図

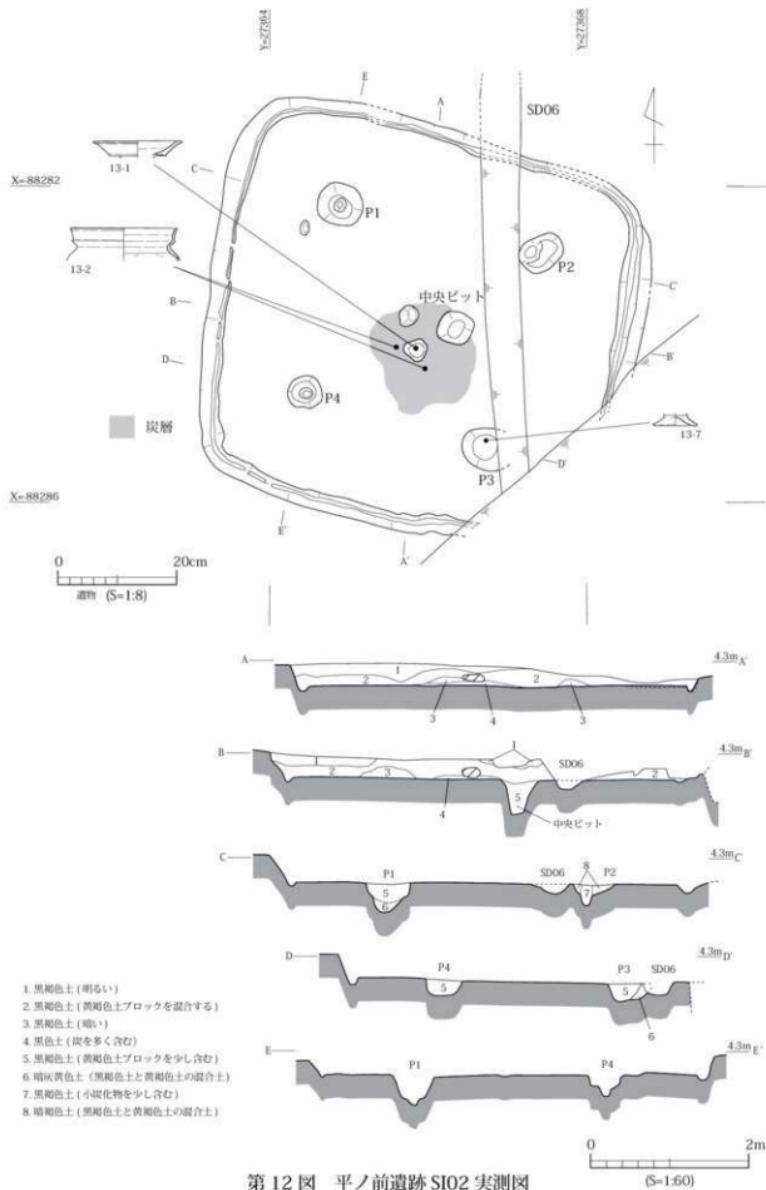


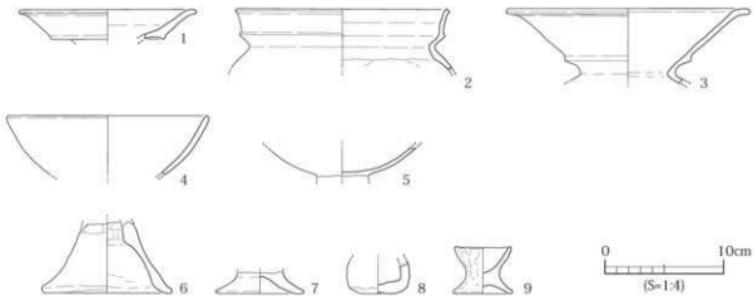
第11図 平ノ前遺跡 SI01 出土遺物実測図

SI02（第12図）

C 2グリッド、調査区南西側に位置する。標高4.3mの地山面（第2検出面）で検出した。後掲するSI05と重複し、それより新しい。南東隅部は調査区外になり、一部が後世の溝状遺構（SD06）やピットに壊される。また、西側では弥生時代後期の溝SD05の東肩部を壊している。

平面形は隅丸方形をなす。上面は東西5.5m×南北5.1m、下面は東西4.9m×南北4.6mの規模で、床面積は22.5m²である。壁高は20～30cmで、壁際に深さ3～10cmの溝が巡る。床面で5基のピットを検出した。このうち、方形に配された4基の柱穴（P 1～4）は、径40～60cm、柱間2.4～2.5mを測り、これらを主柱穴とする4本柱の構造である。ほぼ中央で径45cm、深さ50cmを測るピットを検出した。この中央ピットの南西方向には炭化物を多く含む黒色土（4層）が1.3×1.4mの範囲で薄く堆積しており、人頭大の礫が2個並ぶように検出された。この礫周辺から壺（第13図1）や甕（第13図2）の破片が出土した。また、覆土からはミニチュア土器が2点出土している。なお、4層内の炭化物を採取し¹⁴C年代測定した結果、AD209～333年という値が示された（第5章第1節）。





第13図 平ノ前遺跡S102出土遺物実測図

出土遺物（第13図）

1は小型壺の口縁部である。精緻な造りの複合口縁で、出雲からの搬入品の可能性がある⁽²⁾。小谷3期に相当する。2は複合口縁の彫で、稜はやや退化している。小谷3期古か。3は鼓型器台の受部である。小谷3期。4・5は低脚環の破片で、4は壁際の溝から出土している。6は高環の脚部であるが、歪作りが雑な印象を受ける。7は低脚環の脚部である。8・9はミニチュア土器である。いずれも手づくり成形で、8は丸底気味、9は脚付きの環である。

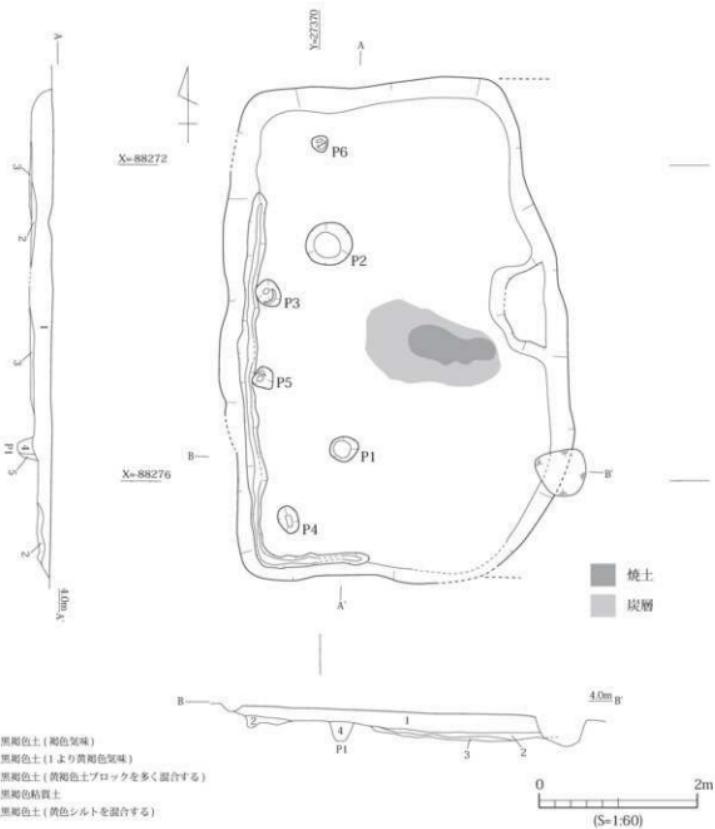
これらの遺物は概ね小谷3期の様相を示している。

S103（第14図）

C・D3グリッド、前掲のS101の西に位置する。SD17が埋没した後の標高4.0m（第2検出面）で検出した。後掲するS104と重複し、それより新しい。さらに、後世の削平を受けている。

平面形は南北にやや長い隅丸長方形をなす。上面は東西4.3m×南北6.2m、下面は東西3.5m×南北5.2mの規模で、床面積は18.2m²である。壁高は10～30cmで、東側は後世の削平が深く及んで低い。西壁と南壁際に浅い溝が巡る。また、東壁の中央部には1.0×0.6mの平面台形状の低い平坦部がある。下層に堆積する3層は黄褐色の地山土を多く混合する黒褐色土で、本遺構の東側3分の2の一段低くなったところに見られる。本遺構の下面是西側3分の1が黄褐色土の地山であるが、東側3分の2は後掲するSD17（古墳時代後期の溝状遺構）の上層部に相当する。そのため、沈み込み防止あるいは貼り床の機能も含めて3層を埋めたと考えられる。床面で5基のピットを検出した。このうち、西壁側にあるP1とP2は2.6mの間隔を測り、柱穴と考えられるが、これらに対応する柱穴は確認されないため柱構造は不明である。中央には1.7×0.9mの不整椭円形の範囲で炭屑が薄く堆積しており、その中で焼土痕を検出した。この炭層の炭化物を採取し¹⁴C年代測定した結果、AD606～661年という値が示された（第5章第1節）。

覆土からは竪穴建物としては比較的多いと思われるコンテナ（内法54×34×15cm）2箱分の遺物が出土した。そのほとんどは摩滅と風化が進んだ破片で、石見3期以前の遺物が相当量含まれていた。それらの多くは本遺構に伴わないと判断したが、覆土の性格を検証するために一部を掲載した。

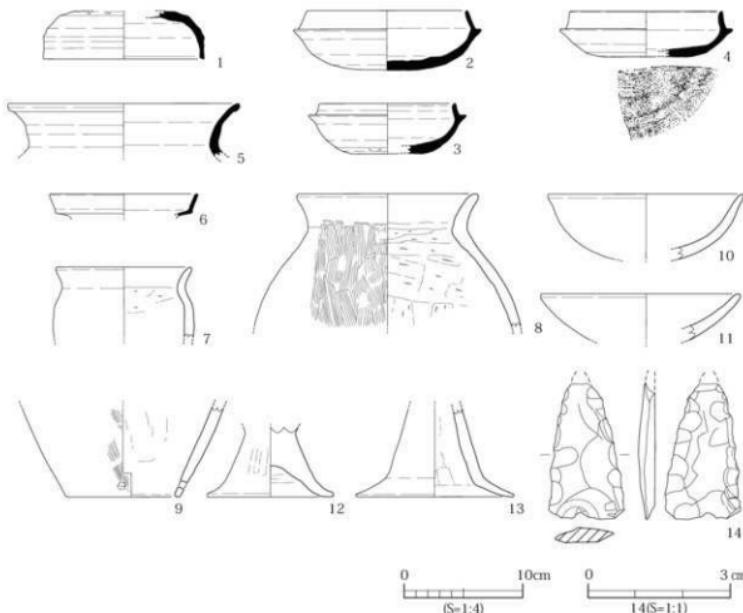


第14図 平ノ前遺跡SIO3実測図

出土遺物（第15図）

1～6は須恵器である。1は口径13.6cmを測る壺蓋である。天井部はヘラケズリされ、曖昧な稜をもつ。石見3期に相当する。2は最大径15.8cmを測る壺身である。口縁部にはSIO1出土須恵器壺（第11図2）と同様の打ち欠き痕が確認される。石見3期に相当する。この土器とSD17出土の破片が接合した。3は最大径13.3cmを測る壺身である。石見4期に相当する。4は扁平な壺身で、最大径14.6cmを測る。石見3期。5は壺の口縁部で、外反した端部は玉縁状をなす。6は壺の口縁部である。薄作りで内面には自然釉が認められる。

7～13は土師器である。7は口径11.2cmを測る小型甕である。8は「く」の字状口縁の甕で、胴部が張る器形である。9は甕の底部で、径6mmの棧渡し用の孔が穿たれる。10・11は高环の环部、12・13は高环の脚部である。10は内外面に、12は外面から脚端部内面まで赤彩が施される。14



第15図 平ノ前遺跡 S103出土遺物実測図

はサヌカイト製の石鎌で、先端部を欠く。混入と考えられる。

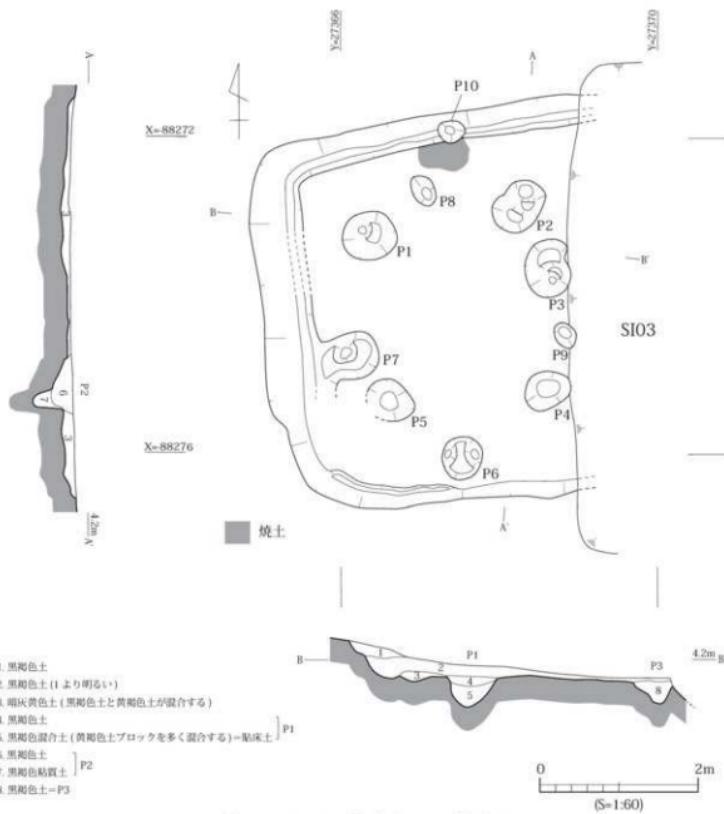
これらの遺物のうち、2・4は石見3期に相当するものである。特に2と接合した破片が出土したのは本遺構周辺の基盤層ではなく、その下のSD17で、やや離れた位置であった。また、本遺構の覆土に多量の古相遺物の破片が含まれていることは、本遺構の廃絶後にSD17を含む周辺の土が埋め土に利用された可能性を示すものと言える。

出土遺物は上記のように、後世の埋め土に関わる遺物を除けば、概ね石見4期の範疇に収まるものと考えられる。

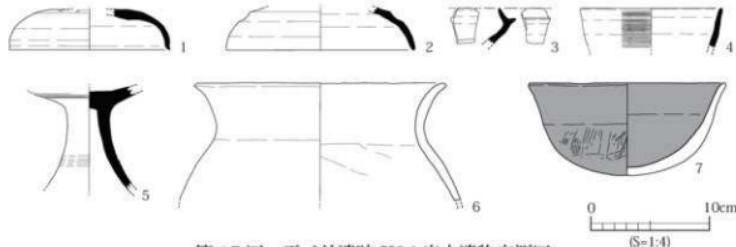
S104（第16図）

C3グリッド、前掲のS103の西に位置する。S103と重複し、それより古い。標高4.4mの地山面（第2検出面）で検出した。

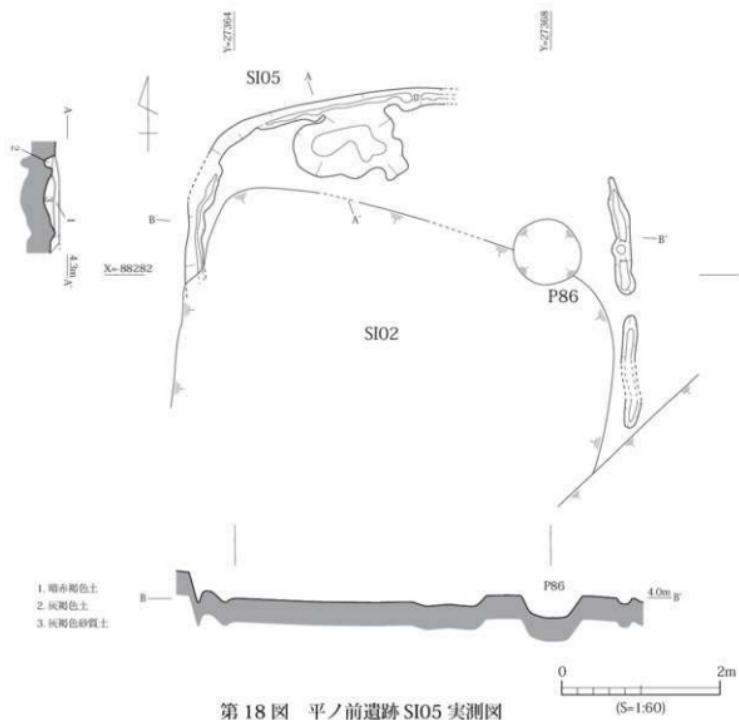
現状で南北5m、東西4.2mを測る。東壁がS103に壊され消失するが、1辺5mほどの隅丸方形をなす建物と推測される。壁高は西壁で40cmを測るが、東側に向かっては後世の削平を受けて低くなる。底から5～10cmは暗灰黄色土（3層）を埋め、貼床としている。壁際には幅10～20cm、深さ5～10cmの溝が巡り、南壁側は途中で消失する。また、北壁際で焼土痕を検出した。床面で大小合わせて10基のピット（P1～10）を検出した。このうち径50～60cm、深さ40～50cmを測るP1、2、4、5は、2.1～2.4mの間隔で方形に配置していることから、これらを主柱穴と



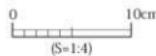
第16図 平ノ前遺跡 SI04 実測図



第17図 平ノ前遺跡 SI04 出土遺物実測図



第18図 平ノ前遺跡SI05実測図



第19図 平ノ前遺跡SI05出土遺物実測図

する4本柱の構造と考えられる。

出土遺物（第17図）

1～5は須恵器である。1は口径13.4cmを測る环蓋である。2は口径15.8cmを測る环蓋で、やや扁平な器形か。いずれも石見4期。3は环身の口縁部破片である。4は口径12cmを測る土器の口縁部で、外面にはカキ目が施される。壺またはコップ形土器の可能性がある。5は高环の接合部から脚部である。脚には3条の沈線が巡る。

6・7は土師器である。6は口縁が外反する壺である。7は丸底で口縁端部が弱く外反する环で、

全面に赤彩が施される。

これらの遺物のうち、3と7はP1から出土している。古相の遺物を含むものの、概ね石見4期の範疇に収まるものと考えられる。

SI05（第18図）

C2 グリッド、前掲の SI02 の北に位置する。標高 4.3 m の地山面（第2検出面）で検出した。SI02 と重複し、それより古い。SI02 よりやや西に南北軸を振る。遺構のほとんどが SI02 と後世の遺構に壊され、壁は西側と北側の一部が残存するのみである。壁際に 3 ~ 10cm の浅い溝が巡る。東側では幅 20cm、深さ 3 ~ 10cm の溝が、西壁から 5.5 m の位置に南北方向に 2 本確認される。これらは消失した東壁際の溝の一部と見られることから、1 辺 5.5m ほどの隅丸方形の建物に復元できる。覆土からは土器の小破片が数点出土しているが、図化できたものは以下の 1 点である。

出土遺物（第19図）

1 は複合口縁の甕で、口縁端部に面をもつ。小谷 3 期に相当する。

（圓山薦）

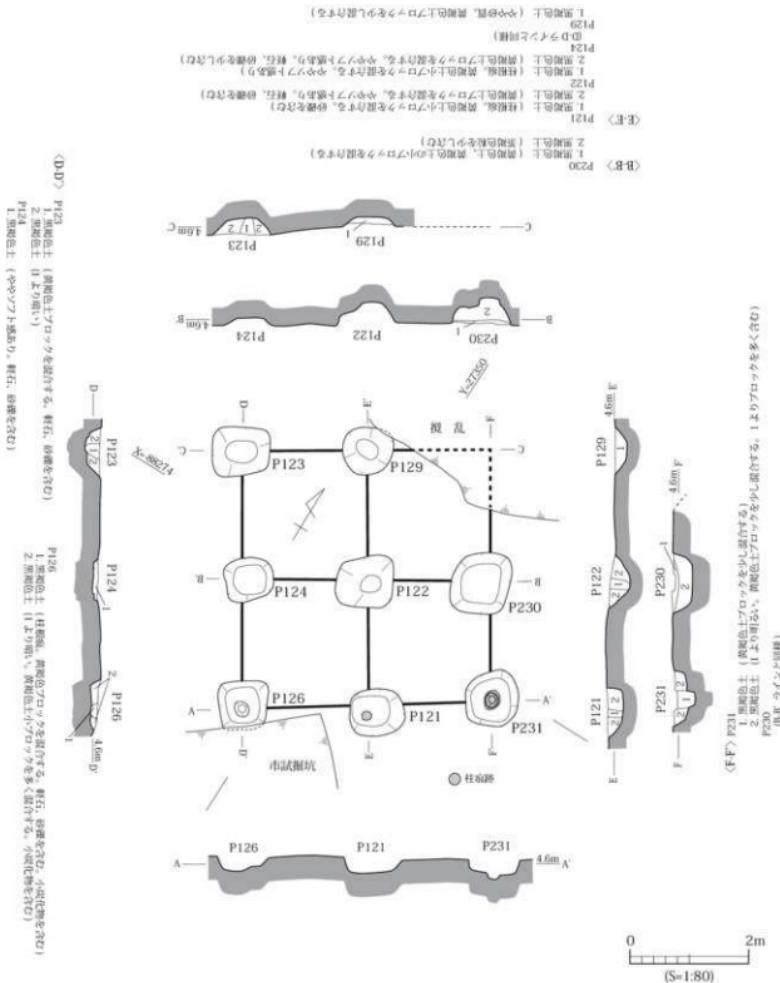
掘立柱建物

SB01（第20図）

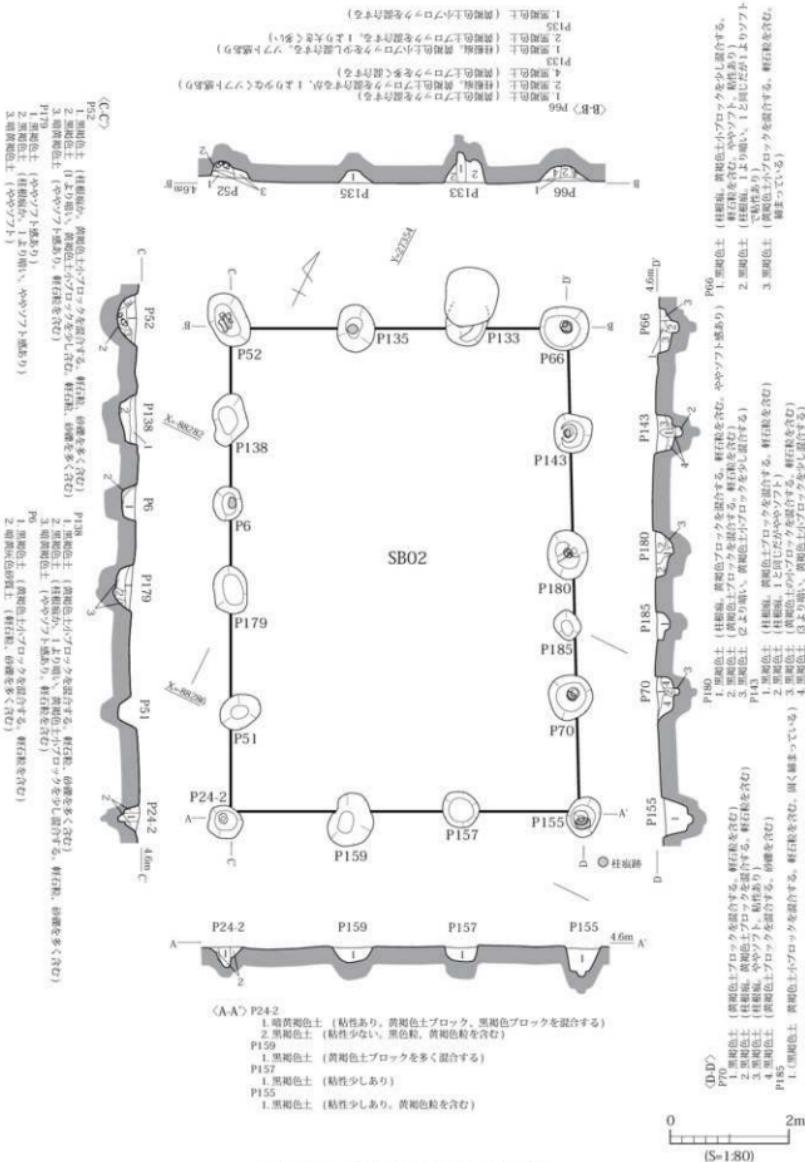
A3・B3 グリッドに位置する。標高 4.6m で検出された。P121、P122、P230 は弥生時代の水路 SD05 と重複しており、水路が埋まった部分を基盤としている。その他のピットは第XV層を基盤としている。2間×2間の総柱式建物である。柱穴を 8 基確認し、北側の 1 基は攢乱により消失している。柱間は北西 - 南東が 4.3m、北東 - 南西が 4.2 m で、4.3 × 4.2 m の長方形の平面形をなす。床面積は 18.1m² である。主軸方位は N-32°-W を指向している。柱穴の平面形は隅丸方形で、1 辺が 1m 前後の規模である。深さは 10 ~ 30cm であり、後世の削平を受けているため下層部がわずかに残っている状況である。柱材は残っておらず、土層図の柱痕と考えられる部分の大きさはは 15 ~ 30cm である。後述する SB07 と総柱建物であることやピットの形状やピットが浅いことなど特徴が類似しており、時期もあまり離れていないと推測される。

SB02（第21図）

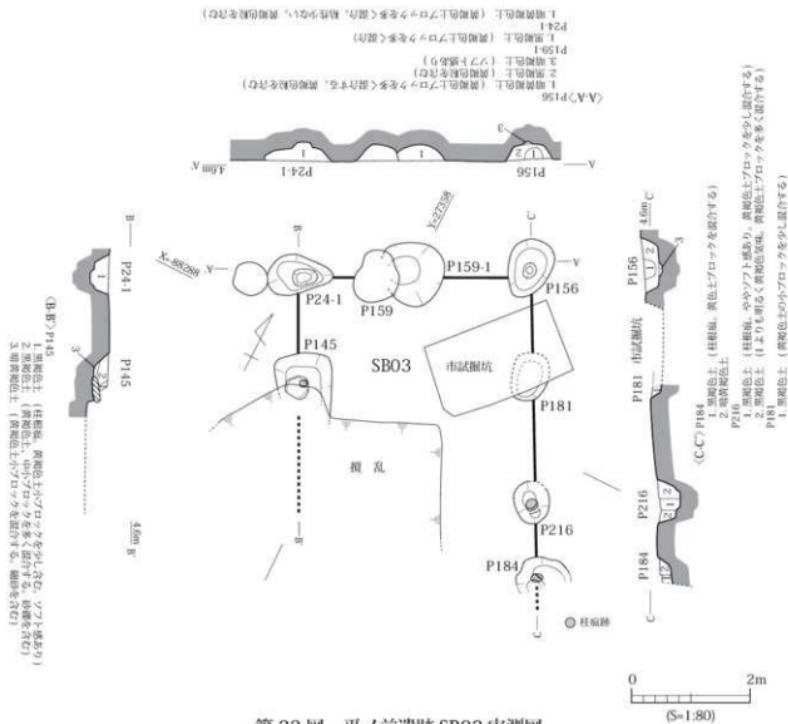
B2・B3・C2 グリッドに位置する。標高 4.6m で検出された。SB02 の北東側半分は、弥生時代の水路 SD05 と重複しており、水路が埋まった部分を基盤としている。南西側は、第XV層を基盤としている。3間×5間の掘立柱建物である。柱穴を 16 基確認した。南東面（A-A'列）は後述する SB03 の北西ラインと重複している。北東面（D-D'列）の P185 については、SB02 に伴うか不明である。柱間は北東 - 南西が 1.8 ~ 2.2 m、北西 - 南東が 1.5 ~ 2.4 m で、5.8 × 8.3 m の長方形の平面形をなす。床面積は 48.1m² である。主軸方位は N-27°-W を指向している。柱穴の平面形は正円もしくは梢円形で、大きさは 50 ~ 80cm の規模である。深さは 10 ~ 30cm であり、土層図の柱痕と考えられる部分の大きさは 15 ~ 20cm である。北東側のピットには柱痕部分が 10cm 前後ピットの底より低くなっているものが多く、基盤面が弥生時代の水路跡であることが影響したことが推測される。



第20図 平ノ前遺跡 SBO1 実測図



第21図 平ノ前遺跡 SBO2 実測図



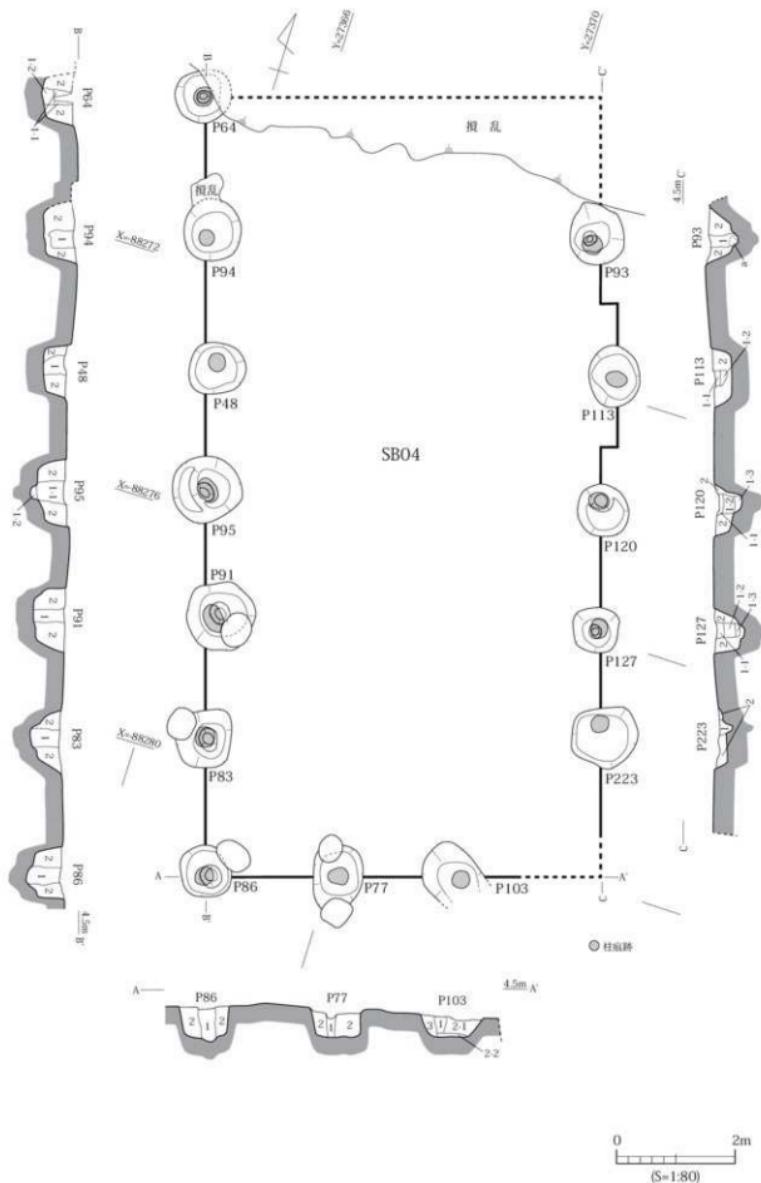
第22図 平ノ前遺跡SB03実測図

出土遺物（第26図）

第26図1はP52から出土した、弥生土器もしくは土師器・鼓形器台の受け部である。弥生時代後期後葉～古墳時代前期と考えられる。2は打製石斧である。

SB03（第22図）

B2・C2グリッドに位置する。標高4.5mで検出された。SB02の北東側半分は、弥生時代の水路跡SD05と重複しており、水路が埋まった部分を基盤としている。南西側は、第XV層もしくは第XV層を基盤としている。建物の南東部分は調査区外へ出ているため桁行は不明であり、2間×3間（以上）の掘立柱建物と考えられる。SB03北西側（A-A'ライン）はSB02と重複しており、ピットの切り合いからSB03、SB02の順で建っていたと考えられる。柱穴を7基確認し、P145基礎盤が残存していた。主軸方位はN-27°-Wを指向している。柱間は北東-南西が1.9m前後、北西-南東が1.8m前後で、3.9×5.1m以上の長方形の平面形をなす。床面積は19.9m²以上である。



第23図 平ノ前遺跡 SBO4 実測図

〈SB04 A-A'〉

P86

1. 黒褐色土 (ややソフト。黄褐色土の硬質塊。小・中プロックを混合する)
 2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)
- P77
1. 黒褐色土 (柱根痕。黄褐色土の硬質塊、小・中プロックを少し混合する)
 2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを多く混合する)
- P103
1. 黒褐色粘質土 (柱根痕。ソフト。粘性あり。黄褐色土小プロックを少し混合する)
 - 2-1. 黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)
 - 2-2. 黄褐色混合土 (2-1より明るい。かたく締まっている)
 3. 黑褐色土 (ややソフト)

〈SB04 B-B'〉

P64

- 1-1. 黒褐色土 (柱根痕。黄褐色土の小プロックを混合する)
- 1-2. 暗灰色粘土 (柱根痕。粘性強くソフト。柱根痕の炭化物を含む)
2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P94

1. 黒褐色土 (柱根痕。暗灰色粘質土の硬質塊、プロックを混合する)
2. 黑褐色混合土 (黄褐色気味。かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを多く混合する。柱根痕の下には硬質塊を集めて固めている)

P48

1. 黒褐色土 (柱根痕。黄褐色土の硬質塊、小プロックを混合する)
2. 黑褐色混合土 (黄褐色気味。かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P95

- 1-1. 黒褐色土 (ややソフト。黄褐色土の小プロックを少し混合する)
- 1-2. 暗灰色粘質土 (ソフトで粘性強い)
2. 黑褐色混合土 (黄褐色気味。かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P91

1. 暗黄褐色混合土 (柱根痕。黄褐色土の硬質塊、小プロックを混合する)
2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P83

1. 黒褐色土 (柱根痕。黄褐色土の硬質塊、小・中プロックを混合する)
2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、プロックを混合する)

P86

1. 黒褐色土 (ややソフト。黄褐色土の小・中プロックを混合する)
2. 暗黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

〈SB04 C-C'〉

P223

1. 黒褐色土 (柱根痕。黄褐色土の硬質塊、小プロックを少し混合する)
2. 黑褐色土 (小砂礫、細砂を混合する)

P127

- 1-1. 黒褐色土 (柱根痕。ややソフト。粘性あり)
- 1-2. 暗黄灰色土 (柱根痕。1より暗く粘性あり。ソフト)
- 1-3. 黑褐色粘質土 (柱根痕。ソフト。粘性強い。柱根痕の炭化物あり)
2. 黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P120

- 1-1. 暗黄灰色土 (柱根痕。黄褐色土の小プロックを少し混合する。ソフト感あり)
- 1-2. 暗黄灰色土 (柱根痕。黄褐色土の小・中プロックを混合する)
- 1-3. 黄褐色土 (柱根痕。黄褐色土の小・中プロックを混合する。締まっている)
2. 黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P113

- 1-1. 黄褐色土 (柱根痕。黄褐色土プロックを混合する)
- 1-2. 黑褐色土 (柱根痕。黄褐色土プロックを少し混合する。ややソフト。粘性あり)
2. 黄褐色混合土 (かたく締まっている。黄褐色土の硬質塊、中・大プロックを混合する)

P93

1. 暗灰色土 (柱根痕。黄褐色土プロック混合土下層部aに暗灰色粘質土。白色粒子、砂礫を含む)
2. 黄褐色混合土 (かたく締まっている。中・大の黄褐色プロックを混合する。硬質なプロック(山土か)を混合する。粘性のある白色粒を混合する)

(B) P73

1. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを少し混合する)
2. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを多く混合する)
3. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを多く混合する)

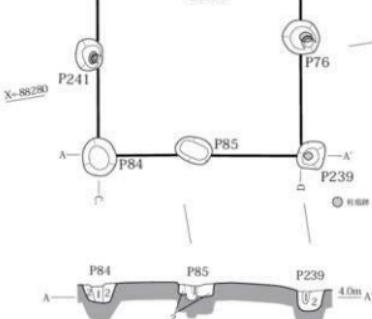


- <C-C'> P92
1. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを少しがけする)
 2. 黄褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを少し混合する)
 3. 黑褐色土 (柱粗緻、ややソフトで柱粗緻あり、小ブロックを少し混合する)
 4. 黑褐色土 (柱粗緻、ややソフトで柱粗緻あり、黄褐色土ブロックを少しがけする)



- P241
1. 黒褐色土 (柱粗緻、褐色塊、ややソフトで柱粗緻あり)
2. 黄褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを多く混合する)
P92
1. 黑褐色土 (柱粗緻、柱粗緻土小ブロックを多く混合する)
2. 黑褐色土 (柱粗緻、柱粗緻土小ブロックを多く混合する)

SB05



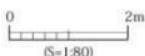
- <A-A'> P85
1. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを混含する。ややソフト)
2. 黑褐色土 (黄褐色土ブロックを少しがけする)

- P75
1. 黒褐色土 (黄褐色土の小ブロックを少し混合する)
2. 黑褐色土 (柱粗緻)
- P74
1. 黑褐色土 (柱粗緻、黄褐色土の小ブロックを少し混合する)
2. 黑褐色土 (柱粗緻)

- P76
1. 黒褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを少し混合する。ややソフト)

- P75
1. 黑褐色土 (柱粗緻、黄褐色土小ブロックを混含する)
2. 黑褐色土 (柱粗緻)

P76



第24図 平ノ前遺跡 SB05 実測図

SB04（第23図）

C2・C3・C4・D2・D3・D4 グリッドに位置する。標高 4.0～4.5m で検出された。SB02 は第 VI 層を基盤としている。3間×6間の掘立柱建物である。柱穴を 14 基確認した。SB05 と重複しており、ピットの切り合いから SB04、SB05 の順で建っていたと考えられる。柱間は北東・南西が 2.2 m、北西・南東が 1.6～2.4 m で、6.6 × 13.0 m の長方形の平面形をなす。床面積は 85.8 m² である。主軸方位は N-17°-W を指向している。柱穴の平面形は正円を指向しているようであり、大きさは 1 m 前後の規模である。深さは 20～60 cm であり、土層図の柱痕と考えられる部分の幅は 20～40 cm である。また、P64、P127 の下層部で検出した柱根の一部と思われる炭化物を ¹⁴C 年代測定したところ、それぞれ AD532～610 年、AD576～650 年という値であった（第5章第1節）。

出土遺物（第26図）

第124図3はP93で出土した須恵器・坏身である。石見5・6A期と考えられる。5は土師器・坏もしくは高环の坏部である。内外面赤彩であり、須恵器模倣土器の可能性を考えられる。6は土師器・高环の脚部である。灰白色の土器である。

SB05（第24図）

C2・C3・D2・D3 グリッドに位置する。標高 4.6m で検出された。SB05 は第 VI 層を基盤としている。2間×3間の掘立柱建物である。柱穴を 10 基確認した。SB04 と重複しており、ピットの切り合いから SB04、SB05 の順で建っていたと考えられる。柱間は北東・南西が 1.7～1.8 m、北西・南東が 1.6～1.9 m で、3.4 × 5.2 m の長方形の平面形をなす。床面積は 17.7 m² である。主軸方位は N-6°-W を指向している。柱穴の平面形は正円を指向しているようであり、大きさは 50～60 cm 前後の規模である。深さは 30～50 cm であり、土層図の柱痕と考えられる部分の幅は 10～15 cm である。

出土遺物（第26図）

第124図4はP239から出土した須恵器・坏身で陶邑編年 TK43併行期と考えられる。7はP85から出土した弥生土器もしくは土師器の器台・脚部の可能性を考えられる。（伊藤智）

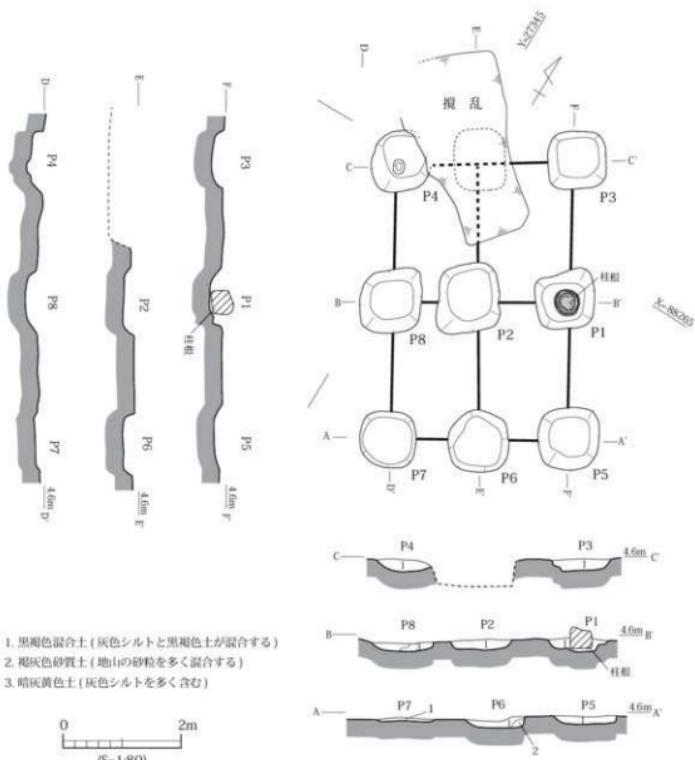
SB07（第25図）

A4グリッド、前掲の SB01 の北 3 m に位置する。標高 4.6m の地山面（第1検出面）で検出した、2間×2間の総柱式建物である。柱穴を 8 基確認し、北西側の 1 基は擾乱によって消失している。柱間は北西・南東が 2.3 m、北東・南西が 1.5 m で、4.6 × 3.0 m の長方形の平面形をなす。床面積は 13.8 m² である。主軸方位は N-33°-W を指向し、SB01 と同軸上にある。柱穴の平面形は隅丸方形で、1辺が 1 m 前後の規模である。深さは 10～30 cm と浅いが、後世の削平を受けているため下層部がわずかに残っている状況である。北東桁側中央の柱穴（P1）で柱根を検出した。柱根は径 40 cm、残存高 35 cm を測る。この柱根については、酸素同位体比年輪年代測定の結果、AD560 年という値が示された。⁽³⁾

高床式建物と考えられる。

出土遺物（第26図）

8は須恵器の坏蓋で、やや扁平なタイプか。9は須恵器坏身の口縁部で、復元最大径 14 cm を測る。

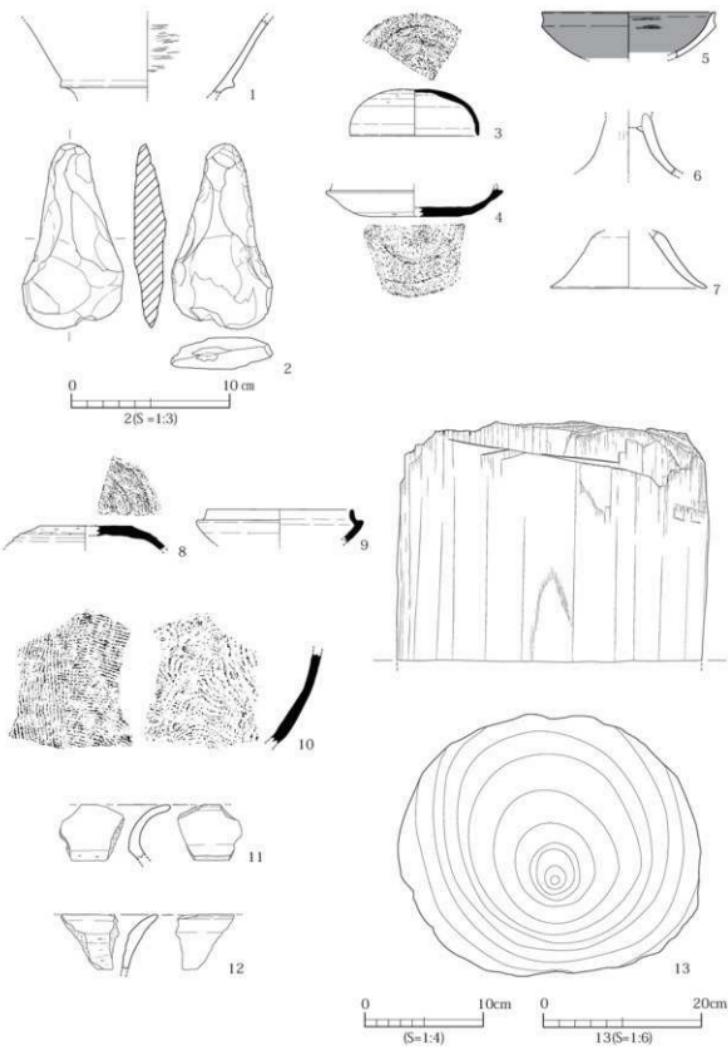


第25図 平ノ前遺跡 SB07 実測図

石見4期か。10は須恵器甕の胸部破片である。内面には同心円文の間に叩き成型時にできたと思われる葉脈の痕が認められる。11・12は土師器で、11は強く外反する甕の口縁、12は甕の口縁である。13の柱の下端部は盤状工具によって平坦に加工されている(図版78)。

出土遺物の様相は、6世紀末から7世紀前半を示す。

(園山薫)



第26図 平ノ前遺跡掘立柱建物出土遺物実測図

溝状遺構

SD05（第 27・28 図）

調査区の西側に位置する。後掲の SD10 と重複し、それより新しい。標高 4.5m の第 2 檜出面（地山面）で検出したが、上面は後世の削平を受けている。旧静間川によって形成された地山は、砂礫およびシルト層である。⁽⁴⁾

本遺構は、南東—北西方向に緩く蛇行して延び、調査区外へと続く。幅は 4 ~ 5.5 m で、長さは調査区内で約 42m を測る。深さは 80 ~ 90cm を測り、断面形は浅い逆台形および鉢状をなす。底面の標高は 3.6 m 前後で、北西側に向かってわずかに下る。土層断面を観察すると、最上層の黒褐色土（1 層）以下は砂礫を多く混合する砂質土が堆積する。この砂質土層ではラミナ（南東→北西の流れ）が観察されたことから、南東（静間川方向）側が上流、北西側が下流と考えられる。断面の観察では、新（以下 SD05（新）とする）と古（以下 SD05（古）とする）の 2 段階の堆積がうかがえ、平面的にも捉えることができた。SD05（新）では自然木を含む木製品などの堆積を確認し、SD05（古）では複数の矢板と杭列などからなる水利施設を確認した。

SD05（新）（第 29 図）

SD05（新）の状況を第 29 図に示した。溝幅は 3.0 ~ 3.8m で、深さは 70 ~ 80cm を測る。断面の観察から、細砂を主とする砂層に粘質土が混合する砂質土（2 ~ 4 層）が短期間に堆積したことがわかった。この砂質土層からは、自然木に混在して多数の木製品を含む遺物が出土した。出土状況をみると、北側 3 分の 1 の範囲内で集中している。これは、後述する SD05（古）の水利施設の位置が関係しているようで、水利施設が機能しなくなった後、流れの淀んだところへ溜ったものと推察される。また、第 33 図 1 のような比較的大きな礫が出土しているが、これらは埋没段階に近場から投棄されたかあるいは流れ込んだものと考えられる。上層の黒褐色土（1 層）の堆積をもって最終的に埋没する。

SD05（新）出土遺物（第 30 ~ 37 図）

第 30 図 1 は壺の頸から胴部上半部である。弥生時代前中期から中期に相当しよう。2 は口径 12cm を測る壺である。口縁には 4 条の沈線が巡り、頸部内面は板状工具でナデつけたような調整である。3 の甕は口縁に粘土を張り付けて肥厚させ、肩部にはヘラ状工具による連続刺突文が巡る。4 は短く屈曲する口縁に 1 条の沈線が巡る。頸から肩部には連続刺突文を施し、その一部をナデ消して段状の区画としているようである。3・4 は頸部直下までケズリが及ぶが、形状・施文的には IV 様式の要素が強い。5 ~ 10 は拡張した口縁に 3 ~ 5 条の沈線が巡る甕である。5 は頸部下に細かい刺突によって 5 条の沈線状の文様を施す。6・8・9 は頸部下に連続刺突文が施され、6 には文様を区画するように沈線が巡る。また、5・8・9 の外面全体には煤が付着し、8 には焦げ痕が観察される。これらの土器はいずれも V-1 様式に相当する。11 は溝の最上層（1 層）から出土した甕で、複合口縁には多条沈線が施される。V-2 様式に相当する。12 は口径 8.6cm、器高 11.3cm を測る小型甕である。外面の調整は風化のため不明だが、内面は胴下半がヘラケズリ、上半が粗雑なナデ調整である。IV-2 様式に相当する。13 は壺または甕の底部で、縦刷毛目調整である。14 は蓋である。

第31～33図は石器である。第31図1は磨製石斧である。石材は塩基性片岩。2は石錘である。両端を打ち欠いている。3・4は凹石である。凹部周辺に摩面が認められる。4は片面中央に小さな敲打痕が認められる。5・6は磨石である。5は両面のほか側円周も使用している。また、片面中心に弱い敲打痕が認められる。7は磨・敲石である。片面と側面が叩きに使用され、片面が磨りに使用され線状痕が確認できる。破断部に弱い擦痕が見られることから、割れた後も使用されたものと思われる。

第32図1は扁平な砥石である。全面を使用し、一部に敲打痕が認められる。2・3は敲石である。4は一端に敲打による弱い凹部が認められる。用途は不明。5は15×20cmの円礫で、片面がよく摩り込まれ、凹部となっている。台石か。

第33図1は線刻石である。長さ27.4cm、幅23.5cm、厚さ12.2cm、重さ9740gを測るやや扁平な隅丸方形の礫を素材としている。石材は安山岩で、一角が欠損し、表面には深い凹部が、平坦な裏面には小さな凹凸が多数見られる。表面から裏面にかけて「T」字状の線刻が施される。線刻の断面形は逆台形状をなし、「T」の横線は幅5mm、深さ2mmで、直線的に12cmほど刻まれる。縦線は幅5～16mm、深さ2～4mmで、横線の中心部から直交して裏面の3分の2までやや蛇行気味に刻まれ、全長36cmを測る。途中、長さ4cmほどの支線が2本斜め方向に枝分かれし、その2本は約9cmの間をおいて平行している。また、欠損する破断面外縁の一端（「T」の横線に近いところ）に加工痕が確認できる。この部分は線刻の表面と同じ風化具合を呈すことから、ここにも線刻が施されていた可能性がある。なお、同様の枝分かれする線刻を有する礫が、約4km東に位置する中尾H遺跡から出土している。⁽⁵⁾

第34～37図は木製品である。溝内からは自然木も含め約100点が出土した。そのうち、加工痕の認められる50箇所を取り上げた。

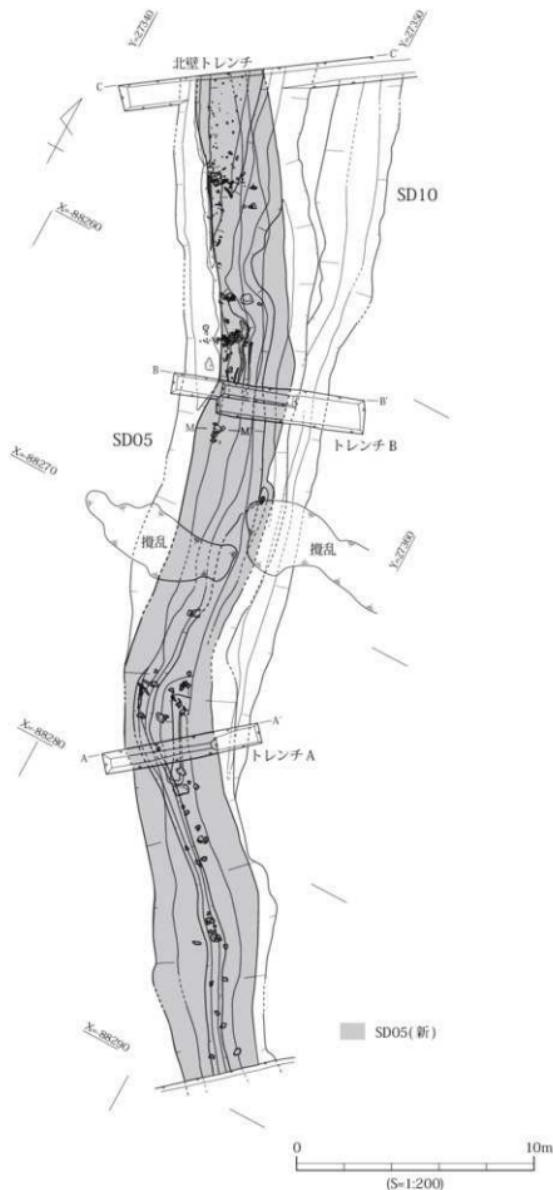
第34図1～4は桶である。5は桶の底板と思われるが、3～6mmの孔が穿たれており、転用された可能性がある。

第35図1・2は田下駄である。3～8は板状木製品である。3・4・6・8には穿孔が認められ、6は片側に抉れをもつ。8は穿孔の痕が見られ、箱物の一部の可能性がある。9・10は容器のように内面が削り込まれているが、樋のような形を呈しており、器種は不明である。転用されたものと思われる。

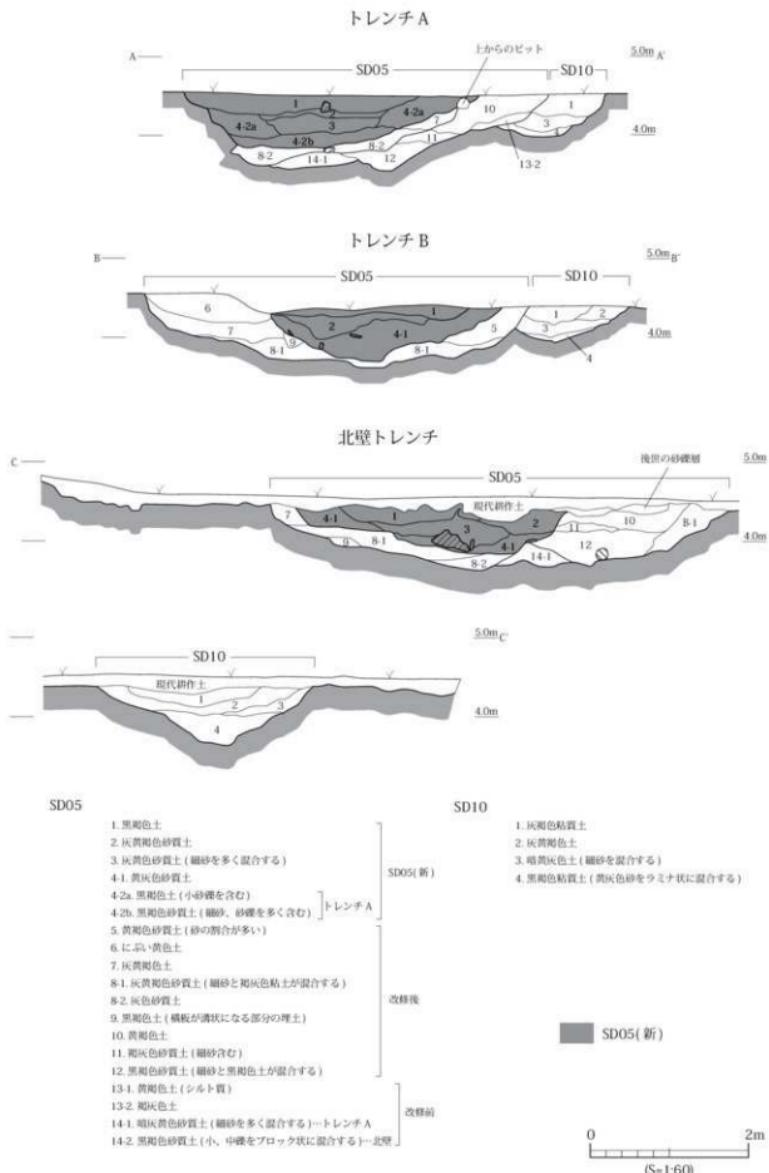
第36図1～4は棒状の木製品である。1の表裏は非常に滑らかに仕上げられている。3・4の端部は抉りをもつ。5～8は脇穴のある板材である。6の表面には接合部と思われる凹みが認められる。これらは建築材の一部と考えられる。9～11は接合部の抉れをもつ棒状の建築材と思われるもので、杭に転用されたか、端部を鋭く削られている。

第37図1～6は建築材を杭に転用したものである。7・8は芯持ち材の杭、9・10は柱材である。9の二股部には桁材の当たり痕が認められる。

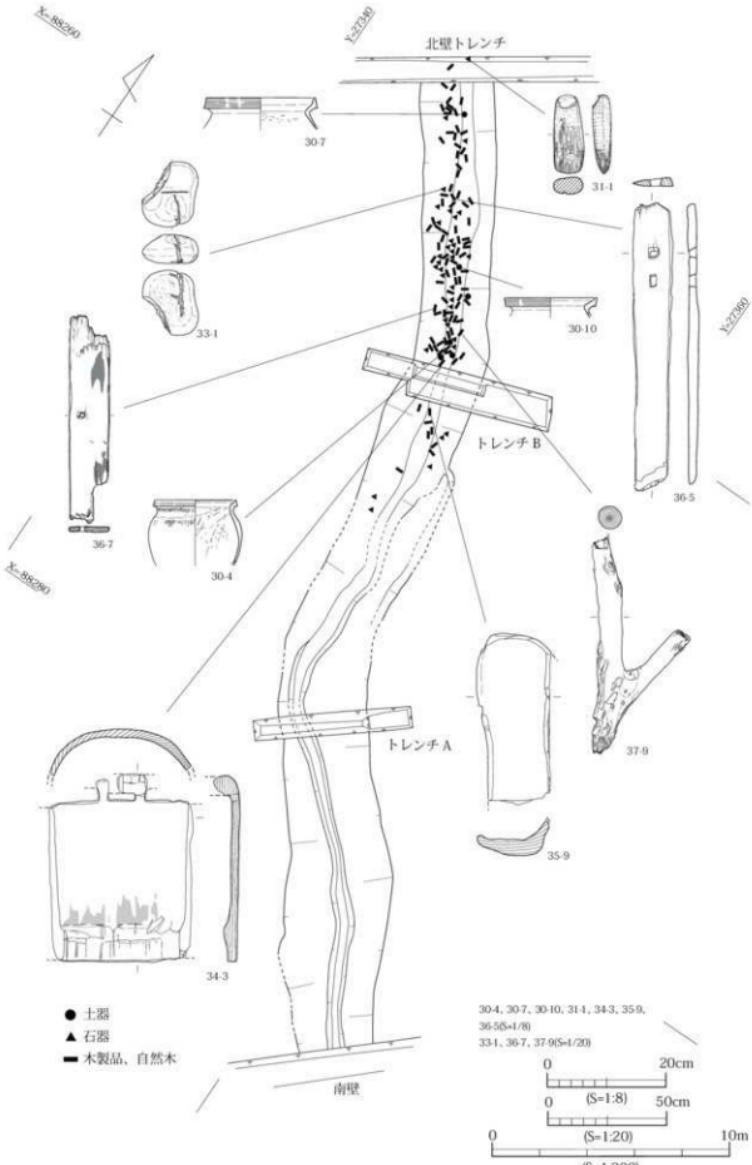
出土遺物は、砂質土層（2～4層）に弥生時代中期の遺物を含むものの、弥生時代後期前葉の様相を示している。また、第30図11が最終堆積の1層から出土することから、SD05（新）は弥生時代後期の前半代には埋没したものと考えられる。



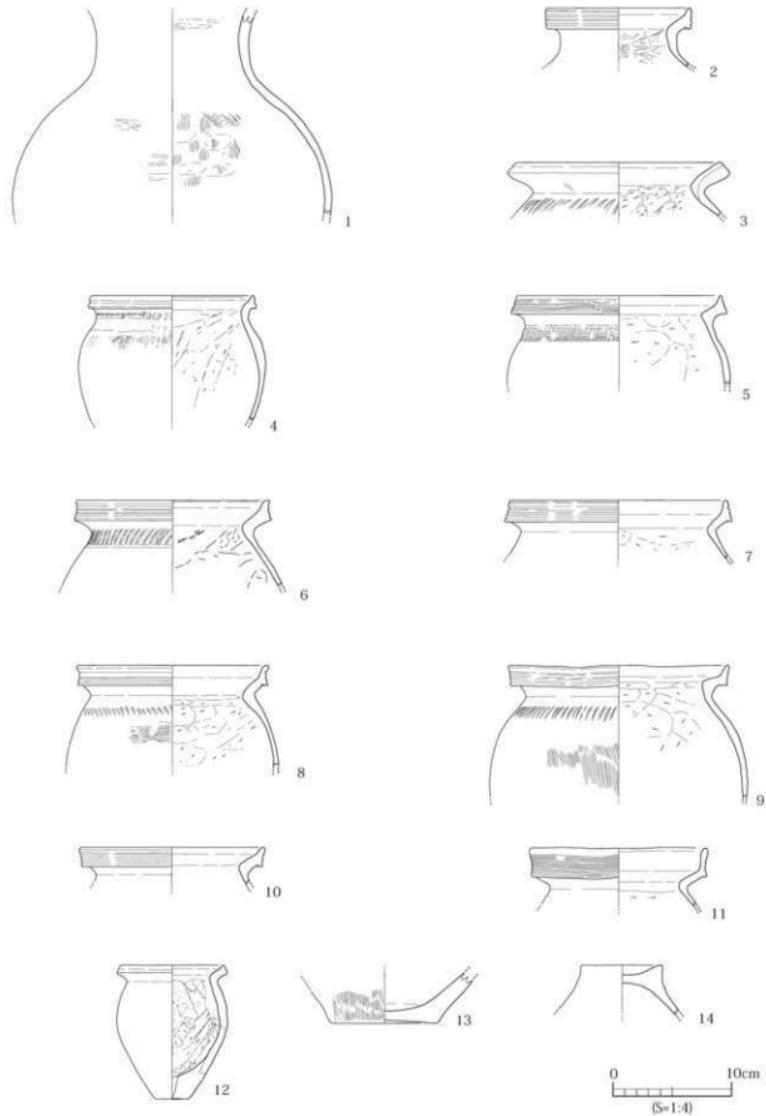
第27図 平ノ前遺跡 SD05、10実測図



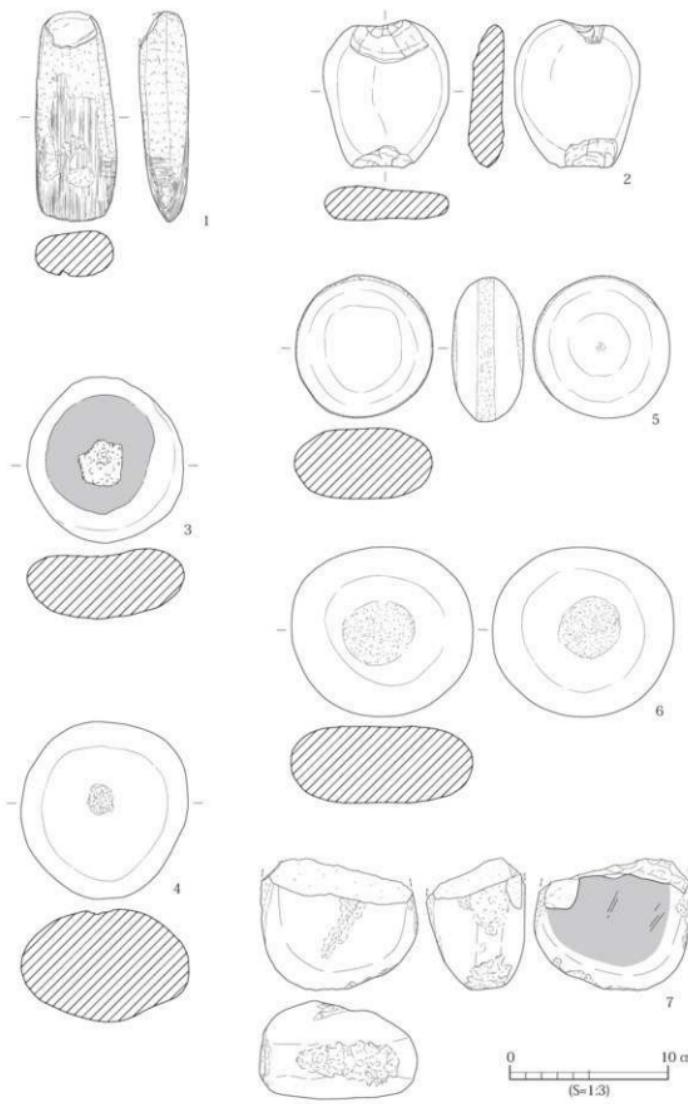
第 28 図 平ノ前遺跡 SD05、10 土層断面実測図



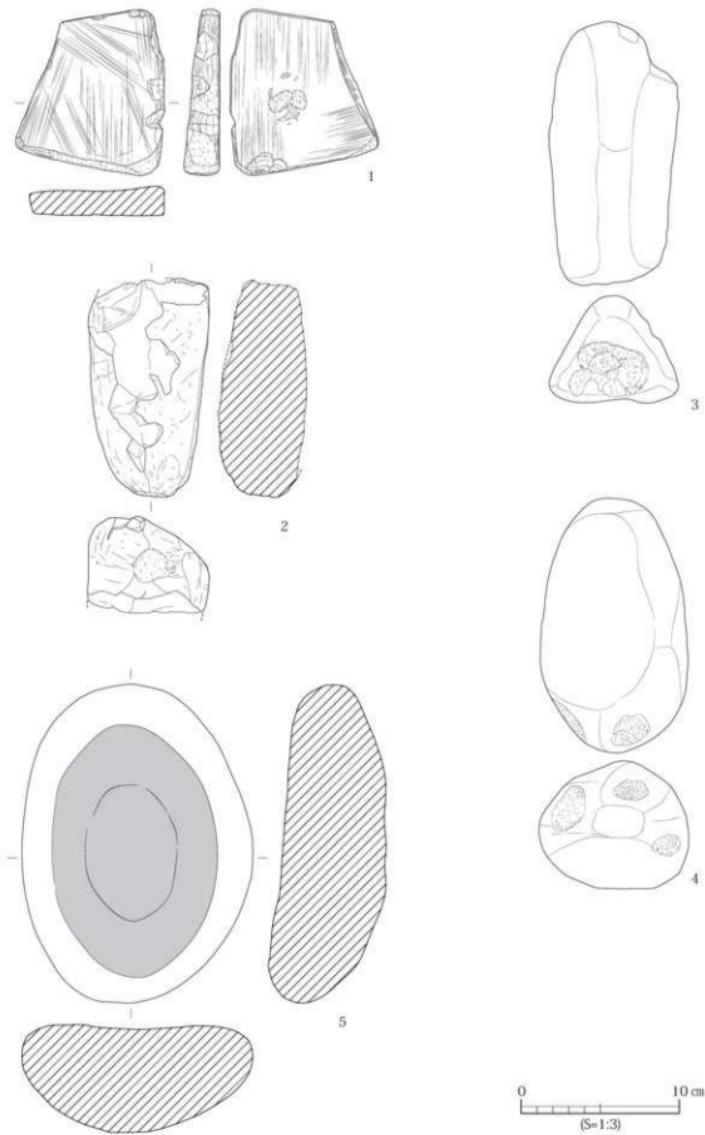
第29図 平ノ前遺跡 SD05(新)実測図



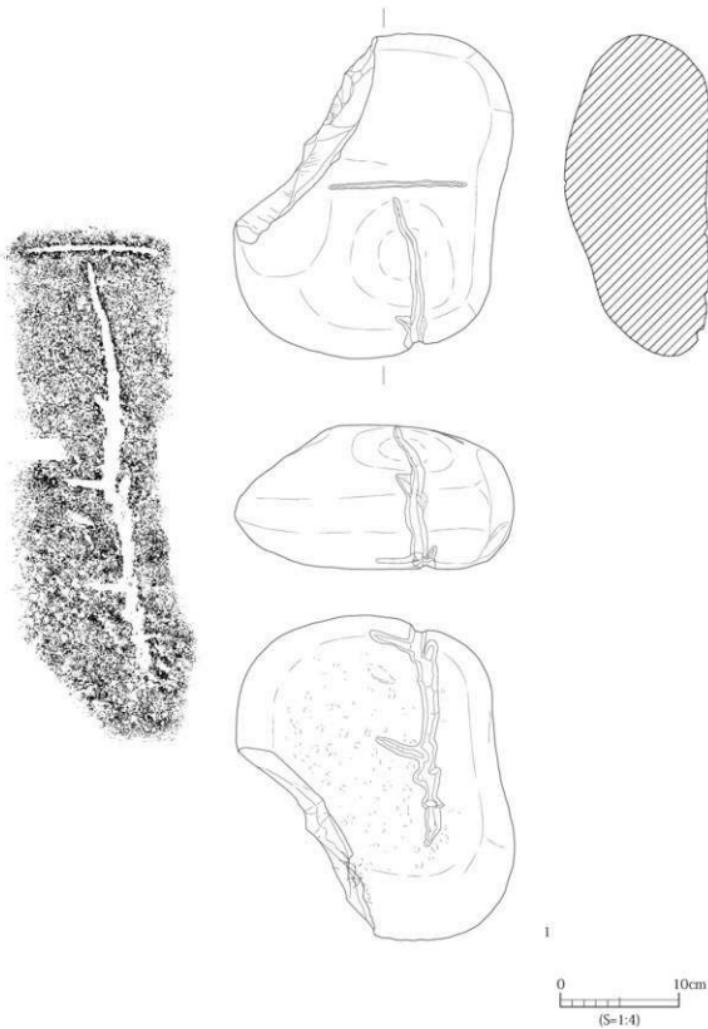
第30図 平ノ前遺跡 SD05(新) 出土遺物実測図(1)



第31図 平ノ前遺跡 SD05(新) 出土遺物実測図(2)



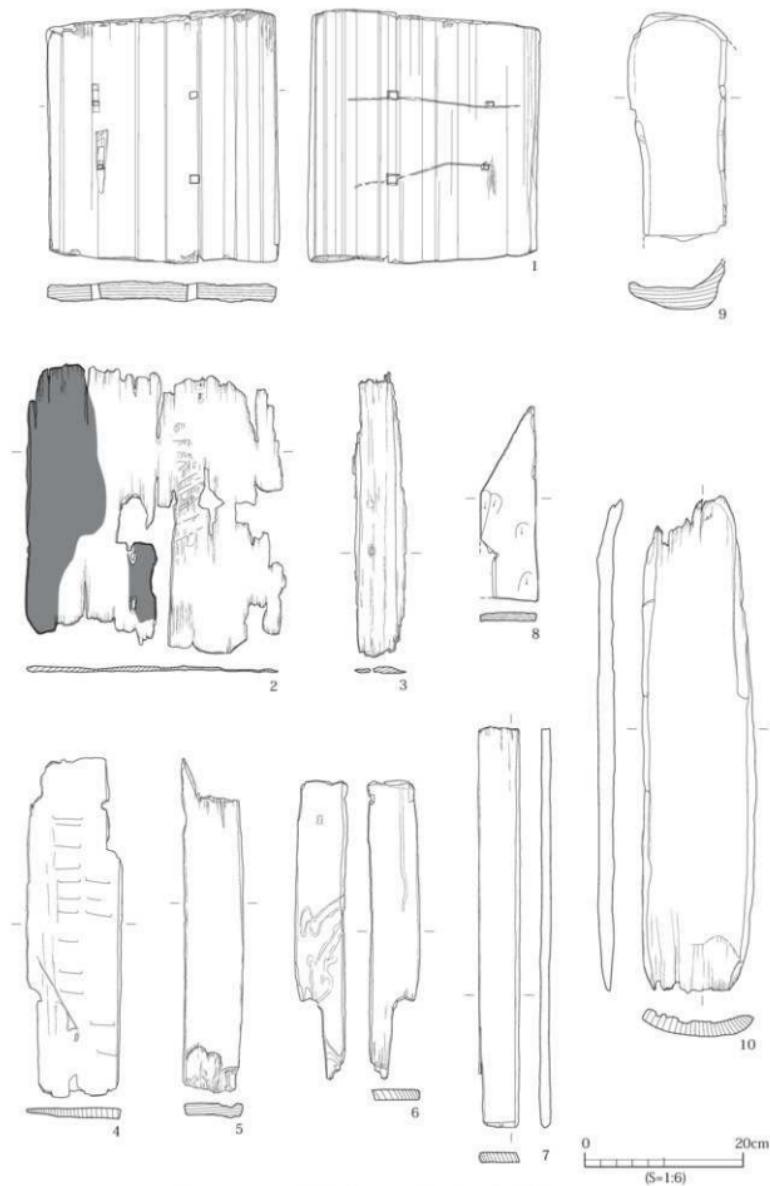
第32図 平ノ前遺跡 SD05(新) 出土遺物実測図(3)



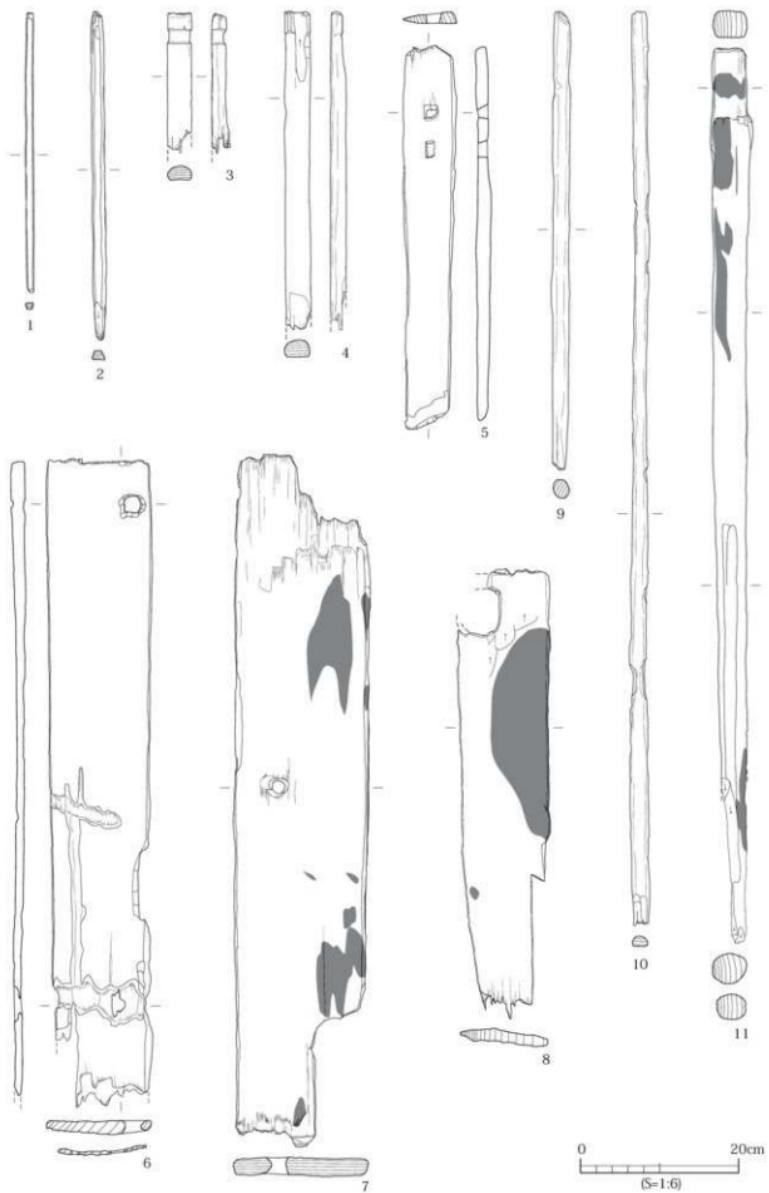
第33図 平ノ前遺跡 SD05(新) 出土遺物実測図(4)



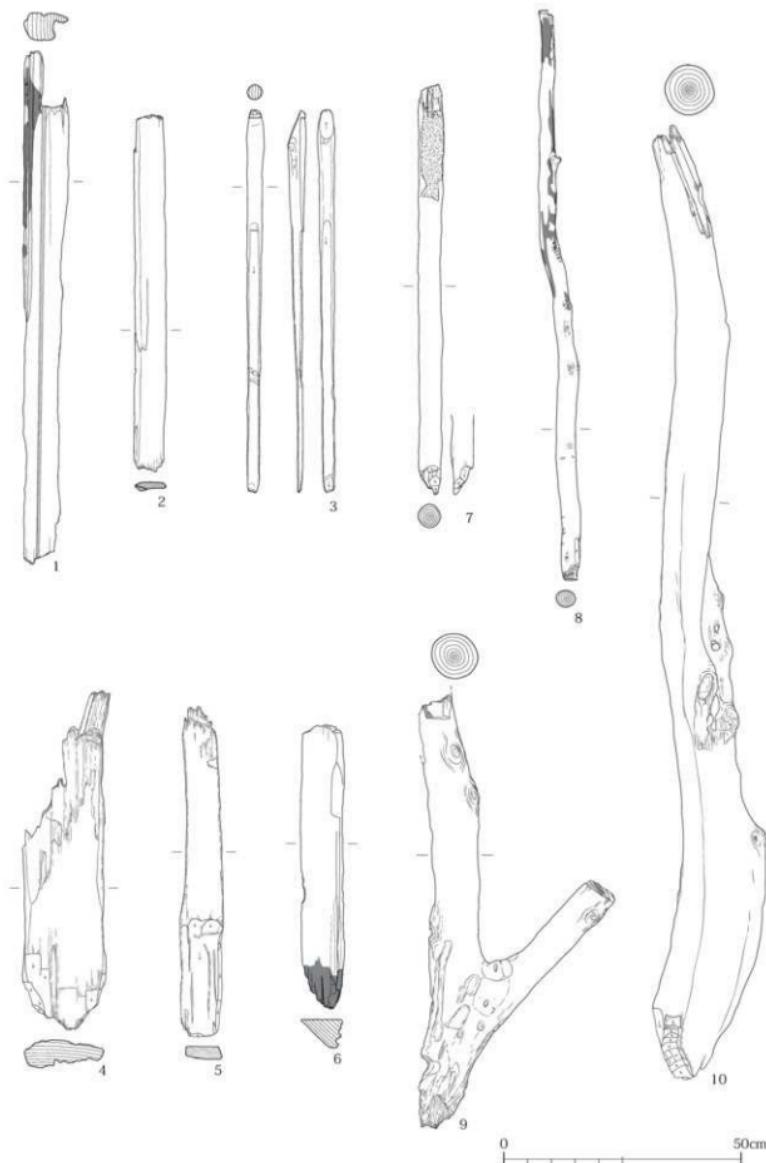
第34図 平ノ前遺跡 SD05(新) 出土遺物実測図(5)



第35図 平ノ前遺跡SD05(新)出土遺物実測図(6)



第36図 平ノ前遺跡 SD05(新)出土遺物実測図(7)



第37図 平ノ前遺跡 SD05(新)出土遺物実測図(8)

SD05（古）（第 38・39 図）

SD05（古）の状況を第 38・39 図に示した。SD05（新）より溝幅は 4 ~ 5.5 m に拡大する。土層断面の観察から、5 ~ 14 層の堆積段階に少なくとも 2 回以上の改修が行われたことがうかがえる（第 28 図）。平面的に捉えることはできなかったが、流路の東側から西側へと掘り直しながら溝幅が広がった状況が見て取れた。砂礫を多く含む砂質土の堆積層中には、粘質土を混合するラミナ層も観察された。また、溝内は當時水が流れていた、あるいは滞留していた形跡がなく、水の流れは一時的あるいは季節的なものであった可能性が高い。水利施設は、南側の 1 箇所と北側 3 分の 1 の範囲で検出した。主に底面や壁面に打ち込まれた矢板と杭で構成されている。まとまりから大きく 6 つに分けることができたため、矢板・杭列 1 ~ 6 とした。

矢板・杭列 1（第 39・40 図）

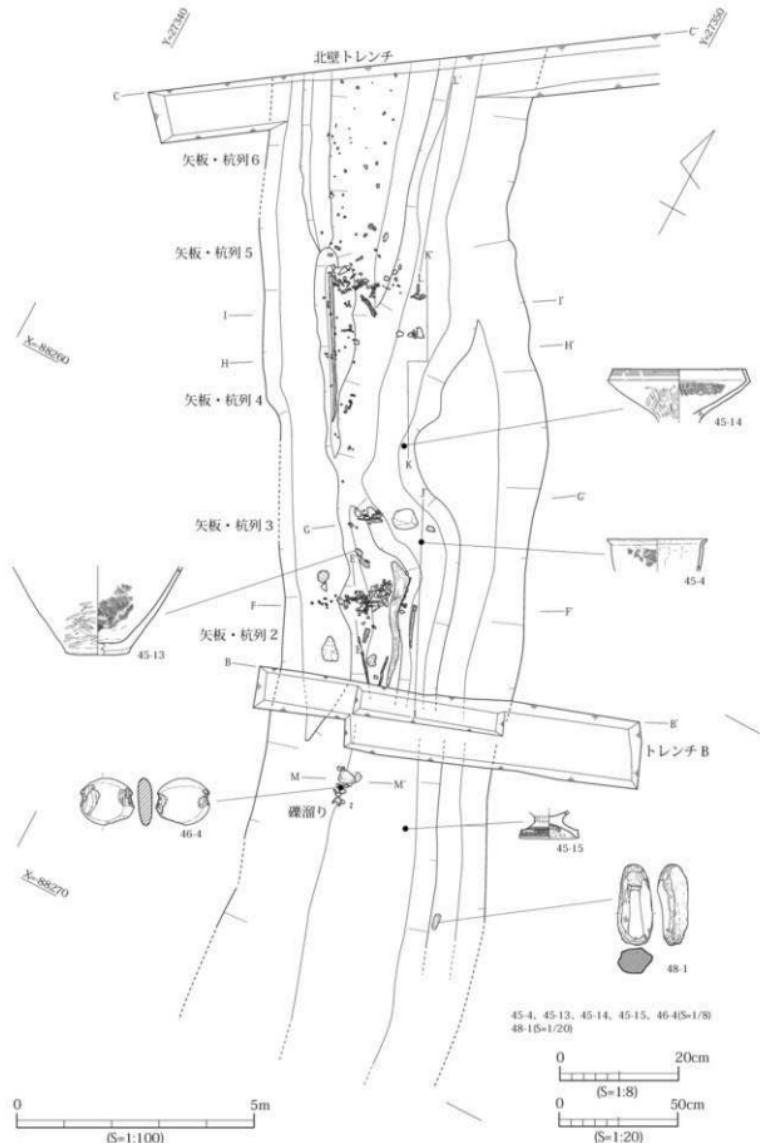
矢板・杭列 1 は、トレンチ A の北側で検出した。10 数本の矢板状の杭が、溝底の東壁側から溝中心に向かって斜め方向に 1 m ほど列状に打ち込まれていた。杭は幅 4 ~ 10 cm、長さ 40 ~ 80 cm で、底面からの残存高 10 ~ 30 cm を測る。ほとんどが施設材からの転用と考えられるが、角材のほか自然木も用いられていた。付近では板材（第 39 図、第 49 図 12）などが出土しており、これらと組み合わされた構造をもっていた可能性がある。

矢板・杭列 2（第 38・41 図）

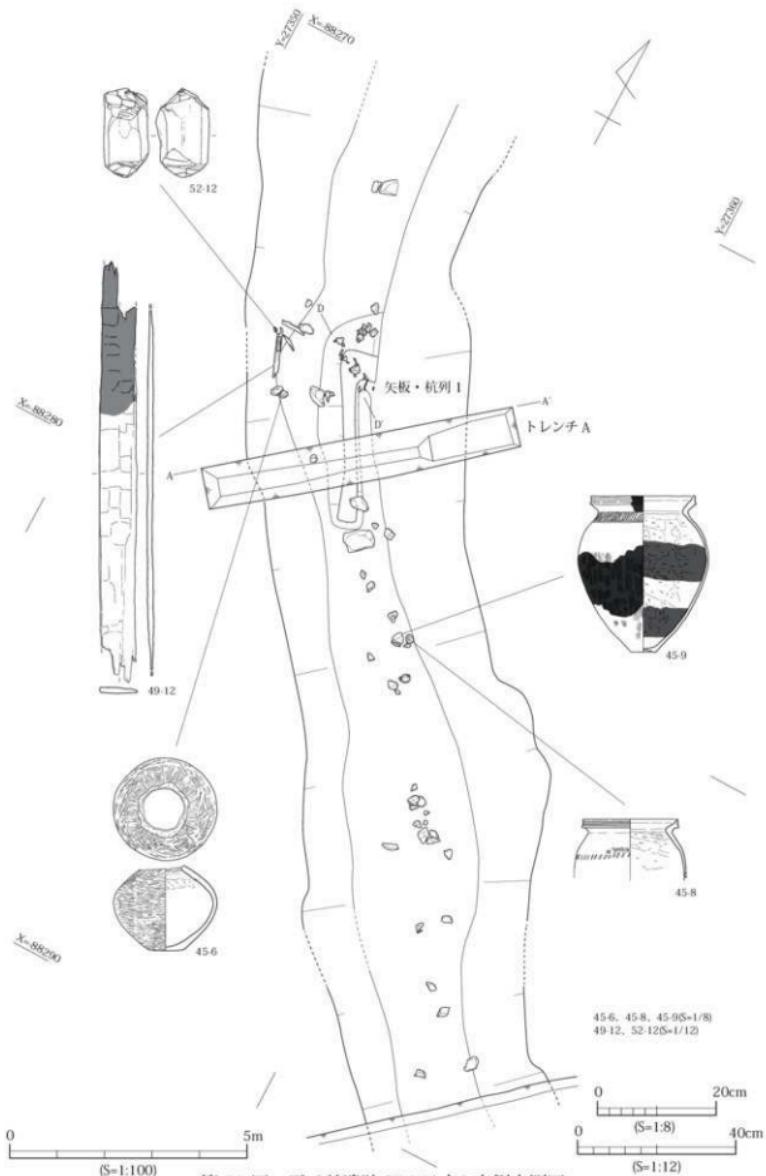
矢板・杭列 2 は、トレンチ B の北側で検出した。矢板・杭列 1 より約 15 m 北に位置する。溝の中心部に、最大径 30 cm、長さ 2.6 m を測る自然木が根元部を下流側にして置かれ、杭で固定されている。この自然木の根元部に近いところから西壁側に向かって、矢板と杭が流路に直交する形で長さ 1 m ほどの範囲で打ち込まれている。自然木に近いほうには、幅 30 cm に矢板が 2 枚打たれ、それを補強する杭が打たれている。そこから西側には 15 本ほどの矢板状の杭や角杭が、30 × 50 cm の長方形をなすように打たれている。ただし、南長辺と西短辺側は散逸したためか杭がまばらである。北長辺には幅 6 cm、長さ 45 cm の横木が杭で固定されている。横木はこの 1 本のみだったが、杭の配置から、横木と杭によって長方形の枠状の構造物を形作っていたものと考えられる。これらの矢板と杭は残存高 20 ~ 50 cm、天端の標高 4.2 m を測る。また、中小の礫が矢板と杭の周囲と下流側に敷き詰めたようにみられ、一部には第 48 図 2 のような縦位に埋まった礫もあった。これらの状況から、溝の中心部に置かれた自然木によって水流を変え、矢板と杭で堰き止められた水が、枠状の構造物に溜められたことがみてとれる。底面の礫は矢板と杭を支えるとともに、堰き止められ溢れた水流によって底面が流失するのを防ぐために置かれたものと考えられる。礫の中には磨製石斧（第 46 図 3）も含まれていた。また、西壁側では杭の抜き取り作業時に、地山内で杭を何本か検出した。いずれも上部は腐食していた。これらは矢板・杭列 2 の同軸上にあることから、矢板・杭列 2 の一部、もしくはその前段階に相当するものと考えられる。

矢板・杭列 3（第 38・41 図）

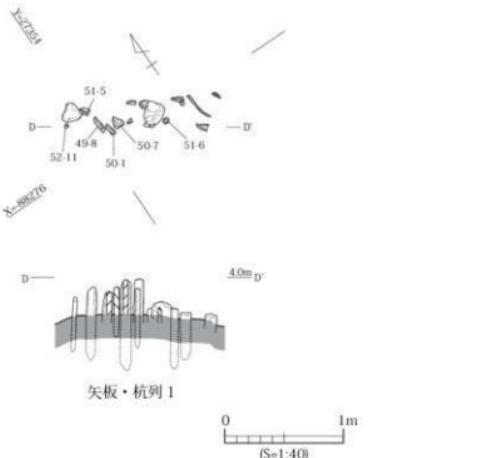
矢板・杭列 3 は、矢板・杭列 2 の下流約 1.8 m の西壁側で検出した。ここは溝底が S 字上に屈曲する場所に当たる。矢板・杭列 2 に平行するように流路に直交して矢板と杭が長さ 0.7 m の範囲で打ち込まれ、周りには 5 ~ 20 cm 大の礫が確認される。矢板と杭は残存高 50 cm、天端の標高 4.15 m を測る。杭には角材や自然木が用いられ、90 cm 近い長材もあった。また、0.2 m ほど離れた溝底中心で、40 × 40 × 50 cm 大の自然礫を 1 個検出した。この礫は、矢板・杭列 3 に近い位置関係に



第38図 平ノ前遺跡SD05(古) 北側実測図



第39図 平ノ前遺跡 SDO5(古) 南側実測図



第40図 平ノ前遺跡 SD05(古) 水利施設実測図(1)

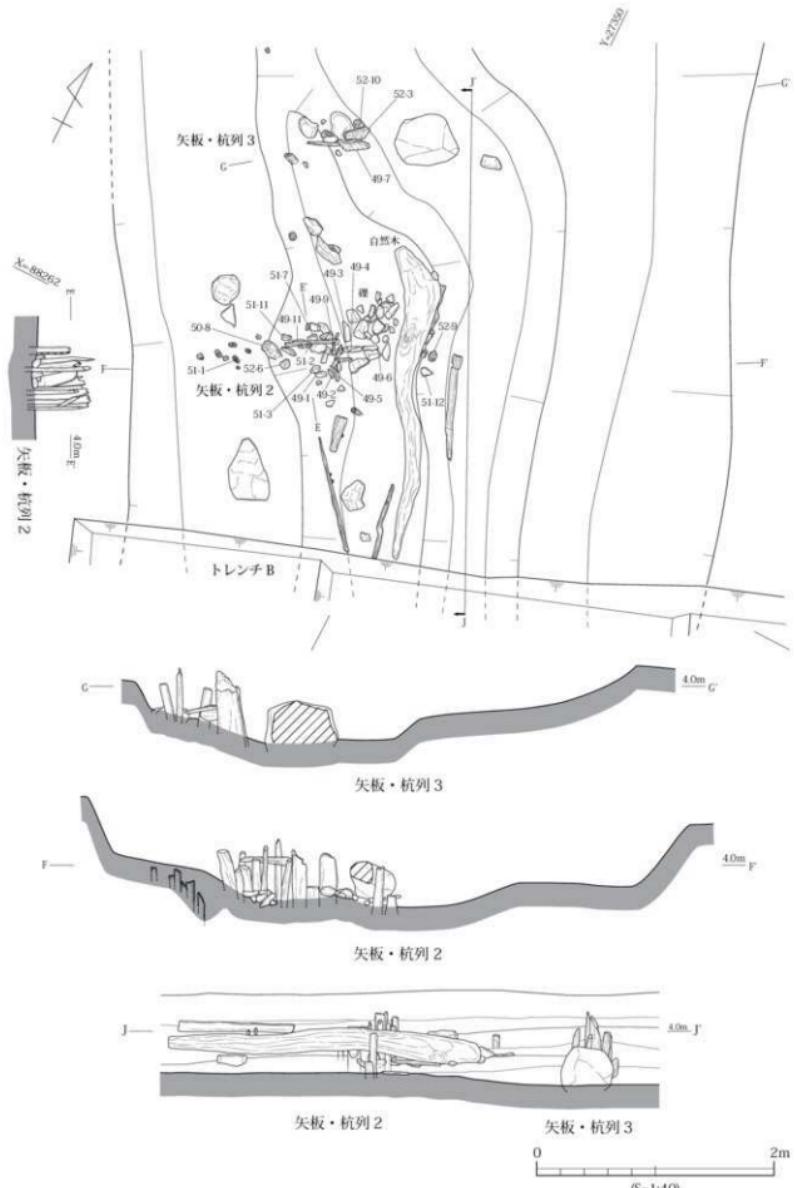
あることから、矢板・杭列2の自然木と同じように水流を変える役割をもって置かれた可能性がある。

矢板・杭列4（第38・42図）

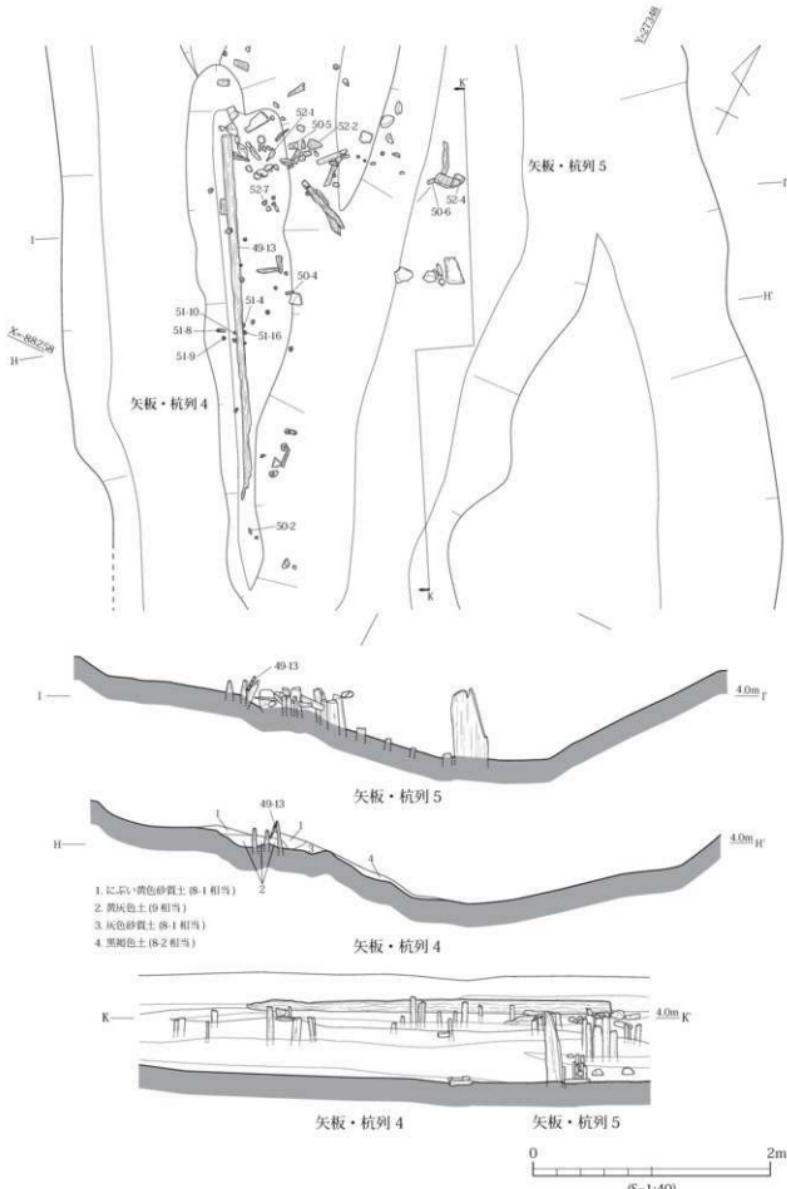
矢板・杭列4は、矢板・杭列3の下流約2mの西岸側で検出した横板を主体としている。西岸側の上部、標高4mには幅0.2～0.5m、長さ4mほどの平坦部があり、そこに幅12cm、厚さ2cm、長さ3m強を測る板材（第49図13）が流路に平行して置かれている。横板は両側から杭留めされている。横板の下端は標高4.0m、天端は4.15mである。土層断面を観察すると、細い溝状の落込みがあり、横板はその壁側に位置している。また、周辺の杭の配置を見ると、横板から20～30cm外側で流路に並行して点在している。おそらく、外側に対となる横板があつて幅20～30cmほどの溝を形成していたものと思われる。横板の上流側は欠損した状況で、さらに長かったものと思われる。横板をそのまま上流側に延長すると矢板・杭列2の西端（桟状部）へとぶつかる（第38図）。矢板・杭列2と矢板・杭列4の天端の標高は4.2～4.15mとほぼ同じであることからも、ここに接続していた可能性は十分考えられる。さらに、横板の置かれた平坦部の下流側には幅0.4mの平坦部が標高4mで調査区北壁まで続いている。北壁の断面では第42図と同じ溝状の落込みが観察され、そこに向かって杭列が続いている。以上の状況から、この下流側の平坦部にも横板で形成された溝が存在していたことが推察される。

矢板・杭列5（第38・42図）

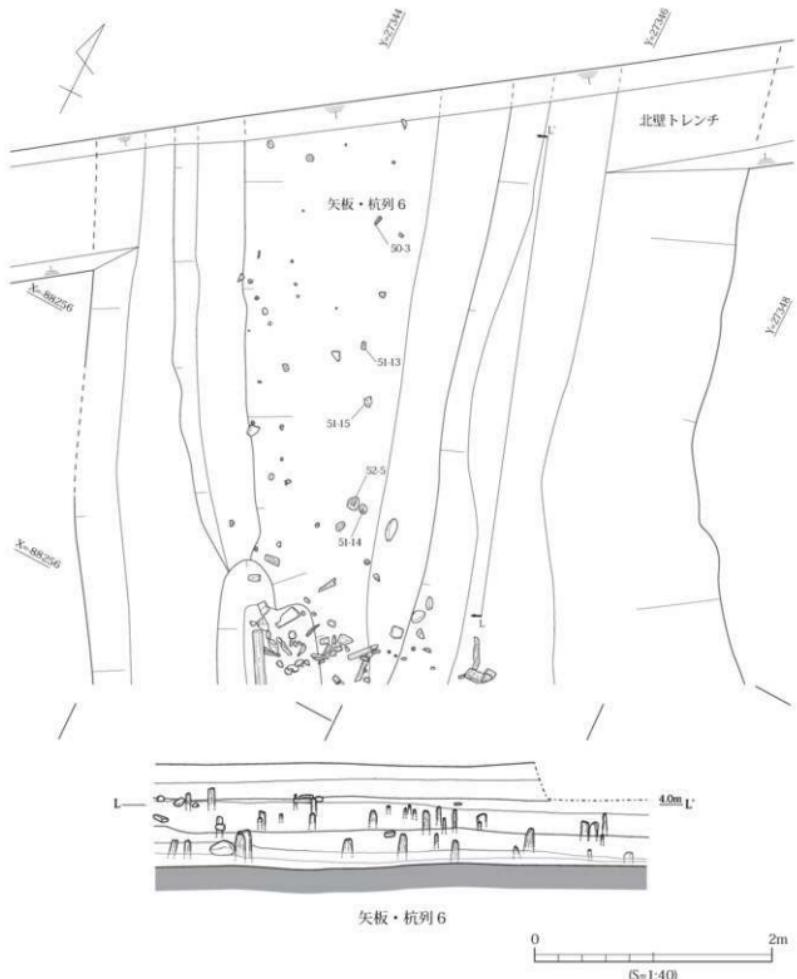
矢板・杭列5は、上記の横板の下流側端部から溝中心に向かって、流路に直交する形で打たれたもので、約2m検出した。矢板と杭の間には中小の礫が散在する。溝中心には幅10～15cm、長さ80～90cmの杭が打ち込まれ、残存高55cmを測る。その天端は最大で標高4.05～4.15mを測る。矢板・杭列5は流路に直交するものの、西壁側と溝中心に近い部分では軸が若干ずれている。溝中心側の列はやや東に振って並び、その方向はやや東に振って進む溝底の方向に直交する形で



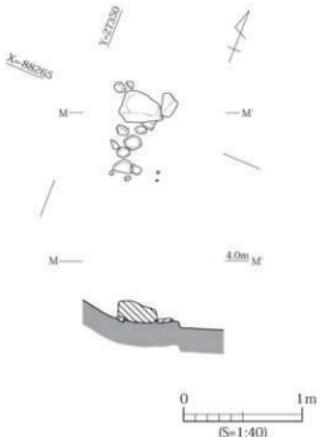
第41図 平ノ前遺跡SD05(古) 水利施設実測図(2)



第42図 平ノ前遺跡 SD05(古) 水利施設実測図(3)



第43図 平ノ前遺跡 SDO5(古) 水利施設実測図(4)



第44図 平ノ前遺跡 SD05(古) 碓溜り実測図

ある。この溝底は、調査区北壁で確認されるSD05(古)の改修前の溝(13・14層)に相当していることから、矢板・杭列5のうち溝中心側の矢板と杭は改修前の溝に伴うものと考えられる。

矢板・杭列6 (第38・43図)

矢板・杭列6は、矢板・杭列5から調査区北壁までの間で検出した杭である。幅5~10cmの転用された角杭が主で、自然木も用いられている。それらは大別すると西岸側に並ぶグループと溝底に沿って並ぶグループに分けられる。溝底に沿って並ぶグループは、前述のようにその方向から、矢板・杭列5における溝中心側の列と同じように改修前の溝に伴うものと判断される。

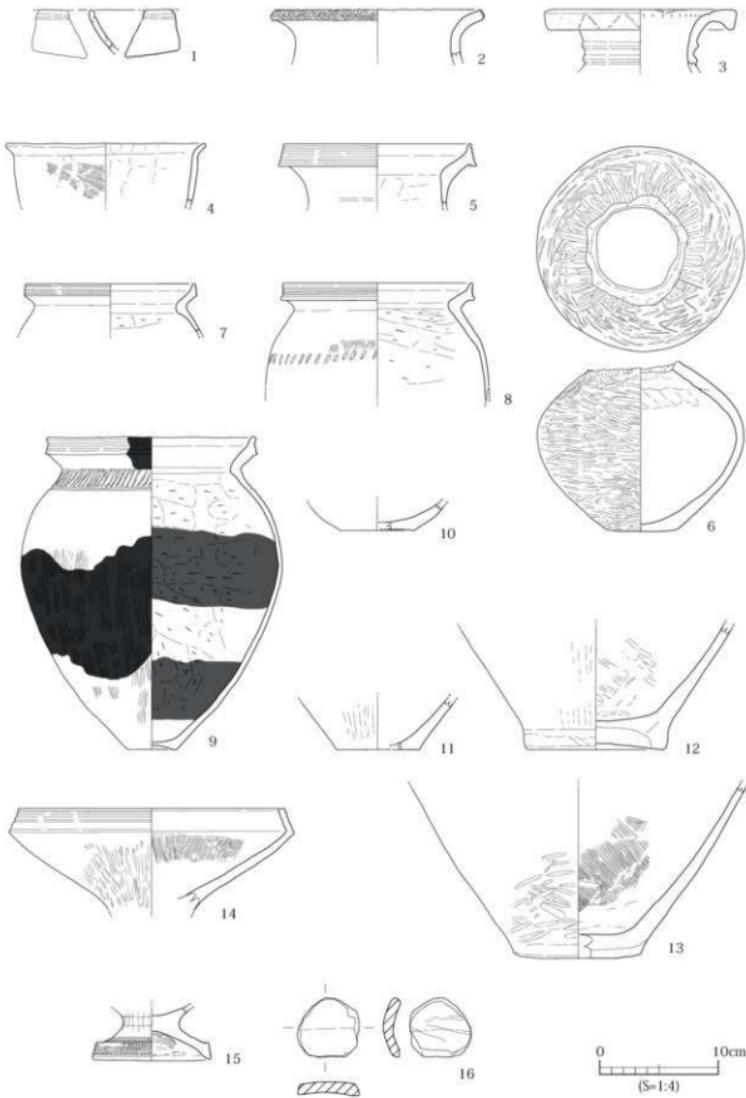
碓溜り (第38・44図)

トレンチBの南側で、碓溜りを1箇所検出した(第38・44図)。西壁近くの底面で、50×80cmの範囲に5~10cm大の円礫を主として最大20×30cm大の礫が集合していた。礫の中には石錘(第46図4)が1点含まれていた。性格は不明であるが、矢板・杭列2の底面で見られた礫のように、水利施設の一部の可能性がある。

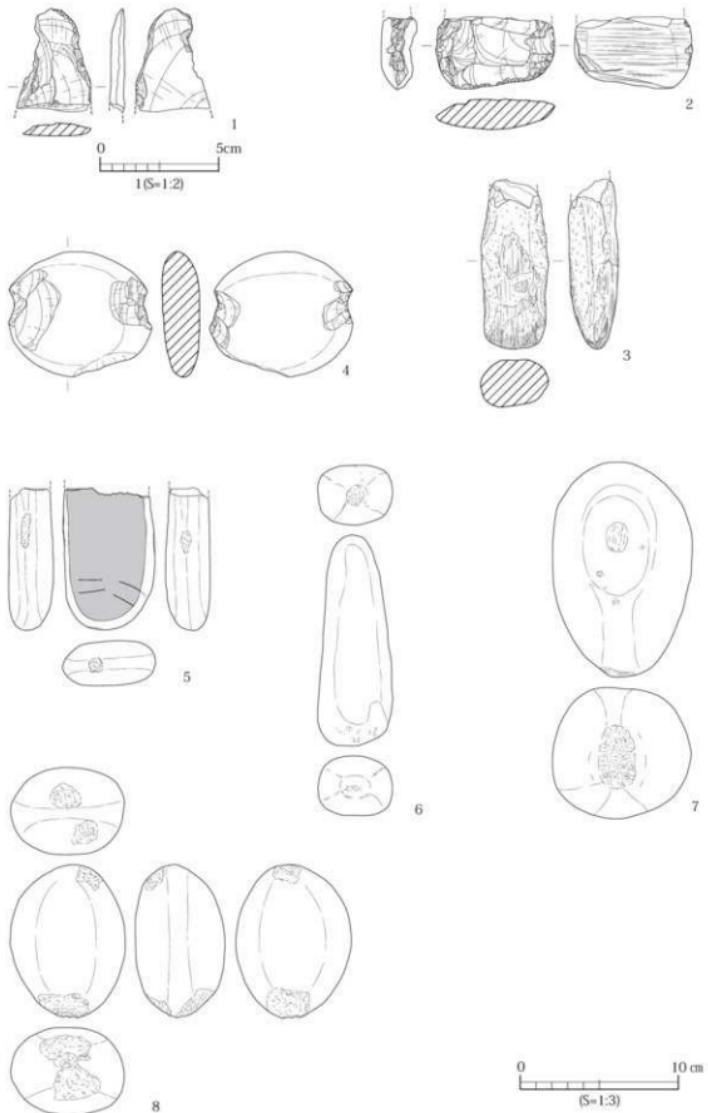
ここで、残存する矢板と杭から水利施設の復元を試みると、矢板・杭列2・3・5などの流路に直交して打たれた矢板と杭で流水を堰き止め、溜り溢れた水を西岸側に設置された矢板・杭列4のような横板を伴う溝へと導水し、下流へ流していたことが理解される。このように、施設は分水と導水を兼ねた施設として築造されたものと考えられる。また、矢板・杭列5・6の状況からは、施設は溝の改修に合わせて造り直しが行われたことがうかがえる。ただし、矢板・杭列2・3・5についてでは、それらが同時に機能していたものかどうか判別し得なかった。

SD05(古) 出土遺物 (第43~50図)

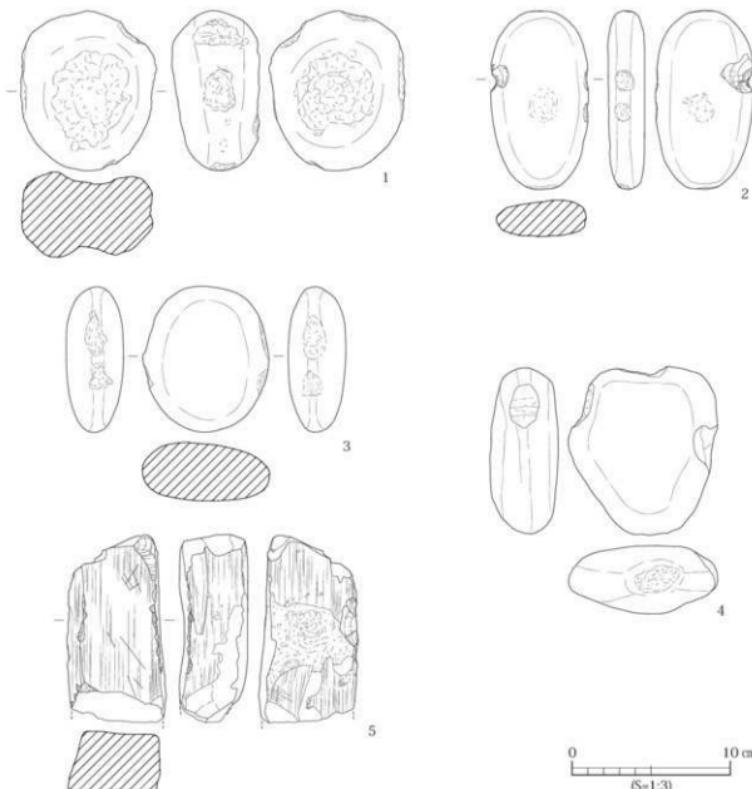
第45図1は縄文時代晩期の浅鉢破片である。地山堆積層(砂層)からの流入と考えられる。2は弥生時代中期前葉に相当する壺の口縁部で、端部には矢羽状に刺突文が施される。3はラッパ状に口縁が開く壺で、頸部に2条の突帯が巡る。口縁の端部に山形文が、上面には山形文と列点が施される。Ⅲ-1様式に相当する。4は無文の壺である。口縁は弱く屈曲し、端部を丸くおさめる。Ⅱ様式に相当する。5は弥生時代中期末から後期初めに相当する壺で、拡張した口縁に4条の沈線が巡る。また、頸部にも1条の沈線が認められる。6は頸部以上を欠き体部のみの形で出土した壺である。最大胴部径はやや上位にあって張り、小さめな底部は凸気味で安定が悪い。外面は横ミガキ調整を基本とするが、頸部下には縦ミガキが施される。本来の器形は不明だが、頸部以上を意図的に打ち欠いているようである。また、肩部の一部には波状の沈線が見える。焼成後につけられたものと考えられるが、線刻か傷跡かは判別出来なかった。弥生時代後期に相当しよう。^[6]7は弥生時代後期頭の壺で、上方にやや拡張した口縁に3条の沈線が巡る。8は口縁が上下にやや拡張す



第45図 平ノ前遺跡 SD05(古) 出土遺物実測図(1)



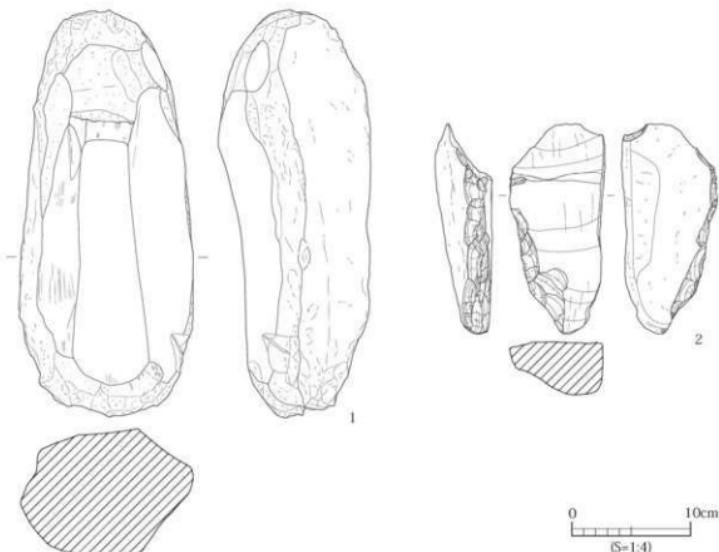
第46図 平ノ前遺跡 SD05(古) 出土遺物実測図(2)



第47図 平ノ前遺跡SD05(古)出土遺物実測図(3)

る壺で、肩部に刺突列点文が巡る。V-1様式に相当する。9は完形の状態で出土した壺で、口径17.5cm、器高26.3cmを測る。最大胴部径は上位にあり、上げ底気味の小さな底部をもつ。やや上方に抵張した口縁には3条の沈線が巡り、頸部下には沈線で区画された間に連続刺突文が巡る。外面には口縁の一部と胸部中心から下半にかけて煤が付着し、内面には最大胴部径と底部付近にドーナツ状の焦げ痕が認められる。V-1様式に相当する。10・11は壺または壺の底部で、12・13は大型壺の底部である。10・11は弥生時代中期から後期、12・13は前期末から中期に相当しよう。14は高环の坏部である。内傾する口縁に3条の凹線が巡る。IV-2様式に相当する。15は台付鉢の脚部である。底面はヘラケズリ後、ミガキ調整される。外面は継ミガキ調整で、裾部上面に3条の凹線を引き、端部近くに刻みを入れる。端部には4条の凹線を引き、その上から斜線を刻み装饰性を高めている。弥生時代中期後葉に相当するものと考えられるが、後期前葉に下る可能性もある。16は土器転用品である。弥生時代前期の壺の胸部から作られ、径5cmの円盤状をなす。

第46～48図は石器である。第46図1は刃部を欠くが、石匙状のスクレイパーと考えられる。



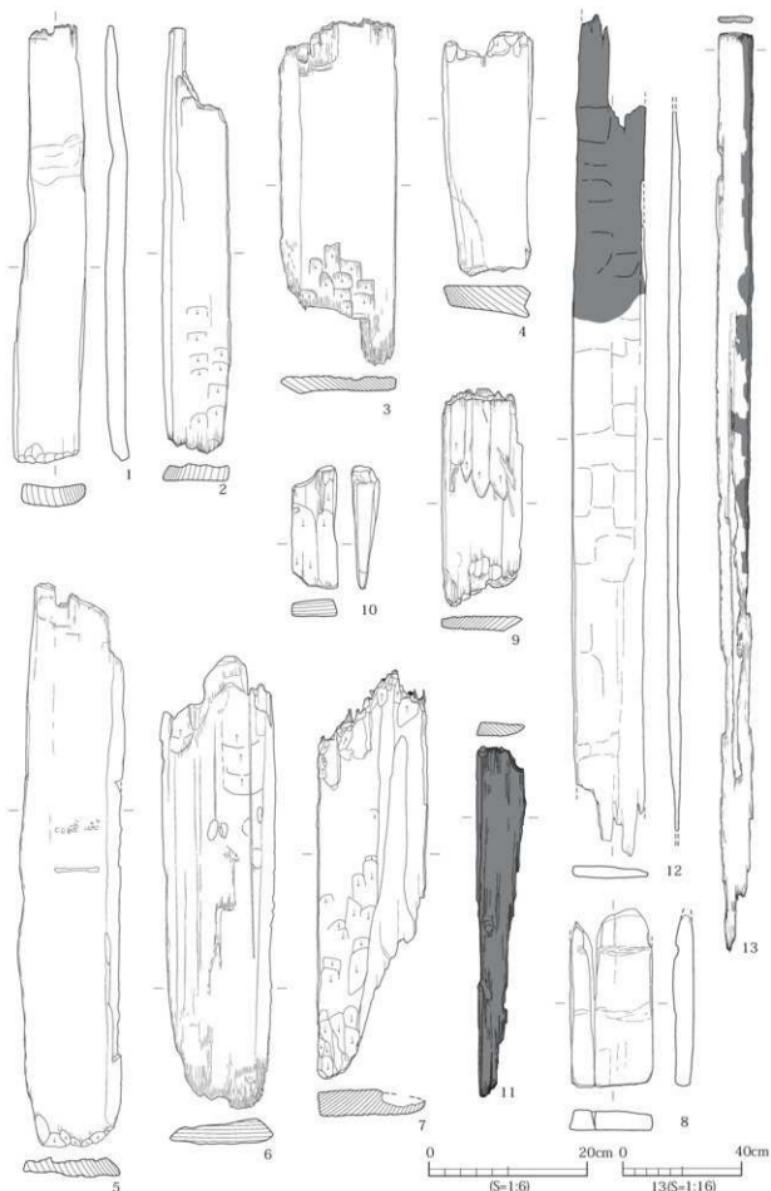
第48図 平ノ前遺跡SD05(古)出土遺物実測図(4)

石材は安山岩。2は磨石の二次利用と考えられるもので、割れて鋭利になった側縁に刃部のような加工痕が認められる。3は矢板・杭列2の礫敷き内から出土した細身の磨製石斧である。側面4箇所に装着痕をもつ。珪質片岩製。4は石錘である。礫溜りより出土した。5・6・7・8は磨・敲石である。7には片面に磨りの使用痕が認められる。8の外面は非常に滑らかに磨かれており、両端部に敲打痕が認められる。

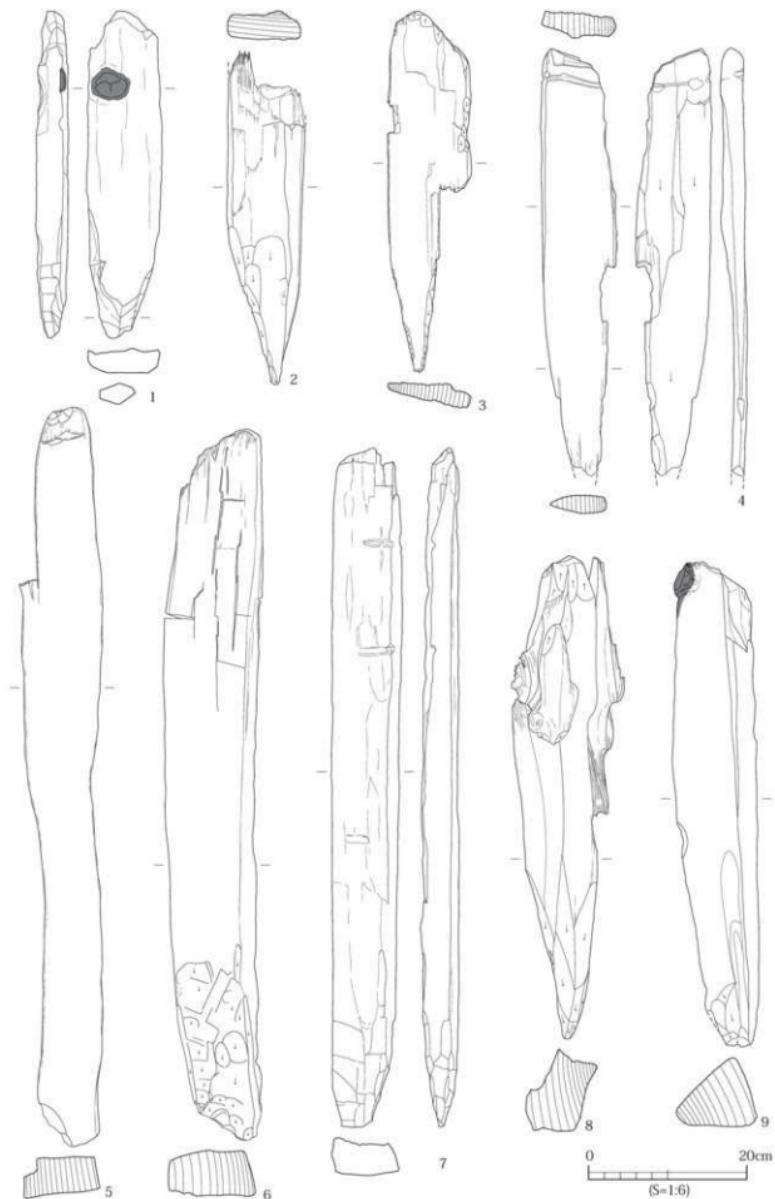
第47図1は凹み石である。両面とも敲打によって大きく凹み、側面にも打痕が認められる。2は一方の側面に打ち欠きの抉りを作り、対する側面に敲打による凹みが見られる。また、表裏面中央と両端部には使用痕のような敲打痕が認められる。3は両側面に2箇所ずつ計4箇所の敲打による凹みをもつ。4は隅丸3角形状の礫の3側面にそれぞれ凹みをもち、突端部には弱い敲打痕が認められる。2・3・4は側面の抉りと凹みから石錘の可能性がある。5は砥石で、4面を使用し、1面には敲打痕が認められる。

第48図1は長さ34.3cm、幅14.7cm、厚さ12.8cmで、重さ7900gを量る大型の砥石である。幅3.5～6.0cm、長さ19～24cmを測る3面の砥面は滑らかに湾曲し、縦方向の細かな使用痕が認められる。鉄器の中砥段階に用いられたものと考えられる。⁽¹⁷⁾2は用途不明であるが、一方の側縁は自然面のままで、片方の側縁を加工して下端部を尖らせている。矢板・杭列2の礫敷きの中で矢板を支えるように縦位に埋まっていたものである。杭状石製品とでもいるべきか。

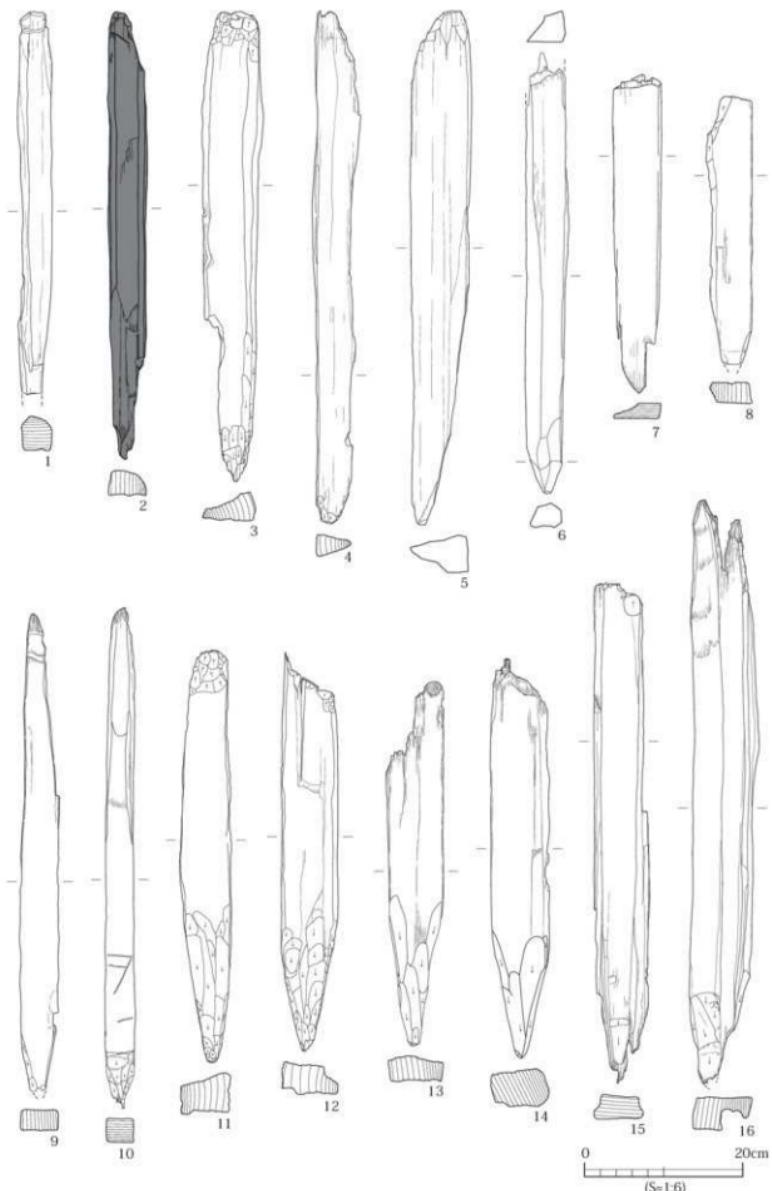
なお、SD05内では掲載した石器以外に、大小様々な礫を多数検出した。自然の円礫や角礫で、拳大から人頭大またはそれ以上の大きさの礫がコンテナ20箱分である。前述したように、本遺構



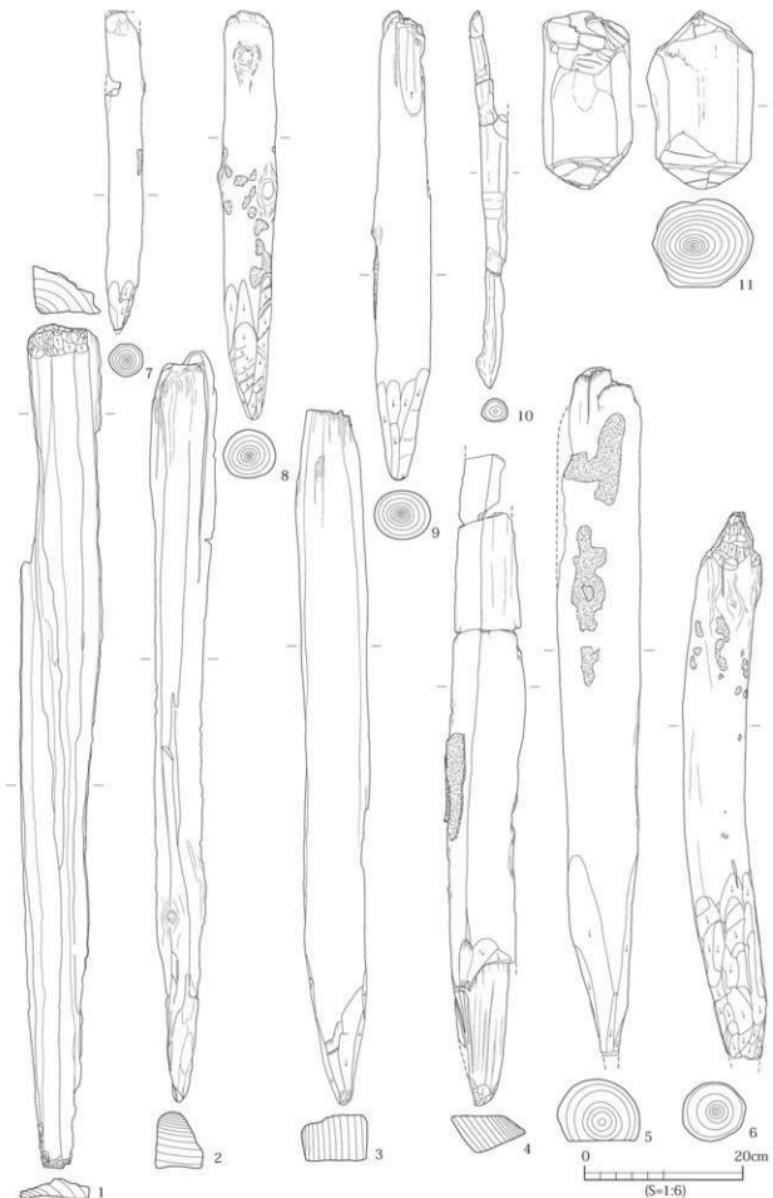
第49図 平ノ前遺跡SD05(古)出土遺物実測図(5)



第50図 平ノ前遺跡SD05(古)出土遺物実測図(6)



第51図 平ノ前遺跡 SD05(古) 出土遺物実測図(7)



第52図 平ノ前遺跡SD05(古)出土遺物実測図(8)

の基盤層は旧静間川の河口近くで堆積した砂層であり、大きな礫は包含しないことから、それらの多くは調査区周辺の丘陵や海岸部で採集されたものと思われる。^[8]

第49～52図は木製品である。掲載した木製品のほとんどは矢板や杭である。これらは水利施設の構造物であるが、施設部材または用具からの転用と見られたため、合わせて70点余りを取り上げた。

第49図1～13は板材である。1～9は端部が削られており、杭または矢板として転用されている。10は長さ15cmほどで、楔の可能性がある。11は矢板・杭列2の中で横木として用いられている。12は矢板・杭列1近くで出土したもので、一部焦げ痕が認められる。13は幅12cm、長さ3mを測る矢板・杭列4を構成する横板である。

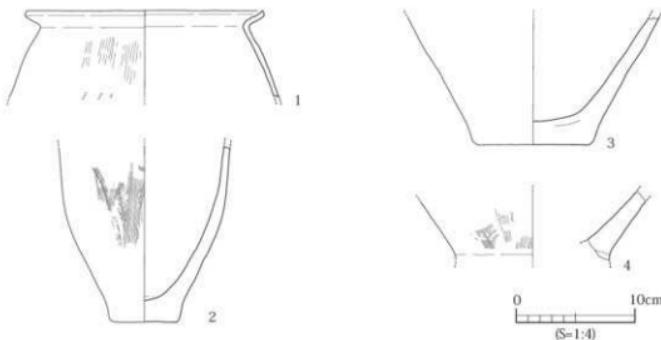
第50図1～第52図11は杭である。建築部材からの転用と考えられる。第50図1～4は板材、5～9は床または梁・桁材、柱材からと思われ、4・7には接合痕と見られる横方向の細い凹みが認められる。このうち、5・6は矢板・杭列5を構成する杭で、長さ90cmを測る。第52図1～4は柱材から作りだされたものと思われ、1・2・4は矢板・杭列5、3は矢板・杭列3を構成する杭である。5～11は芯持材で、5・6は柱材からの転用と思われる。7には穿孔と抉りが認められるが、元來の加工か転用時のものかは不明である。これらのうち、第50図1・4・6は水流に直交する形で打ち込まれており、矢板として用いられたものと考えられる。

これらの矢板や杭の頭（実測図の天）部には、加工痕および打痕の認められるものが多い。また、下端部は非常に滑らかに削られ、平坦な削り面を残す個体が多い。この加工痕は鉄器によるものと考えられ、溝内から大型の砥石（第48図1）が出土していることからも理解できる。さらに一部の材には焦げや炭化した痕が見られるものがあり、火災あるいは焼却にあったことが推測される。第52図11は径13cm、長さ22cmの芯持材で、両端が粗く削られている。例り物の未成品の可能性がある。

出土遺物は、概ね弥生時代後期初頭から前葉の様相を示している。このうち、第45図1・3・4・8・11・14は、SD05（古）の改修前の溝から出土したものである。弥生時代中期の遺物（第45図2・3）などII～III様式の土器を含むものの、これらは先行し重複するSD10からの流れ込みの可能性がある。SD05（古）の改修前の溝には弥生時代中期後葉から後期初頭に相当する土器片が比較的多く含まれることから、この時期をSD05の掘削開始と捉えたい。水利施設は、SD05（新）の埋没時期との関係から、弥生時代後期前半まで機能していたものと考えられる。SD05（新）においても水利施設が調査区外で位置を変えて構築されていた可能性はあるが、弥生時代後期前半のうちには完全に埋没する。

SD10（第27・28図）

SD05の東に位置して重複し、SD05より古い。標高4.5mの第2検出面（地山面）で検出した。調査区北壁からトレンチA付近まで、SD05よりやや東方向に振って直線的に延び、検出長30mを測る。トレンチB付近からトレンチA付近までは西肩部をSD05に壊され、以南は消失する。溝幅は3.0m弱で、深さは50～70cmを測る。断面形は逆台形状をなす。底面の標高は、南東側が4.0m、北西側で3.65mと、北西へ向かって下ることから、南東（静間川側）→北西の流れが想定される。砂礫を多く含む堆積土の下層部には、細砂と粘土が互層状に堆積した状況がうかがえる。



第 53 図 平ノ前遺跡 SD10 出土遺物実測図

出土遺物は少なく、掘り直しは見られない。また、SD05（古）にみられた水利施設は確認されなかった。

SD10 出土遺物（第 53 図）

1 は口径 20cm 弱の甕で、「く」の字状をなす口縁の端部を少し引き上げるもの。風化が進んでいるが、胴部には刺突列点文が認められる。Ⅲ-1 様式に相当する。2 は小型甕の下半部、3 は大型甕の底部である。4 は底面を欠くが、体部の開き方から大型甕の底部であろう。2・3・4 は 3~5 mm の砂粒を多く含む胎土と形状から、弥生時代前期後葉から中期初頭に相当するものと思われる。

出土遺物は、弥生時代前期後葉から中期の様相を示していることから、SD05 が開削されるまでが存続期間と考えられる。

(園山薫)



写真 2 平ノ前遺跡 SD05(古) 杭抜き取り作業

SD17（第 54 ~ 83、123 図）

SD17 は調査区中央部に位置する南から北へと流れていた水路跡もしくは河道路であったと考えられる。底及び東岸を確認しきれなかったが、検出された全長は約 40 m、確認できた深さは 2 m であるが本来はさらに深いと考えられる。堆積状況は、調査区の南東壁の土層では（第 7、8 図）、西岸の基盤層である第 XIV 層を掘り込んで第 XI 層が堆積している。第 XI 層は炭化物を多く含んだ黒色系の粘質土が主体であり多くの遺物が出土した。第 XI 層の上には茶褐色砂質土（第 X 層）が堆積している。この第 X 層は洪水砂と考えられる。この第 X 層の上に第 VII 層が堆積している。第 X 層をはさんで第 XI 層を SD17 下層、第 VII 層を SD17 上層とした。また SD17 下層として確認できたのは南西壁付近の D2 ~ D3 グリッド付近のみである。SD17 上層についても東岸や底を調査区内全域で確認できなかったが、調査状況から水路跡と考えられ、規模は南東壁土層部分で幅約 5 m、残存する深さ 1.2 m となっている。出土した遺物から SD17 下層は 5 世紀末から 6 世紀前半頃、SD17 上層は 6 世紀前半から後半頃と考えられる。その後北西壁土層（第 9 図）第 VII-25 層、4 ライン土層（第 56 図）の第 VII-37 層の砂質土もしくは砂礫層が堆積する災害（土石流もしくは洪水など）が発生して SD17 は機能を終了し、新たに SDO4 が掘削されたと考えられる。

SD17 は西側から東側へと傾斜する地形に掘削されている。基盤層は約 7 万年前に形成された灰白色の粘土層を含む基盤層で、東側は後世の浸食作用などを受けて地形は東へ落ち込んでいたと推測される。その後落ち込んだ部分には旧静間川の河川堆積物が堆積したと考えられる。SD17 が掘削される部分はこの地形の壇（C と D グリッドの境付近）に位置したと考えられる。

出土した遺物は土師器、須恵器を中心に、石器、木製品、骨類、玉作関係遺物、金銅製歩拂付空玉を含む玉製品など多様である。遺物がまとまって出土している部分は大別すると 4 箇所確認された。D2-D3 グリッド付近、D4-D5 グリッド付近、D6 グリッド、D7 グリッドの 4 箇所であり、それぞれ南から土器溜り A、B、C、D 群とした。なお、土器溜り B 群ではさらに 6 箇所に細分して抽出し、B-1 ~ B-6 群とした。

土器溜り B 群

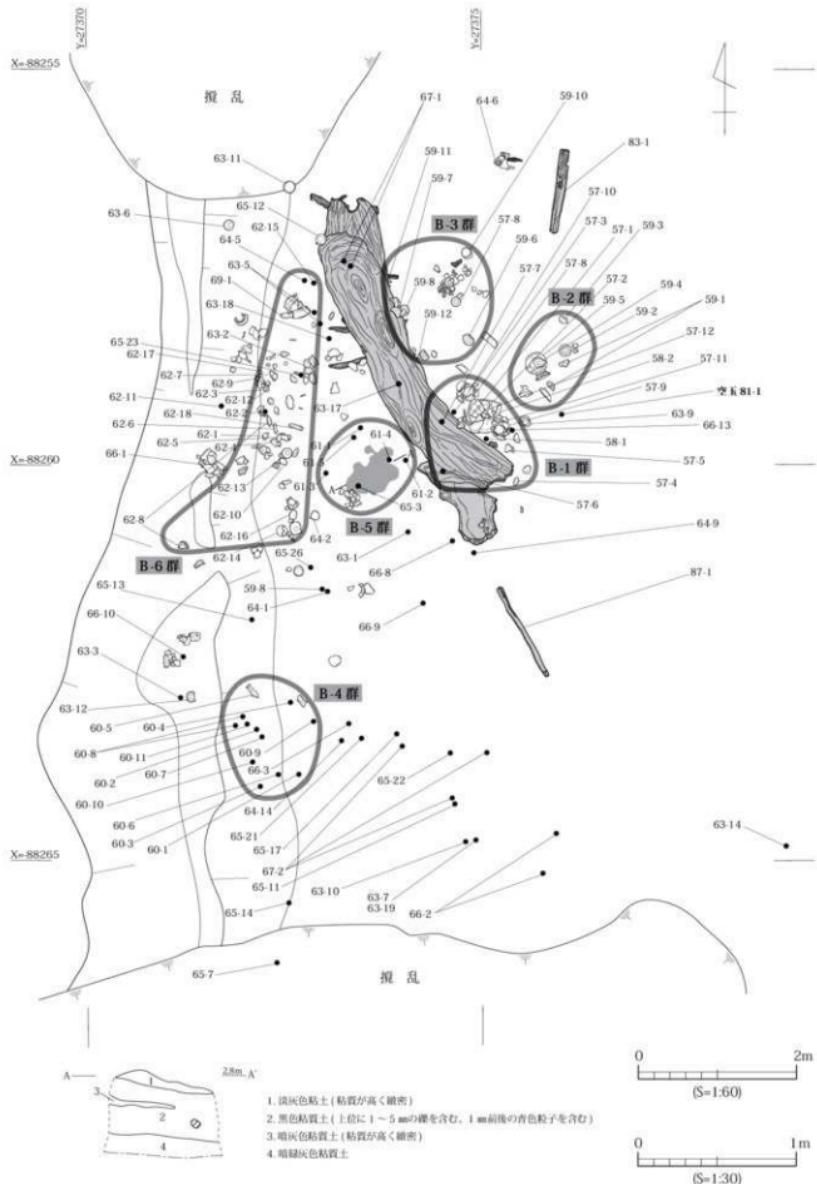
土器溜り B 群では陶邑編年 TK43 併行期の遺物を主体に出土している。B 群の中央付近では直径約 70cm、長さ約 5 m の大木が横たわっており、杭で固定してあった。その西側法面には地山である灰白色砂礫層に灰白色粘土が貼られていた。粘土を使用して SD17 を構築した部分があったと考えられる。特に多くの遺物が出土している。土器溜り B 群の特徴は以下（①～⑤）のとおりである。
①コップ形須恵器が複数点出土している。
②完形の須恵器環の出土が多く、その中には内面や口縁端部が摩耗したものの、口縁端部の一部が欠けているものなどが多く出土している。
③磨製石斧、磨石、敲石が出土している。
④獸骨が出土している。
⑤金銅製歩拂付空玉が出土している。
西側法面から大木周辺にかけて出土している遺物は、SD17 上層の段階に意図的に置かれたもしくは投棄されたものと推測される。その後西側法面付近は灰白色粘土が混じる黒色土（第 56 図第 VII-13 層）で埋まっている。

土器溜り A 群

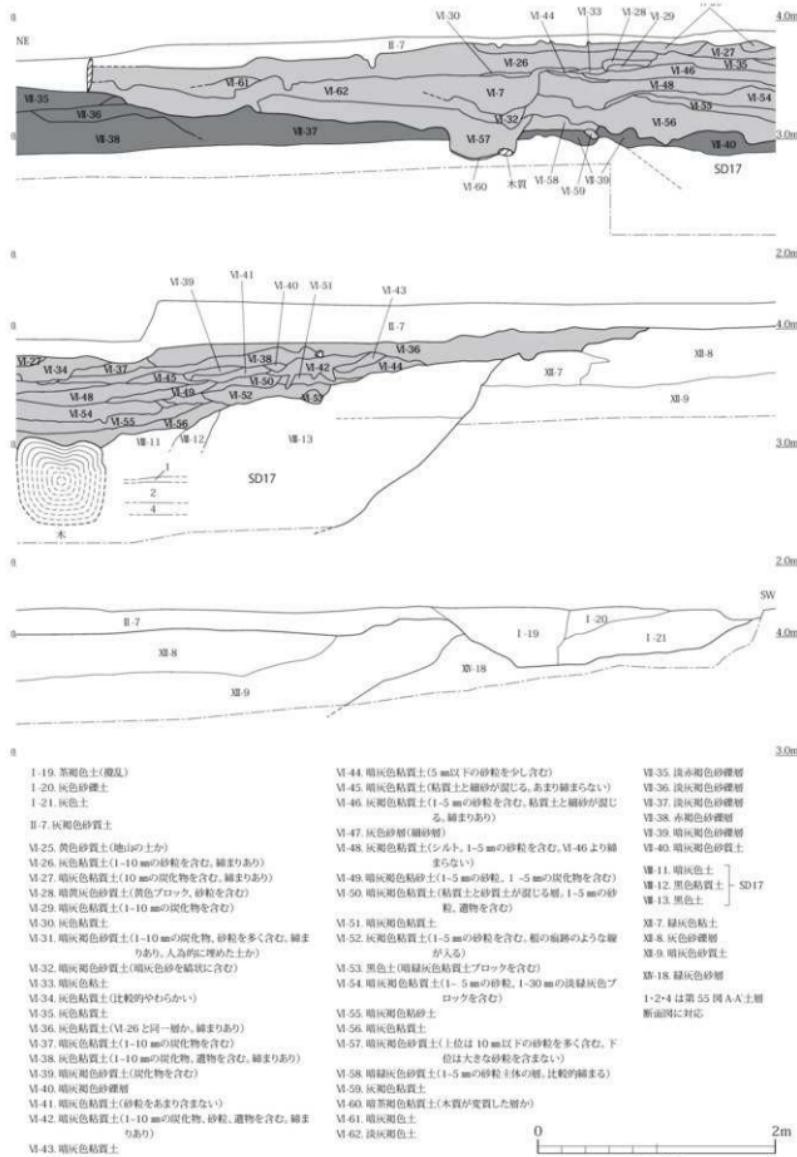
土器溜り A 群は、上層と下層に分けられる。下層の遺物は西側法面から上方で出土している。陶邑編年 TK23・74 ~ MT15・TK10 併行期の遺物が出土している。特徴は以下（①～④）のとおりである。
①土師器が主体であり、須恵器模倣の黒色磨研土器が複数出土している。
②須恵器が數



第54図 平ノ前遺跡SD17実測図



第55図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群遺物出土状況図



第 56 図 平ノ前遺跡 4 ライン土層図

点出土している。③玉生産に伴う碧玉の残核が出土している。④須恵器・土師器には完形に近い状態に復元できるものが出土している。また上層では陶邑編年TK43併行期の遺物が出土している。特徴としては以下（①～④）のとおりである。①火を受けたような遺物が出土しており、ほぼ完形の須恵器が複数枚重なって出土している。②滑石製白玉、土製、鹿角製丸玉などの玉製品が出土している。③魚骨、獸骨が出土している。④土師器・甕には胴部最大径部分より少し上の位置で破損している土器が多数出土している。

土器溜り C 及び D 群

土器溜り C 及び D 群では、陶邑編年 TK43 併行期の遺物を中心に出土している。C 及び D 群の特徴は以下（①～③）のとおりである。① A、B 群と比べ遺物の出土量は少なかったが、完全な形に近い状態に復元できる土師器、須恵器が数点出土している。②完形の土器は A、B 群同様に口縁部の一部が欠損するものが含まれる。③須恵器・提瓶が複数個出土している。

SD17 出土遺物に共通してあげられる特徴

SD17 出土遺物に共通してあげられる特徴は、以下（①～④）のとおりである。①同じ器種でも器形、焼成、胎土などの特徴に多様性がみられる。②土師器には、灰白色を呈し、胎土や焼成などに共通性がある土器（以下灰白色の土器とする）と、橙色を呈し、胎土に金雲母を多く含む土器の 2 系統の土器があり、数量的にまとまって出土している。③甕、移動式竈が多い。④完形に近い状態に復元できる土器が多く、その一部は口縁端部が欠損するものが含まれる。

SD17 土器溜り B 群出土遺物（第 57～69 図）

SD17 土器溜り B 群の土器を中心に掲載した。土器溜り B 群をさらに細分して、B 群-1～6 の 6 箇所とそれ以外の部分に分けて記載している。

B-1 群

第 57、58 図は B-1 群で出土した。第 57 図 1～8 は須恵器である。1～3 は環蓋である。1、2 は口縁部の一部が欠けている。3 は淡赤褐色を呈しており、また風化が激しい。4、5 は环身である。5 は口縁部の一部が欠損する。6 は有蓋高杯である。7 は短頸壺である。8 は把手の付くコップ形土器である。底部はカキ目が施されている。9～12 は土師器である。9 は高杯の环部と考えられ、風化しているが内外面赤彩であったと考えられる。灰白色の土器である。10～12 は甕である。12 は頸部から口縁端部にかけて直線状にたちあがり、体部はやや胴長なプロポーションを持つ。10、11 は口縁端部が欠損する。12 は大木の脇から出土しており、第 58 図 2 の移動式竈の中に入れ子の状態で出土している。他の遺物も出土しており、意図的にまとめられていたと考えられる。

第 58 図 1、2 は土師器である。1 は把手が付く鍋である。2 は焚き口の上方にのみ底が付く移動式竈である。底の一部と口縁端部の一部が欠損しているがほぼ完形である。

B-2 群

第 59 図 1～5 は B-2 群で出土した遺物で、付近からは金銅製歩幅付空玉が出土している。1、2、5 は須恵器である。1 は環蓋であり、天井部はカキ目が施され口縁部の一部が欠けており、内面底部や口縁端部など摩耗している。2 は环身である。5 は甕である。胴部に横 18cm 縦 14cm の範囲に亀裂が入っており、意図的に穿孔された可能性もある。3、4 は土師器である。3 は环で、風化が

激しいが内外面赤彩と考えられる。4は、赤彩の鉢と考えられ、内外面丁寧に磨きが施されている。

B-3群

第59図6～12は、B-3群で出土した遺物である。6、7は須恵器で6は坏蓋で、口縁端部の一部が欠けている。7は坏身である。口縁端部に細かい敲打痕がある。6、7ともに内面及び口縁端部が摩耗している。8～12は土師器である。8、9は完形の坏身である。風化しているが内外面赤彩が施されている。10は甕である。端部が一部欠けており、意図的に打ち欠かれた可能性がある。12は壺の口縁部と考えられる。かなり風化している。10は灰白色の土器である。

B-4群

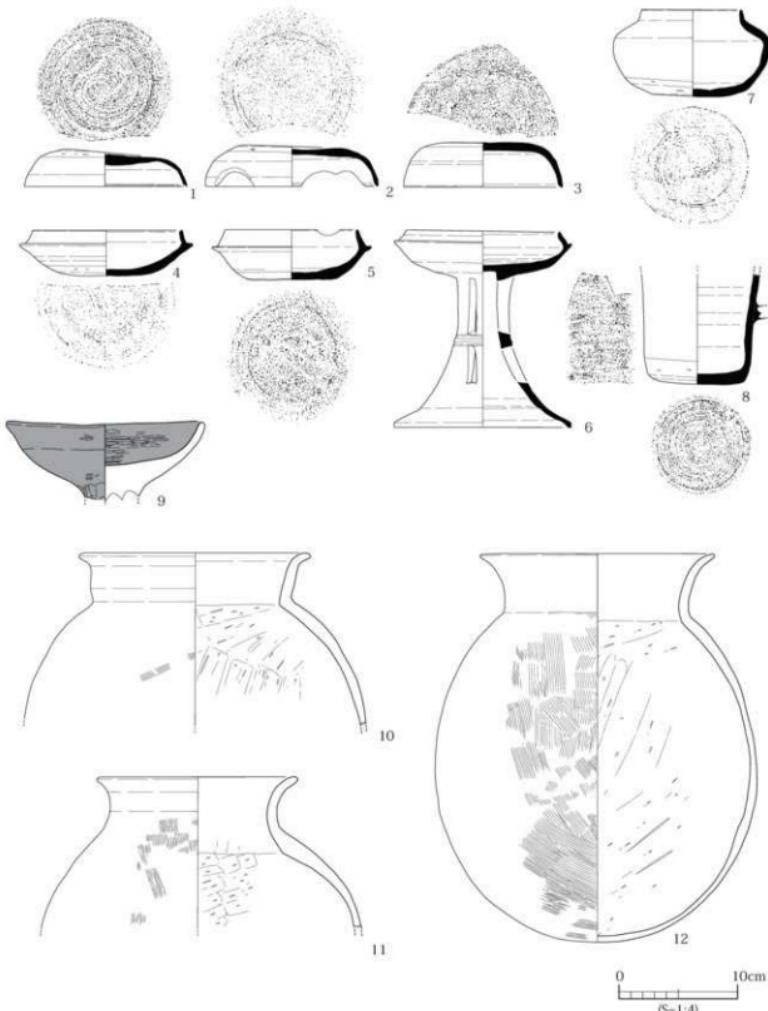
第60図は、B-4群で出土した遺物である。1、2は標高2.5m以下で出土しており、その他は標高3.0m以上で出土している。1、2は土師器である。1は甕であり、やや薄手で頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がっている。2は移動式竈と考えられ、口縁部に外面にアクセントがあり、退化した複合口縁の形状に似ている。3～6は須恵器である。3は坏蓋である。内面や口縁端部は摩耗している。4は提瓶の把手である。5、6は甕である。5は口縁部の一部が欠けている。7～11は土師器である。7は高环もしくは低脚环の坏部である。内外面赤彩が施されている。8～10は甕である。9は口縁端部が一部欠けている。10は色調がやや赤みがかかっているが、灰白色の土器と考えられる。口縁部の立ち上がりが短くあまり外反していない。11は壺である。把手が欠損している。また使用されたためか内面が茶褐色に変色している。

B-5群

第61図はB-5群で出土した遺物である。灰白色粘土塊が出土した部分である。1、2は須恵器である。1は坏蓋であり、灰白色的色調を呈し同規模の須恵器に比べ重量が軽い。また風化が激しい。2は坏身であり、陶邑編年のMT15、TK10併行期の特徴を持っている。また色調は赤褐色を呈し、しっかりと焼き締まっている感がある。3～5は土師器である。3は坏で、口縁端部の一部が欠けている。内外面赤彩が施されている。灰白色的土器である。4は赤彩の高环で、須恵器模倣品と考えられる。焼成はしっかりとおり、同規模の土師器と比べて重くしまった感がある。また胎土中に金雲母が多く含まれている。火を受けたためか坏部内面がやや黒色を呈し、細かい敲打痕も確認される。全体的に風化もしている。5は高环である。灰白色系の色調であるが、緻密で同規模の土師器と比べて重い。

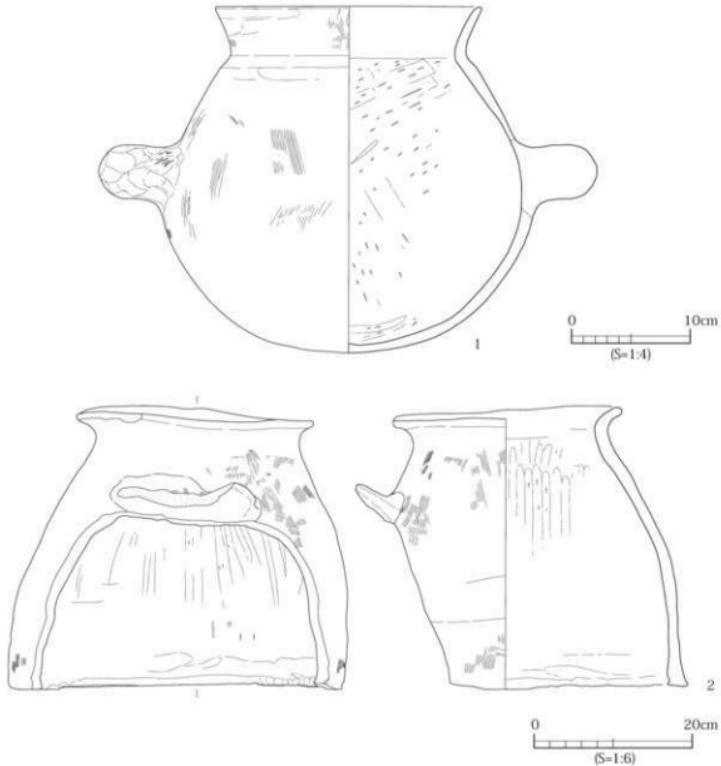
B-6群

第62図はB-6群で出土した遺物である。1～11は須恵器である。1～3は坏蓋である。1、2は天井部が偏平であるが3は丸みを帯びている。1、2は口縁端部が一部欠けている。天井部内面など摩耗している。4～10は坏身である。坏蓋と同様に底部が偏平なものや丸みを帯びたものがあり、器形だけでもバラエティーに富んでいる。焼成、色調もさまざまである。4、7、9、10には底部外面に板状圧痕があり、5にはヘラ記号があり、また6、7はカキ目風の調整が施されている。4、7、8、9の底部内面は摩耗している。11は甕である。第60図6と同じ規格と考えられるが、焼成時にゆがんだと考えられる。12～17は土師器及び土製品である。12は坏である。13は壺もしくは小形壺と考えられる。14、15は甕と考えられる。法量の違いはあるが、器形としては両者とも体部が緩く膨らみ頸部にわずかなアクセントをもつ。両者ともに口縁部が一部欠けている。14は灰白色の土器である。16は鉢である。底部内面が使用のためか摩耗している。灰白色の



第57図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B-1 群出土遺物実測図(1)

土器であり、また全体的に風化している。17は土鍤である。分銅もしくは棹秤の鍤を写している可能性があり本書ではこの形状の土鍤は分銅形土鍤とする。平ノ前遺跡では分銅形土鍤は多く出土しているが、その中ではこの土鍤はもっとも下層から出土している。18は塩基性片岩製の磨製石斧である。刃部が擦り減り、側面部に敲打痕が認められることから、伐採以外の目的に再利用され



第 58 図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B-1 群出土遺物実測図 (2)

た可能性がある。

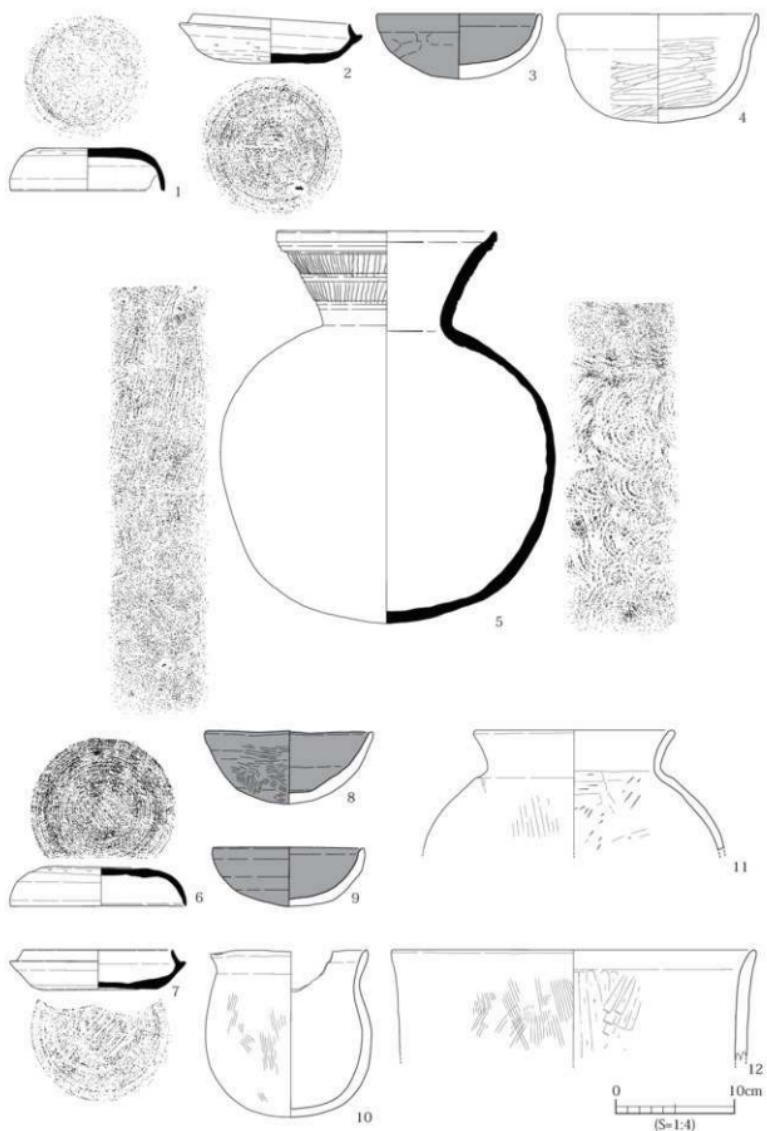
B-1 群～B-6 群以外の B 群出土遺物

第 63 ～ 69 図の遺物は、B-1 群～B-6 群以外の B 群出土遺物である。

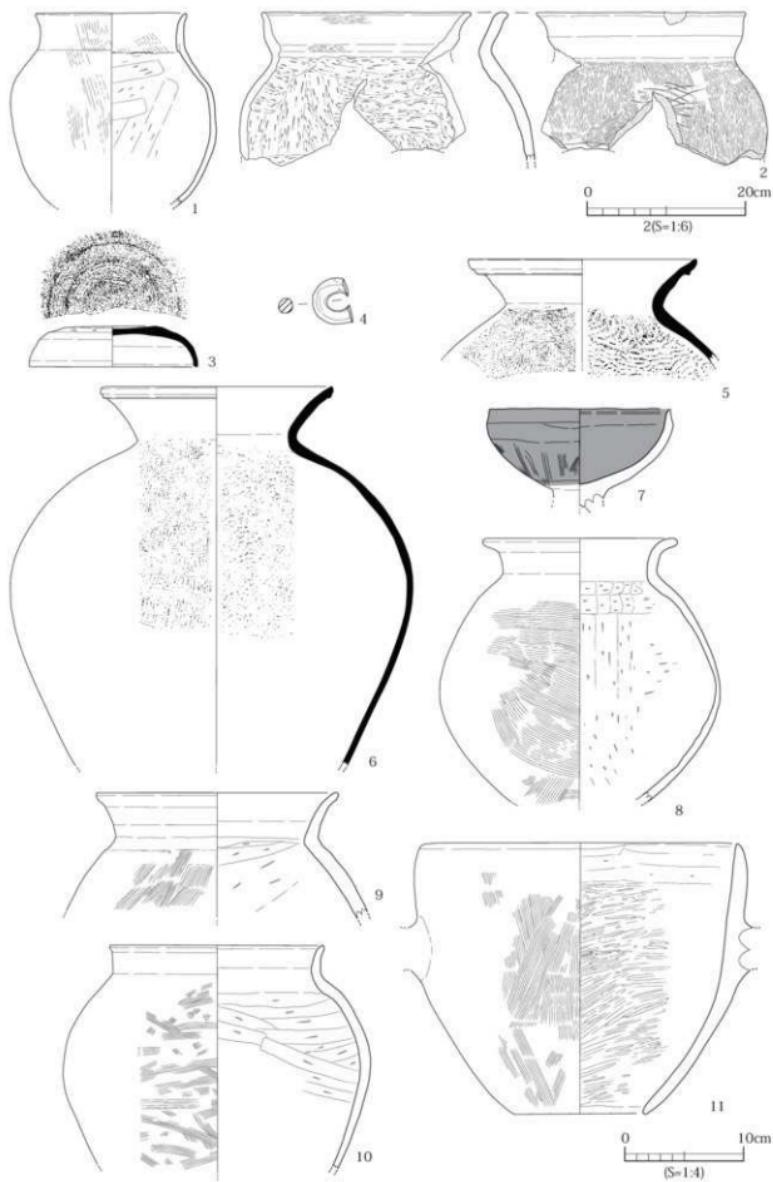
第 63 図は須恵器の坏である。1 ～ 10 は蓋、11 ～ 19 は身である。器形、調整、焼成、使用の痕跡など、バラエティーに富んでいる。

1 は青灰色を呈し、しっかりと焼き締まっている感がある。口縁端部が部分的に欠損している。2 は緑灰色を呈し、胎土中に灰白色粘土が塊状に残っている。4 つの破片を接合して復元したが、破片の 1 点のみに黒斑部分が認められることより、割れた後（もしくは割った後）火を受けたと思われる。6 ～ 10 は口縁部が一部欠けている。9 は天井部外面に板状圧痕が残っている。5 と 7 は表面は濃い青灰色であるが、断面が赤褐色を呈している。3、5、7 は外面に自然釉がかかっている。

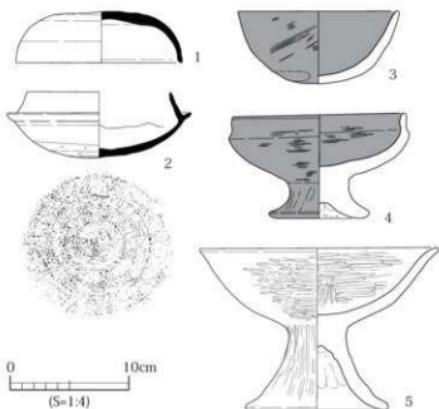
11 はほぼ完形であるが、口縁端部が一部欠けている。4、11 の内面には成形時の當て具痕が認められる。12 は底部外面にヘラ記号がある。13 は底部外面に緑色の自然釉がかかっている。器形



第59図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B-2、B-3群出土遺物実測図



第60図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B-4 群出土遺物実測図



第 61 図 平ノ前遺跡 SD17
土器溜り B-5 群出土遺物実測図

4 は高環である。1 は長脚無蓋高環である。2、3 は有蓋高環である。4 は脚部であり、直徑約 5 mm の円孔（透かし）が 3箇所穿孔されている。5～8 は、甌もしくは壺と考えられる。5 は灰白色を呈している。器形から陶邑編年 MT15・TK10 併行期以前の時期の可能性が考えられる。9～12 はコップ形土器もしくはその一部と考えられる。9 はほぼ完形であり、外面及び内面の一部に緑色の自然釉がかかっている。同規模の他の須恵器に比べて重量が軽い。13 は甌である。14 は瓦質風の土器である。平らな面はカキ目状の調整が施されており提瓶の可能性が考えられる。全体的に風化しており、内面中央付近は摩耗している。

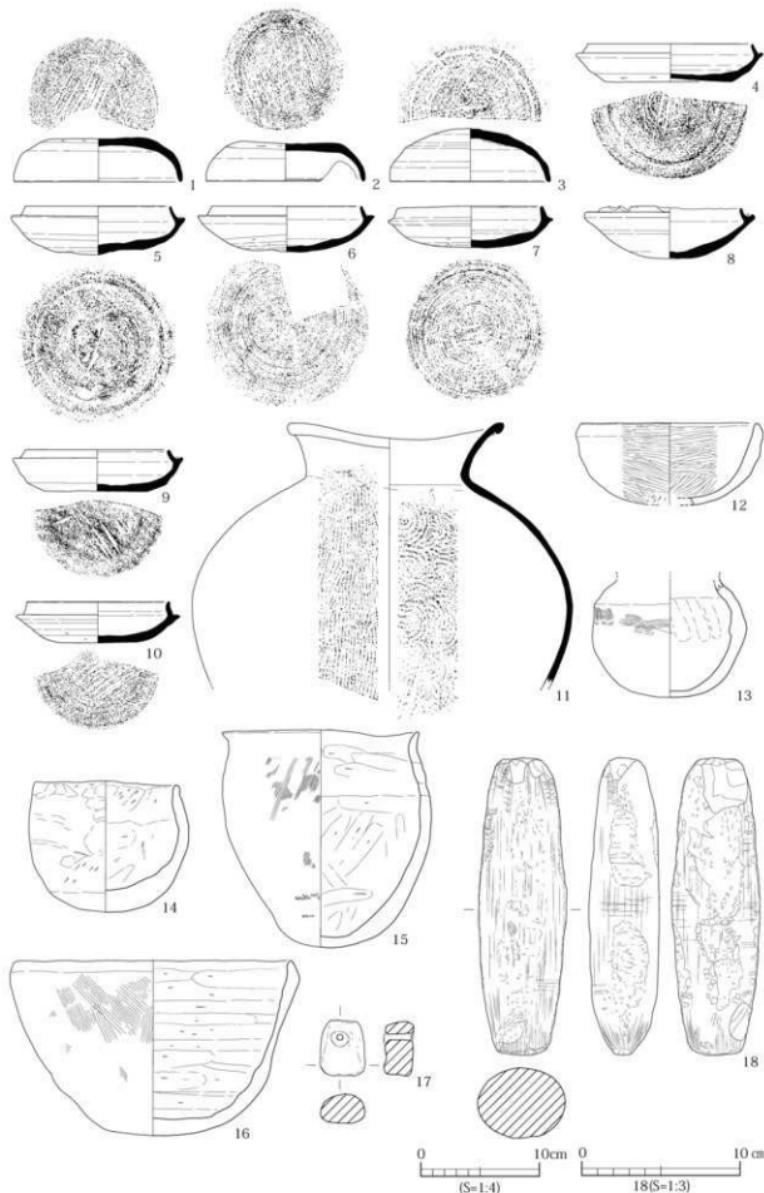
第 65 図は土師器である。1～5、7～14 は壺である。2 は高台状の底部を持つ壺であり、灰白色の土器である。古墳時代の祭祀遺跡である高田遺跡（石川県羽咋市）で類似の土器が出土している。⁽¹¹⁾ 7～14 は内外面赤彩である。7 は外面上にヘラ記号がある。14 は口縁端部に須恵器・壺のように段が付いている。8、13、14 以外の土器は灰白色の土器である。1～3、7～10、14 について、口縁端部が一部欠けている。

15～27 は高環である。17 は第 61 図-4 と同様に、須恵器模倣土器であり、口縁部が欠損しており壺内部は火を受けたためかやや黒変している。26 も同様で全体的に黒変している部分が確認できる。17 と 26 以外の土器は灰白色の土器の可能性があり 17 と 26 は時期は異なるかもしれないが胎土や質感に類似性を感じられる。18 は壺部の立ち上がりに稜がある。15、16、20 は、小片であったり、風化が激しいため赤彩かどうかは不明であるが、他の高環は赤彩である。23、24 は全面赤彩と考えられ、それ以外は脚部内面は赤彩が施されていない。

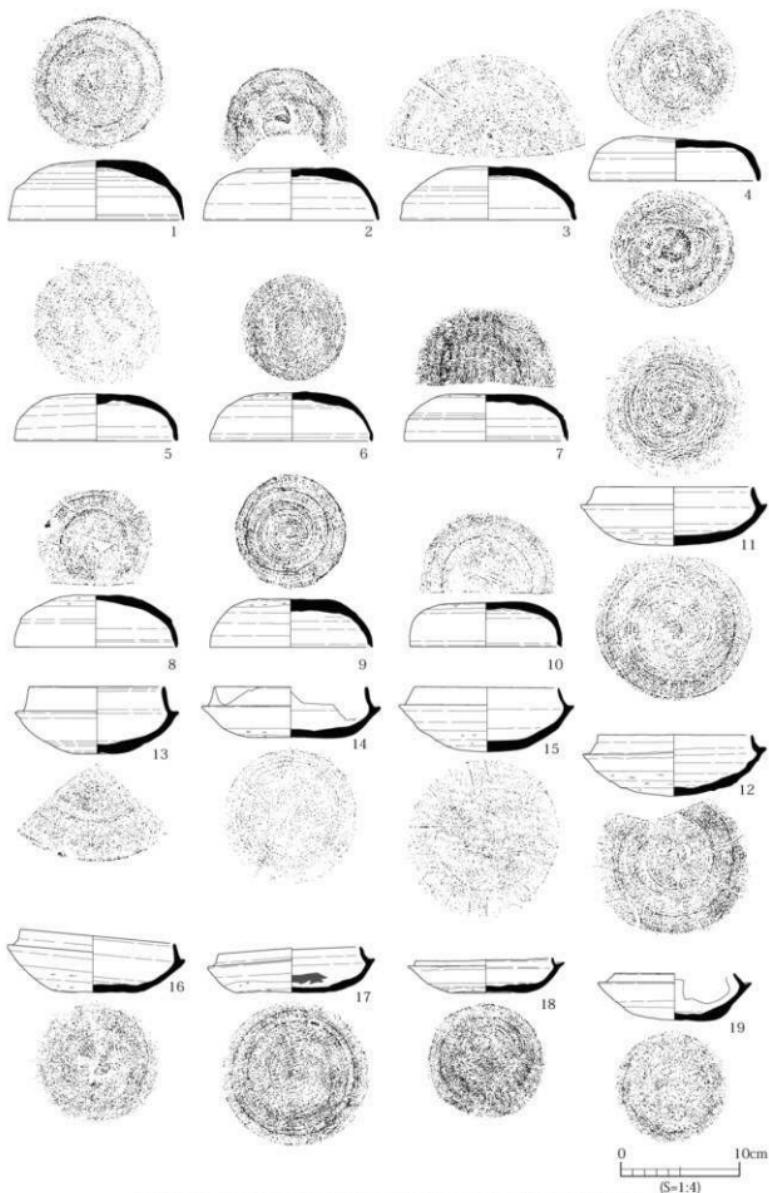
第 66 図は土師器である。1～7 は甌である。1 は口縁部外面の立ち上がりに稜がみられる。このタイプの口縁部の甌は SD17 では比較的多くみられる。2 は頸部がしまらないタイプの甌である。内面の調整の特徴から甌の可能性も考えられる。灰白色の土器である。3 は球を上下から少し押しつぶしたような体部を持ち体部から頸部の立ち上がりがやや直線的に伸びる形状の甌である。4 は赤みを帯びているが、灰白色の土器である。5 は退化した複合口縁の甌である。胎土は 8 など前期

から陶邑編年 TK23・TK47 併行期と考えられる。14 は色調が赤褐色を呈する。口縁部の立ち上がりが急であるが、めんぐろ古墳（浜田市）出土須恵器环身に類似品がある。⁽¹⁰⁾ 陶邑編年 MT15・TK10 併行期と推測される。15 は岡田葉師古墳（松江市）出土須恵器壺に類似品がある。⁽¹⁰⁾ 17 の内面には一部に黒褐色物質が付着しており、灯明皿的使用が推測される。11～15、17～19 は口縁端部が一部欠けている。16 には外面に板状圧痕が残る。

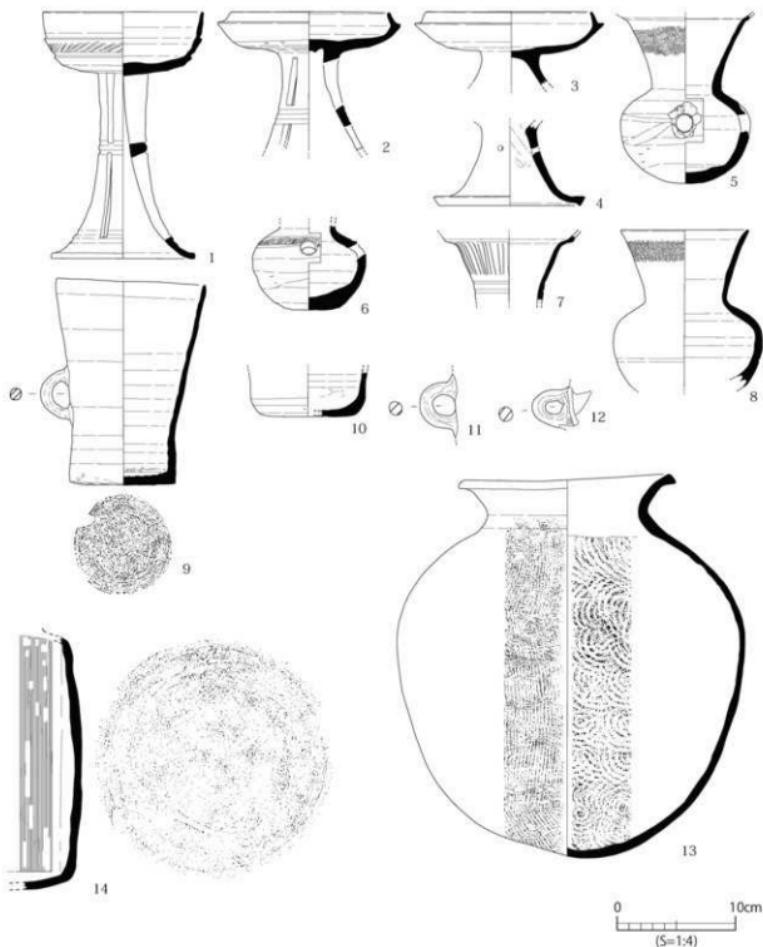
第 64 図は須恵器である。1～



第62図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B-6群出土遺物実測図

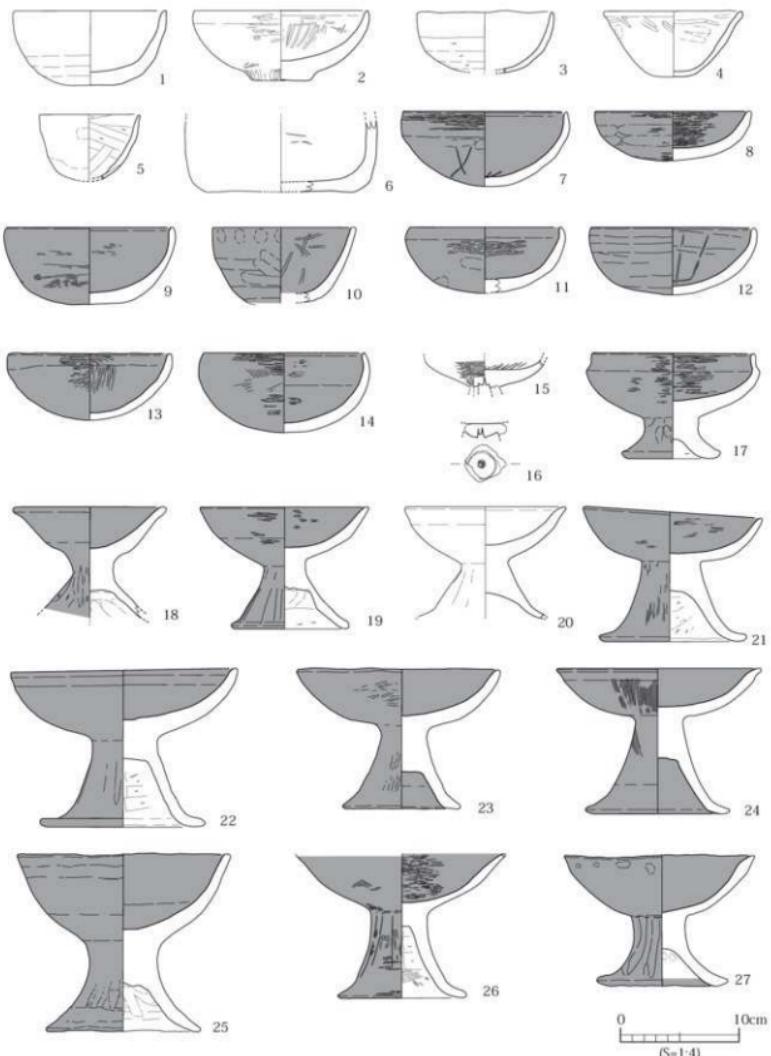


第63図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群出土遺物実測図(1)



第64図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群出土遺物実測図(2)

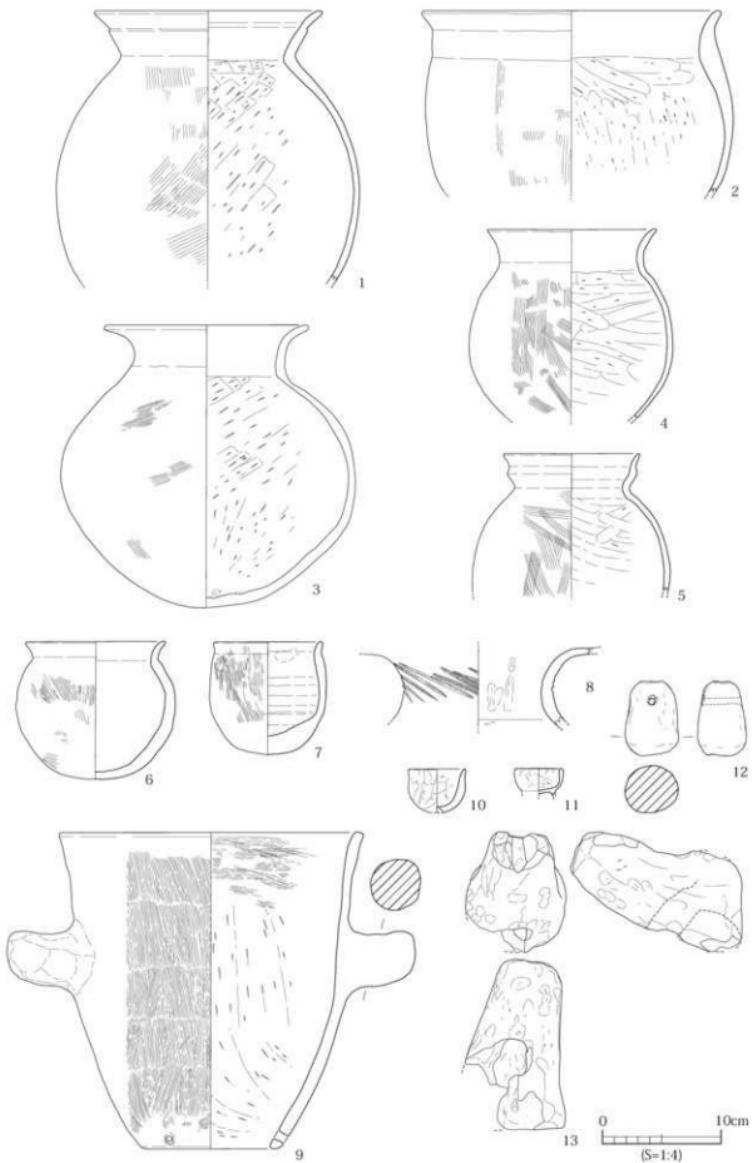
の土器に似た感がある。6は単純口縁の甕、7は頸部がしまらず体部から直線的に立ち上がり口縁端部が若干外反する。黄灰色の緻密な胎土であり、よく焼き締まっており同規模の他の土器と比べて重い。8は古墳時代前期の壺の頸部である。SD17では、古墳時代前期の土器片がわずかだが出土している。9は甕である。灰白色の土器である。口縁端部は少し外反し、底部は筒抜けタイプである。10、11はミニチュア土器である。11は高台が貼り付けられている。12は分銅形の土錘である。B-6群出土土錘(第62図17)とこの2点のみSD17から出土しており、平ノ前遺跡出土



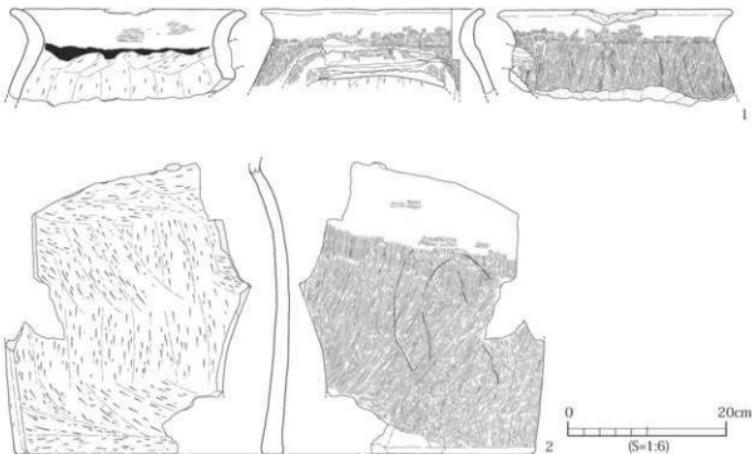
第65図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜りB群出土遺物実測図(3)

の分銅形土鉢の中では最も古い層から出土している。13は土製支脚である。SD17より上の第VI層から出土している。棒状の形状の先端部に工具で凹みを施したタイプである。

第67図1、2は移動式竈である。1は口縁部である。口縁部から12cmくらいのところで水平方



第66図 平ノ前遺跡 SD17 土器割り B群出土遺物実測図(4)



第67図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群出土遺物実測図(5)

向に欠損しており、器台のような用途に再利用された可能性が推測される。2は体部である。焚口の反対側も焚口状の空洞が備え付けられた竈であり、体部の外面に線刻が確認される。前後に二口開口している竈は、島根県西部では数例確認されており、当遺跡では3点以上出土している。

第68、69図は石器である。第68図1は磨石で一部に赤色の付着物が認められる。2は砥石である。大木の下から出土している。3は敲石、4は磨石・敲石である。SD17では磨石や敲石が比較的多く出土している。

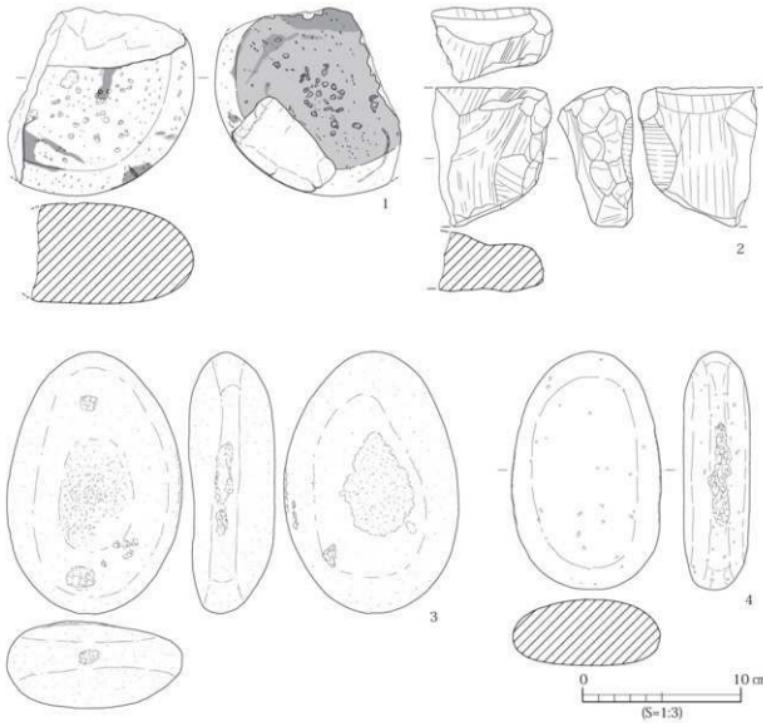
第69図1、2は磨石・敲石である。3、4は敲石、5は磨石、6は砥石である。

磨石・敲石などの石器はSD05・10でも出土しており、近辺に縄文時代から弥生時代にかけての生活面があり、これらの石器はそこからの流れ込み、もしくは古墳時代にこれらの石器をSD17で再利用したことなどが推測される。

この他、土器溜りB群では、シカなどの獣骨が出土している。

SD17 土器溜りA群出土遺物（第70～78図）

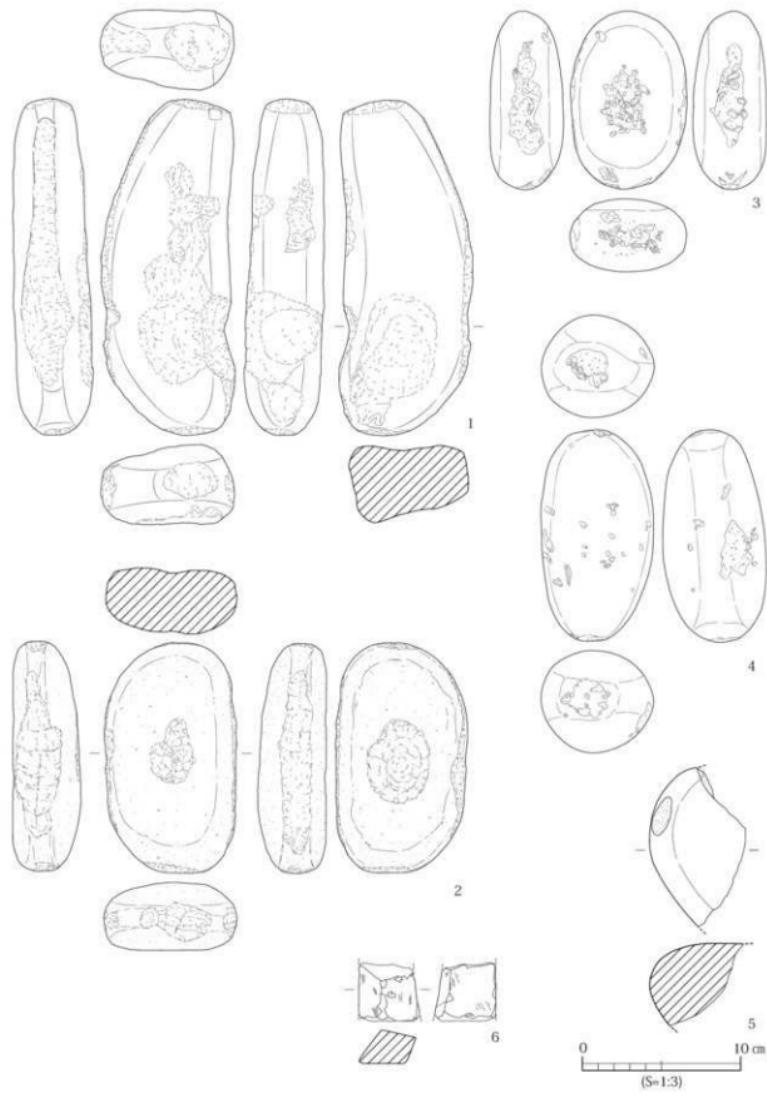
第70図は須恵器・壺である。1～9は蓋である。1、2は陶邑編年TK23・47並行期頃の時期と考えられる。2はSD17下層（第XI層）から出土している可能性がある。3は焼成時に変形したためか形状が歪んでいるがTK23・47もしくはMT15・TK10並行期の時期の可能性が考えられる。4はTK43並行期と考えられる。3は胎土に黒色粒子を含んでいる。1～4は焼成及び色調などの質感がさまざまである。5～7は上層（第VII層）のほぼ同じ位置で出土した遺物である。3と同様に胎土に黒色粒子を含むことや色調や、火を受けたためか一部黒変しているなど、共通点がみられる。時期はTK43並行期以降と考えられる。8は内面に指頭圧痕があり、また口縁端部の形状など土師器の壺との共通性がうかがえる。全体に摩耗している。9は内面から口縁端部（一部外面まで及ぶ）黒変している。また内面は摩耗が激しい。20の壺身と同一箇所で出土している。10～20



第68図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群出土遺物実測図(6)

は身である。10は胎土に黒色粒子が含まれること、色調、焼成具合が2の蓋と似ている。11は3と似ている。12は全体的に灰白色の色調を呈し、口縁端部が一部欠けている。14も全体的に灰白色を呈している。15は外面が淡い赤褐色を呈し、底部が平らになっているのが特徴的である。13～15は最大径が15cmを超えており、MT15・TK10並行期頃の時期と考えられる。16は灰色を呈し、胎土も密でありしっかりと焼き締まっている。形状は岡田薬師古墳（松江市）出土品に似ている。¹²⁾ TK43並行期と考えられる。16～20は口縁部が欠けている資料で、時期はTK43並行期以降と考えられる。

第71図4～18は土師器・壺である。このうち出土層位が推測できる資料は下記のとおりである。5、8、9、10は上層（第VII層）、11、13、14、17下層（第XI層）出土と考えられる。上層出土の10は灰白色的土器であり、また外面にヘラ記号「×」が確認できる。下層出土14のすぐ近くで、碧玉の残核（第123図1）が出土している。土師器も形状、胎土、焼成がバラエティーに富んでいる。灰白色的土器や色調が橙色の土器がある程度含まれている。灰白色や橙色の土器それの中でもさらに細分されると考えられる。橙色の土器と考えられる7は表面に光沢があり、ニスを塗ったような質感である。その光沢（質感）は後述する把手付椀（第73図11）に似ている。また



第69図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り B群出土遺物実測図(7)

口縁部が一部欠けている。第XI層付近で出土している。

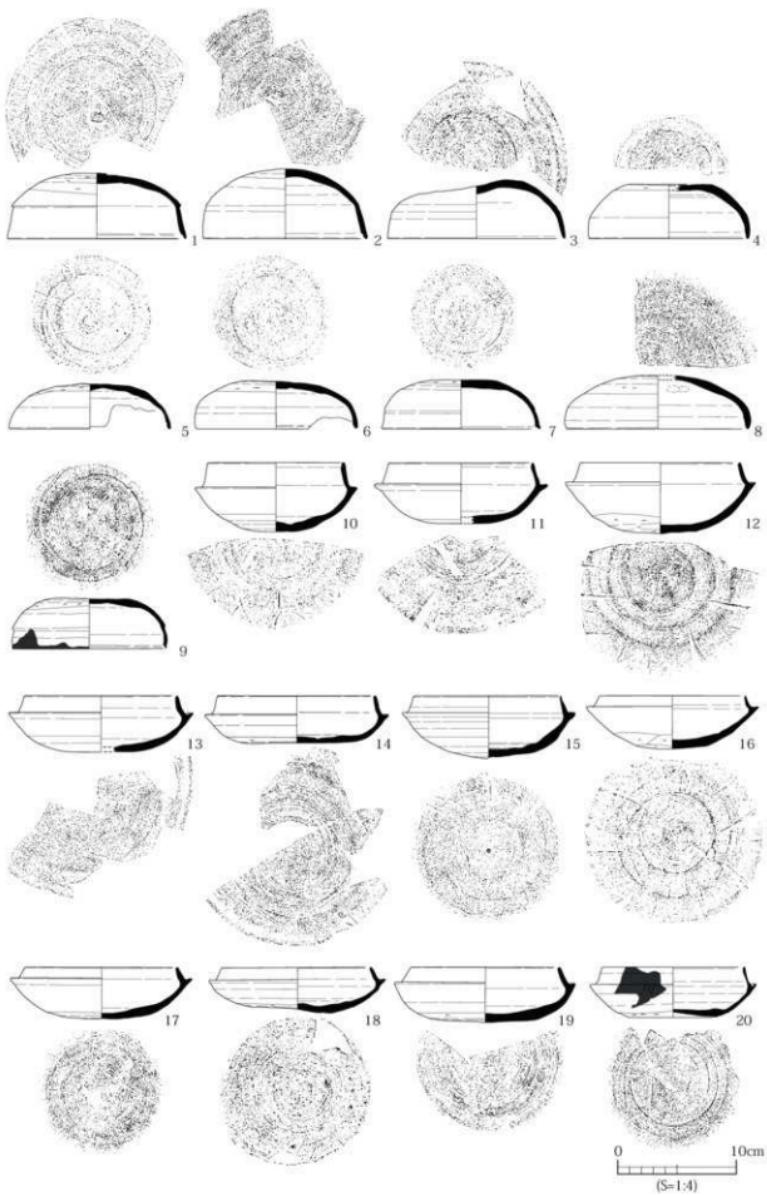
第72図は、黒色磨研土器を含む土師器である。1～7は須恵器模倣の黒色磨研土器である。1～5は蓋を6、7は身を模倣している。1～5は蓋を模倣しているが、坏として使用していると考えられる。蓋を模倣している土器については、1、2は器高が高く、口径は13cm前後であるが、3、4は15cm前後と差がみられる。3、4は陶邑編年MT15・TK10型式を模倣していると考えられるが1、2はTK23・47型式の蓋を模倣している可能性が考えられる。また1、2、4は体部から口縁部の段の作りが丁寧であるが、3は体部と口縁部の境に沈線を回らせた後の調整が簡略化している。5にいたっては、沈線が二重になっている部分がある。すべてが時期差ではないかもしれないが、「(1、2)→4→3→5」の変遷が考えられる。8は須恵器模倣土器であるが、硬質であり、胎土や焼成具合も他の黒色土器とは異なっている。9、10も須恵器を模倣している可能性があるが器種は特定できない。11～16は黒色土器の坏である。これらの黒色土器についても形状、胎土、焼成具合が様々である。15、16は灰白色の土器と同じ胎土を用いて黒色磨研土器を作成していると考えられる。3、4、5、11なども灰白色の土器と同じ胎土をもちいている可能性がある。また12は胎土中に金雲母が多くみられ、橙色系の土師器と関連しているかもしれない。出土層位では、3、14が下層（第XI層）から出土している。平ノ前遺跡から出土している須恵器模倣系の黒色土器は、D2・D3グリッドに比較的集中しており、第XI層に対応する時期の遺物と推測される。17～20、26～30は高环、21～25は低脚环と考えられる。17は松山智弘氏の古墳時代高环の环部と脚部の接続法aと考えられ、胎土や焼成も併せて推測すると古墳時代前期から中期前半の高环と考えられる。⁽¹³⁾ 18は环部外面に稜がある灰白色の土器である。19は、円形の透かし孔が4方向にある。20は灰白色の土器の高环と考えられる。21は低脚环であるが、やや赤みがかった硬質な灰白色の土器と考えられる。22～25はほぼ同じ形状の低脚环と考えられる。22は橙色系、23、24は灰白色の土器と考えられる。出雲国府跡大倉原地区24号土坑から類似した土器が出土している。⁽¹⁴⁾ 25は环部及び脚部の内外面赤彩である。30は口縁部外面や内面が黒変している部分が確認される。また脚部を取り除き再利用した可能性も考えられる。17～30の土器の中には口縁部や脚端部など意図的に抉ったり打ち欠いているものも含まれているかもしれない。

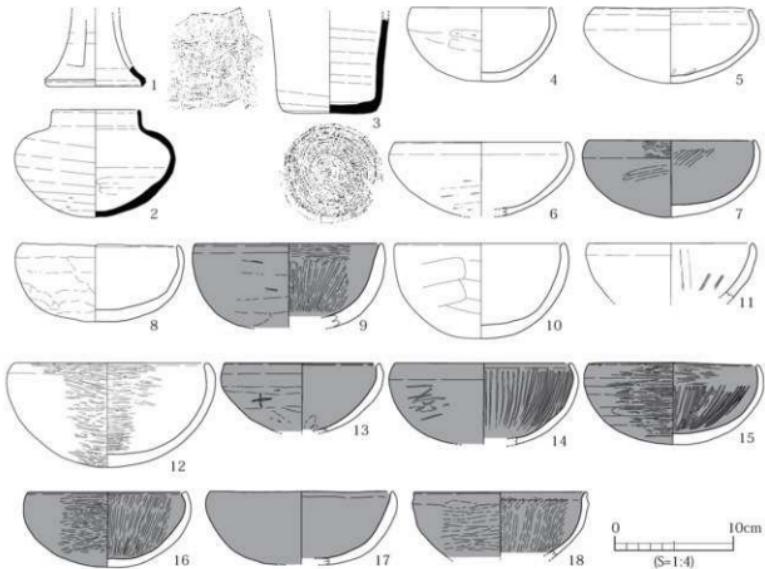
第73図は土師器及び土製品である。1、2は小型の壺と考えられる。2は外面と口縁部内面が赤彩であり小型であるので壺の可能性もある。黒変している部分があり2次利用の可能性も考えられる。3は壺と考えられる。内外面赤彩であり、口縁端部の割れ口の一部にも顔料が付着している。4、5は短頸壺である。4は焼成時の黒斑部分がしっかりとついている。4、5ともに完形である。6は直口壺、7は小形丸底壺である。8は鉢であり、橙色系の土器である。9は鉢と考えられる。あまり見られない器種であるが、平ノ前遺跡では似たような土器が数点出土している。10、11は平底で把手のつく椀であるが、把手部分は欠落している。両者ともに口縁端部下にアクセントがある。内外面赤彩であり、11の表面は光沢感がある。11は胎土中に金雲母がみられ橙色系の土器である。また口縁部が「U」字状に欠けており、意図的に打ち欠いた可能性もある。12は鉢である。13は高环の口縁部の可能性が考えられる。内外面に黒変がリング状に認められる。14～18はミニチュア土器である。19は鏡の模造品と考えられる。鉢の部分がはがれており、鏡面部分が大きく欠けている。胎土中に金雲母が含まれており橙色系の土器と考えられる。大家八反田遺跡（大田市）などで出土している。20～22は円筒状の土錘である。このタイプの土錘は浜寄・地方遺跡（益田市）

などで出土している。^[16]出土層位については、1、12 が下層（第XI層）で出土している。また 2、4、5、8～11、20 が上層（第XI層）に対応する位置から出土していると考えられる。

第74図は土師器の甕（もしくは壺）である。1は古墳時代前期の複合口縁の甕である。2は口縁端部が内面に少し張り出している特徴を持つ甕で中期頃と考えられる。3は口縁部外面に稜がある甕もしくは壺である。4は、口縁端部が角張っている土師器ではめずらしい形状である。須恵器などの写しの可能性が考えられる。5、6は口縁部外面に複合口縁が退化したようなアクセントがある。また体部外面は縱方を基調としたハケ目調整が施されており、5は体部上方に横方向のハケ目がある。3～6は胎土中に金雲母が含まれており、橙色系の土器の可能性が考えられる。7はやや短めの口縁部であり、外面に若干の膨らみがある。胎土は硬質であり特異ではあるが色調や金雲母が含まれていることなど広義な意味では橙色系の土器と考えられる。8は単純口縁ではあるが頸部からの立ち上がりが直線的である。他の甕に比べ器壁が薄いのが特徴である。色調は鮮やかな橙色を呈する。胎土中に金雲母はあまり含まれていないが、広義な意味では橙色系土器と考えられる。9は壺の可能性もある。口縁部外面に稜がある。橙色系の土器と考えられる。10は単純口縁の甕もしくは壺である。器壁が厚い。11は口縁部外面に緩い稜があり端部はやや面取りしてあり、少し外反している。10と11は甕としては使用されていない可能性があり、また胎土や色調から灰白色の土器と考えられる。12は甕もしくは壺と考えられ、口縁部に複合口縁が退化したような段がある。体部上方に線刻がわずかに確認でき、文様が施されていたと考えられる。13は壺の可能性が考えられる。出土層位は、5が下層（第XI層）から出土しており、6、11についても第XI層に対応する層位から出土している可能性がある。7～9は上層（第VIII層出土）と考えられる。

第75図は、土師器・甕である。中には、体部を水平に打ち欠いて再利用した土器も含まれる可能性も考えられる。1～3は口縁部にアクセントがある甕である。1は体部上方が欠けている。口縁部の内外面と破面に黒色及び白色に変色した部分が確認されることから、火を利用した作業に使用された可能性が考えられる。4は単純口縁の甕であるが、黒色及び白色に変色している部分があり体部を打ち欠き再利用した可能性も考えられる。5は外反する口縁の甕であり、体部の内面に、成形時の粘土の継ぎ足し部分がはっきりと残っている粗い作りの甕である。6は口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がり端部が外反する甕である。7は口縁部が内湾しながら立ち上がる甕と考えられ、肩がやや張っている。黒変している部分があり、再利用の可能性がある。8は口縁部が外に張る口縁部の甕である。9は頸部が直線状に立ち上がる口縁部の甕である。全体的に器壁が薄く、外面には口縁端部から体部下半まで吹きこぼれもしくは湯切りによる液体が垂れたような痕跡が残っている。また体部外面の下半は、使用時に付いた煤を掻き取ったような痕跡も残っている。10は甕の底部である。器壁が非常に薄く、内外面黒変している。胎土中に金雲母や半透明の粒子を含んでいる。11は甕もしくは鍋と考えられる。12は甕の可能性が考えられるが、体部が歪んでおり別の器種の可能性もある。全体的に激しく風化し、火元の近くにされられるなど特殊な状況下に置かれたことも考えられる。13～15は小形の甕と考えられる。すべて器壁が薄い。口縁部の形態には違いがあり、13は口縁部に複合口縁の退化したような段がある。それに対して14でも段がみられるが、13よりしっかりとした段であり、口縁端部は面とりされており若干外反している。15は単純口縁であるが大きく外反し、底部は完全に丸くなく若干平底ぎみの形状である。また15は9と同様に口縁部外面から体部にかけて灰白色の液だれ状の痕跡が確認される。再利用さ

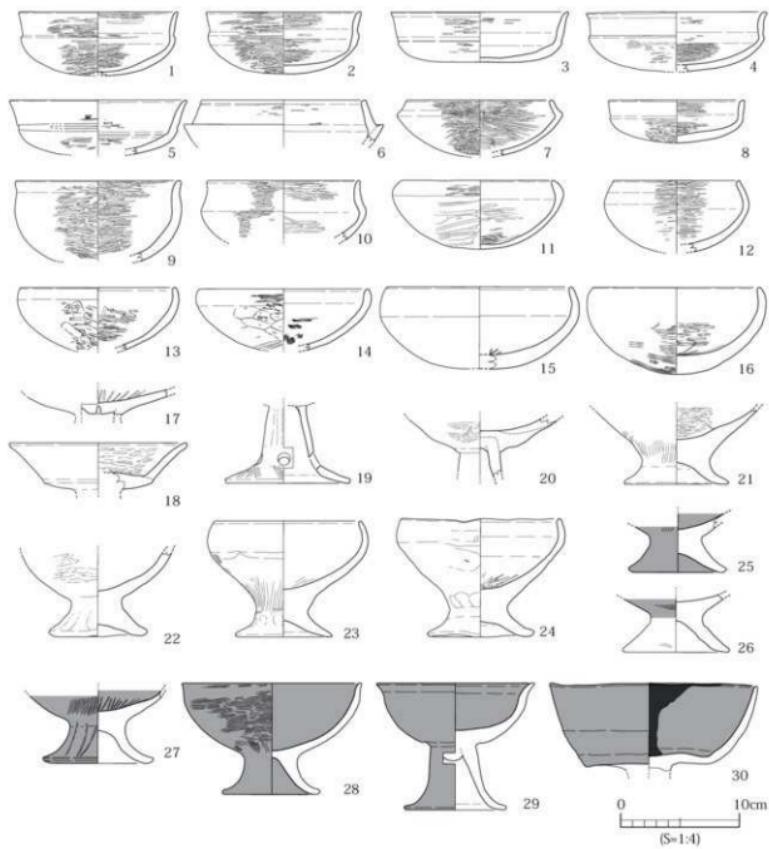




第71図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り A群出土遺物実測図(2)

れた可能性もあり判断が難しいが、1、3、9、11などは橙色系の土器の可能性が考えられる。出土層位は、2、9は下層（第XI層）出土の可能性があり、4、6、11は上層（第VII層）であり、1、3、5、13は第VII層に対応する層からの出土の可能性が考えられる。

第76図は上師器であり、1～6は瓶、7、8は移動式竈である。瓶は現状で観察する限りすべて単孔式と考えられる。1はリング状の把手がつく瓶である。体部から少し外傾しながら立ち上がり口縁端部が少し外反する。底の端部は面とりされている。比較的丁寧な作りであり、色調も黄白色を指向していると考えられる。焼成時の黒斑部分とのコントラストが鮮やかであり、近辺で出土した、土師器・直口壺（第73図4）と共に通性が見うけられる。2は把手部分が付いていたかどうかは不明である。体部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部はほぼ直口している。3はリング状の把手がついているが外縁部が欠損している。口縁端部は少し外反している。4は把手部分が付いていたかどうか不明である。硬質で、体部から口縁部にかけてやや外傾しながら直線的に立ち上がり端部は少し外反している。5は1、3などのリング状の把手を作ろうとしているが最終的にはリング状の空洞を粘土で充填している。リング状把手の形態化と考えられる。体部から口縁部にかけてやや外傾しながら直線的に立ち上がり端部は少し外反している。6は牛角状の把手が付いている。口縁部は不明である。外面が赤彩されている。把手が付いている部分より上側は風化が激しい。7、8は焚き口部分はないが器壁の厚さ、内面の調整具合、使用による痕跡（煤け方）などにより移動式竈と考えられる。瓶1、2、4、5は内面があまり変色していないため、未使用の可能性がある。1は胎土中に金雲母を含んでいる。5は灰白色の土器と考えられる。8は胎土中に金雲母も多く含み、橙色系の土器と考えられる。6の赤彩の瓶は下層（第XI層）から出土し

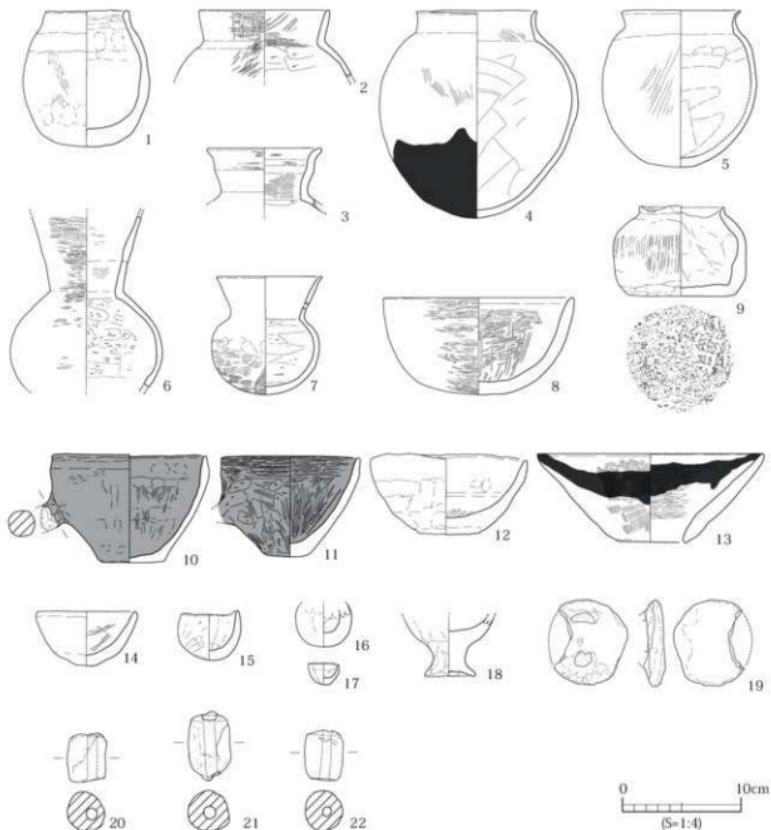


第72図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り A群出土遺物実測図(3)

ている。

第77図は1は土師器、2～4は石器、5は鹿角と考えられる。1は移動式竈である。口縁部を欠いており、全形は不明であるが底も付いていない。器壁が薄く、外面はハケ目調整と考えられるが、摩耗のためか部分的にしか残存していない。橙色を呈し、金雲母を含んでおり橙色系の土器と考えられる。第XII層出土と考えられる。2は磨石・敲石である。3は磨石である。4は砥石である。5は鹿角で図面の矢印部分に加工痕がある。また網掛け部分は熱を受けていると考えられる。

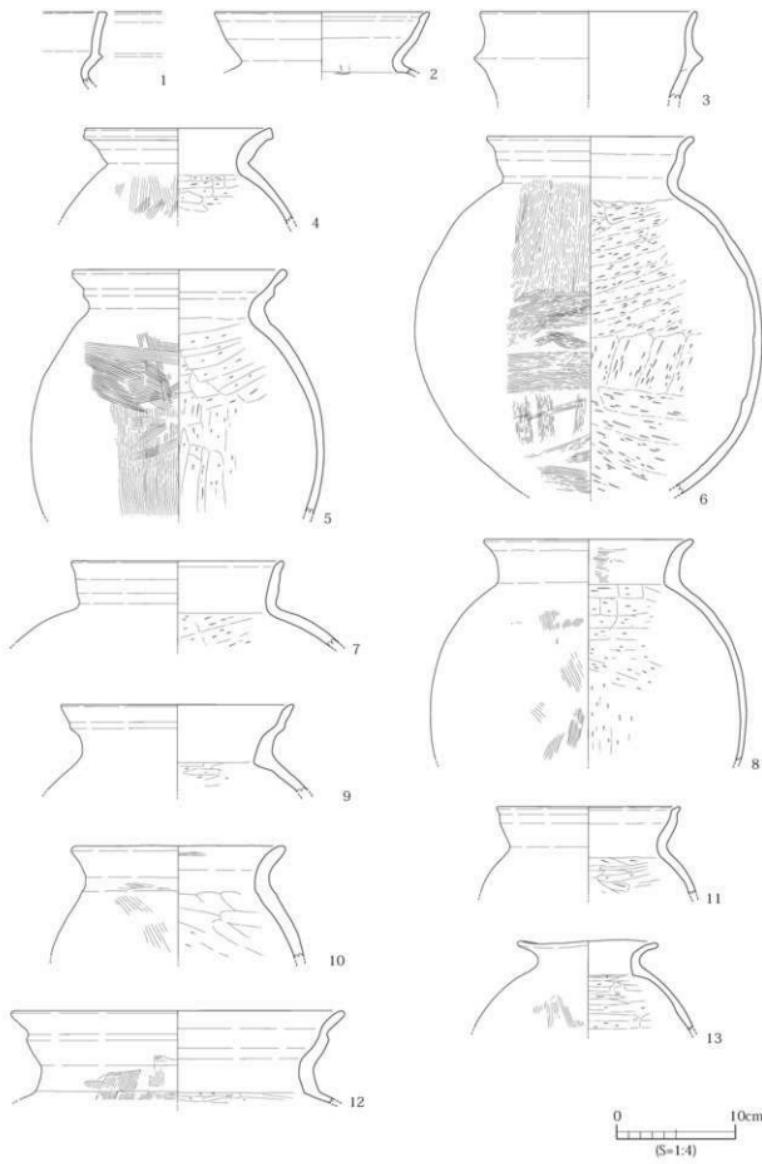
このほか土器溜りA群の土壤を水洗いした中から、獣骨や魚骨なども出土している。魚骨にはコブダイ、マダイなどのタイ科、フグ、スズキなどがある。動物骨にはシカ、イノシシのほかウサギ、カエルなどの骨がある。魚骨の割合が多い。



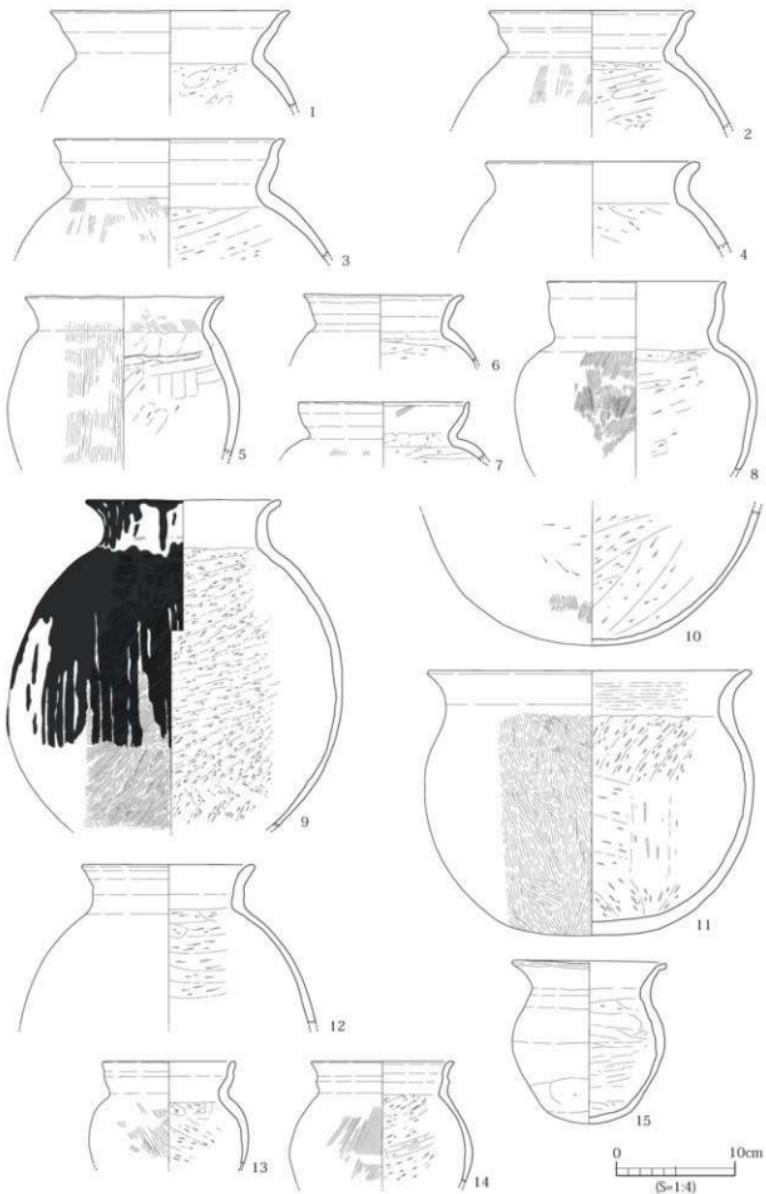
第73図 平ノ前遺跡SD17土器溜りA群出土遺物実測図(4)

SD17土器溜りC群出土遺物(第78~79図)

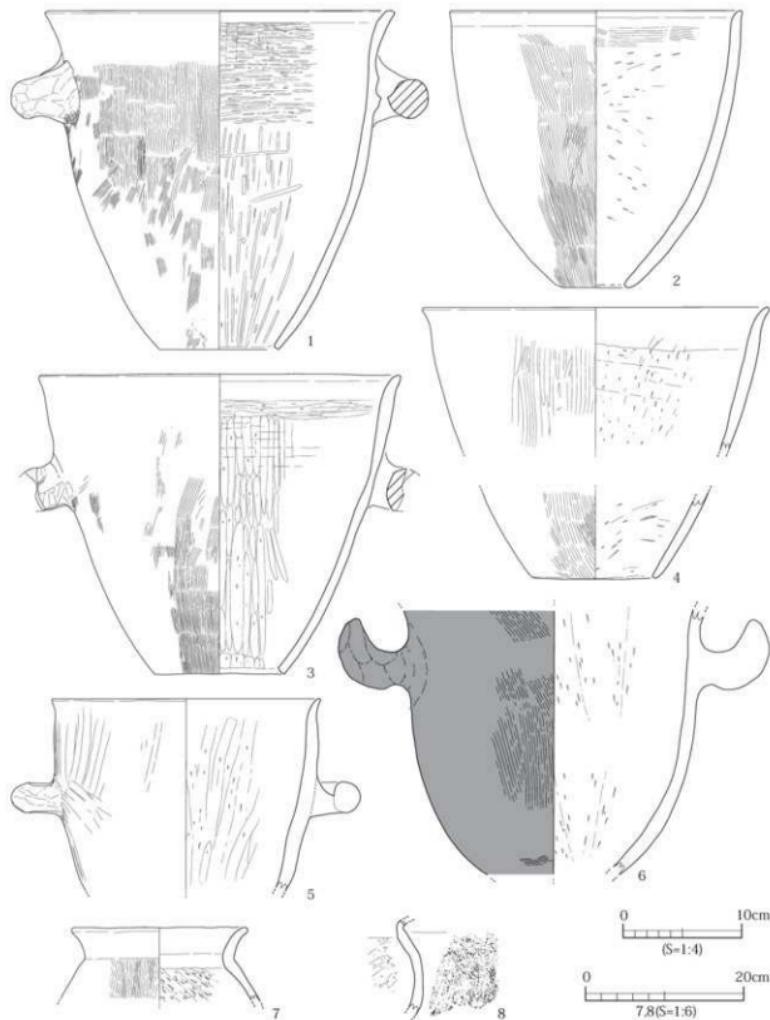
第78、79図は土器溜りC群で出土した遺物である。第78図1、2、5、6は須恵器、その他は土師器である。1~4は一箇所から出土した。1は無蓋高杯である。脚部に二段の方形透かしが三方向にあいている。胎土、色調が須恵器壺蓋(第70図1)に似ている。2は甕で、口縁部が長く、外面に二段の波状文が施されている。外面の多くは自然釉がかかり灰白色を呈している。しっかりと焼き締まっている感がある。口縁部の2箇所が欠けている。破面は淡赤褐色を呈している。3は全面赤彩の高杯である。口縁部は削れており、破面付近は黒褐色に変色している。熱などを受けて割れたことも推測される。4は甕である。5~7は一箇所から出土した。5は須恵器・横瓶である。片側が焼成時に歪んだと考えられる。6は須恵器の提瓶である。体部は両面ともほぼ同じような膨らみである。把手は鉤状と考えられる。7は土師器・甕である。破片から復元した個体であるが、



第74図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り A群出土遺物実測図(5)

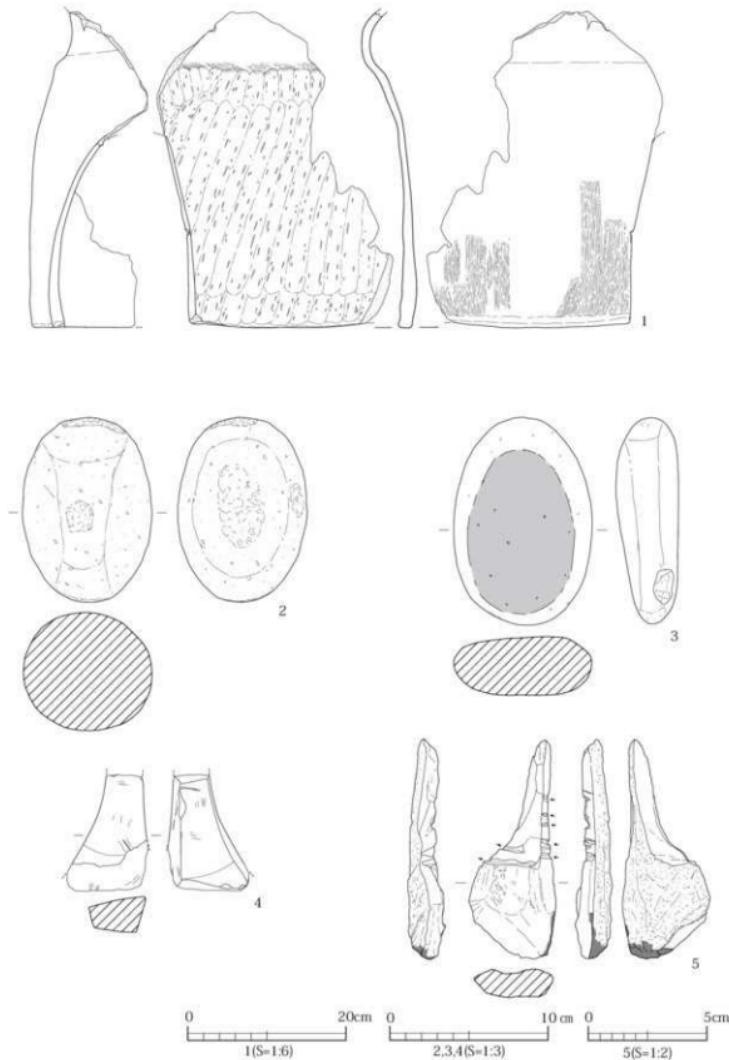


第75図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り A群出土遺物実測図(6)



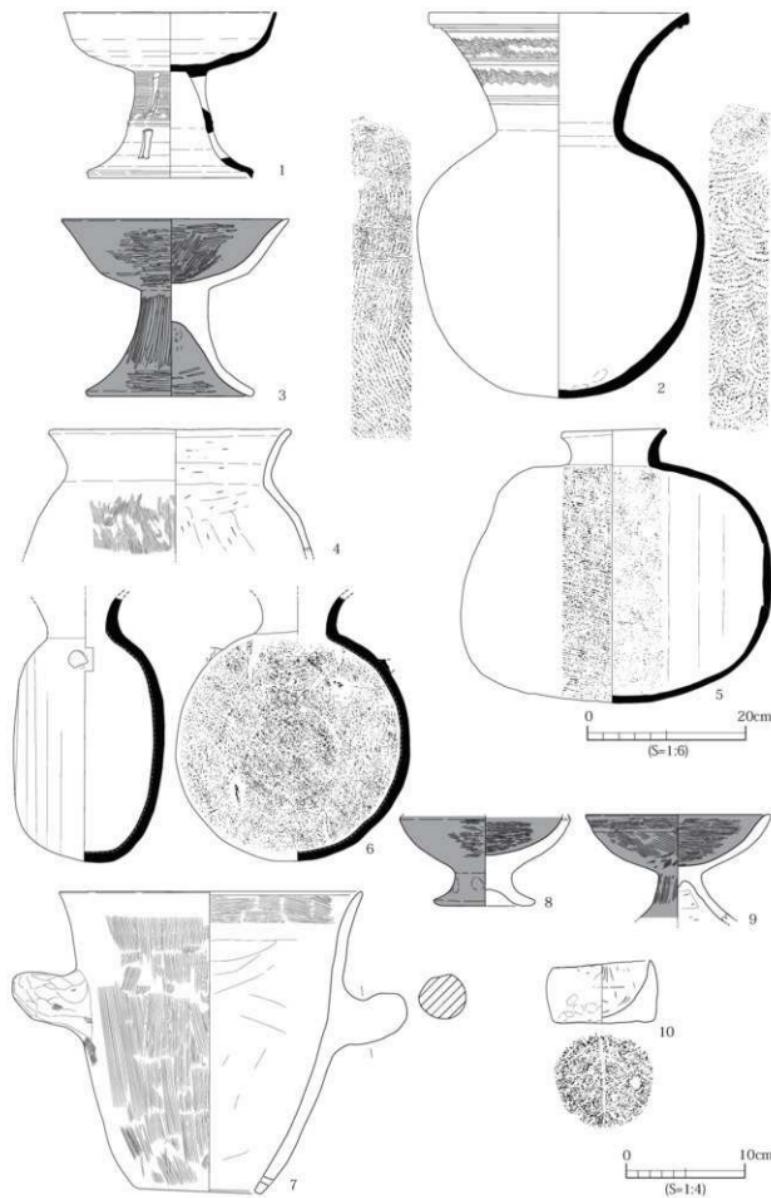
第76図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り A群出土遺物実測図(7)

ほぼ完形である。8～10は、直径約50cmの範囲から出土した。8、9は赤彩の土師器の高环である。8は須恵器模倣系と考えられ、第61図4、65図17とほぼ同型と考えられる。9は口縁部外面に稜を持つ高环で、脚端部が欠損する。10は土師器の鉢と考えられる。底部に木葉痕がついている。製作時についた可能性が考えられる。

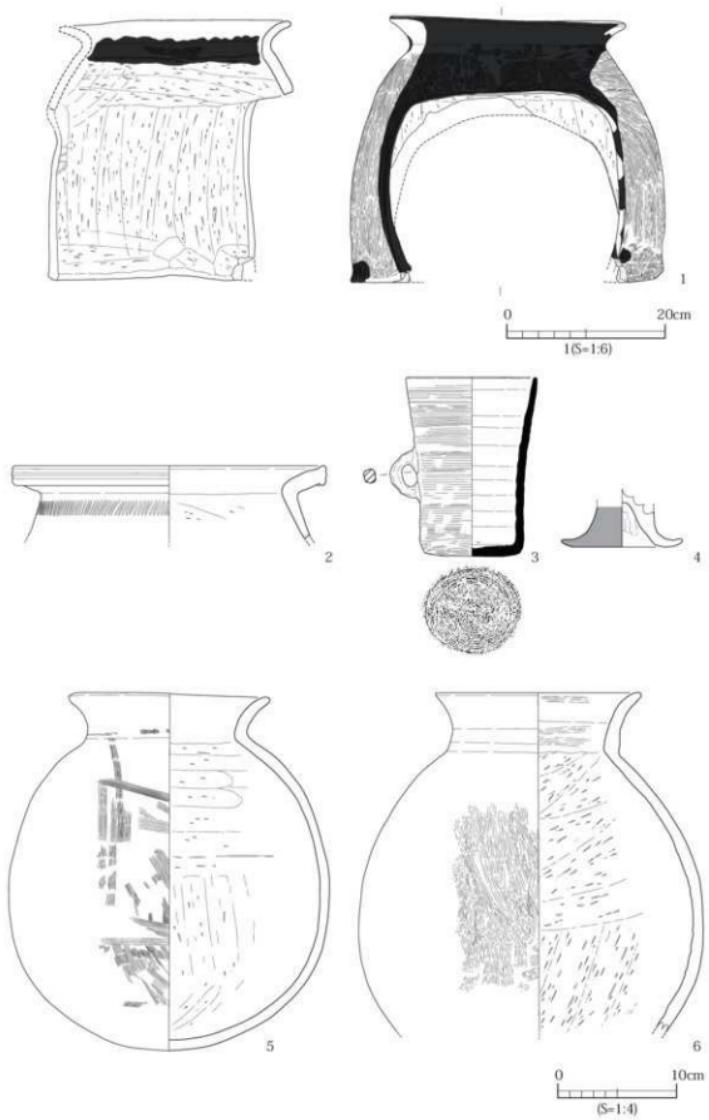


第77図 平ノ前遺跡 SD17 土器掘り A群出土遺物実測図(8)

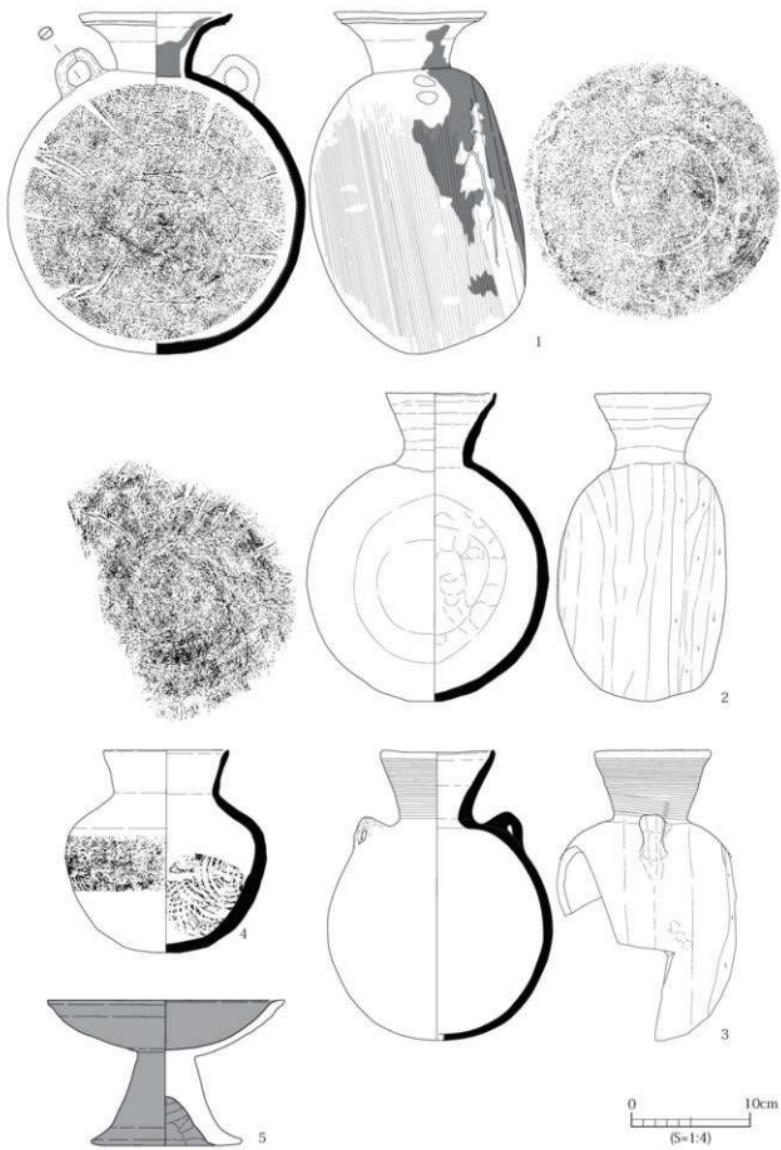
第79図1は土師器の移動式竈であり底が付かず、器壁が薄く、第67図2の土器と同様に焚口の反対側も焚口状の空洞が備え付けられた竈である。2は、弥生時代中期（第IV様式）の甕である。黒変し、また風化も激しい。古墳時代に再利用された可能性も考えられる。3は須恵器・コップ形



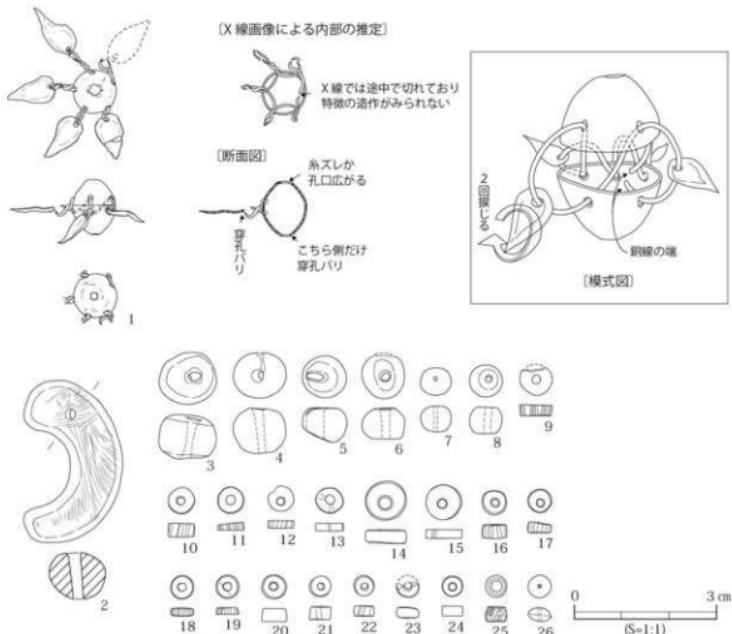
第78図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り C群出土遺物実測図(1)



第79図 平ノ前遺跡 SD17 土器割り C群出土遺物実測図(2)



第80図 平ノ前遺跡 SD17 土器溜り D群出土遺物実測図



第81図 平ノ前遺跡 SD17 出土玉製品実測図

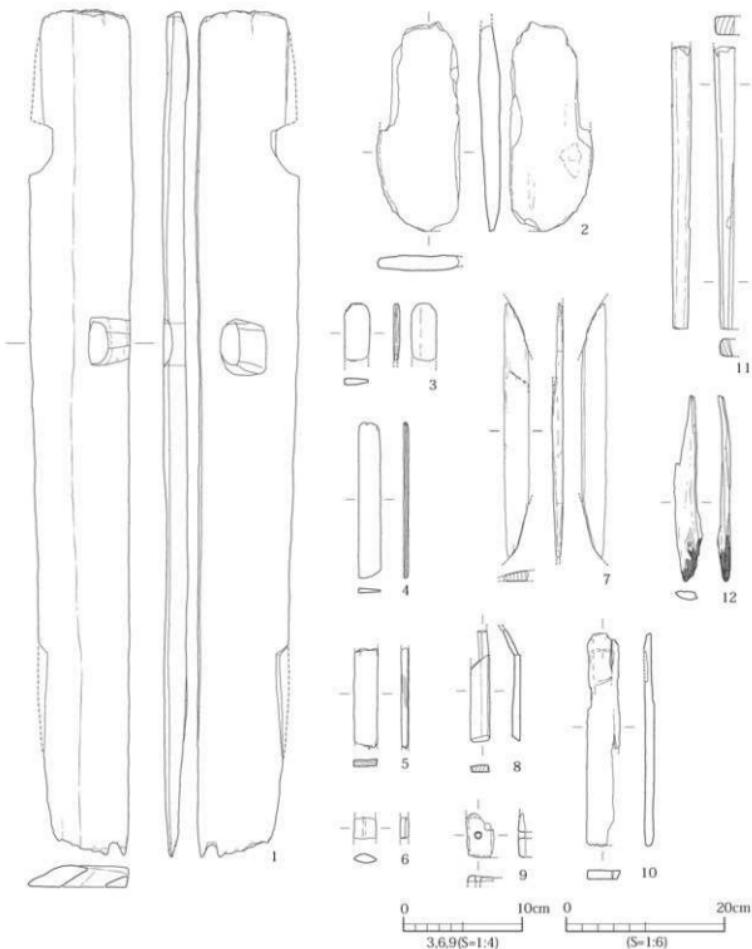
土器である。体部外面及び底部外面にカキ目風の調整が施されている。4は土師器の高環の脚部である。外面赤彩の土器が黒変している。5、6は土師器の壺である。5は灰白色の土器である。

SD17 土器溜り D 群出土遺物（第 80 図）

第80図1～3は、須恵器、提瓶である。1、3は環状の把手が二箇所に付くが、3の把手はややひしゃげている。2はかたく焼き締まっている。4は長頸壺で、口縁部から肩部にかけて自然釉がかかっている。口縁部が割れているが、割れ口にも自然釉がかかっている。5は土師器・高環であり、内外面が赤彩である。口縁部外面に稜がある。灰白色の土器の可能性がある。

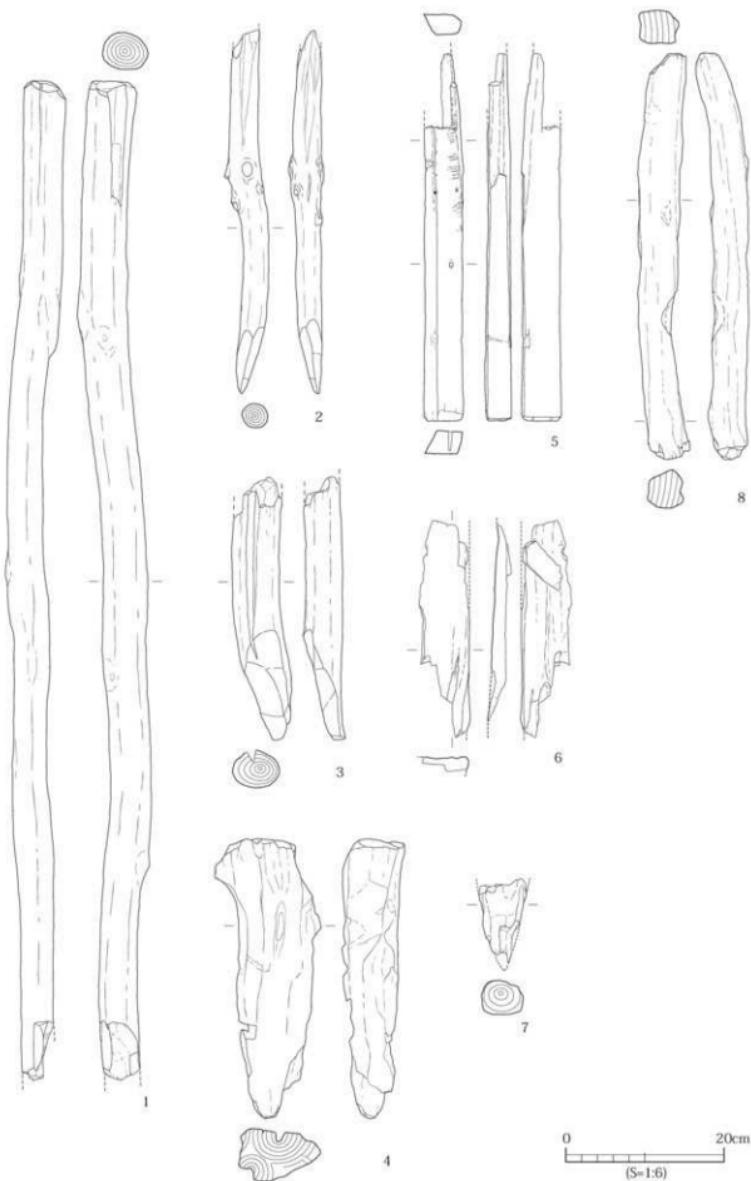
SD17 出土玉製品（第 81 図）

第81図はSD17で出土した玉製品である。1は金銅製歩搖付空玉である。土器溜りB群の縁辺部で出土した。第VII層より下層の砂質土を含む黒色粘質土から出土した。銅板から作成されたと推測される。中心の空玉部分の中は空洞であり、銅板から半球状の素材を二つ作成して上下に合わせることにより成形されている。形は縦が1.15cm、横が0.9cmで、縦方向に長い環玉のような形状をしている。糸をとおして使用されるためと考えられる穿孔が上下に2箇所に施されている。また、歩搖をつなぎ止めるために空玉の最大径部分付近に上下の半球に一箇所ずつ穿孔されており、5枚



第82図 平ノ前遺跡SD17出土遺物実測図(1)

の歩搔をつなぐためほぼ均等に5箇所穿孔されている（上下併せて合計10箇所）。本来歩搔は5箇所付けられていたと考えられるが、出土時は二つはつながった状態で残っていたが、二つは外れた状態で出土した。残り1枚は確認されていない。歩搔も銅板から心葉型に作成され、空玉との接合のため1箇所穿孔されている。5枚の歩搔と空玉は、1本の銅製（もしくは金銅製）の針金を用いて縫い合わせるようにして繋げられている。針金は空玉の内側から空玉に穿孔された穴をとおされ、歩搔に穿孔された穴をとおり、空玉に穿孔された別の穴をとおり空玉の内側へとおされる。この作業を5回繰り返し、まだ接合されていない空玉の上下と、5枚の歩搔が緩くつながった状態



第83図 平ノ前遺跡 SD17 出土遺物実測図(2)

ができる。その後それぞれの歩搖をねじりながら針金を締めることにより、歩搖と空玉のあそびをなくし、かつ空玉の上球部分と下球部分も合わさって、歩搖付空玉の球形ができる。空玉の上下の接合は蠟を使用されたかは不明であるが、肉眼観察によると空玉の接合部分の溝状の凹みには金が付着している。鍍金された段階は銅板作成の後か、歩搖接合前か、歩搖接合後のかは不明である。金がはがれる可能性を考慮すると、少なくとも、空玉の上下及び歩搖を作成した段階よりは後と推測される。この歩搖付空玉の使用方法は不明であるが、上下に穿孔された片側は抉られたように破損している部分があることから、組状のものがとおされた状態で外圧が加わっていた可能性が考えられる。ただし、装飾品として使われていたか、保管時に外圧が加わったかは分からぬ。2～26は、土製、石製、鹿角製の玉製品である。7、25は土器溜りB群の金銅製歩搖付空玉の近くで、26は土器溜りC群で、その他は土器溜りA群で出土である。2は滑石製の勾玉である。3～6は土製丸玉、7は瑪瑙質の丸玉、8は鹿角製丸玉、9～24は石製白玉である。25・26は土器溜りC群出土の小玉で、25は滑石製、26は綠簾石製である。26の表面の一部には赤褐色物質が付着していたため、材質分析を実施した（分析結果は第5章第2節に掲載）。

SD17 出土木製品（第82、83図）

第82図の木製品の10以外は土器溜りB群もしくはその縁辺部で出土している。1はD5グリッドの土器溜りB群の北東端で出土した。屋根の棟で使用された建築部材の可能性が考えられる。2は鉛もしくはその未成品の可能性がある。12は燃え差しと考えられる。

第83図の遺物はD4及びD5グリッド周辺の土器溜りB群周辺で出土している。1は、杭としているが建築材などの垂木材の可能性もある。2～6、8、9は大木の真横から出土しており、このうちいくつかは大木を固定するような杭として機能していたと考えられる。中には転用材の可能性がある杭も含まれている。

SD17 出土玉作関係遺物（第123、124図）

第123図1～4は、SD17出土の玉未成品や製作途中の段階の遺物である。1はD3出土の碧玉の剥片である。石核から玉製品の素材をとった残りの残核である。2はD5出土の碧玉の剥片である。素材剥片である。3はD2出土の碧玉の剥片である。薄い剥片であるが、表面が研磨により幅広く面取りされる状況から、研磨工程にある勾玉未成品から剥離したものと考えられる。4はD3出土の緑色凝灰岩製の丸玉未成品である。研磨工程の未成品である。

SD17 出土その他の遺物（写真図版90、91 写真図版のみ）

写真図版90の1はSD17土器溜りA群の埋土を水洗いを実施して抽出された大きさ5mm前後の淡い藍色の物質である。ガラス滓と考えられるが、排出された時期やどのような作業で発生したかなどは不明である。その他、2は土器溜りB群で出土した縄文土器である。6は黒曜石である。土器溜りB群の大木の下から出土している。

写真図版91の2は、ガラス滓と考えられる。形状は楕円の形状であり碗状の下の部分には地山が溶着しているようである。また上面の濃緑色のガラス質部分の中には黒色の物質が認められる。排出された時期やどのような作業で発生したかなどは不明である。（伊藤智）

SD04（第 84 図）

SD04 は、調査区の中央部を南北に直線状に流れる水路跡である。標高約 3.0m、幅約 90cm、深さ約 30cm、検出された長さは約 40m である。SD17 が埋まつた後、同じ方向に構築されており、溝底の標高から南から北へ流れた水路と考えられる。SD04 から東約 20m の範囲にはほぼ南北方向に砂礫層が堆積しており、部分的ではあるがこの砂礫層の上に SD04 が構築されている。SD04 の底付近ではラミナ状の堆積が確認されている部分があることから水流があったと考えられる。調査区南東付近の SD04 の直下には灰色の粘土が確認された部分があった。また D4-D5 グリッド付近では、水路の両脇に杭の痕跡と木質が粘土化したと考えられる板状の痕跡も確認された。SD04 の構築にあたって、底に粘土を貼つたり、両側面などに板材などの木材が使用された箇所もあったと考えられる。ただし上流部分（D3-D4 グリッド付近）は、SD04 の痕跡をわずかに確認できたのみで、後世に削平されたと考えられる。D3-D4 グリッド付近では SD04 が構築される前後の段階で遺構が重複しており、標高が高くなりながら同じ場所もしくは水路の位置がえられて、水路が利用されていたことも推測される。D4 グリッドの木製品が出土した近辺では、轍の羽口片、鉄滓、炭片を含む黒色土で埋められていた。水路の上流方向から下流方向にむかって埋められた痕跡が確認され、水位上昇の対策として、もしくは作業面の確保のため埋められたことなどが推測される。

SD04 の性格は不明であるが、近くでは轍の羽口や鍛冶治滓など鍛冶関連遺物が出土していることより、鍛錬鍛冶に伴う機能があったことも推測される。

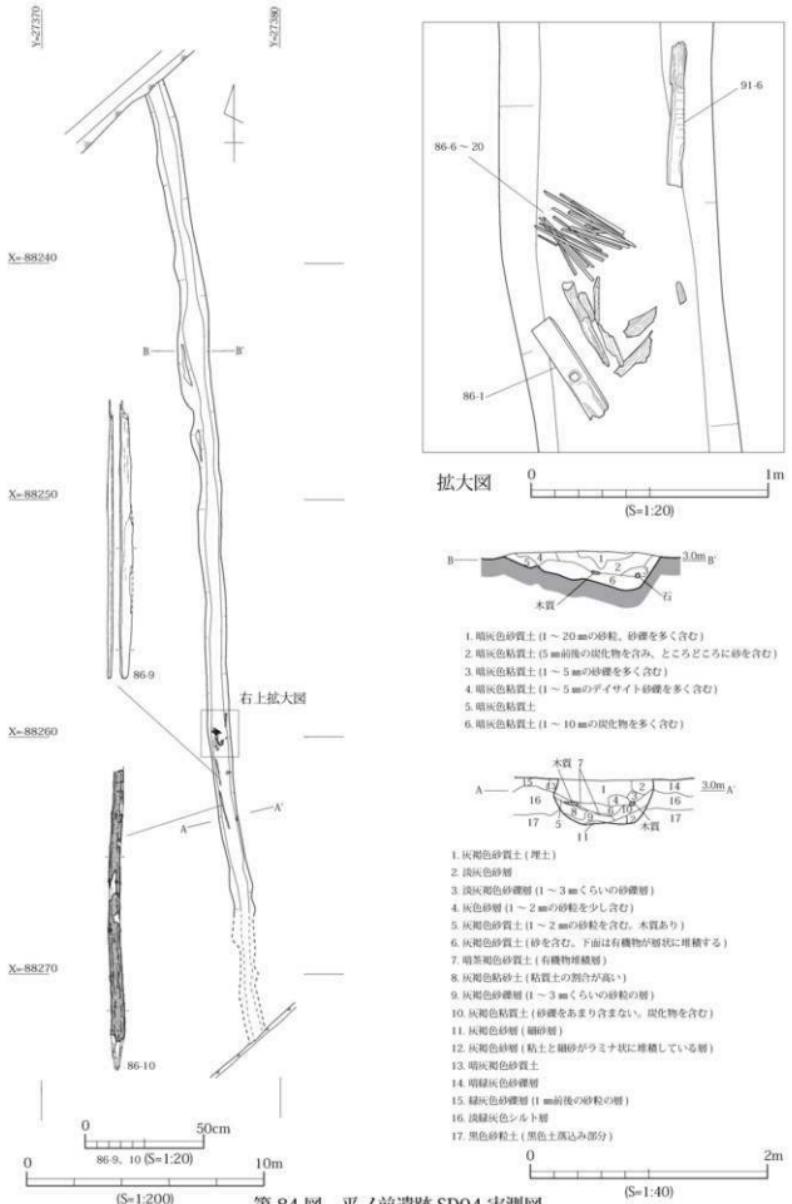
出土遺物（第 85、86、122 図）

SD04 から出土した遺物は第 85、86 図のとおりである。第 85 図 1、2 は須恵器の坏身である。1 は底部外面に自然釉が付着している。断面は赤褐色を呈しており、しっかりと焼き締まっている。2 は全体に灰白色を呈しており、瓦質的な土器である。1、2 はともに、残存率が 30% くらいであり、内外面の摩耗が激しい。3 は須恵器甕の口縁部の一部と考えられる。4 は土師器・坏である。内外面赤彩であるが風化が激しい。形状は口縁部外面にアクセントをもっており、胎土中には 5mm 前後の礫を含み、中には 10mm を超える礫もしくは粘土塊を含んでいる。5 は土師器の甕と考えられる。第 85 図 6 ~ 25 は燃えさしと考えられる。直径 10mm 弱、長さは 14 ~ 34cm であり、基本的には直線状であるが 6 や 20 など反った形状のものも含まれている。第 84 図の拡大図のとおり木製品がまとまっている部分から出土した。

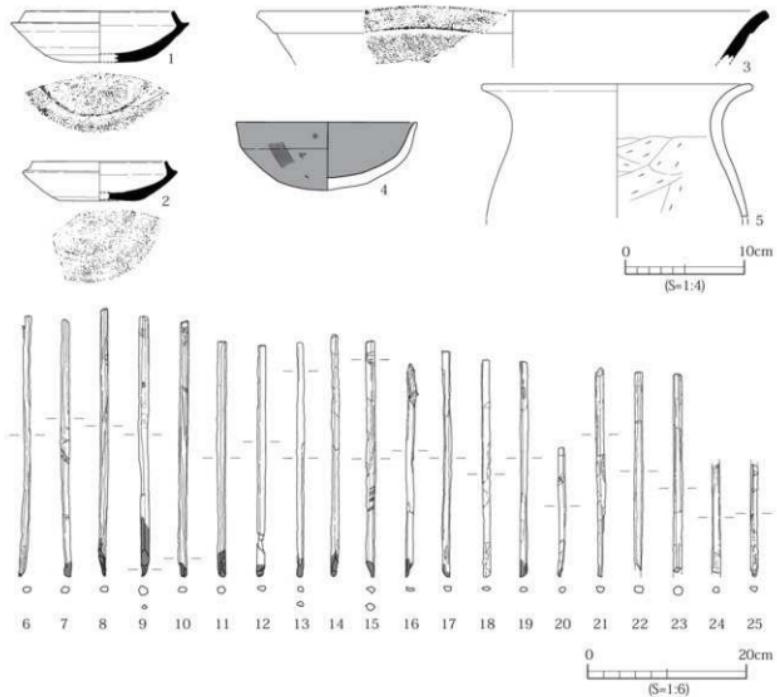
第 86 図 1 ~ 10 は木製品である。1 は角材である。残存している長さは 48.6cm、幅 10.5cm、厚さ 6.8 cm であり、直径約 3.3cm のぼぞ穴が開いている。片方の端は、燃えて炭化しているが鉤状の加工があり他の材との接合部分と考えられる。もう一方の端は、燃えていないが切断されたような痕跡がある。ぼぞ穴部分は穴に沿って擦れた痕跡がある。建築材の一部と考えられ、建物が焼失したのか、解体後燃やされたのかは不明である。2 はぼぞ穴が開いており刃物等の柄の可能性が考えられる。3 は板材、4 ~ 8 は杭もしくは用途不明品である。6 は根がらみと考えられ、くぼみが確認される。^[17] 6、9 は建築材などの転用材の可能性が考えられる。10 は芯持ち、皮付の杭である。

第 122 図 1 ~ 3 の轍の羽口、7 の鉄滓（楕円鍛冶滓）は SD04 から出土している。前述した炭を多く含む埋土から出土しており、またこの埋土からは、鍛造剝片も確認されている。羽口や鉄滓は鍛錬鍛冶遺構に伴うものと考えられ、近辺で鍛錬鍛冶が行われていたと考えられる。

遺構の時期であるが、出土遺物している須恵器 1、2 は陶邑編年 TK43 ~ TK209 併行期（石見



第84図 平ノ前遺跡 SDO4 実測図

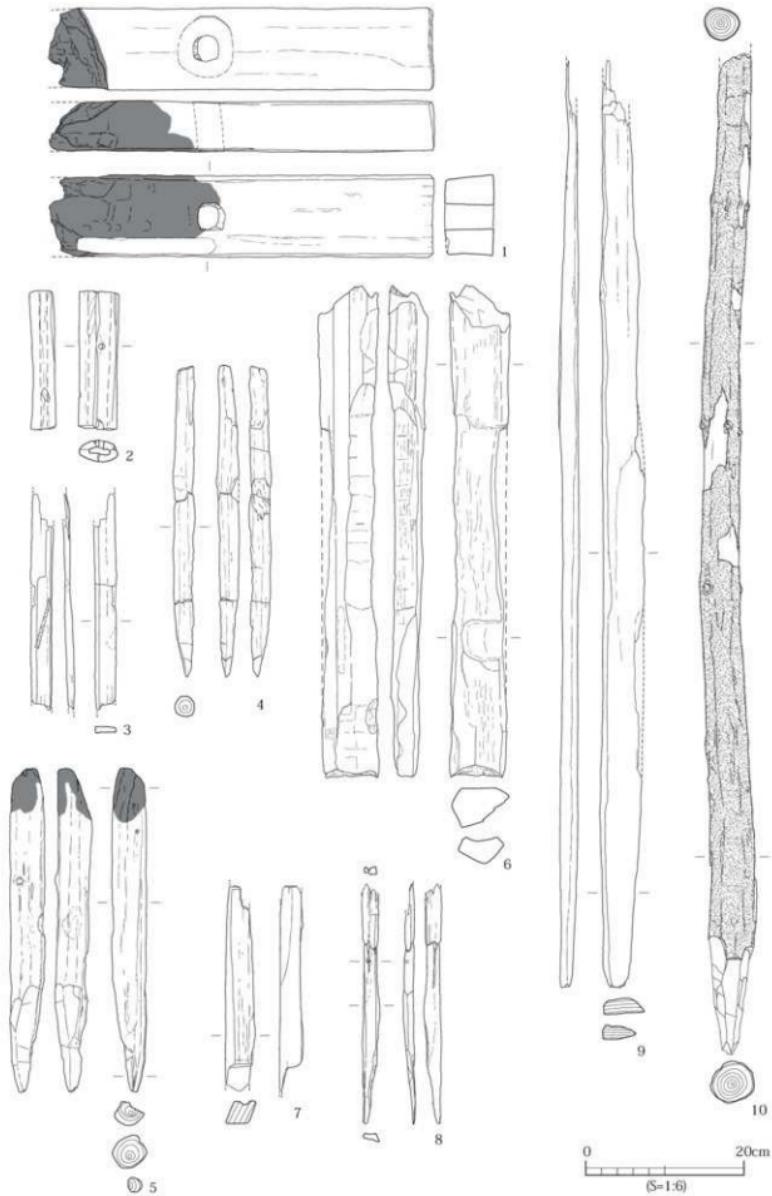


第 85 図 平ノ前遺跡 SD04 出土遺物実測図 (1)

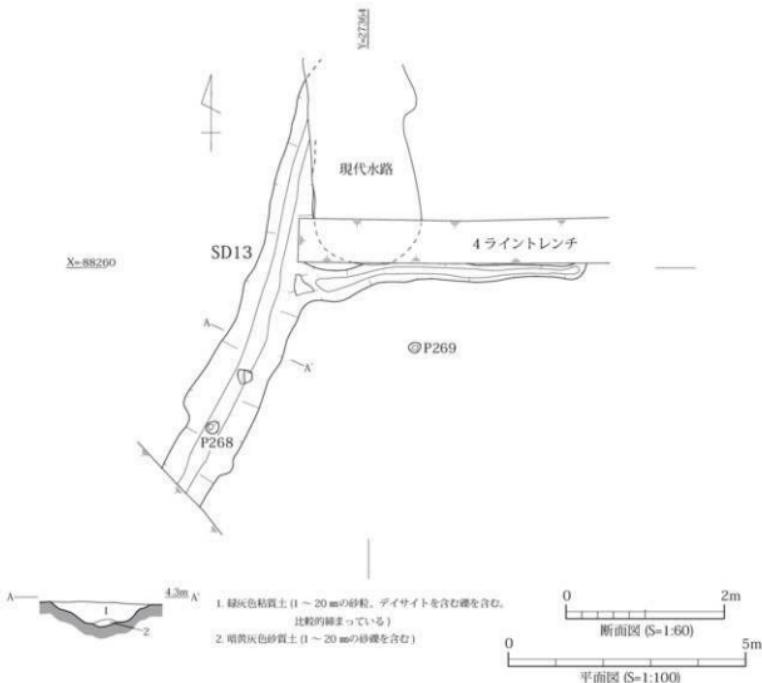
3～4期)と考えられる。SD04より上層部分のD4グリッドでは、後述するSK01、SD11、SD12が確認されており、ここで検出されてた炭化物の放射性炭素による年代測定を実施しており(第5章第1節)、おおむね6世紀後半から7世紀前葉の年代という結果が出ている。SD04より下層のSD17の下限はTK43～TK209併行期(石見3～4期)と考えているので、SD04の時期はTK209併行期(石見4期頃)から7世紀前葉頃と推測される。ただしこれは遺構の重複が激しいD4グリッド付近であり、D5グリッドから北は、SD04が埋まった後も同じ水路を利用している可能性も考えられる。

SD13(第87図)

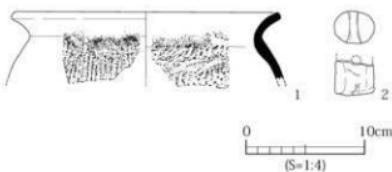
調査区中央西寄りに位置している。第XV層上面で検出された。標高約4.4m、南北方向に長さ約9m、幅1.2m、深さ30cmの溝状遺構を主体として、南端から北へ5mの地点から枝状に溝がのびた状態で検出された。枝状部分の長さは約5mである。南北方向は底の標高が南から北へ低くなっている。東西方向はわずかであるが西側が低くなっている。遺構の性格は不明である。



第86図 平ノ前遺跡 SDO4 出土遺物実測図(2)



第 87 図 平ノ前遺跡 SD13 実測図

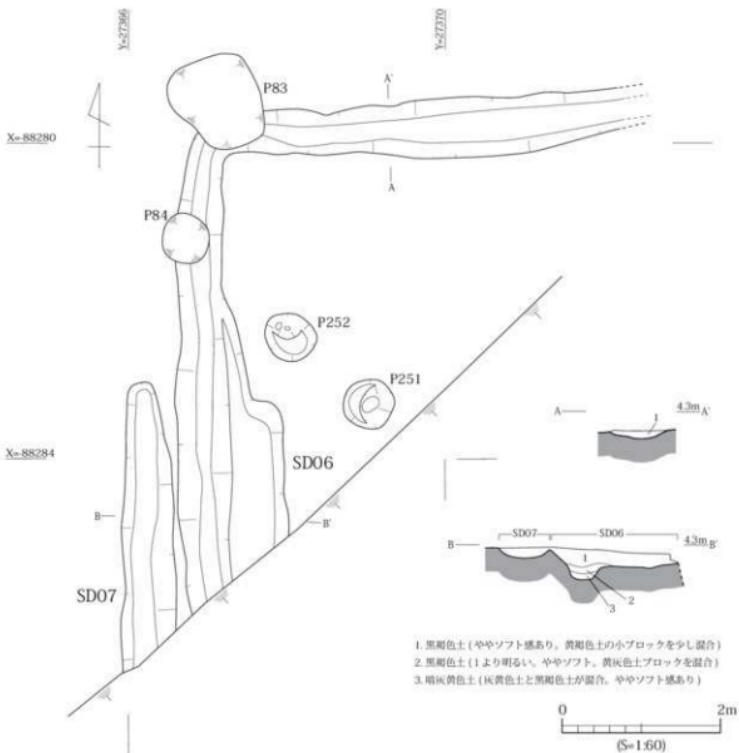


第 88 図 平ノ前遺跡 SD13 出土遺物実測図

出土遺物（第 88 図）

出土遺物は第 88 図のとおりである。1 は須恵器の甕片である。断面が淡赤褐色を呈している。2 は土師器の土錘片と考えられる。孔の部分で割れているが、破面を含めて全体が黒褐色を呈している。

遺構の時期については、古墳時代後期頃以降と考えられる。



第89図 平ノ前遺跡 SD06、07 実測図

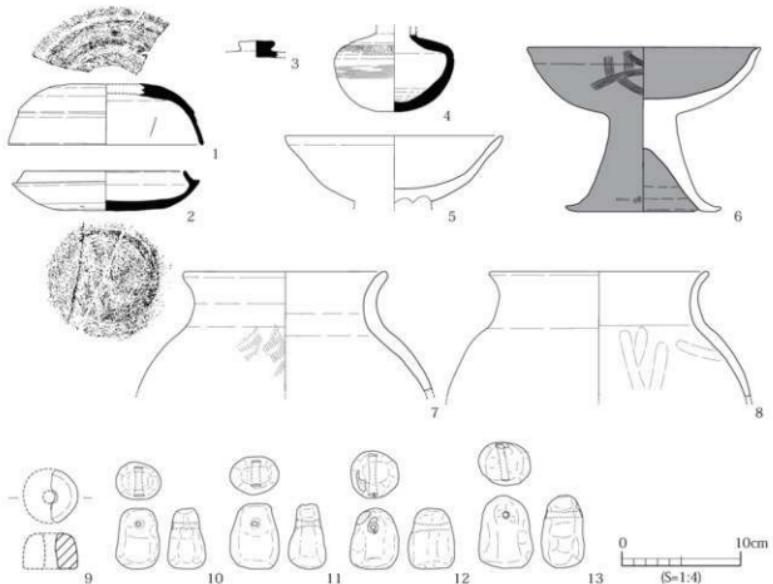
SD06、07 (第89図)

調査区の南側に位置する。第VI層上面もしくはVI層中で検出された。SD06は南北方向の溝がP83付近で東方向に90°折れ曲がったような平面形をしている。標高は約4.1m、長さは南北方向は6m、東西方向は5mであり、幅は0.4~0.6mであるが、南北方向の南側部分は東肩が二段堀状になっているので幅が約1.1mになっている。深さは10~40cmである。

SD07は、SD06が二段堀になっている部分の西側に、南北方向のSD06に平行するように検出された。標高4.3m、長さ3.5m、幅0.6m、深さ、10cmである。SD06、SD07ともに、性格等は不明である。

出土遺物 (第90図)

第90図はSD06から出土した遺物である。1~4は須恵器である。1は壺蓋と考えられる。調整時に付いた工具などの痕跡かもしれないが内面に線刻がついている。口縁部の一部が欠けている。2は壺身である。口縁部の一部が欠けている。全体的に風化している。3は壺蓋などのつまみ部分である。算盤玉型である。4は甕である。注口部分が失われているが断面に自然釉が付着している。



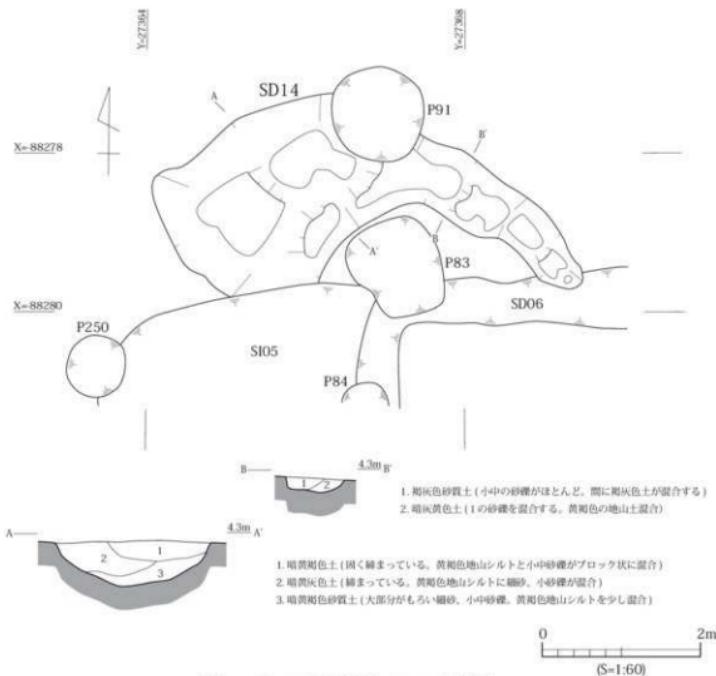
第90図 平ノ前遺跡 SD06 出土遺物実測図

箇所がある。底部内面に多数の敲打痕が見られる。5～13は土師器もしくは土製品である。5は高環の環部である。6は高环である。口縁部外間に稜があり、少し外反する。灰白色の土器の可能性がある。全体的に風化しているが、内外面は赤彩である。脚端部が一部欠損する。7、8は甕と考えられる。同一個体であるが、出土位置が5m離れている。風化が激しい。胎土中に5mm前後の灰白色物質を含んでいる。胎土中に灰白色物質を含む。9は紡錘車である。半分しか残存していない。また胎土は7、8に共通する。10～13は土鍤である。12は灰白色系の土器と同じ胎土と考えられる。重量に差はあるが、分銅形の土鍤と考えられる。

時期については、3が7世紀の前葉頃の可能性が考えられ、前後の遺構の関係からSD06の時期は7世紀前葉から中葉頃と推測される。

SD14（第91図）

調査区の南側部分でSD06を掘り下げて検出され、SI05に切られていた。よってSD14、SI05、SD06の順に機能したと考えられるが、遺構の性格によってはSI05とほぼ同じ時期の可能性も考えられる。平面形は歪んだ扇のような形状である。標高4.2m、長さは約6m、幅は0.5～2mである。性格は不明であるが、スロープ状の通路や排水溝などが推測される。時期はSI05に切られていることより、古墳時代前期以前と考えられる。



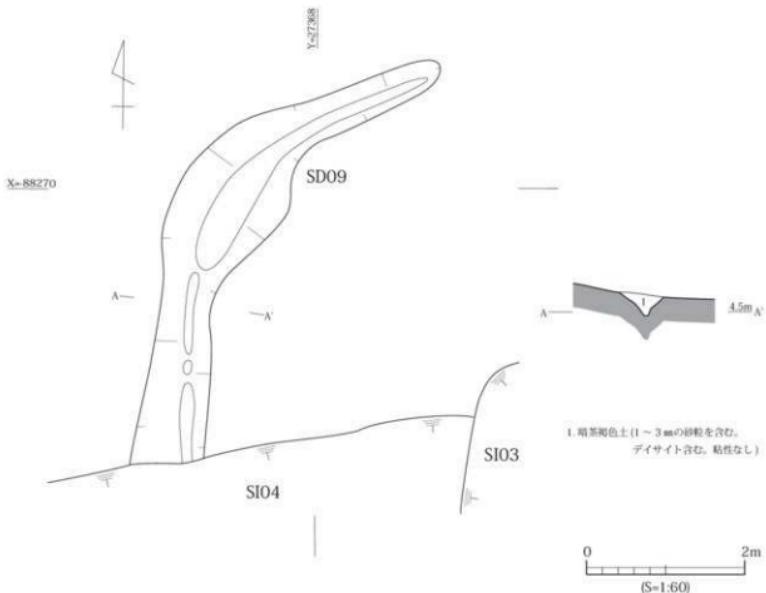
第 91 図 平ノ前遺跡 SD14 実測図

SD09（第 92 図）

調査区の南側、SI04に重複する状況で検出された。南側を SI04 で切られており北側に向かってのび、少しずつ東にカーブする、曲がった形状をしている。長さは約 6m、幅は 0.5 ~ 1.4m、深さは、20cm である。底の標高は北側が若干低くなっている。性格は不明である。時期は古墳時代後期以前と考えられる。

SD01（第 93 図）

調査区の東側に位置する。西側は調査区南東壁土層図（第 7、8 図）の第VII-33 層（古墳時代後～終末期の水害によって形成された砂礫層）を基盤として、東側は第IX層もしくは第XIII層を基盤として形成されている。この基盤となっている砂礫層（第VII-33 層）は本来は南北方向のグリッドライン F ライン付近の土石流もしくは洪水によって形成された層であったと推測される。その後東西の土砂が流失して土手状の高まりが形成されたと推測される。SD01 はこの高まりから標高のより低い場所（南側）に向かって掘削されていると考えられる。土層図の 11 ~ 14 層は、やや西側に崩れているが東側の地山であったと考えられる。遺構の性格は不明である。



第92図 平ノ前遺跡 SD09 実測図

出土遺物（第94図）

第94図1、2は須恵器である。1は高台が付く壺の底部、2は壺と考えられる。3は土師器の壺である。この他に古墳時代から古代にかけての須恵器の片や、底部に糸切り痕のある土師器・壺もしくは皿が出土している。この壺もしくは皿は、中世前半（12世紀前後）と推測される。

土坑

SK01（第95図）

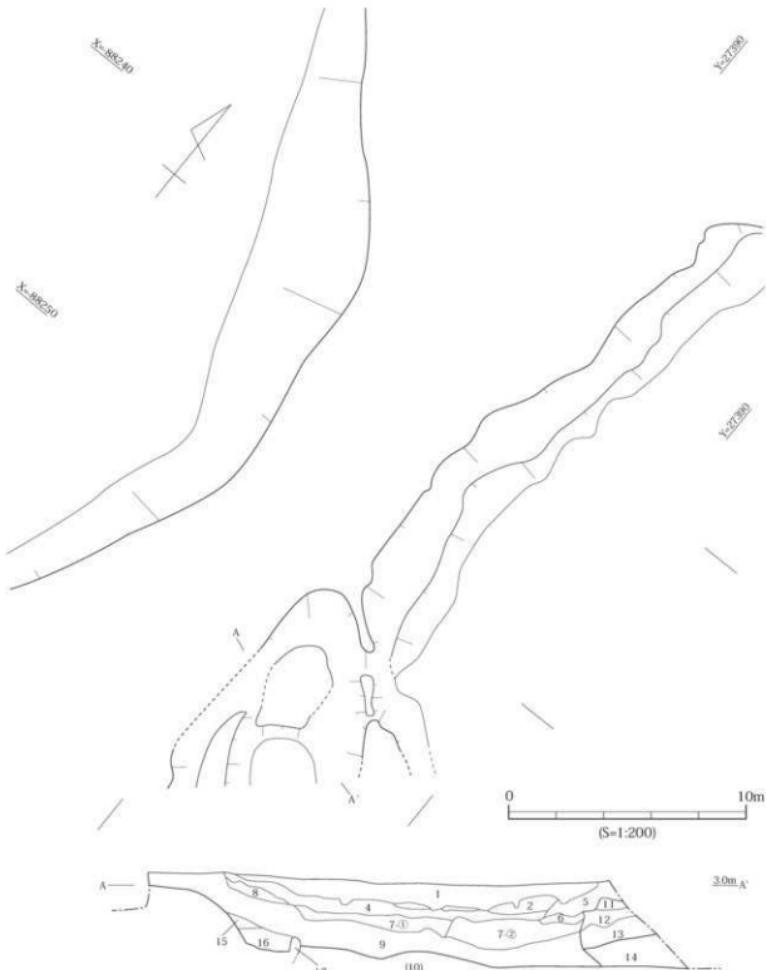
調査区の中央から少し南によった箇所で検出された。標高約3.8m、直径1.2m前後のやや歪んだ円形であり、深さは30cmである。検出面は、第VI層に対応する層である。SD04、SD11、12が埋まつた後の土坑である。前述したとおりであるが、SK01の基盤となっている下層部分は、鞆の羽口、鍛治溝、炭を多く含む土で埋められている部分や、暗灰色の粘質土や炭混じりの土で埋まっている。SK01も鍛冶関連の施設の可能性が考えられるが詳細は不明である。

時期は7世紀前葉以降と考えられる。

SK12（第96図）

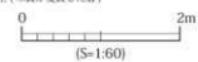
調査区の南側、SD05に一部重なる状況で検出された。標高4.5m、平面形は、長軸が2.5m、短軸が2.0mくらいの楕円形であり、深さは20cmである。性格は不明である。

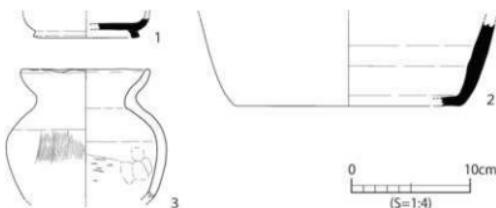
時期はSD05に切られているので、弥生時代中期以前と考えられる。



1. 黒褐色砂質土 (砂粒 (デイサイトを含む) を多く含む。全体の5層もしくは7層に対応か)
2. 黒褐色砂質土 (よりしまっている)
3. 喰黃灰褐色粘土 (1 ~ 5mmの灰白色粒子 (デイサイト) を多く含む)
4. 喰灰褐色土
5. 喰灰褐色土 (1 ~ 5mmの砂粒 (デイサイト) を多く含む)
6. 黑褐色砂質土
- 7-① 黑褐色シルト層 (上位は砂粒を含む。7-①より細まる)
- 7-② 黑灰色シルト層 (上位は砂粒を含む。7-①より細まる)
8. 淡灰褐色シルト層
9. 緑灰褐色土 (シルト~粘土)
10. 喰黃灰褐色砂質土 (上位はかたく締まっている)
11. 茶褐色砂質土
12. 喰黃灰褐色砂質土 (締まっている)
13. 喰黃灰褐色砂質土 (地山)
14. 茶褐色砂礫層 (地山)
15. 灰色砂層 (やわらかい。法面からの流れ込みか)
16. 灰色シルト層 (地山)
17. 喰黃灰褐色砂質土 (木質が変質した層)

第93図 平ノ前遺跡 SD01 実測図





第94図 平ノ前遺跡 SD01出土遺物実測図

SK05（第97図）

調査区の南側、SD17、SD06と重なる状況で検出された。第VI層中の遺構と考えられる。切り合いなどからSD17、SK05、SD06の順と考えられる。SD17に堆積した黒色土（第VII層）や黒褐色系の造成土の上から掘り込まれていると考えられるが東側部分は検出できなかった。現状南北5.0m、東西0.5～2.5mの大きさの落ち込みである。深さは10cmである。中央部分を東西方向にSD06の東西溝に切られている。掘り下げた床面でピットを5基確認している。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第98図）

1～3は須恵器である。1は壺蓋と考えられる。2は高環の脚部であり陶邑編年TK23・47併行期の可能性が考えられる。3は甌などの口縁部と考えられる。4は土師器・甌の口縁部であり、口縁部外面に稜がある。

遺構が重複する部分であり、古い時期の遺物が混入している可能性も考えられるが、遺構の切り合いかから、時期は6世紀後葉から7世紀前葉頃と推測される。

SK02、SK07（第99図）

調査区の南側、S103の南側で検出された。第VI層中の遺構と考えられる。S103と重なっており、切り合いかからS103、SK07、SK02と考えられる。

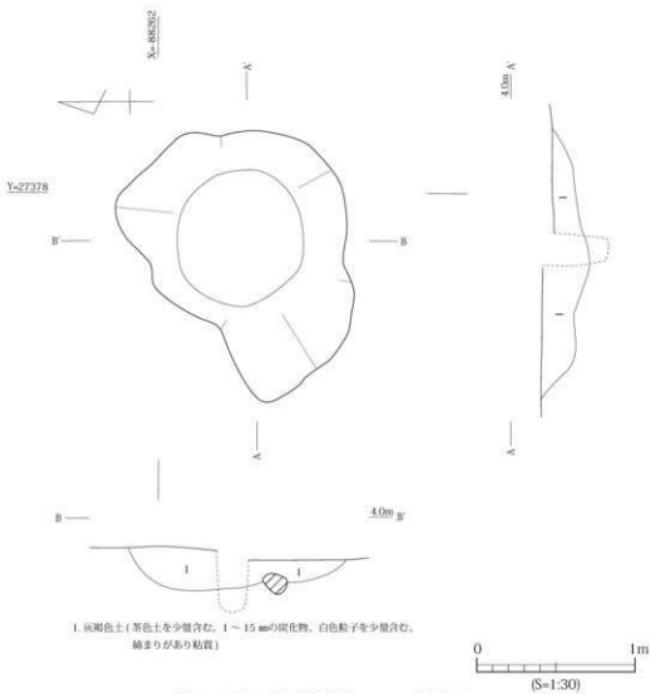
SK02は標高約3.9m、平面形は長軸1.5m、短軸1mの梢円形であり、深さは約30cmである。

SK07は標高約3.8m、平面形は長軸約2m、短軸約1.2mの梢円形であり、深さは約20cmである。両遺構とも、性格は不明である。

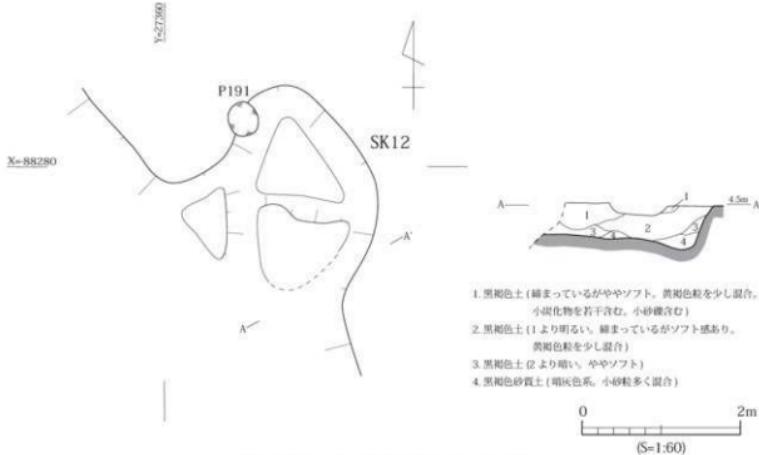
出土遺物（第100図）

第100図はSK07出土遺物である。土製品・分銅形土鍾である。

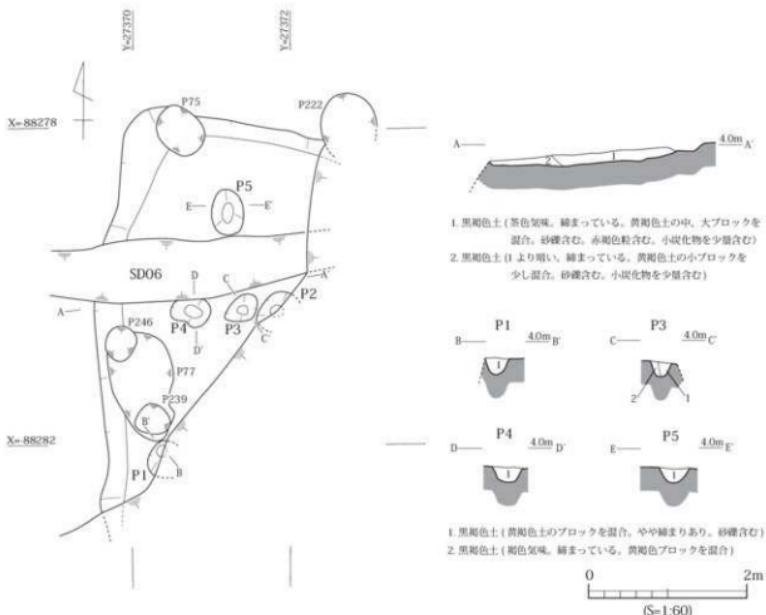
遺構の時期は6世紀後葉から7世紀前葉頃と推測される。



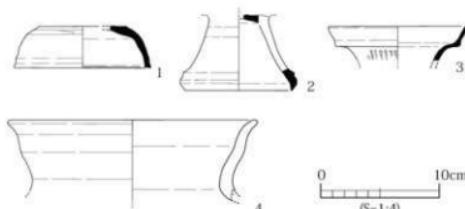
第95図 平ノ前遺跡SK01実測図



第96図 平ノ前遺跡SK12実測図



第97図 平ノ前遺跡SK05実測図



第98図 平ノ前遺跡SK05出土遺物実測図

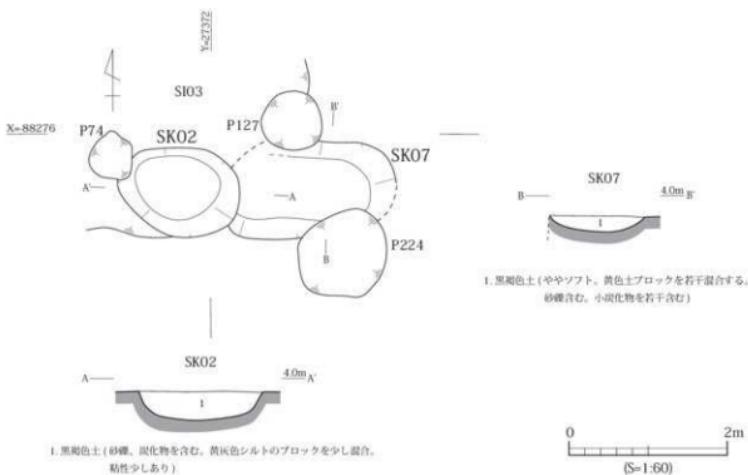
炭溜り

SD11、12、炭溜り1、2、3 (第101図)

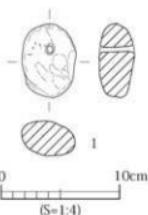
調査区の中央部南より部分で検出された。第VI層中の遺構と考えられる。

SD11は、標高約3.8m、東西方向に長さ約7m、幅約0.5m、深さ約10cmの規模である。SD12は、標高約3.8m、南北方向に長さ約8m、幅約0.5～0.7m、深さ約20cmの規模である。

炭溜り1は標高3.9m、東西約5m、南北約4mの範囲、厚さ約20cmである。炭溜り2は標高3.5m、東西約2.5m、南北約2mの範囲、厚さ約10cmである。炭溜り3は、標高3.4m、東西約7m、南北約3～4mの範囲、厚さ約10cmである。



第99図 平ノ前遺跡 SK02、07 実測図



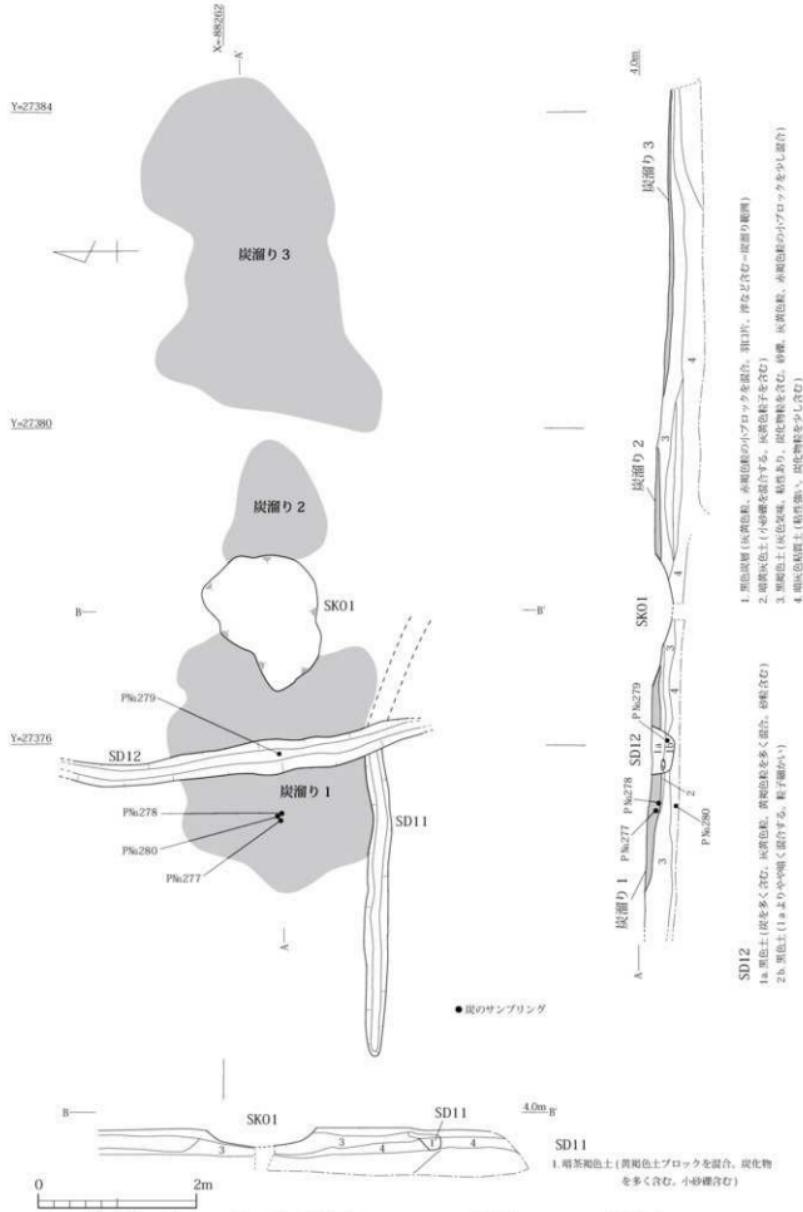
第100図 平ノ前遺跡
SK07 出土遺物実測図

炭溜り1はSD11、SD12に切られており、SD11はSD12に切られている。またSK01により炭溜り1、炭溜り2は切られている。SD11とSD12はほぼ直交している。炭溜り1、炭溜り2、炭溜り3は東西に並ぶ状況になっている。SD11、SD12、炭溜り1、2、3は鍛冶に関する遺構の可能性が考えられる。

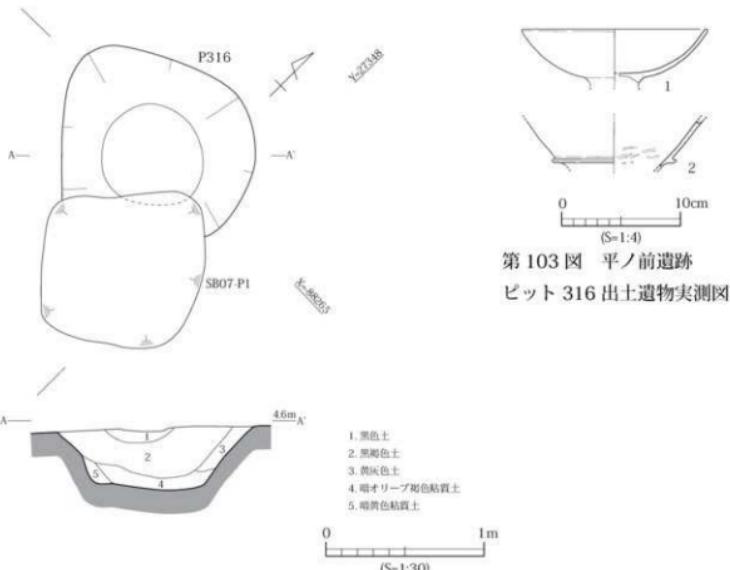
出土遺物（第122図）

第122図4の輪の羽口が炭溜り1から、5が炭溜り1近辺から出土している。8、9は椀形鍛治溝であり、炭溜り3から出土している。

時期については、放射性炭素年代測定（第5章第1節）より炭溜り1は6世紀後葉～7世紀前葉頃と考えられる。D4グリッド部分のSD04が埋められる時期からSK01の時期まで、SD11、12、炭溜り1、2、3の周辺は、鍛冶関連施設の一部もしくはその近辺にあり、時間的な幅も短期間と考えられる。SD11、12、炭溜り1、2、3は炭溜り1の6世紀後葉～7世紀前葉の時期とそれほど離れていないと推測される。
(伊藤智)



第101図 平ノ前遺跡 SD11、12、炭溜り 1・2・3 実測図



第102図 平ノ前遺跡ピット316実測図

ピット

P316 (第102図)

調査区の西側、SB07のP1と重複する部分で検出された。標高5m、直径約1.2mの歪んだ円形であり、深さは約40cmである。遺構の性格は不明である。

出土遺物 (第103図)

1、2は土師器で、1は低脚壺の壺部、2は鼓形器台の受け部である。P316の時期は出土した遺物から古墳時代前期と考えられる。

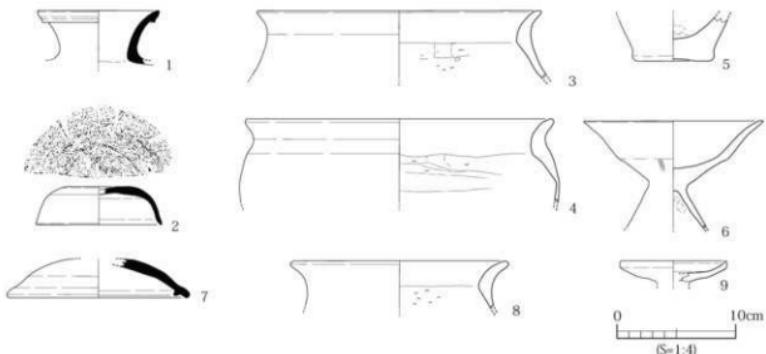
(園山薦)

ピット (第5、6図)

第5、6図は、調査区南部のピット平面図である。多くのピットは、掘立柱建物と同じ検出面で検出されているが、竪穴建物に伴うピットなどいくつかのピットは、掘立柱建物の層位から掘り下げた層で検出された。P58など根固めと考えられる石材が検出されるピットも確認された。

出土遺物 (第104、123図)

第104図はピットから出土した遺物である。1、2、7は須恵器である。1は壺もしくは提瓶の口縁部である。2は壺蓋である。7は天井部につまみが付くと考えられる壺蓋である。3、4、6、8、9は土師器である。6は高壺でSB07の西側で検出されたP177から出土している。9は高壺の壺部と考えられる。5は弥生土器・壺もしくは壺の底部と考えられる。



第104図 平ノ前遺跡ピット出土遺物実測図

第5節 包含層出土遺物

第VII層より下層出土遺物（第105、106図）

第105、106図は第VII層より下層から出土している可能性がある遺物である。

第105図1、2は須恵器・壺蓋である。1は灰白色を呈しており、口縁部の一部が欠けている。天井部と体部境の稜や、口縁端部の段、口径が15cmを超えていることなど陶邑編年MT15・TK10併行期の壺蓋と考えられる。2は破片であるが、内面が摩耗している。3は弥生土器の甌と考えられるが、口縁端部の形状や胎土・焼成など特徴がある土器である。4は土師器の高杯である。風化が激しいが、全面赤彩と考えられる。内面に敲打痕があり、脚端部の一部が欠けているが、ほぼ完形に近い状態である。5、6はミニチュア土器の一部と考えられる。7は土師器の移動式竈である。焚き口の反対側も開口してある二口開口型の竈である。胎土中に金雲母を多く含んでいる。

第106図は木製品である。1は杭である。D7グリッド、第VII層から出土している。角材に加工してあり、転用材の可能性も考えられる。2は板材である。炭化している。

第VI、VII層出土遺物（第107～112図）

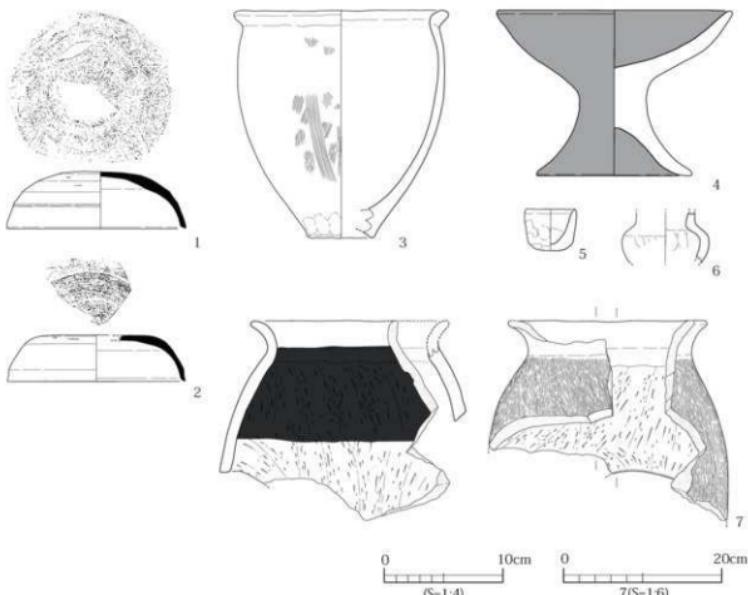
第107図は、第VI層、VII層出土の須恵器である。1～8は壺蓋である。1は天井部にヘラ記号がある。2は天井部に板状圧痕がある壺蓋である。胎土中に直径3mm前後の白色粒子を含み、内面は摩耗している。3は色調が緑灰色を呈しており、胎土中に灰白色の粘土が筋状に混じっている。内面に成形時の当て具痕が認められる。第63図2と同質と考えられる。4は天井部に板状圧痕があり、口縁部の一部が欠けている。内面は摩滅している。5は天井部に板状圧痕があり、口縁部の一部が欠けている。全体的に非常に摩耗している。6は1～5より小径であるが、天井部には板状圧痕があり、口縁端部には段が付けられている。口縁部の一部が欠けている。7、8は6よりもさらに小径になっている。8の天井部は比較的丁寧にヘラケズリしているが、7はヘラケズリをしていない。9はつまみの付く蓋であるが、器種は不明である。天井部には自然釉が付着している。 第123図5はP254出土の頁岩製管玉未成品である。研磨工程の未成品である。

（伊藤智）

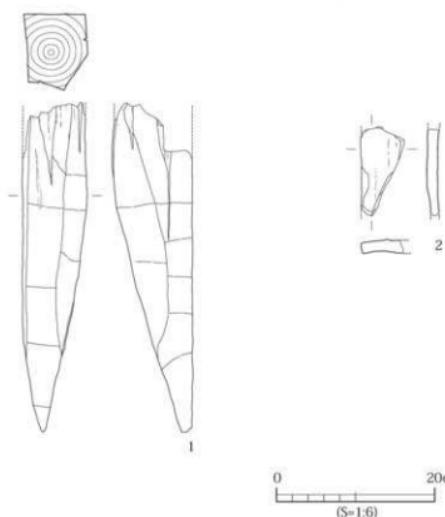
1～6は陶邑編年TK43～209併行期におさまると考えられ、7、8は石見5・6A期、9は石見6B期頃と考えられる。10～13は环身である。10は口縁端部が割れているが、破面を含めて摩耗している。12は高台が付く环であるが、高台部分は摩耗してほとんど残っていない。13は口縁部を欠くが、高台付きの环と考えられる。内面が摩耗している。10は陶邑編年TK43～209併行期頃、11は石見5・6A期、12、13は石見5・6A期以降と考えられる。14～19は高环である。14は低脚有蓋高环であるが、脚部に段が付く形状をとる。3方向1段の透かしがある。15は环底部が平らな形状をとっている。口縁部や脚端部の一部が欠けている。17は脚部のみであり、外に連続刺突文状の文様がある。18、19も脚部のみであり、2方向にスリット状の透かしが施されている。20、21は甌と考えられる。22は長颈甌と考えられる。外面は自然釉が付着しており、体部の一部に別の個体の一部が釉着している。また口縁部は割れているが、破面の一部に自然釉が付着している。焼成前に割れていたか、焼成時に割れたと推測される。23はコップ形の須恵器で、第VIもしくはVII層で出土している。コップ形土器はこのほかSD17の土器溜りB群で3点以上出土しているが、23は調整や自然釉のかかり具合などいすれの例とも異なっている。底部及び底部付近の外面は回転ヘラケズリ痕が残っている。胎土には直径5mm前後の灰白色粒子や黒色物質を含んでいる。また口縁部の一部が欠けているが、その破片がD6グリッドで出土している。24は甌である。破面は赤褐色を呈している。25は提瓶の把手部分と考えられる。

第108図は第VI、VII層から出土した土師器である。1、2は环と考えられる。1、2ともに風化が激しいが、両者ともに平底を指向している。1は口縁部の一部が欠けている。2の外面は赤彩と考えられ、口縁部の一部が欠けている。3は黒色磨研土器である。須恵器环蓋を模倣した环身と考えられる。4は高台の付く环の底部と考えられる。風化が激しく調整等は不明である。5は低脚环と考えられ、外面にはハケ目調整、环部内面には刺突状の工具痕が残る。6～9は高环である。6～8は外面赤彩であり、口縁部や脚端部が欠損するものがある。9は外面のみの赤彩と考えられる。わずかに残っている环底部は敲打痕があり、黒変している。なにかに転用された可能性も考えられる。10は鉢と考えられる。外面赤彩である。風化が激しいが、底部に線刻が残っており木葉痕の可能性が考えられる（図版64）。形状や木葉痕などSD17出土鉢（第78図10）との類似性がみられる。また胎土中に金雲母を含んでおり、火を受けた痕跡がある。11は手捏ね土器である。12は小形の甌もしくは甌と考えられる。破片であるが底部は平底、頸部がわずかにくびれ、口縁端部はやや外反する形状である。13、14は手捏ね土器である。15は土師器の甌としているが、詳細は不明である。16は甌もしくは甌である。古墳時代前～中期の可能性が考えられる。16は口縁部外面が緩く膨らみ、口縁端部が少し外反し、内面に緩い段が付く甌である。SD17出土甌（第74図11）と同一個体の可能性がある。19、20は外面赤彩の甌である。両者とも風化が激しいが20は口縁部内面も赤彩と考えられる。21はやや胴長の形状をもつ甌である。胎土中に灰白粒子を多く含み、また黒色物質、赤褐色物質を含んでいる。22は頸部があまりくびれない形状をもつ甌もしくは甌である。内外面が黒褐色を呈しており、また胎土中には金雲母を多く含んでいる。24は厚手の甌である。灰白色粒子を多く含んでいる。1、2、5～10、18～20は灰白色の土器と考えられる。

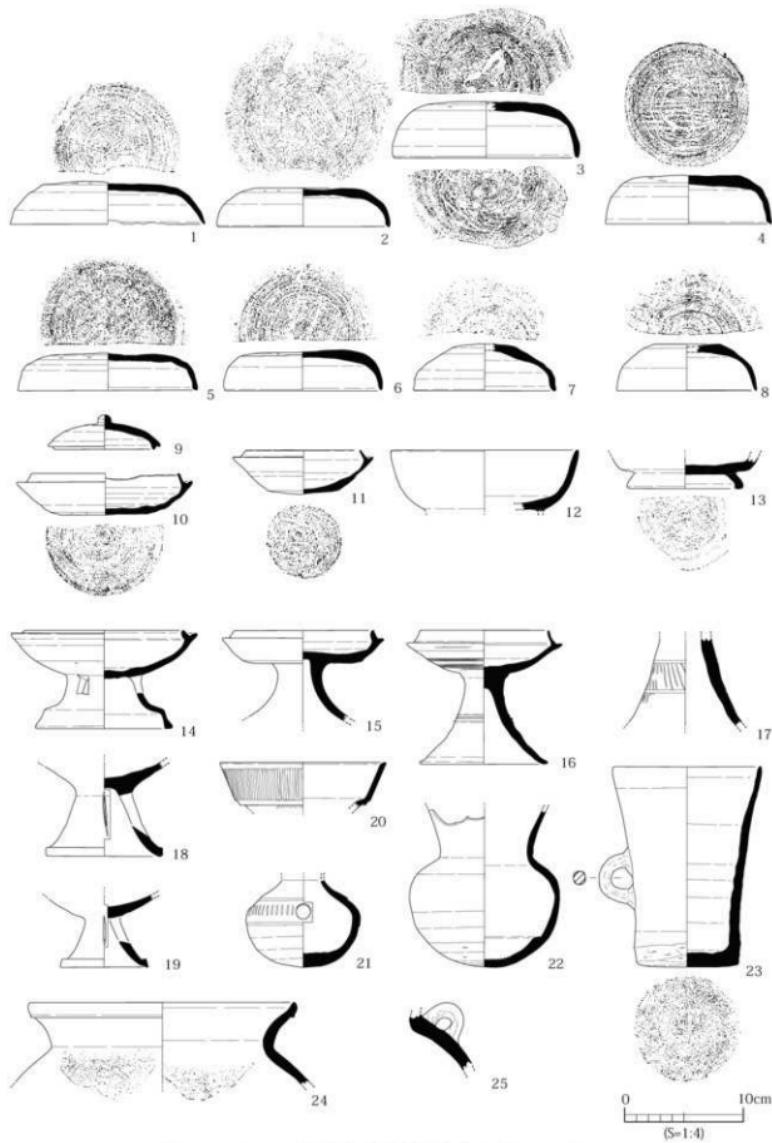
第109図は、第VI層、VII層出土の土師器もしくは土製品である。1～3は甌である。1は口縁端部が外反している。2は少し外傾しながらわずかに外反する口縁をもち、底部横に桟木渡し用の



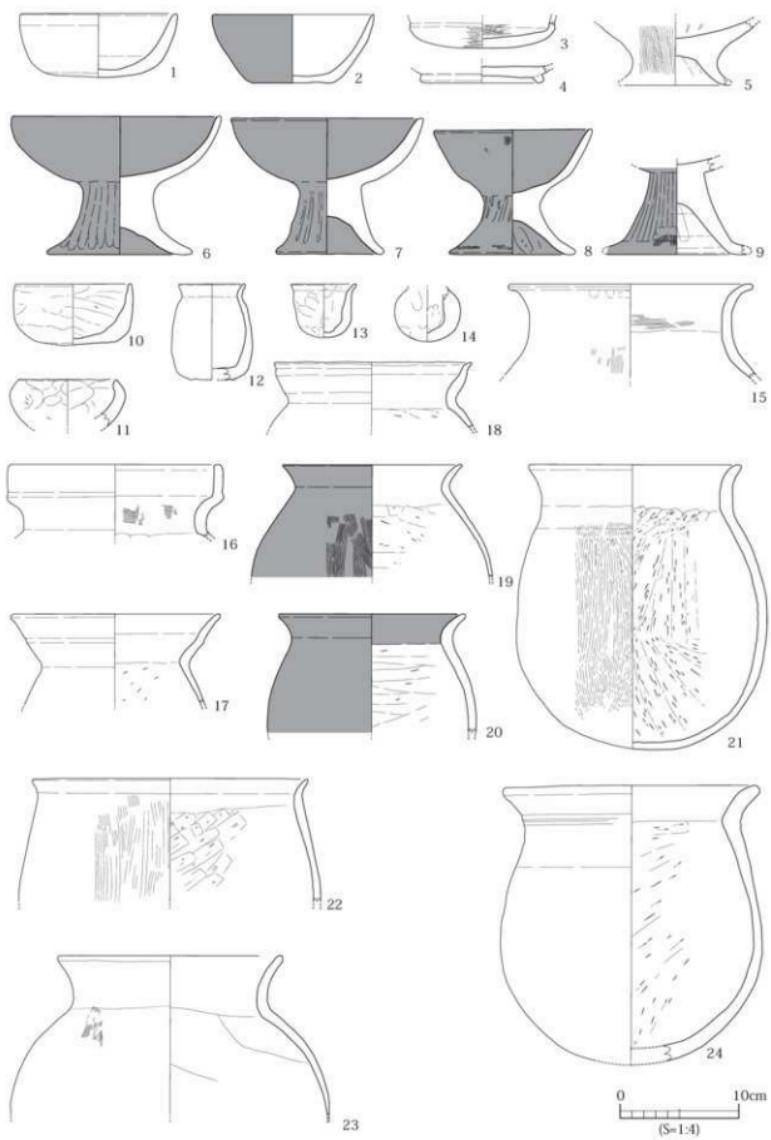
第105図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VII層より下層)(1)



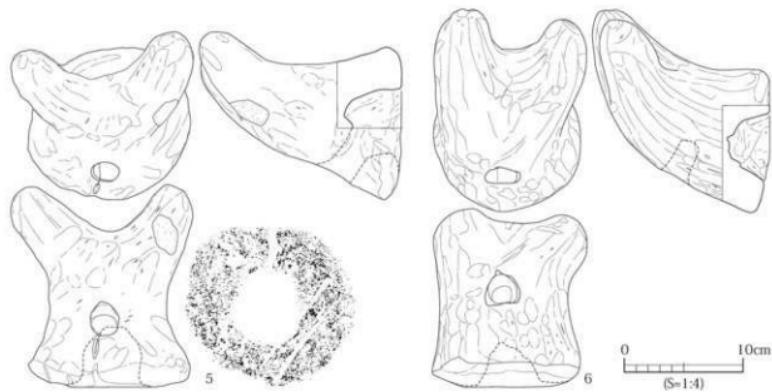
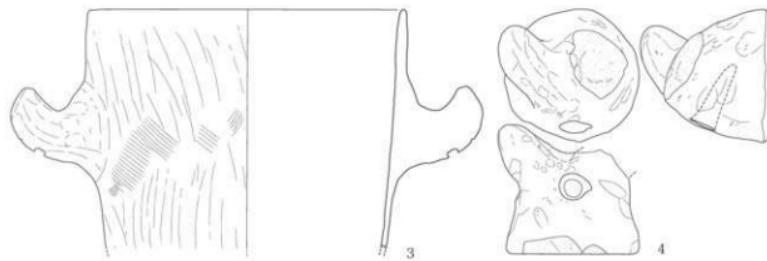
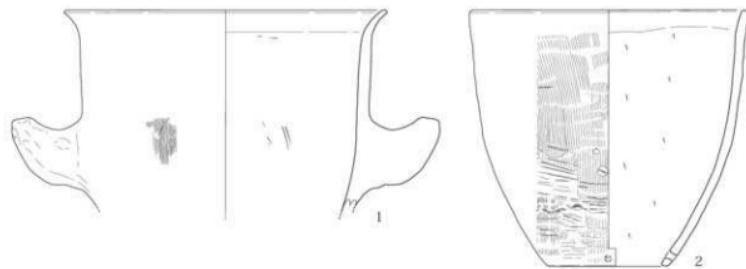
第106図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VII層より下層)(2)



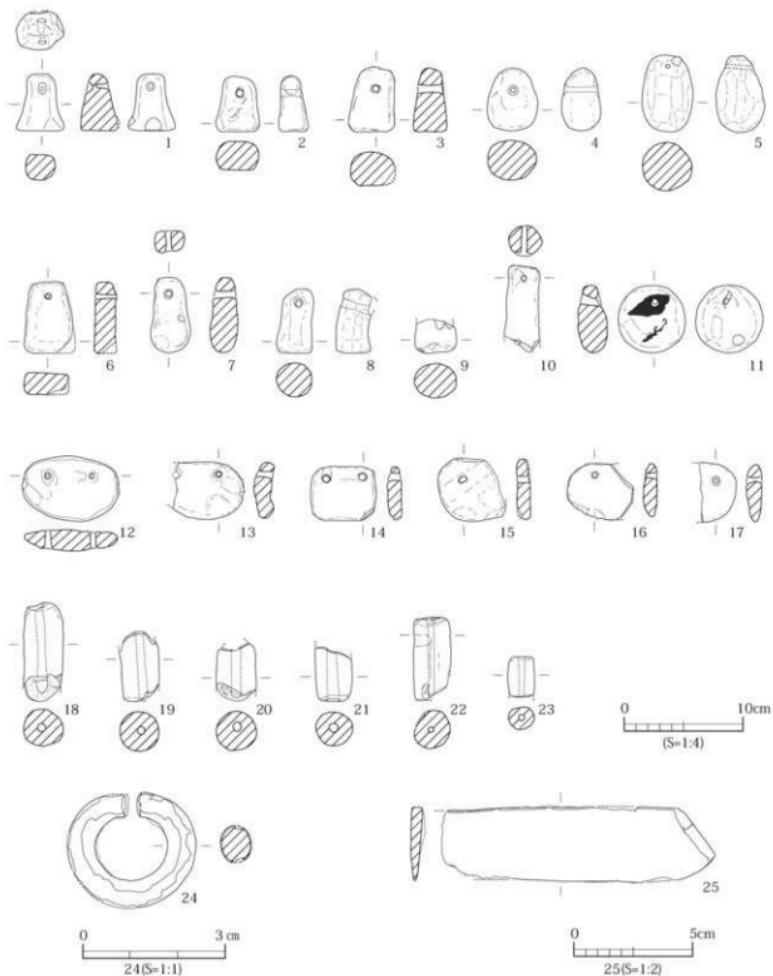
第 107 図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(1)



第108図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(2)

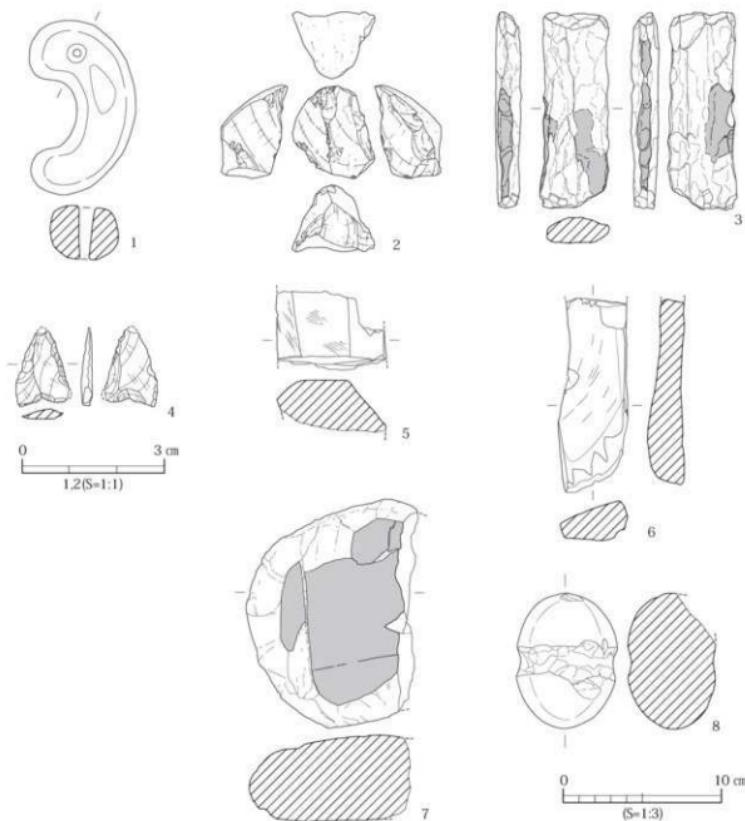


第109図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(3)



第110図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(4)

小円孔をもっている。把手の付かない壺と考えられる。3は垂直に立ち上がる口縁を持ち、牛角状の把手の下側に幅1cm弱の抉りがついている。1～3は灰白色の土器である4～6は土製支脚である。すべて2方向に突起をもち、胴部に非貫通の孔がある。4は全体的に小さく、底部に空洞がない形状である。5、6は底部に空洞があり、5の孔は底部の空洞部分に貫通している。6は灰白色の土器と同じ胎土と考えられる。

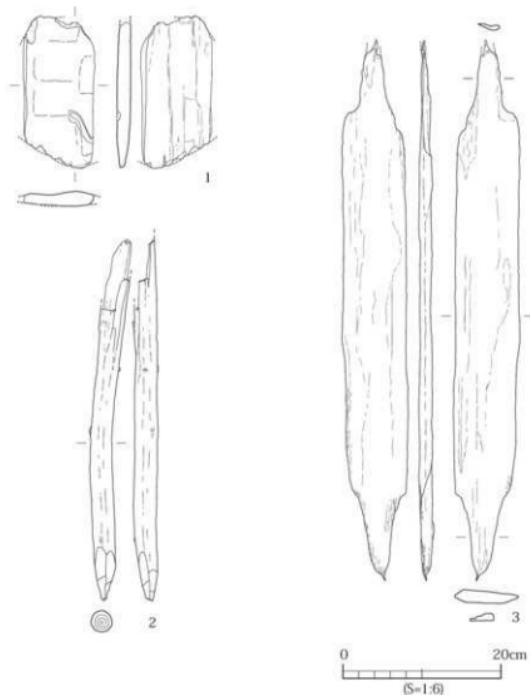


第111図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(5)

第110図は、第VI、VII層出土の土製品及び金属製品である。1～23は土鍤と考えられる土製品である。1～9は分銅形、10は円筒形、11は円盤1孔形、12～17は円盤2孔形、18～23は筒形の土鍤である。2、3、6、7、10、12～15、19、23は灰白色の土器と同じような胎土の土鍤である。24は耳環である。芯は銅製であり表面は銀製と考えられる。25は鉄製の鍤と考えられる。

第111図は第VI、VII層出土の石製品である。1は碧玉製の勾玉である。2は緑色凝灰岩製の残核である。3は頁岩製と考えられる砥石である。主に側縁部に使用痕がみられ、玉生産に使用された内磨砥石と考えられる。4は安山岩製の石鍤である。5は流紋岩製の砥石である。破損部分以外の5面使用している。6は珪化木製の砥石である。小口面以外の4面使用している。7は凝灰岩製の石皿である。8はデイサイト製の石鍤である。

第112図は第VI、VII層出土出の木製品である。1は板状の木製品である。2は杭である。3は板状の木製品である。



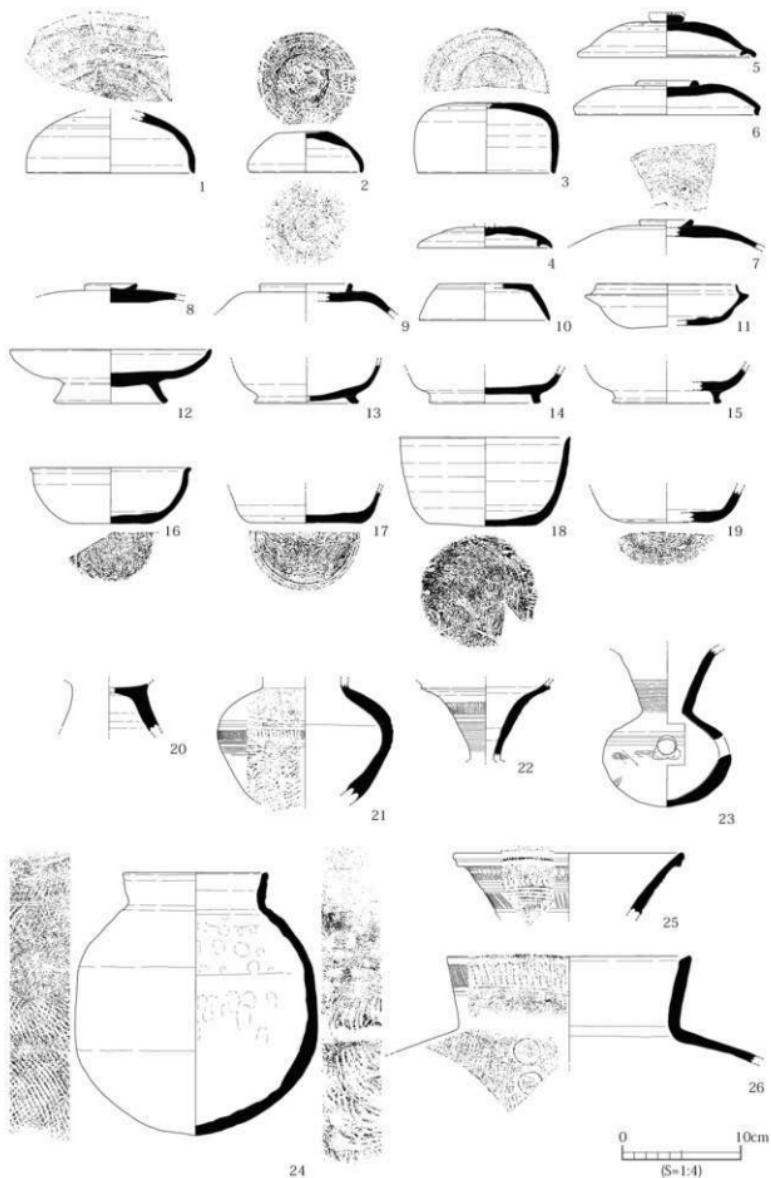
第112図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第VI、VII層)(6)

第IV～VI、IX層出土遺物(第113～115図)

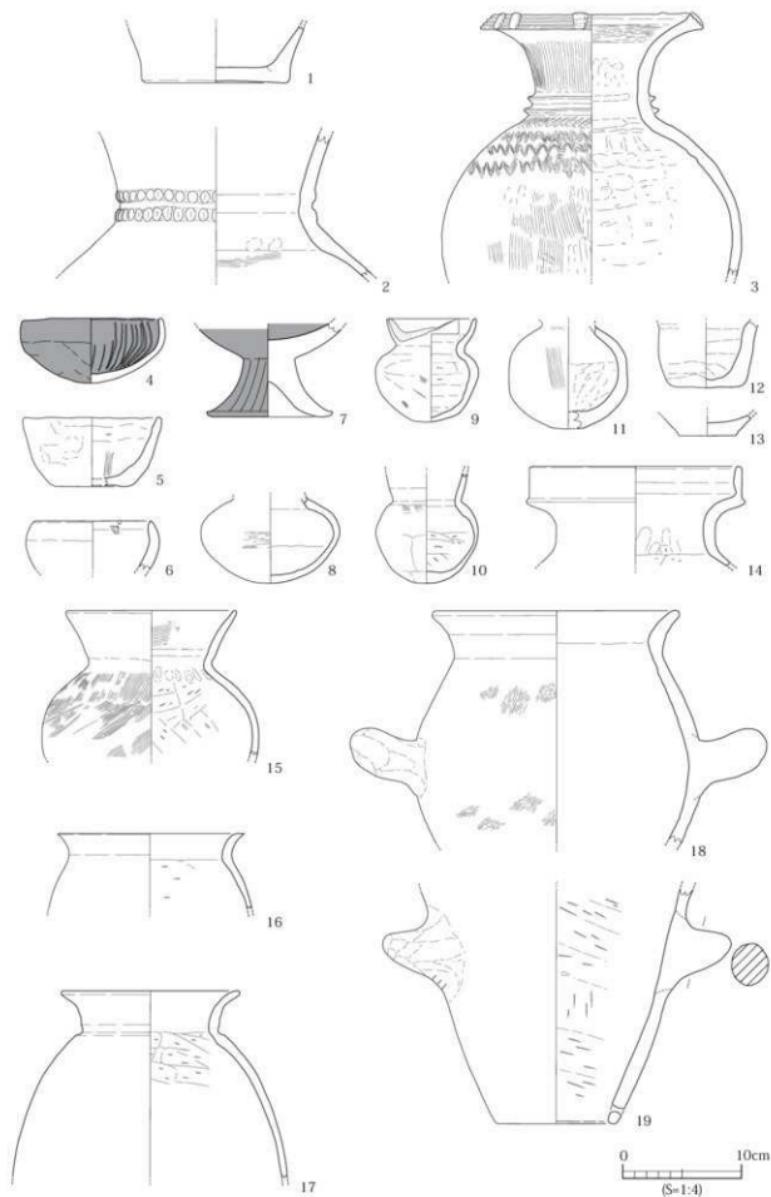
第113図は第IV～VI層、IX層出土の須恵器である。1～10は環もしくはその他の蓋である。1は内面天井部が摩耗している。2は内面に一文字状のヘラ記号が施されている。口縁端部が摩耗しており、口縁部が一部欠けている。3も口縁部の一部が欠損する。4、5は天井部につまみが付き口縁部にかえりが付く蓋である。4はつまみが完全に失われており、5は残存している。また両者とも内面が摩耗している。5は口縁部の一部が欠損する。6～8は輪状つまみの蓋である。7はつまみの横に「十」字状の陰刻がある。一文字状の工具を直交させて2度押しあてたような痕跡である。内面はかなり摩耗している。9は大きめの輪状つまみが付く蓋である。外面には緑色から灰色の自然釉がしっかりと付着しており、断面は淡赤褐色を呈している。胎土中には1mm弱の灰白粒子を少し含んでいるが、きめ細かい。内面は摩耗しており、輪状つまみの一部や口縁部の一部欠けている。10は器種不明の蓋であり、外面と口縁部内面の一部に緑色の自然釉が付着している。また外面の天井部と体部の境には一条の沈線状落ち込みがある。12は石見6A期、6は石見7期と考えられる。11～19は環もしくはその他の機種の身と考えられる。11の外面は自然釉が付着している。口縁部の一部が小さく欠けている。12は高台の付く環で、内面から口縁部にかけて、脚端部など激し

く摩耗している。また脚端部のかけた部分も摩耗している。13～15も高台の付く壺と考えられる。13は脚端部が摩耗している。15の内面には漆と考えられる黒褐色物質が付着している。16は無高台の壺である。直径7cm前後の平らな底部で、体部は丸みがあり内湾しながら立ち上がり口縁端部が少し外反する。形状は7世紀後半以降の出雲地域で出土する須恵器・壺身に似ている。底部には板状の木目痕のような痕跡が残っており、回転台からの切り離し技法は不明である。17は壺と考えられるが、底部の縁に粘土がはがれたような痕跡があり高台が付いていた可能性がある。底部切り離しは回転糸切りである。18は平底で体部が少し丸みがある無高台の壺と考えられる。底部切り離しは回転糸切りである。口縁部の一部が欠損する。19は小片であるが、壺身と考えられる。内面は摩耗している。12は出雲Ⅱ期(±石見6C期)、16は出雲Ⅱ～Ⅲ期(±石見6C～8期)、17は石見9B期以降頃と考えられる。20は高壺の脚部と考えられる。脚端部側は欠けており、また内面は摩耗している。21は壺もしくは甌の可能性も考えられる。22は甌の一部と考えられる。23は甌である。口縁部は欠けている。24は壺である。外面にはタカキと横方向のカギ目痕が残り、内面の下範囲はタカキ、上半には指頭圧痕が残っている。口縁部は垂直に短く立ち上がっている。体部を横から見た断面の形状は完全な曲線状ではなく、体部の途中に稜をもつ多角形状になっている。口縁部が少し欠けているがほぼ完形である。25は甌の口縁部である。26は直口気味の口縁部をもつ甌の可能性が考えられる。体部外面に直径2cm前後の粘土がはがれたような痕跡が2箇所並んでおり把手などが付いていた可能性がある。しっかりと焼き締まっている。このうち、1、2、4、5、12、17については内面の摩耗が進んでいることから、転用甌の可能性が考えられる。

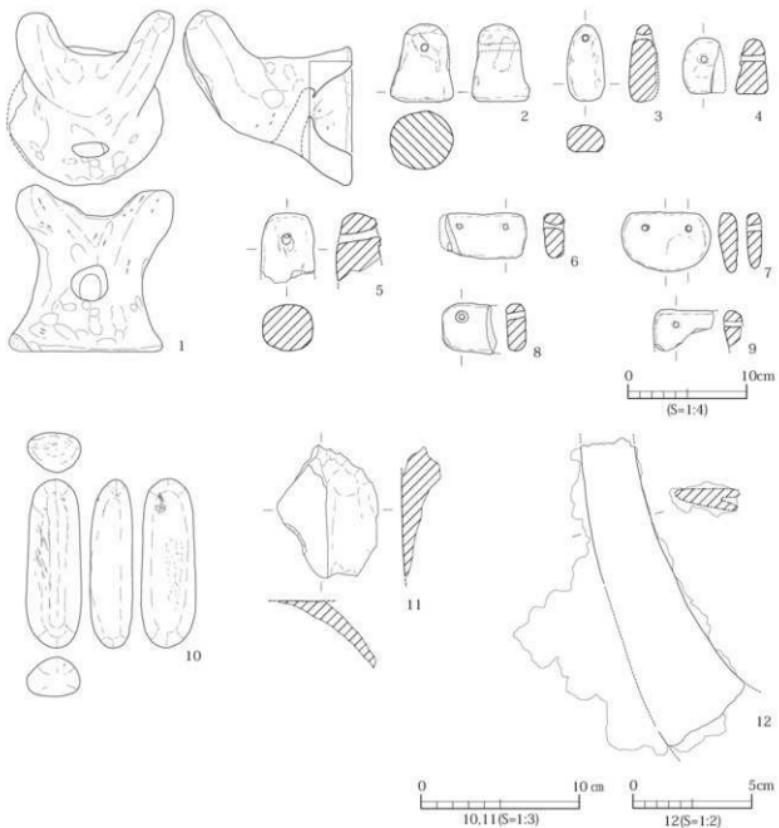
第114図は第IV～VI層、IX層出土の弥生土器、土師器である。1～3は弥生土器、4～19は土師器である。1は甌と考えられる。2は直口壺の頸部で2条の指頭圧痕文帯が付いている。第Ⅲ様式頃と考えられる。3は壺である。口縁部には四線文の上に浮文が施されている。頸部外面には縱方向のハケ目、頸部と体部の境には2条の突帯が貼り付けてあり、その下に貝殻によると考えられる刺突文、3条の波状文が施されている。口縁部の内面は横方向のハケ目であり、体部には指頭圧痕、ヨコナデとなっている。また口縁部の浮文は風化が激しいが、貝殻の縁を押しあてたような文様が施されている可能性がある。4は壺である。内面に暗文が施されており土器の色調は橙色である。同じ色調の甌15と同一箇所から出土している。5は壺で口縁部が一部欠けている。6は色調が灰白色を呈しており、炉などで高温にさらされた可能性が考えられる。口縁部内面にガラス滓の様な物質が付着しており、坩堝の可能性が考えられる。7は赤彩の高壺である。8は直口壺の体部と考えられる。9～11は小形丸底壺である。9の口縁部は緩く内湾し緩い稜がある。口縁部が欠けており、体部の一部も表面が剥落している。10は口縁部から体部にかけて欠けている。12は時期、器種は不明である。口縁部側は欠損し、また摩耗している。内面は黒変している。13は全体が摩耗しているが、平安時代以降の壺もしくは皿の可能性がある。14は直口気味の複合口縁の甌である。15は少し外反しながら外傾する単純口縁の甌である。口縁部の一部が欠けており、また胴部最大径部分より少し下がったところでほぼ水平に底部が欠落する。16は甌であり色調が赤褐色を呈している。17は頸部と体部の境に小さな段が付いた状態になっており、頸部から外反する口縁部への立ち上がりが若干直線状になっている形態をとる。18、19は甌である。18は把手が付いている部分で胴部最大径をとり、頸部にかけて内傾しながら立ち上がり頸部がくびれ、口縁部は外反する形状であり平ノ前遺跡で出土する甌の中では珍しい形狀である。風化が激しいが未使用の可能性



第113図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第IV-VII、IX層)(1)



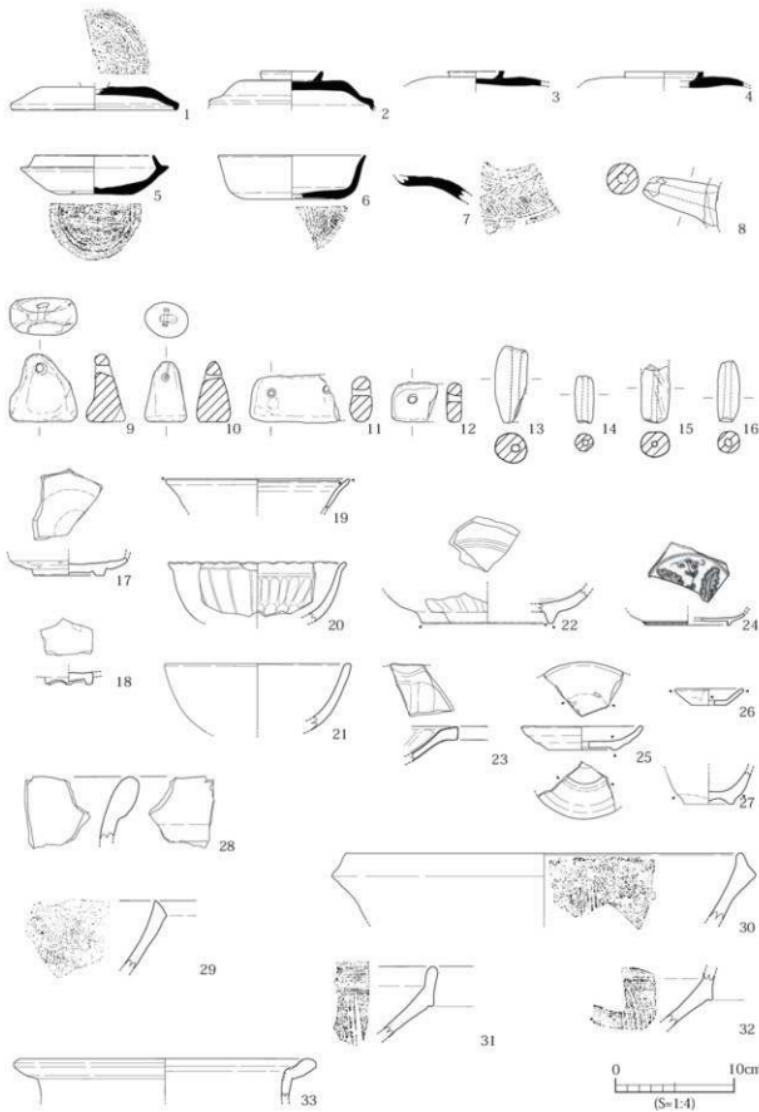
第114図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第IV-VII、IX層)(2)



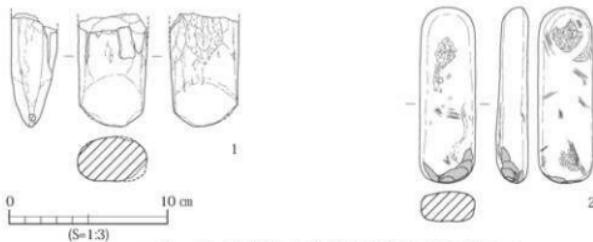
第115図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第IV-VII、IX層)(3)

がある。口縁部が一部欠けている。19はやや小さめの把手の瓶である。5、7、18は灰白色の土器と考えられる。グリッドラインFより東側で出土する遺物(5、7、19など)の中には土器の表面に黒褐色物質が付着しているものもいくつか含まれており、埋蔵環境の影響などで付着したことが推測される。

第115図は第IV～VI、IX層出土の土製品、石製品、鉄製品である。1は土製支脚である。2方向に突起をもち、胴部の穿孔は未貫通であるが、底部の空洞には貫通している。2～9は土錘である。2～5は分銅形の土錘である。6～9は2孔ある円盤形もしくは長方形形の土錘と考えられる。10はデイサイト製の石器・敲石である。11はデイサイト製の砥石の破片である。12は鉄製品・鍔先の一部と考えられる。



第116図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第Ⅱ層)(1)



第117図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(第II層)(2)

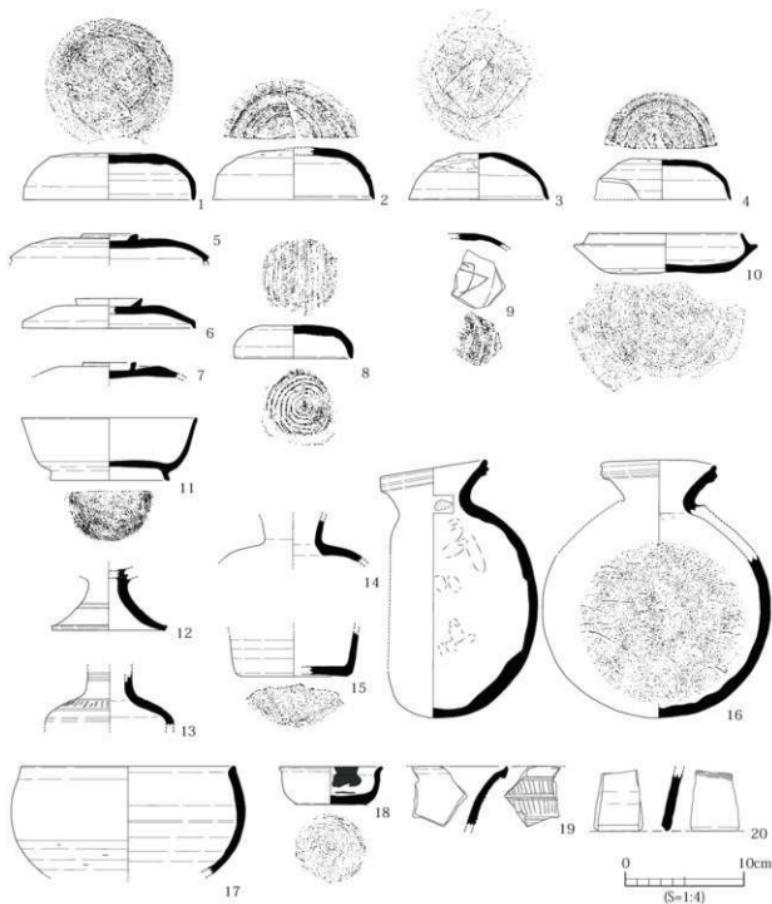
第II層出土遺物(第116~117図)

第116図は、第II層から出土した遺物である。1~7は須恵器である。1は天井部につまみが付く坏蓋であり天井部は回転糸切り痕が残っている。つまみは失われている。2は輪状つまみの付く坏蓋である。天井部は糸切りと考えられる。内面は摩耗している。3、4は輪状つまみの付く坏蓋である。3の内面は摩耗しており、また部分的に薄く黒色に変色している。2、3は転用硯の可能性がある。1は石見9A期前後と考えられる。2は石見9B期と考えられる。5は坏身である。口縁端部や受け部の端部に敲打痕がある。6は底部が回転糸切りの無高台坏身である。石見9B期と考えられる。7は壺の肩部と考えられる。外面に文様が施されている。8は注口土器の注口部分である。9~16は土製品の土鍤である。9、10は分銅形、11、12は長方形2孔形、13~16は小型な円筒形である。12は孔から上端にかけての表面に紐の痕跡が残っている。10、16は灰白色の土器と同じ胎土である。17~32は陶磁器である。17は中国製の白磁・碗もしくは皿と考えられる。内面見込はリング状に釉がはぎとられている。底部は削り出し高台で露胎である。18は中国製白磁の皿D群である。19は中国製白磁の碗もしくは皿である。大宰府分類の碗もしくは皿IX類である。20は中国龍泉窯系青磁の碗である。口縁端部には輪花、外面には線刻陰文花、内面には連弁文もしくは菊花文が施されている。21は中国龍泉窯系青磁の碗である。22は中国龍泉窯系青磁の坏である。大宰府分類の青磁の环III類である。23は中国龍泉窯系青磁の盤である。口縁部上面に陰刻による2条の波状文、内面に連弁文が施されている。24は青花の皿である。端反りの皿B2群と考えられる。25は瀬戸美濃系の丸皿である。26は陶器の灰釉小皿である。口縁端部から内面は全面施釉、外表面は露胎であるが、部分的に釉薬が垂れ下がっている。底部は糸切りである。27は肥前系唐津の小杯である。高台部分から底部は露胎である。28は備前系陶器の甕の口縁部である。IV B期と考えられる。29は陶器の擂鉢である。30~32は備前系陶器の擂鉢である。33は瓦質土器の鍋である。

第117図は第II層出土の石器である。1は塩基性片岩製の磨製石斧である。刃部側のみで基部側は欠損している。敲打痕があり二次利用された可能性がある。2は砂岩製の磨石で、敲打痕がある。

出土層位不明遺物(第118~121図)

第118図は出土層位不明の須恵器である。1~4は坏蓋である。2は体部と口縁部の壠に段がつき、口縁端部に段がついている。また口縁部が一部欠けている。3は外面天井部は、不定方向の粗いヘラケズリが施されている。口縁部が一部欠けている。出土位置はD3グリッド、出土層位はVI~VII

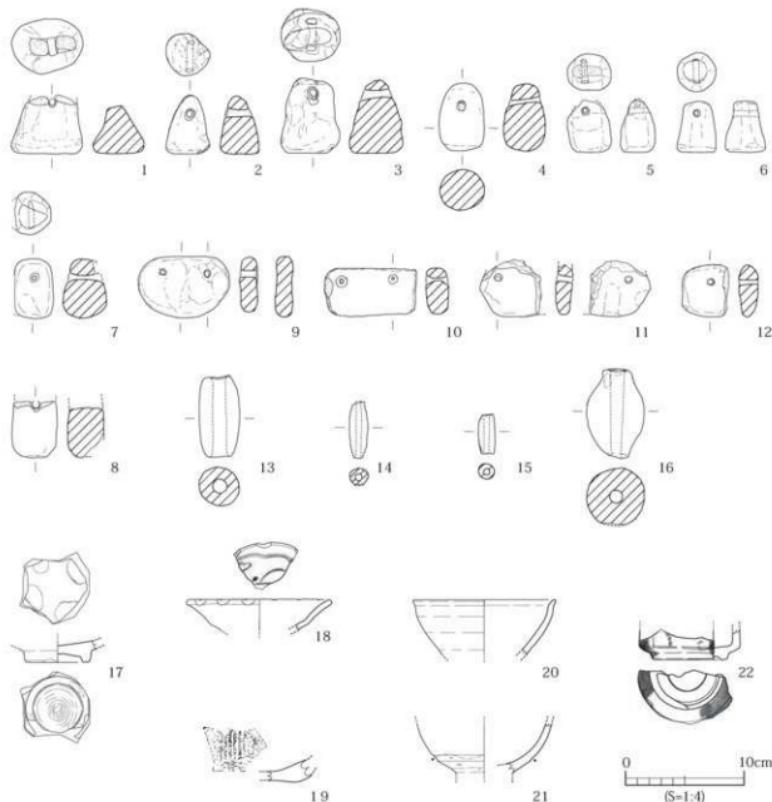


第118図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(出土層位不明)(1)

層と考えられる。質感に弾力性がなくバリバリとした感があり、SD17出土の須恵器壺蓋(第70図5、7)と同質と推測される。4は天井部に板状圧痕があり、口縁部が一部欠けている。内面が摩耗している。5は輪状つまみが付く蓋であり、つまみが欠けている。6は輪状つまみがつく蓋である。内面が摩耗している。7は輪状つまみがつく蓋である。内面は非常に摩耗している。6、7は転用硯の可能性がある。8は壺などの蓋と考えられる。天井部外面には板状圧痕、内面には同心円状のあて具痕が残っている。9は壺蓋の破片である。天井部内面にヘラ記号もしくはヘラ状工具による線刻が施されている。1、2は陶邑編年TK43～TK209併行期と考えられる。10は壊身である。底部外面に「×」印のヘラ記号が施されている。内面から口縁部にかけて摩耗している。11は高台の付く壺である。口縁部が欠けている。12は高壺の脚部であり脚端部が欠けている。13は陶邑



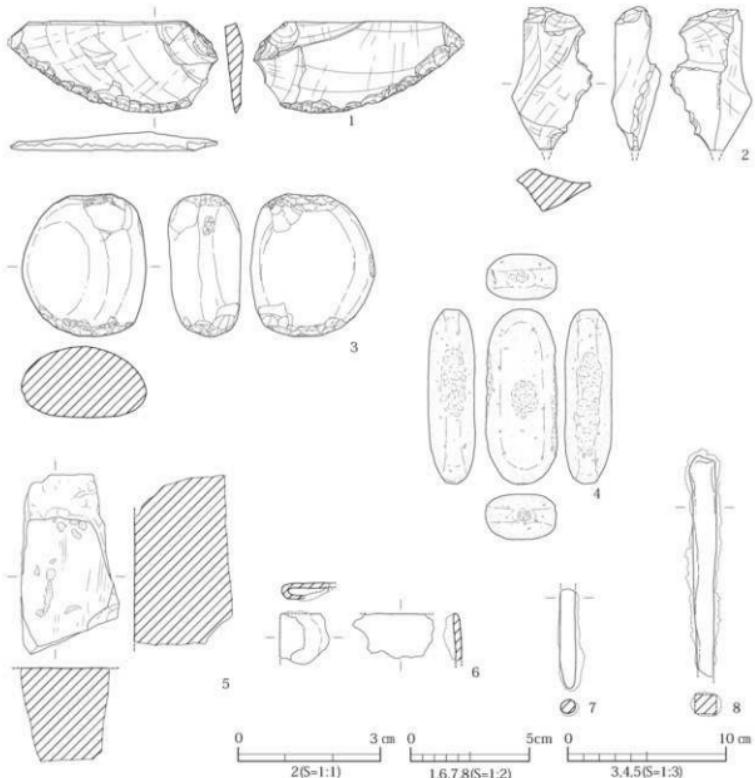
第119図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(出土層位不明)(2)



第120図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(出土層位不明)(3)

編年TK43～TK209併行期、11は石見7～8期と考えられる。13は蓋もしくは罐であり、肩部に文様が施されている。また内面及び破面に漆が付着している。14は壺と考えられる。内面に漆が付着している。15は器種不明の底部である。16は提瓶である。把手の痕跡が口縁部の両側に残っている。また内面には縦横の格子状文様が付いており、製作時に布などをあてていた痕跡と考えられる。17は环もしくは鉢と考えられる。外面過半はヘラケズリが施されている。18は灯明皿形土器である。底部は回転糸切りで、口縁部内面の一部に黒色物質が付着しており墨痕と考えられる。また底部に黒変している部分があり墨書きと考えられる。19は外面に文様が施された甕などの口縁部と考えられる。20は器種不明の瓦質風の土器である。甑の底部の可能性が考えられる。

第119図は出土層位不明の上器である。1は縄文土器の深鉢である。外面の下半は擬縄文が施されている。縄文時代後期である。2は弥生土器の甕の口縁部である。V-2～3様式と考えられる。3は弥生土器の鼓形器台の脚部である。V-4様式と考えられる。4は頸部に突帯の付く壺と考え



第121図 平ノ前遺跡出土遺物実測図(出土層位不明)(4)

られる。5は小片であるが、小型特殊器台の口縁部の一部の可能性がある。外面にスタンプ状の竹管文が施されている。6は甌などの頸部と考えられるが時期など詳細は不明である。色調は橙色であり、また外面にスタンプ状の竹管文が最低2つは並んでいたと考えられる。7～17は土師器である。7は古墳時代前期の壺である。8は鼓形器台の脚部である。古墳時代前期である。9は壺である。風化が激しいが、底部外面に木葉痕の痕跡が残っている。10は壺と考えられる。11は須恵器模倣土器と考えられる。風化が激しいが黒色土器であった可能性も考えられる。12は高壺の口縁部である。有稜高壺である。13は高壺の脚部であり、外面及び内面が黒変している。14は土師器・高壺である。色調が橙色を呈している。口縁部や脚端部が欠けている。底部内面に黒褐色物質が付着しており、灯明皿的な再利用があったと考えられる。15、16は土師器・高壺である。小型であり灰白色の土器と考えられる。17は高壺もしくは低脚壺と考えられる。脚部内面は削り出しと考えられる。18は土師器もしくは軟質の須恵器で壺などの口縁部の可能性が考えられる。内面に漆が付着している。19・20は土師器の甌である。19は単純口縁であるが、口縁端部が内側に

若干肉厚になっている。また非常に焼き締まっており固くなっている。20は赤褐色を呈している。21は土製支脚である。2方向の突起があり、孔は貫通していない。底部に空洞がある。22は土製支脚と考えられる。2方向の突起の反対側にひれ状の突起をもつタイプと考えられる。23は土師器环と考えられる。24は高台の付く环と考えられる。23,24は平安時代以降の土器と考えられる。

第120図は出土層位不明の土製品及び陶磁器である。1～16は土錘と考えられる。1～7は分銅形、9～12は円盤もしくは長方形の2孔形土錘、13～15は円筒形の土錘である。8は円筒形で胸部に一箇所穿孔される。6,7,9,11～13は灰白色の土器と同じ胎土と考えられる。16は褐色鉄軸がかかるており、近世以降の錘と考えられる。17は朝鮮陶器の皿である。16世紀頃と考えられる。18は中国製青磁の棱花皿である。19は備前系陶器の擂鉢である。20は瀬戸美濃系陶器の天目碗である。21は肥前系唐津の碗である。22は瀬戸美濃系陶器の筒形鉢である。

第121図は出土層位不明の石製品、鉄製品である。1は安山岩製スクレイバーである。一部欠損している。2は黒曜石製石器である。鑽状の石器の可能性が考えられる。3は凝灰岩製敲石である。4は安山岩製敲石である。5は流紋岩製砥石である。6は鉄製品の鎌もしくは摘鎌と考えられる。7、8は棒状鉄製品である。

平ノ前遺跡出土生産関係遺物（鍛冶）

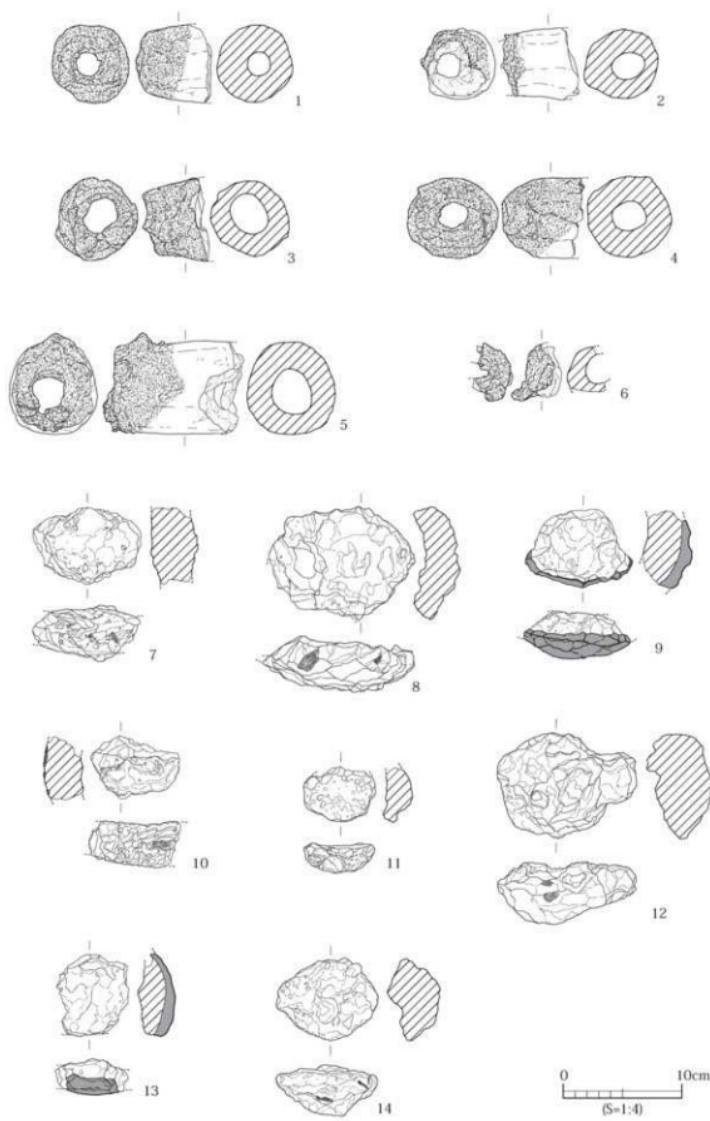
第122図は鍛冶関係遺物である。1～6は鞴の羽口、7～14は椀形鍛治津である。

1～3、7は先述したとおり、SD04のD4グリッドで出土している。それ以外の羽口、津も出土層位に違いがあるが、D4グリッド付近に集中している。出土層位は、羽口の6、鍛治津10～14は第VI層に対応する層から出土している。SD04が埋められた以降、上層のSD11・12が埋没するまでの時間は数十年単位だったと推測される。その間D4グリッドの近い場所で、鍛冶が行われていたと考えられる。自然堆積もあったと考えられるが、鍛冶を行いながら人為的な地形改変も行われ、その後の大形掘立柱建物（SBO4）の設営時に大規模な整地が行われて鍛冶遺構が失われた可能性が推測される。

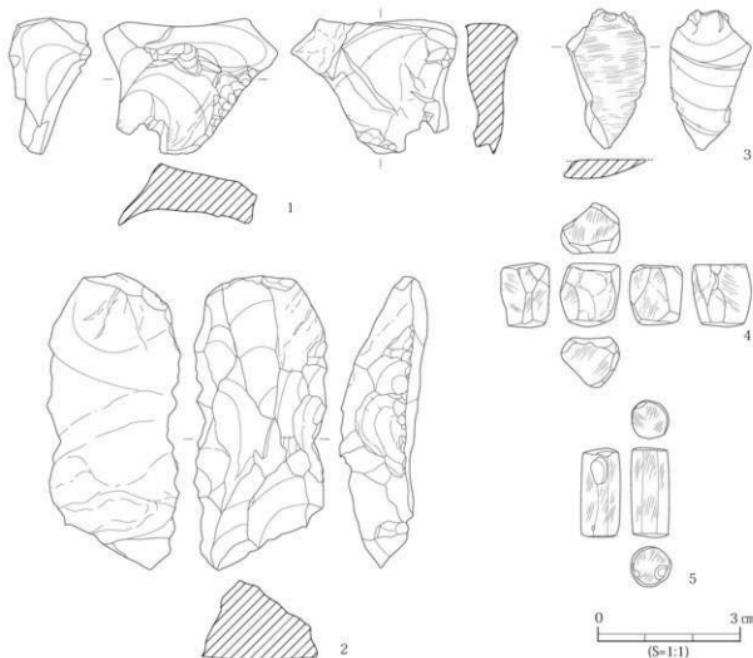
平ノ前遺跡出土生産関係遺物（玉作）（第123、124図）

第123図は遺構出土の玉作関係遺物であり、1～4はSD17、5はピット出土遺物で前述したとおりである。

第124図は、遺物包含層から出土した玉生産関係の遺物である。1は第VI層出土の碧玉製の剥片である。素材剥片になり得る剥片と考えられる。2は第I層出土の碧玉製の管玉未製品・角柱状加工品である。3は第II層出土の碧玉製の剥片・素材剥片である。製作時に自然面の不要な部分を取り除いた剥片と考えられる。4は第I層出土の碧玉製の管玉未製品・角柱状加工品である。原石が小さかったため次の工程に進めなかったものと考えられる。5は第II層出土の碧玉製の剥片・素材剥片である。6は第IX層出土の碧玉製の管玉未製品・角柱状加工品である。欠損品と考えられる。7は石英片岩（紅縞片岩）製の内磨砥石である。また、表のみの掲載であるが、玉作に関係するとみられる碧玉製の剥片が出土している（第3表石1）。（伊藤智）



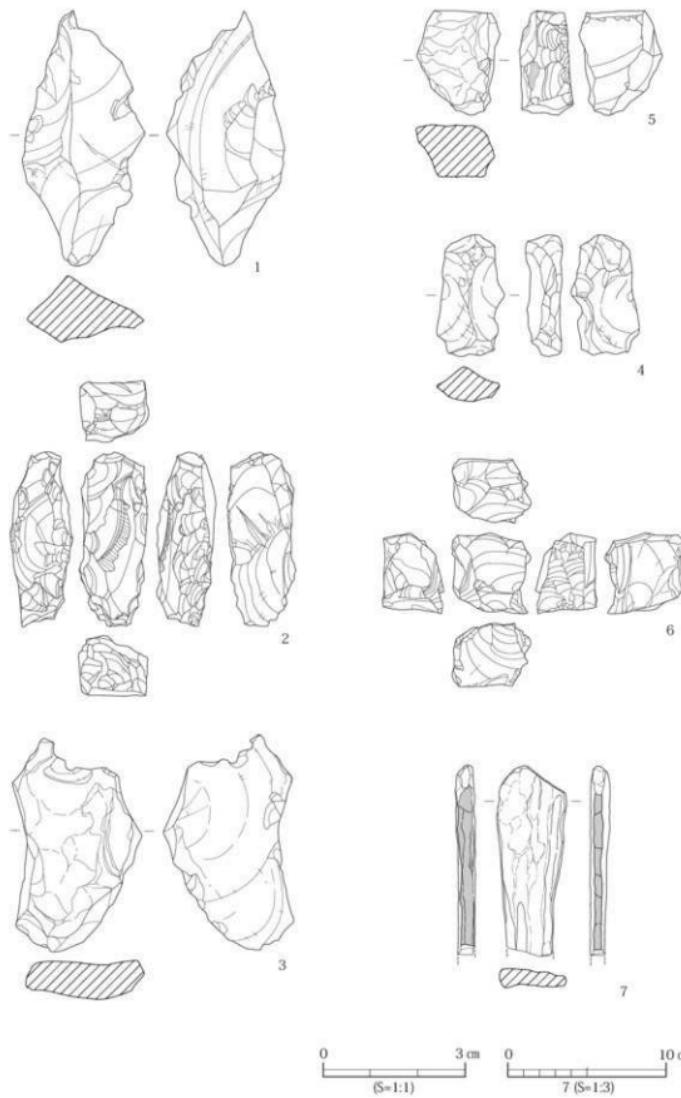
第122図 平ノ前遺跡出土生産関係遺物実測図(鍛冶)



第123図 平ノ前遺跡出土生産関係遺物実測図(玉作)(1)

【註】

- (1) SD17出土の須恵器環(第62図-8)と同種。口縁端と立ち上がりに同様の打ち欠きが見られる。
- (2) 古志本郷遺跡K II区SD07出土の141-1・2に類似する。島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡VI-K区の調査一斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVII』
- (3) 尾馬あかね・李 貞・中塙 武・仁木 聰 2019『島根県出土材の酸素同位体比年輪年代測定法による年代決定』『古代文化研究』27 島根県古代文化センター
- (4) 中村唯史氏のご教示による。旧静間川が何度も流れを変えながら堆積した地山は、縄文時代後・晩期の土器片を若干包含することから、縄文時代晩期には形成されたものと考えられる。
- (5) 中尾H遺跡出土の線刻石(第102図2)は、枝線をもつ2本の線が平行するように刻まれている。またその年代は縄文時代後期と推定されている。島根県教育委員会2003『門遺跡、高原遺跡I区、中尾H遺跡』
- (6) 器形的に類似するものに、「重留遺跡第3地点」出土の壺(財団法人北九州市芸術文化振興財団2001)、「大谷尻遺跡」SK1016出土の壺(徳島県埋蔵文化財調査年報1995)がある。「重留遺跡第3地点」出土の壺は中期末葉に比定されている。
- (7) 米田克彦氏のご教示による。その底面の大きさから、鎌や劍などの大型品用と推定される。
- (8) 中村唯史氏のご教示による。



第124図 平ノ前遺跡出土生産関係遺物実測図(玉作)(2)

- (9) 第 42 図 F11 に類似する。島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2009 『めんぐろ古墳の研究』
- (10) 第 13 図 7 に類似する。島根県教育委員会 1986 『岡田薬師古墳 - 池北台第二団地発掘調査報告』
- (11) 26 図 311 富来町教育委員会 1999 『高田遺跡 - 能登における古墳時代祭祀遺構等の調査 -』
- (12) 註 7 と同じ
- (13) 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 - 大東式の再検討 -」『島根考古学会誌』第 8 集 島根考古学会
- (14) 島根県教育委員会 2004 『史跡出雲国府跡 -2-』
- (15) 松尾充晶 2015 「古墳時代の水利と祭祀」『古代文化研究』23 島根県古代文化センター
- (16) 第 103 図 76 ~ 85 島根県教育委員会 2007 『浜寄・地方遺跡 -1H・II・2B・2D・2E 各区の調査 -』
- (17) 山持遺跡 6 区では掘立柱建物の基礎として柱と組み合う横木と報告されている。島根県教育委員会 2012 「山持遺跡 Vol. 8 (6, 7 区) 『国道 431 号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10』

【参考文献】

- 広江耕史 1996 「山陰の煮炊具 - 出雲・石見 -」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東 4 煮炊具』古代の土器研究
会第 4 回シンポジウム資料
- 広瀬和雄 1988 「3. 墓と水路」『弥生文化の研究 2 生業』金間惣一・佐原真編 雄山閣
- 白石聰 2008 「古墳時代今治平野における炊事形態の受容と普及 - 造り付けカマドと懐形土器の検討を通じて -」『地域・
文化の考古学 - 下條信行先生退任記念論文集 -』下條信行先生退任記念事業会編
- 島根県八雲村教育委員会 2001 『前田遺跡（第 II 調査区）』
- 出雲市教育委員会 2016 『杉沢遺跡・杉沢 II 遺跡・杉沢横穴墓群』出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調
査報告書
- 大田市教育委員会 2017 『鋼淵遺跡』一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事・和江地区漁港関連道整備工事に伴う埋蔵文
化財発掘調査報告書
- 島根県教育委員会 1999 『姫原西遺跡』一般国道出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1

第2表 平ノ前遺跡 出土土器観察表

Fig 部番 番号	形態 種類	出土 場所	出土層位	種別	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調		備考
									外: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	
11 1 28	S101	直底器	环(蓋)	14.8					0.2mm以下の白色砂粒 を多く含む		
11 2 28	S101	直底器	环(身)	12.0		14.4			0.2mm以下の白色砂粒 を少量含む		打ち欠き
11 3 28	S101	直底器	环(身)	(10.7)	4.5	5.6			5PB6/ 5PB6/	1mm以下の白砂粒を若干 含む	
11 4 28	D3	S101	直底器	环(身)	(10.1)	3.5			5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	0.2mm以下の白色砂粒を 少く含む
11 5 28	D3	S101	土師器	环	(12.0)	5.9			5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	0.5mm以下の白色砂粒を 多く含む
11 6 28	D3	S101	土師器	甕	20.8				5: 淡褐色 内: 淡褐色	5YR6/8 5YR6/8	0.5mm以下の砂粒を少く 含む
11 7 28	D3	S101	土師器	低腹环	(14.2)				5: 淡白色 内: 淡白色	2.5YR2/ 2.5YR2/	0.2mm以下の白色砂粒を 多く含む
11 8 28	S101	土師器	瓶			7.2			5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/1 10YR8/1	0.5mm以下の砂粒を少く 含む
11 9 28	S101	土師器	瓶			10.8			5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/4 7.5YR8/3	0.5mm以下の白色砂粒を 少く含む
11 10 28	D3	S101	土製品	土塗文壺		(11.0)			5: 淡褐色 内: 淡褐色	7.5YR6/8 5YR5/6	0.5mm以下の砂粒を少く 含む
11 11 28	S101	土製品	土瓶	長さ 5.0	幅 5.0	厚さ 4.0			5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	0.5mm以下の白色砂粒を 少く含む
13 1 29	S102	土師器	壺	(15.0)					5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	0.2mm以下の白色砂粒を 多く含む
13 2 29	S102	土師器	甕	(17.5)					5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	0.5mm以下の砂粒を多く 含む
13 3 29	S102	土師器	盤型窓附	(20.2)					5: 淡灰-暗褐色 内: 暗褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	2mm以下の白色砂粒を 多く含む
13 4 29	S102	土師器	低腹环	(16.8)					5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR8/4 10YR8/3	0.5mm以下の砂粒を多く 含む
13 5 29	S102	土師器	低腹环						5: 淡褐色 内: 淡白色	7.5YR7/6 10YR8/2	0.5mm以下の砂粒を多く 含む
13 6 28	C2	S102	土師器	高环		11.0			5: 淡黃褐色 内: 淡白色	7.5YR8/0 7.5YR8/2	0.5mm以下の白色砂粒を 多く含む
13 7 29	C2	S102	土師器	低腹环		7.4			5: 淡灰-暗褐色 内: 暗褐色	10YR8/3 10YR8/2	2mm以下の白色砂粒を 多く含む
13 8 29	S102	土製品	手捏ね土壺		(3.2)				5: 淡灰-暗褐色 内: 暗褐色	10YR8/3 10YR8/2	3mm以下の砂粒を少く 含む
13 9 29	S102	土製品	手捏ね土壺	(4.6)	4.0	4.8			5: 淡灰-暗褐色 内: 淡灰-暗褐色	10YR8/4 10YR8/4	2mm以下の砂粒を少く 含む
15 1 30	S103	直底器	环(蓋)	(13.8)					5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	2mm以下の白色砂粒を 多く含む
15 2 29	D2 D3	S103	直底器	环(身)	(13.4)	10.4			5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を幾層 状に含む
15 3 29	S103	直底器	环(身)	(11.4)	(5.8)				5: 淡白色 内: 淡白色	5Y7/1 5Y7/1	0.5mm以下の白色砂粒 を多く含む
15 4 29	S103	直底器	环(身)	(12.8)	3.85				5: 淡白色 内: 淡白色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒を少く 含む
15 5 30	S103	直底器	壺	(19.4)					5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	0.2mm以下の微砂粒を 少く含む
15 6 30	S103	直底器	甕	(12.4)					5: 淡褐色 内: 淡褐色	5Y7/1 5Y7/1	0.2mm以下の微砂粒を 少く含む
15 7 30	S103	土師器	甕	(11.2)					5: 淡灰-暗褐色 内: 暗褐色	7.5YR7/4 7.5YR8/2	1mm以下の砂粒を多く 含む
15 8 30	S103	土師器	甕	(15.2)					5: 淡灰-暗褐色 内: 暗褐色	10YR8/3 7.5YR8/4	4mm以下の白色砂粒を 多く含む
15 9 30	S103	土師器	瓶			(8.8)			5: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	7.5YR8/6 7.5YR8/8	2mm以下の白色砂粒を 多く含む
15 10 30	S103	土師器	高环	(16.4)					5: 淡灰-暗褐色 内: 淡灰-暗褐色	10YR7/3 10YR7/4	0.2mm以下の微砂粒を 少く含む
15 11 30	E1	S103	土師器	高环	(15.6)				5: 淡灰-暗褐色 内: 淡黃褐色	10YR7/3 10YR8/3	0.5mm以下の微砂粒を 少く含む
15 12 30	S103	土師器	高环		(10.6)				5: 淡灰-暗褐色 内: 淡灰-暗褐色	10YR7/3 10YR7/3	0.5mm以下の微砂粒を 少く含む
15 13 30	D4	S103	土師器	高环		(13.4)			5: 淡褐色 内: 淡褐色	2.5YR8/8 5YR5/6	3mm以下の白色砂粒を 多く含む
17 1 30	S104	直底器	环(蓋)	(13.4)					5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	0.2mm以下の微砂粒を 少く含む
17 2 30	S104	直底器	环(蓋)	(15.8)					5: 淡白色 内: 淡白色	5Y7/1 5Y7/1	1mm以下の淡石砂粒を 少く含む
17 3 30	S104	直底器	环(身)	(14.8)					5: 淡褐色 内: 淡褐色	N6/ N6/	1mm以下の白色砂粒を 多く含む
17 4 30	S104	直底器	コップ形土器 か	(11.8)					5: 淡白色 内: 淡白色	N7/ N6/1	0.1mm以下の白色砂粒 を多く含む
17 5 30	S104	直底器	高环			16.4	7.8		5: 淡灰褐色 内: 明モリーフ色	5GB6/ 5G7/1	1mm以下の砂粒を幾層 状に含む
17 6 30	S104	土師器	甕	(21.2)					5: 淡黃褐色 内: 淡白色	10YR8/2 10YR8/2	4mm以下の白色砂粒を 多く含む
17 7 29 30	S104	土師器	环						5: 淡灰褐色 内: 淡黃褐色	10YR7/3 7.5YR8/4	0.5mm以下の微砂粒を 多く含む

Fig	測定番号	写真番号	出土地点	出土部位	種類	距離	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	出土	参考	
19	1	30	C2	S805	土師器	壺	(16.6)			外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を多く含む	
26	1	31		S802	土師器	壺				外:にふる・黄褐色 内:にふる・黄褐色	10YR7/4 10YR7/4	1mm以下の砂粒を多く含む	
26	3	31		S804	須恵器	环(蓋)	(10.8)	3.9		外:灰色 内:灰色	N6/ N5/	1mm以下の砂粒を少額含む	
26	4	31		S805	須恵器	环(身)			(5.4)	外:灰色 内:灰色	N5/ N7/	1mm以下の白色砂粒を多く含む	
26	5	31		S804	土師器	壺	(14.6)			外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	7.5Y8R4/4 7.5Y8R4/4	1mm以下の砂粒を少額含む	
26	6	31		S804	土師器	壺				外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	7.5Y8R4/4 7.5Y8R4/4	1mm以下の砂粒を微量含む	
26	7	31		S805	土師器	壺			(13.0)	外:褐色 内:褐色	5YR7/6 5YR7/6	2mm以下の砂粒を若干含む	
26	8	31		S807	須恵器	环(蓋)	天井付 (7.8)			外:灰色 内:灰白色	N6/ N7/	0.5mm以下の白色砂粒を多く含む	
26	9	31	A4	S807 (P306)	須恵器	环(身)	(12.2)			外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	0.5mm以下の砂粒を微量含む	
26	10	31		S807 (P301)	須恵器	壺				外:灰色 内:灰色	N6/ N6/	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
26	11	31		S807 (P302)	土師器	壺				外:褐色 内:灰褐色	10YR8/4/4 10YR8/4/4	1mm以下の砂粒を多く含む	
26	12	31		S807 (P306)	土師器	壺				外:灰黃褐色 内:淡黃褐色	10YR8/2/2 10YR8/4/4	1mm以下の砂粒を多く含む	
30	1	32		S805(新)	弁生土器	壺				外:にふる・褐褐色 内:褐褐色	10YR6/3 10YR6/4	1mm以下の砂粒を微量含む	
30	2	32	B4	S805(新)	弁生土器	壺	(12.0)			外:にふる・褐褐色 内:灰黃褐色	10YR7/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒を多く含む	
30	3	32	B4	S805(新)	弁生土器	壺	(17.2)			外:灰白色 内:灰黃褐色	10YR8/2 10YR8/2	1mm以下の砂粒を多く含む	
30	4	32		S805(新)	弁生土器	壺	(13.6)			外:褐灰色 内:淡黃褐色	10YR8/4/1 10YR8/6/2	2mm以下の砂粒を少額含む	
30	5	32		S805(新)	弁生土器	壺	(17.2)			外:黑色 内:にふる・褐褐色	10YR2/1 10YR8/2	1mm以下の砂粒を多く含む	
30	6	32		S805(新)	弁生土器	壺	(16.0)			外:黑色 内:灰白色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	2mm以下の赤色砂粒を多く含む	
30	7	32		S805(新)	弁生土器	壺	(18.0)			外:にふる・褐褐色 内:淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を多く含む	
30	8	32	D3	S805(新)	弁生土器	壺	16.0			外:黑色 内:にふる・褐褐色	10YR2/1 10YR7/2/3	1mm以下の砂粒を少額含む	
30	9	32		S805(新)	弁生土器	壺	(18.4)			外:黑色 内:にふる・褐褐色	10YR2/2 10YR8/2	2mm以下の砂粒を多く含む	
30	10	32		S805(新)	弁生土器	壺	(15.4)			外:褐褐色 内:灰黃褐色	10YR8/3 10YR8/2	1mm以下の砂粒を微量含む	
30	11	32		S805(新)	弁生土器	壺	(14.8)			外:灰黃褐色 内:淡黃褐色	10YR8/4/4 10YR7/2/2	2mm以下の白色砂粒を多く含む	
30	12	32		S805(新)	弁生土器	壺	(8.6)		(3.0)	外:灰黃褐色 内:にふる・褐褐色	10YR8/2/2 10YR7/4/4	1.5mm以下の白色砂粒を多く含む	
30	13	32		S805(新)	弁生土器	實または壺			8.9	外:にふる・褐褐色 内:灰白色	10YR7/2 10YR8/2	5mm以下の赤色砂粒を多く含む	
30	14	32		S805(新)	弁生土器	壺	6.7			外:褐灰色 内:褐褐色	10YR6/4/1 10YR8/1	2mm以下の砂粒を多く含む	
45	1	33	B3	S805(古)	圓文土器	浅鉢				外:オーリーブ黒色 内:オーリーブ黒色	5Y3/1 5Y3/1	微砂粒を少額含む	
45	2	33	B2	S805(古)	弁生土器	近J1壺	(17.2)			外:にふる・褐褐色 内:明黄色	10YR7/3 10YR7/6	3mm以下の砂粒を少額含む	
45	3	33	B2	S805(古)	弁生土器	近J1壺	(16.2)			外:淡黃褐色 内:明黄色	10YR8/3 10YR8/6	3mm以下の砂粒を多く含む	
45	4	33	B4	S805(古)	弁生土器	壺	(16.6)			外:にふる・褐褐色 内:黑褐色	10YR8/3/3 10YR8/3/1	1mm以下の砂粒を多く含む	
45	5	33		S805(古)	弁生土器	壺	(15.6)			外:灰黃褐色 内:にふる・褐褐色	10YR8/2/2 10YR7/2/2	1mm以下の砂粒を多く含む	
45	6	33	R3	S805(古)	弁生土器	壺				外:灰黃褐色 内:灰白色	2.5Y8V3/3 2.5Y8V1/1	1mm以下の砂粒を多く含む	
45	7	33		S805(古)	弁生土器	壺	(17.0)			外:褐灰色 内:灰黃褐色	10YR8/4/1 10YR9/2/2	1mm以下の砂粒を微量含む	
45	8	33		S805(古)	弁生土器	壺	(15.8)			外:にふる・褐褐色 内:灰白色	10YR8/4/2 10YR8/2/2	2mm以下の砂粒を少額含む	
45	9	33		S805(古)	圓文B	弁生土器	壺	17.5	26.3	4.0	外:にふる・褐褐色 内:にふる・褐褐色	10YR8/4/4 10YR8/4/4	鐵砂粒を多く含む
45	10	33		S805(古)	弁生土器	實または壺			6.2	外:オーリーブ黒色 内:灰色	10YR8/2/2 10YR8/2/2	1mm以下の砂粒を微量含む	
45	11	33	B4 B5	S805(古)	弁生土器	實または壺			(7.0)	外:灰黃褐色 内:にふる・褐褐色	10YR8/2/2 10YR7/2/2	0.1mm以下の白色砂粒を微量含む	
45	12	34		S805(古)	圓文A	弁生土器	壺		(11.2)	外:灰黃褐色 内:淡黃褐色	2.5Y8V2/3 10YR8/3/3	3mm以下の白色砂粒を多く含む	
45	13	34	A4	S805(古)	弁生土器	壺			(10.0)	外:にふる・褐褐色 内:にふる・褐褐色	10YR5/1 10YR5/1	2mm以下の白色砂粒を少額含む	
45	14	34	A5	S805(古)	弁生土器	台付鉢			(22.2)	外:灰黃褐色 内:灰黃褐色	10YR8/2/2 10YR4/2/2	2mm以下の砂粒を微量含む	
45	15	34		S805(古)	弁生土器	台付鉢			10.0	外:にふる・褐色 内:にふる・褐色	2.5Y8V6/3 2.5Y8V6/3	1mm以下の砂粒を少額含む	

Rg	部位 番号	万能 番号	出上 地點	出上被服	機別	部種	口掛 長径 cm	幅挂 幅 cm	成掛 厚さ cm	色調	歴史	備考	
45	16	33	SDO(古) II型	土製品	土製印摩	外:にじみ、黄褐色 内:にじみ、黄褐色	10YR7/4 10YR7/2	1.5m以下、4mmの大 粒を若干含む			土製印摩品		
53	1	35	B5	赤生土器	要	(19.8)	5.5	5.0	0.8	外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	7.5YR7/4 2.5YR7/4	1mm以下の砂粒を微量 含む	外:胸部剥落点文
53	2	35	B3	SD10	赤生土器	要			5.6	外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	7.5YR7/3 10YR7/3	4mm以下の砂粒を多量 含む	
53	3	35		SD10	赤生土器	要			9.4	外:にじみ、黄褐色 内:にじみ、黄褐色	10YR6/3 10YR6/4	5mm以下の砂粒を多く 含む	
53	4	35	B4	SD10	赤生土器	収				外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	7.5YR7/3 10YR7/6	5mm以下の砂粒を多く 含む	外:一部黒斑
57	1	35	B5	上部彫り B-1群	須恵器	坪(蓋)	(13.7)	3.1		外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	5RA4/1 2.5Gv4/1	3mm以下の白色砂粒を 多く含む	
57	2	35	B5	上部彫り B-1群	須恵器	坪(蓋)	14.4	3.5		外:褐色 内:暗青灰色	5Pv4/1 5PB4/1	2mm以下の白色砂粒を 少量化	内:使用痕 打ち込み
57	3	35	D5	上部彫り B-1群	須恵器	坪(蓋)	(13.4)	3.3		外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	7.5YR7/4 3YR6/4	3mm以下の白色砂粒を 多く含む	
57	4	35	D4	上部彫り B-1群	須恵器	坪(身)	(12.6)	3.85		外:褐色 内:褐色	N7/ N7	3mm以下の砂粒を少量化	
57	5	35	D5	上部彫り B-1群	須恵器	坪(身)	11.2	4.3		外:褐色 内:褐色	N8/ N6/	2mm以下の砂粒を少量化	打ち欠き
57	6	35	D5	上部彫り B-1群	須恵器	高环	(13.0)	16.7	15.0	外:褐色 内:褐色	N6/ N6/	3mm以下の砂粒を微量 含む	外:脚部2段三方形透かし、朱模様
57	7	35	D5	上部彫り B-1群	須恵器	知恵環	(8.4)	7.3	6.8	外:褐色 内:褐色	N3/ N3/	1mm以下の白色砂粒を 少量化	
57	8	35	D4	上部彫り B-1群	須恵器	コップ形土器			7.4	外:褐色 内:褐色	NS/ NS/	1mm以下の白色砂粒を 少量化	
57	9	35	D5	上部彫り B-1群	上部器	高环	(8.4)			外:淡褐色 内:淡褐色	2.5YR7/3 2.5YR7/3	2mm以下の砂粒を少量化	内:外:赤彩
57	10	35	D5	上部彫り B-1群	上部器	要	(19.5)			外:淡褐色 内:淡褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	3mm以下 砂粒を多量含む	外:爆付着
57	11	36	D5	上部彫り B-2群	上部器	要	(16.4)			外:にじみ、褐色 内:にじみ、褐色	7.5YR7/3 7.5YR6/3	3mm以下の砂粒を多く 含む	内:外:爆付着
57	12	36	D5	上部彫り B-2群	上部器	要	19.4	32.8		外:褐色 内:にじみ、淡褐色	5YR8/6 5YR5/4	5mm以下の砂粒を多量 含む	外:爆付着
58	1	36	D5	上部彫り B-2群	上部器	輪	(22.2)	29.3		外:淡褐色 内:淡褐色	10YR8/4 2.5YR8/3	6mm以下の砂粒を多量 含む	外:一部黒度
58	2	36	D5	上部彫り B-2群	上部器	甌	29.0	36.0		外:にじみ、淡褐色 内:にじみ、淡褐色	10YR7/3 10YR7/3	5mm以下の砂粒を多く 含む	延付き
59	1	36	D5	上部彫り B-2群	須恵器	坪(蓋)	12.8	3.7		外:褐色 内:褐色	N6/ N6/	3mm以下の白色砂粒を 少量化	
59	2	36	D3	上部彫り B-2群	須恵器	坪(身)	13.4	4.8		外:褐色 内:褐色	N6/ N7/	3mm以下の白色砂粒を 少量化	
59	3	35	D3	上部彫り B-2群	上部器	坪	(14.0)	5.5		外:淡褐色 内:淡褐色	10YR8/2 10YR8/2	2mm以下の砂粒を少量化	内:外:赤彩
59	4	36	D3	上部彫り B-2群	上部器	鉢	(16.6)	9.2		外:褐色 内:淡褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	1mm以下の砂粒を少量化	
59	5	36	D3	上部彫り B-2群	須恵器	要	18.4	33.0		外:褐色 内:褐色	N4/ N5/	2mm以下の白色砂粒を 少量化	外:脚部2段2差墨縞文に区画された網状
59	6	37	D3	上部彫り B-2群	須恵器	坪(蓋)	14.7	3.3		外:褐色 内:褐色	N6/ N6/	3mm以下の白色砂粒を 少量化	内:使用痕
59	7	37	D3	上部彫り B-2群	須恵器	坪(身)	(12.6)	3.4		外:褐色 内:褐色	N4/ N5/	2mm以下の白色砂粒を 少量化	内:使用痕
59	8	36	D3	上部彫り B-2群	上部器	坪	14.0	6.8		外:褐色 内:褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	0.5mm以下の纏跡を 少量化	内:外:赤彩
59	9	36	D3	上部彫り B-2群	上部器	坪	12.7	5.0		外:淡褐色 内:にじみ、褐色	10YR8/4 10YR7/4	1mm程の砂粒を微量 含む	内:外:赤彩
59	10	36	D3	上部彫り B-2群	上部器	要	13.3	14.1		外:淡褐色 内:褐色	10YR8/3 10YR8/2	2mm以下の砂粒を微量 含む	打ち欠き
59	11	37	D3	上部彫り B-2群	上部器	要	(17.0)			外:淡褐色 内:にじみ、褐色	10YR8/3 10YR7/2	5mm以下の砂粒を少量化	内:外:爆付着
59	12	37	D3	上部彫り B-2群	上部器	瓶	(30.4)			外:褐色 内:褐色	10YR8/2 10YR8/2	3mm以下の砂粒を多く 含む	
60	1	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	要	13.2			外:褐色 内:淡褐色	5YR7/6 10YR8/4	2mm以下の砂粒を微量 含む	将:爆付着
60	2	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	甌	(26.4)			外:淡褐色 内:淡褐色	10YR8/4 10YR8/4	2mm以下の砂粒を多く 含む	上腹部にアセットアントあり
60	3	37	D4	上部彫り B-4群	須恵器	坪(蓋)	(14.4)	3.4		外:褐色 内:褐色	NS/ 7.5Y5/1	5mm以下の白色砂粒を 少量化	内:使用痕
60	4	37	D4	上部彫り B-4群	須恵器	把手				外:褐色 内:褐色	NH/ NH/	1mm以下の白色砂粒を 微量含む	
60	5	37	D4	上部彫り B-4群	須恵器	要	(19.3)			外:褐色 内:褐色	N7/ N7/	4mm以下の砂粒を少量化	
60	6	37	D4	上部彫り B-4群	須恵器	要	19.4			外:褐色 内:褐色	N7/ N7/	3mm以下の砂粒を少量化	
60	7	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	高环	15.4			外:淡褐色 内:淡褐色	10YR8/3 10YR8/3	2mm以下の白色砂粒を 微量含む	内:外:赤彩
60	8	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	要	(15.8)			外:にじみ、淡褐色 内:にじみ、淡褐色	10YR7/2 10YR7/2	5mm以下の砂粒を多量 含む	外:爆付着
60	9	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	要	(20.4)			外:褐色 内:にじみ、褐色	5YR6/6 7.5YR7/7	5mm以下の砂粒を多く 含む	
60	10	37	D4	上部彫り B-4群	上部器	要	(17.9)			外:にじみ、淡褐色 内:淡褐色	7.5YR7/4 10YR8/4	2mm以下の白色砂粒を 微量含む	

Fig	器物番号	直角座標	出土地点	縁側	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	出土	備考
60	11	37	D4	上部縁 B群	土器部	壺	(26.5)	23.0	11.0	外：ぶどう葉緑色 内：灰黄褐色	10YR5/4 10YR5/2 2mm以下の砂粒を少量含む
61	1	38	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(13.9)			外：灰白色 内：灰白色	3YR1/ 3YR1/ 1mm以下の砂粒を少量含む
61	2	38	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.0	5.6		外：暗赤灰色 内：灰褐色	10YR4/1 10YR4/2 4mm以下の白色砂粒を多く含む
61	3	38	D4	上部縁 B群	土器部	壺	(13.4)	6.1		外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR7/3 2mm以下の砂粒を少量含む
61	4	38	D4	上部縁 B群	須恵器	壺H	(14.4)	8.9	8.3	外：ぶどう葉緑色 内：ぶどう葉緑色	10YR7/3 10YR7/3 1mm以下の砂粒を若干含む
61	5	38	D4	上部縁 B群	土器部	壺H	20.1	13.7	11.7	外：淡黄色 内：淡黄色	2.5YR/3 2.5YR/3 2mm以下の砂粒を多く含む
62	1	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(14.0)	3.3		外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/ 2mm以下の白色砂粒を若干含む
62	2	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	17.2	3.4		外：青灰黑色 内：青灰黑色	3PB6/1 3PB6/1 5mm以下の白色砂粒を多く含む
62	3	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(13.4)	4.5		外：灰黑色 内：灰黑色	N5/ N5/ 2mm以下の砂粒を微量含む
62	4	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(13.8)	3.4		外：灰黑色 内：灰黑色	N6/ N6/ 3mm以下の白色砂粒を少量含む
62	5	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(12.2)	4.1		外：灰白色 内：灰白色	N7/ N6/ 3mm以下の砂粒を若干含む
62	6	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.6	3.9		外：灰黑色 内：灰黑色	3YR1/ 3YR1/ 3mm以下の砂粒を多く含む
62	7	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.8	3.6		外：灰黑色 内：灰黑色	N5/ N5/ 4mm以下の砂粒を多く含む
62	8	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.1	4.5		外：黄灰黑色 内：黄灰黑色	2.5YR/1 2.5YR/1 2mm以下の砂粒を多く含む
62	9	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(12.2)	3.5		外：灰白色 内：灰白色	10YR5/1 10YR5/1 3mm以下の白色砂粒を少暈含む
62	10	38	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(12.0)	3.5		外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/ 2mm以下の砂粒を少量含む
62	11	38	D5	上部縁 B群	須恵器	質	(18.2)			外：灰黑色 内：灰黑色	N6/ N6/ 2mm以下の砂粒を少量含む
62	12	38	D5	上部縁 B群	土器部	壺	(15.0)	6.9		外：ぶどう葉緑色 内：ぶどう葉緑色	7.5YR7/4 7.5YR7/4 2mm以下の白色砂粒を多く含む
62	13	38	D5	上部縁 B群	土器部	質				外：灰白色 内：灰白色	10YR8/3 10YR8/3 4mm以下の白色砂粒を少暈含む
62	14	38	D5	上部縁 B群	土器部	質	(11.2)	11.1		外：青灰黑色 内：青灰黑色	2.5YR7/3 2.5YR7/3 2mm以下の砂粒を少暈含む
62	15	38	D5	上部縁 B群	土器部	質	(16.6)	18.4		外：青灰黑色 内：青灰黑色	2.5YR7/4 2.5YR7/4 2mm以下の砂粒を少暈含む
62	16	38	D5	上部縁 B群	土器部	質	23.5	14.8		外：淡黄色 内：淡黄色	2.5YR3/3 2.5YR3/3 4mm以下の砂粒を多く含む
62	17	44	D5	上部縁 B群	上製品	上	長5.4 幅4.7 厚2.5			外：ぶどう葉緑色	10YR7/2 10YR7/2 5mm以下の砂粒を微量含む
63	1	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	14.8	5.1		外：青灰黑色 内：灰褐色	10BG6/1 10BG6/1 3mm以下の砂粒を多く含む
63	2	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	14.7	3.5		外：灰白色 内：灰白色	7.5YR7/1 7.5YR7/1 2mm以下の砂粒を多く含む
63	3	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(14.8)	4.5		外：灰黑色 内：灰黑色	7.5YR6/1 7.5YR6/1 3mm以下の砂粒を若干含む
63	4	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(14.1)	3.8		外：暗青灰黑色 内：青灰黑色	3PB4/1 3PB4/1 1mm以下の砂粒を少量含む
63	5	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	13.6	4.0		外：灰黑色 内：灰黑色	N6/ N6/ 3mm以下の白色砂粒を少暈含む
63	6	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	13.7	4.2		外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/ 3mm以下の砂粒を多く含む
63	7	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(13.7)	6.2		外：灰白色 内：灰白色	3YR7/1 3YR7/1 1mm以下の白色砂粒を少暈含む
63	8	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(13.6)	4.5		外：灰黑色 内：灰黑色	N4/ N4/ 1mm以下の白色砂粒を若干含む
63	9	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	13.7	4.1	天井部 6.9	外：灰白色 内：灰白色	N8/ N8/ 1mm以下の白色砂粒を少暈含む
63	10	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(蓋)	(12.6)	3.8		外：灰白色 内：灰白色	7.5YR6/1 7.5YR7/1 2mm以下の砂粒を少暈含む
63	11	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(13.3)	5.0		外：灰黑色 内：灰黑色	N6/ N6/ 1mm以下の砂粒を微量含む
63	12	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.6	5.0		外：灰黑色 内：灰黑色	N5/ N5/ 1mm以下の砂粒を微量含む
63	13	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	(11.2)	5.7		外：明青灰黑色 内：明青灰黑色	3PB7/1 3PB7/1 1mm以下の砂粒を微量含む
63	14	39	D4	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.8	4.3		外：暗赤灰色 内：橙色	3YR5/1 3YR6/1 4mm以下の白色砂粒を若干含む
63	15	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	12.0	5.5		外：灰黑色 内：灰黑色	N5/ N5/ 1mm以下の砂粒を多く含む
63	16	39	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	16.0	4.7		外：青灰黑色 内：青灰黑色	5PB5/1 5PB5/1 3mm以下の砂粒を微量含む
63	17	40	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	11.9	3.8		外：灰黑色 内：灰黑色	N5/ N5/ 3mm以下の白色砂粒を少暈含む
63	18	40	D5	上部縁 B群	須恵器	壺(身)	11.5	3.0		外：黄灰黑色 内：黄灰黑色	2.5YR6/1 2.5YR6/1 3mm以下の白色砂粒を少暈含む

Rg	回数	回数	万能 機器	出上地點	出上耕種	耕種	口耕 (m)	耕幅 (m)	深耕 (m)	成形 (m)	色調	土質	備考	
63	19	40	D4	上耕振り B群	直進器	耕耘 (身)	[10.0]	4.0	6.8		外：灰色 内：灰褐色	N5/ 7.5YR5/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む	打ち欠き
64	1	40	D4	上耕振り B群	直進器	耕耘	13.5	20.9	12.2		外：深黄色 内：深灰色	N5/ N5	1mm以下の白色砂粒を幾量含む	外：1环部 刺突文 頭部2段三方長方刺透かし 1.2条浅縫 頭部2条深縫
64	2	40	D4	上耕振り B群	直進器	耕耘	13.8				外：深灰色 内：深灰色	N6/ N6	2mm以下の砂粒を少量含む	外：耕頭2段三方長方刺透かし、2条深縫 内：使用前 打ち欠き
64	3	41	D4	上耕振り B群	直進器	耕耘	[13.9]				外：灰褐色 内：暗灰色	5PB6/1 5PB5/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む	頭部3方内形孔
64	4	40	D5	上耕振り B群	直進器	耕耘		[11.9]			外：深灰色 内：深灰色	N6/ N6	1mm以下の砂粒を若干含む	頭部刺突文、内形孔
64	5	40	B5	上耕振り B群	直進器	耕耘					外：深白色 内：暗白色	7.5YR1/ 7Y7/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む	外：頭部刺突文、胸部内形孔
64	6	40	B5	上耕振り B群	直進器	耕耘					外：深モリエ色 内：暗白色	2.5GY4/1 N3/	2mm以下の砂粒を若干含む	外：頭部刺突文
64	7	41	D5	上耕振り B群	直進器	耕耘					外：深灰色 内：深灰色	5PB5/1 5PB5/1	1mm以下の白色砂粒を少量含む	外：頭部ヘラ彎曲直縫文、2条深縫
64	8	40	D4	上耕振り B群	直進器	耕耘または跡	10.8				外：深白色 内：深白色	N7/ N7	1mm以下の白色砂粒を少量含む	外：頭部黃状文
64	9	40	D4	上耕振り B群	直進器	コップ形上耕	12.6	17.5	8.9		外：深灰色 内：深灰色	N6/ N6	2mm以下の白色砂粒を少量含む	
64	10	41	D5	上耕振り B群	直進器	コップ形上耕		[7.8]			外：深灰色 内：深灰色	N4/ N4	1mm以下の砂粒を微量含む	
64	11	41	D4	上耕振り B群	把手 (コープ付)直	耕耘					外：深灰色 内：深灰色	5PB5/1 5PB5/1	1mm以下の砂粒を少量含む	
64	12	41	D4	上耕振り B群	把手 (コープ付)直	耕耘					外：深灰色 内：深灰色	N4/ N6	1mm以下の砂粒を微量含む	
64	13	40	D5	上耕振り B群	直進器	耙	17.3	32.5			外：深灰色 内：深灰色	N5/ 7.5YR6/1	3mm以下の砂粒を微量含む	
64	14	40	D4	上耕振り B群	直進器	耙撒					外：深灰色 内：深灰色	5PB5/1 N5/	1mm以下の砂粒を微量含む	頭部模様品か
65	1	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[12.7]	6.3			外：深褐色 内：深褐色	10YR8/3 10YR8/3	2mm以下の白色砂粒を少量含む	
65	2	42	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[14.6]	5.9	[4.98]		外：深黄色 内：深黄色	2.5Y7/3 2.5Y7/3	3mm以下の砂粒を少量含む	
65	3	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[11.4]				外：深黄色 内：深黄色	2.5YR7/2 2.5YR7/2	3mm以下の砂粒を少量含む	
65	4	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[12.1]	5.6			外：褐色 内：褐色	7.5YR7/0 5YR7/0	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
65	5	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[8.3]				外：深黃褐色 内：深白色	7.5YR8/4 10YR8/2	2mm以下の砂粒を少量含む	
65	6	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘または跡		[12.4]			外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5YR7/2 10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量含む	
65	7	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	13.8	[6.4]			外：深黃褐色 内：深黃褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	1mm以下の砂粒を多く含む	外：「×」ヘラ繩記 内面：赤彩
65	8	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[13.0]	4.2			外：深黃褐色 内：深黃褐色	10YR7/3 10YR7/3	1mm以下の砂粒を微量含む	内面：赤彩
65	9	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	13.9	6.6			外：深黃褐色 内：褐色	7.5YR8/4 7.5YR7/0	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	10	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[11.8]				外：深白色 内：深白色	10YR8/2 10YR8/2	2mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	11	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[12.0]	5.6			外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y7/2 10YR8/4	1mm以下の白色砂粒を微量含む	内面：赤彩
65	12	41	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	13.7	5.7			外：深黃褐色 内：深黃褐色	10YR8/4 10YR8/4	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	13	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	13.7	5.6			外：深黃褐色 内：褐色	10YR8/3 5YR7/8	2mm以下の白色砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	14	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[13.6]	6.7			外：深黃褐色 内：深黃褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	3mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	15	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘					外：深白色 内：深白色	7.5YR8/2 7.5YR8/2	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	16	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘					外：深褐色 内：褐色	10YR2/1 10YR2/1	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	17	41	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[13.6]	8.9			外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	3mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	18	41	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[12.4]				外：深黃褐色 内：深黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量含む	内面：赤彩
65	19	41	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[14.0]	10.3	[9.4]		外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y8/3 10YR7/4	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	20	41	D3	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[12.3]				外：深白色 内：深白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	1mm以下の砂粒を少量含む	
65	21	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	[14.6]	11.4	[11.4]		外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	22	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	19.0	13.4	13.9		外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	4mm以下の砂粒を多く含む	内面：赤彩
65	23	42	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	17.0	11.8	10.0		外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	1mm以下の砂粒を少量含む	内面：赤彩
65	24	42	D5	上耕振り B群	上耕器	耕耘	17.3	12.3	11.0		外：深黃褐色 内：深黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量含む	内面：赤彩
65	25	42	D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘	17.6	15.0	12.7		外：深黃褐色 内：深黃褐色	10YR8/4 10YR8/4	1mm以下の砂粒を微量含む	内面：赤彩
65	26	42	D4D4	上耕振り B群	上耕器	耕耘					外：深黃褐色 内：深黃褐色	2.5Y6/4 2.5Y6/4	1mm以下の砂粒を微量含む	外：被熱により一部黒化 内面：赤彩

Fig	植物番号	直高(㎜)	出土地点	出土樹位	種別	品種	口径(㎜)	高さ(㎜)	底径(㎜)	成形(㎜)	色調	取土	参考
65	27	42	D4	上部樹冠 B群	上部器	高杯	(16.6)	11.1	11.0	外：褐色 内：褐色	5YR6/8 5YR6/8	3mm以下の白色砂粒を少量含む	内外：赤茶
66	1	43	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞	(19.0)			外：明赤褐色 内：深赤褐色	5YR5/0 5YR5/4	5mm以下の白色砂粒を多く含む	外：蝶形花
66	2	43	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞	(24.8)			外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 2.5YR8/2	1mm以下の砂粒を若干含む	内外面：蝶付着
66	3	43	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞	(16.8)	23.9		外：灰白色 内：灰白色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	4mm以下の砂粒を多く含む	外：蝶付着
66	4	44	D5	上部樹冠 B群	上部器	盞	(14.2)			外：灰白色 内：浅黄褐色	5YR7/3 7.5YR8/4	1mm以下の砂粒を少額含む	内外：蝶付着
66	5	44	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞	(11.0)			外：灰白色 内：灰白色	10YR8/3 10YR7/2	2mm以下の砂粒を少額含む	内外：蝶付着
66	6	43	D5	上部樹冠 B群	上部器	盞	(11.4)	11.6		外：灰白色 内：明黄色	7.5YR7/3 7.5YR7/4	4mm以下の砂粒を多く含む	外：蝶付着
66	7	43	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞	(9.0)	9.5		外：浅黄褐色 内：暗灰色	2.5YR7/4 10YR8/1	1mm以下の砂粒を若干含む	打ち欠き 内：付着物あり
66	8	44	D4	上部樹冠 B群	上部器	盞				外：灰白色 内：暗灰色	10YR8/2 10YR8/2	1mm以下の砂粒を含む	外：側突変
66	9	43	D3	上部樹冠 B群	上部器	盞	(25.6)	26.7	11.4	外：灰白色 内：浅黄褐色	10YR8/2 10YR8/3	2mm以下の砂粒を多く含む	外：蝶付着 世代化
66	10	44	D3	上部樹冠 B群	上部品	手捏ね土器	(4.7)	0.7		外：灰白色 内：灰白色	10YR7/2 10YR7/2	1mm以下の砂粒を行子含む	
66	11	43	D4	上部樹冠 B群	上製品	手捏ね土器	(3.9)			外：灰白色 内：灰白色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	0.5mm以下の砂粒を微量含む	丸径：0.6mm × 0.5mm 重量：96.6g 一様判定
66	12	41	D5	上部樹冠 B群	上製品	土器	長さ 6.2	幅 4.4	厚さ 4.0	外：灰白色 内：灰白色	5YR6/8 5YR6/8	1mm以下の白色砂粒を少額含む	丸径：非貫通孔
66	13	43	D5	上部樹冠 B群	上製品	土質文部		14.4		外：灰白色 内：灰白色	2.5YR6/8 2.5YR6/8	5mm以下の砂粒を行子含む	側面：蝶付着
67	1	44	D5	上部樹冠 B群	上部器	甌		28.4		外：灰白色 内：浅黄褐色	10YR8/2 7.5YR8/3	3mm以下の砂粒を多く含む	内：蝶付着 前後開口
67	2	44	D4	上部樹冠 B群	上部器	甌				外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	2mm以下の砂粒を多く含む	外：羅網文字
70	1	45	D2	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(15.0)	5.6		外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ 7.5Y6/1	3mm以下の砂粒を若干含む	内：使用痕 打ち欠き
70	2	45	D2	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13.8)	5.9		外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6	砂粒をほとんど含まない	
70	3	45	D2	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(15.0)	5.0		外：青灰褐色 内：青灰褐色	5P85/1 5P85/1	2mm以下の砂粒を少額含む	内：使用痕
70	4	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13.5)	4.6		外：青灰褐色 内：青灰褐色	5B85/1 5B85/1	2mm以下の白色砂粒を少額含む	内：使用痕
70	5	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13.5)	3.8		外：青灰褐色 内：青灰褐色	N8/ N8/	4mm以下の砂粒を行子含む	打ち欠き
70	6	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13.4)	4.1		外：青灰褐色 内：青灰褐色	5Y3/1 5Y3/1	2mm以下の砂粒を行子含む	内：使用痕 打ち欠き
70	7	45	D2	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13)	4.2		外：灰白色 内：灰白色	N5/ N5/	1mm以下の砂粒を行子含む	外：天津都 黒色物貿易着
70	8	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(15.2)	4.5		外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6	砂粒をほとんど含まない	
70	9	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(蓋)	(13.0)	4.3	5.7	外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N4/	3mm以下の白色砂粒を少額含む	外：(1)天津都 黒色物貿易着 内：使用痕
70	10	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(11.4)	5.8		外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/	砂粒をほとんど含まない	
70	11	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.2)	5.2		外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N5/	2mm以下の砂粒を少額含む	
70	12	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(13.3)	6.0		外：灰白色 内：灰白色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm以下の砂粒を多く含む	内：使用痕
70	13	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.8)	4.8		外：灰白色 内：灰白色	10Y7/1 7.5Y7/1	3mm以下の砂粒を多く含む	
70	14	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(13.3)	4.0		外：青褐色 内：浅黄褐色	7.5YR7/6 2.5YR6/1	3mm以下の白色砂粒を少額含む	
70	15	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.3)	5.3		外：明青褐色 内：灰褐色	5B7/1 N7/	2mm以下の砂粒を微量含む	
70	16	45	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.3)	4.5		外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N5/	1mm以下の砂粒を少額含む	
70	17	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.9)	4.4		外：灰褐色 内：暗灰色	N5/ 10YR4/1	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
70	18	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.5)	3.9		外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N4/	1mm以下の砂粒を微量含む	
70	19	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.5)	4.7		外：青灰褐色 内：オリーブ灰褐色	5B6/1 2.5G6/1	3mm以下の白色砂粒を少額含む	内：使用痕
70	20	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	輪(身)	(12.8)	4.2		外：青灰褐色 内：青灰褐色	5P85/1 5P85/1	3mm以下の白色砂粒を少額含む	外：縦状痕、黒色物貿易着
T1	1	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	高杯				外：青灰褐色 内：灰褐色	N3/ N6/	1mm以下の砂粒を微量含む	外：鶴屋基・美濃掛 鶴屋 三方前方面透かし
T1	2	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	刻印高杯	(7.2)	9.1		外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6/	2mm以下の砂粒を行子含む	
T1	3	46	D2	上部樹冠 A群	頭頂器	コップ形土器			7.5	外：青褐色 内：灰褐色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を微量含む	
T1	4	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	H	(11.8)	8.2		外：明灰褐色 内：浅黄褐色	5YR7/2 10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量含む	
T1	5	46	D3	上部樹冠 A群	頭頂器	H	(13.2)	6.4		外：青褐色 内：浅黄褐色	7.5YR7/6 7.5YR8/3	3mm以下の砂粒を少額含む	

Rg	回数	採取箇所	出土位置	出土層位	樹種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	地質	備考	
71	6	46	D2	上層面 A層	土壌層	环	(14.3)		外：褐色 内：深褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	3mm以下の砂粒を少量 含む	
71	7	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	14.1	6.6	外：灰-褐色 内：深白色	10YR7/2 10YR8/2	2mm以下の砂粒を若干 含む	
71	8	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	13.0	6.3	外：浅黃褐色 内：淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	0.5mm以下の砂粒を微 量含む	
71	9	46	D2	上層面 A層	土壌層	环	(15.6)		外：浅紅色 内：深白色	10YR8/2 7.5YR7/4	3mm以下の砂粒を微量 含む	
71	10	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(14.1)	8.0	外：淺褐色 内：深黃褐色	10YR3/1 10YR7/2	4mm以下の砂粒を少量 含む	
71	11	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(14.0)		外：淺黃褐色 内：深白色	2.5YR7/3 2.5YR8/2	1mm以下の砂粒を微量 含む	
71	12	46	D2	上層面 A層	土壌層	环	(16.2)	8.8	外：淺黃褐色 内：淡黃褐色	10YR8/4 10YR8/3	3mm以下の砂粒を微量 含む	
71	13	46	D2	上層面 A層	土壌層	环	(13.0)		外：淺黃褐色 内：淡黃褐色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	4mm以下の砂粒を微量 含む	
71	14	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(14.9)		外：淺褐色 内：淡黃褐色	5YR6/6 7.5YR8/3	1mm以下の砂粒を微量 含む	
71	15	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(14.2)	6.9	外：淺黃褐色 内：淡黃褐色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	2mm以下の砂粒を微量 含む	
71	16	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(13.3)	6.4	外：褐色 内：灰-褐色	2.5YR7/6 7.5YR8/4	3mm以下の砂粒を微量 含む	
71	17	46	D3	上層面 A層	土壌層	环	(15.4)		外：深褐色 内：深黃褐色	2.5YR7/4 2.5YR8/3	1mm以下の白色砂粒を 微量含む	
71	18	46	D2	上層面 A層	土壌層	环	(14.6)		外：褐色 内：褐色	5YR6/6 5YR7/4	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	1	48	D3	上層面 A層 (黑色土層)	土壌層 (黑色土層)	环 (身)	(13.2)	5.4	外：深褐色 内：深黃褐色	10YR4/1 10YR6/2	1mm以下の全雲母を 微量含む	
72	2	47	D3	上層面 A層 (黑色土層)	土壌層 (黑色土層)	环 (身)	(12.9)	5.3	外：深褐色 内：深黑色	10YR2/1 10YR2/1	1mm以下の全雲母を 微量含む	
72	3	47	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(14.9)	4.2	外：深褐色 内：深黃褐色	N3/ 2.5Y4/1	2mm以下の砂粒を微量 含む	
72	4	47	D2	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(14.9)	5.3	外：深褐色 内：深黑色	2.5Y3/1 2.5Y3/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	5	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(14.8)		外：灰-灰褐色 内：深黑色	10YR7/2 N2/	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	6	48	D2	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(13.8)		外：深褐色 内：深黑色	10YR3/1 10YR4/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	7	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(12.2)		外：深褐色 内：深黑色	10YR2/1 10YR2/1	1mm以下の全雲母を 微量含む	
72	8	48	D2	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(11.4)	3.7	外：深褐色 内：深黑色	N4/ N5/	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
72	9	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(13.8)		外：灰-灰褐色 内：深黑色	2.5Y2/1 2.5Y2/1	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
72	10	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(12.8)		外：深褐色 内：深黑色	7.5YR2/1 7.5YR2/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	11	47	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(12.8)	5.8	外：深褐色 内：深黑色	N2/ 7.5YR4/2	1mm以下の全雲母を 微量含む	
72	12	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(10.6)		外：深褐色 内：深黑色	N1.5/ N2/	1mm以下の全雲母を 微量含む	
72	13	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(13.0)		外：深褐色 内：深黑色	7.5YR3/1 7.5YR3/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	14	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(14.2)		外：深褐色 内：深黑色	2.5Y3/1 2.5Y3/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	15	48	D3	上層面 A層	土壌層	环 (身)	(15.4)	6.98	外：深褐色 内：深黑色	7.5YR4/1 7.5YR4/1	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
72	16	47	D2	上層面 A層	土壌層	环 (身)	14.0	7.4	外：深褐色 内：深黑色	7.5YR3/1 10YR4/1	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
72	17	48	D3	上層面 A層	土壌層	高环			外：深褐色 内：深黑色	2.5Y8/1 2.5Y8/1	1mm以下の砂粒を多く 含む	
72	18	47	D3	上層面 A層	土壌層	高环	14.8		外：深褐色 内：深黑色	10YR6/2 2.5Y8/2	1mm以下の砂粒を少 量含む	
72	19	47	D3	上層面 A層	土壌層	高环		10.5	外：深褐色 内：深黑色	5Y7/1 10YR7/1	1mm以下の全雲母を多 く含む	
72	20	47	D3	上層面 A層	土壌層	高环			外：深褐色 内：深黑色	10YR8/1 10YR8/1	1mm以下の砂粒を少 量含む	
72	21	47	D2	上層面 A層	土壌層	低環		8.8	外：浅黃褐色 内：灰-褐色	7.5YR6/4 10YR7/3	1mm以下の白色砂粒を 微量含む	
72	22	47	D2	上層面 A層	土壌層	低環		8.3	外：灰-褐色 内：灰-褐色	7.5YR7/4 5YR6/4	3mm以下の白色砂粒を 微量含む	
72	23	47	D3	上層面 A層	土壌層	低環H	(12.2)	9.8	外：浅黃褐色 内：深白色	10YR8/3 10YR8/1	1mm以下の砂粒を少 量含む	
72	24	47	D2	上層面 A層	土壌層	低環H	(13.4)	10.0	9.0	外：浅黃褐色 内：灰-褐色	10YR8/3 10YR7/3	1mm以下の黑色砂粒を 微量含む
72	25	47	D3	上層面 A層	土壌層	低環H		(8.3)	外：深褐色 内：深黃褐色	5YR6/6 10YR8/3	2mm以下の砂粒を微量 含む	
72	26	47	D2	上層面 A層	土壌層	高环	(9.0)		外：灰-褐色 内：深褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/2	3mm以下の砂粒を微量 含む	
72	27	47	D3	上層面 A層	土壌層	高环	(10.4)		外：灰-褐色 内：灰-褐色	7.5YR5/4 7.5YR5/3	1mm以下の砂粒を微量 含む	
72	28	47	D3	上層面 A層	土壌層	高环	(15.0)	9.4	外：深褐色 内：明赤褐色	2.5YR5/6 2.5YR5/6	4mm以下の砂粒を少 量含む	

Fig	番号	直角座標	出土地点	出土部位	種類	品種	口径 (mm)	底径 (mm)	底高 (mm)	底深 (mm)	色調	出土	備考
72	29	47	D3	上部割り A群	土器部	高环	13.4	10.7	(8.3)	外: 明赤褐色 内: 明赤褐色	2.5YR5/6 2.5YR5/6	1mm以下の砂粒を 少量含む	内外: 赤絞
72	30	47	D3	上部割り A群	土器部	高环	17.4			外: 淡黄色 内: 棕色	7.5Y7/3 2.5YR5/6	1mm以下の砂粒を少 量含む	内外: 浅絞、削付着 二次利用の可能性あり(打明顔化)
73	1	49	D3	上部割り A群	土器部	甌	65.7	11.4		外: 灰褐色 内: 灰白色	2.5Y7/2 2.5Y8/2	1mm以下の砂粒を多く 含む	
73	2	50	D2	上部割り A群	土器部	甌	(10.8)			外: 棕色 内: 明灰褐色	5YR6/5 N3/	1mm以下の砂粒を少 量含む	内外: 一部黒度、赤絞(内部はD3部のみ)
73	3	50	D2	上部割り A群	土器部	甌	(9.4)			外: に赤い黄褐色 内: 明灰褐色	10YR7/3 10YR5/3	1mm以下の砂粒を微量 含む	外: 被焼により変色 内外: 赤絞(内部はD3部のみ)
73	4	49	D3	上部割り A群	土器部	短溜頭	10.1	17.5		外: 棕色 内: 淡黄褐色	2.5Y8/1 10YR8/4	1mm以下の砂粒を微量 含む	外: 一部黒度
73	5	49	D3	上部割り A群	土器部	短溜頭	10.0	13.2		外: 棕色 内: 棕色	2.5YR5/8 2.5YR7/6	1mm以下の砂粒を少 量含む	外: 一部黒度
73	6	50	D3	上部割り A群	土器部	直口巻				外: 棕色 内: に赤い	2.5YR6/6 5YR7/3	0.5mm以下の砂粒を 少量含む	外: 掘付着 内外: 赤絞(内部はD3部のみ)
73	7	49	D3	上部割り A群	土器部	小形丸底瓶	(8.9)	(10.0)		外: 淡黃褐色 内: 棕色	7.5YR6/5 7.5YR7/3	1mm以下の砂粒を少 量含む	
73	8	49	D2	上部割り A群	土器部	甌	(15.8)	8.2		外: 棕色 内: 棕色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	1mm以下の砂粒を少 量含む	
73	9	49	D3	上部割り A群	土器部	甌			7.3	外: 淡黄褐色 内: 棕色	10YR8/4 5YR6/5	1mm以下の砂粒を微量 含む	
73	10	49	D3	上部割り (把手付)	土器部	甌 (把手付)	11.6	8.5	4.0	外: に赤い 内: 明灰褐色	7.5YR7/4 5YR7/2	2mm以下の砂粒を少 量含む	外: 口縁部H字状に削られている 内外: 赤絞
73	11	49	D3	上部割り A群	土器部	甌 (把手付)	12.8	9.1	5.4	外: 明赤褐色 内: 明赤褐色	2.5YR5/6 5YR7/3	1mm以下の砂粒を少 量含む	
73	12	49	D3	上部割り A群	土器部	甌	12.8	6.7	5.1	外: 明灰褐色 内: に赤い黄褐色	10YR6/8 10YR7/4	1mm以下の砂粒を少 量含む	打ち欠きか
73	13	49	D3	上部割り A群	土器部	高环	(19.2)	7.5	(5.6)	外: 棕色 内: 淡黄褐色	7.5YR7/6 7.5YR4/4	3mm以下の砂粒を行す る	内外: 黒度
73	14	50	D3	上部割り A群	土製品	手苔ね土器	(8.8)	4.6		外: 灰白色 内: 灰白色	10YR7/1 10YR8/2	2mm以下の砂粒を微量 含む	
73	15	50	D3	上部割り A群	土製品	手苔ね土器	4.6	4.5		外: 灰白色 内: 灰白色	10YR7/1 10YR8/2	1mm以下の砂粒を微量 含む	
73	16	50	D2	上部割り A群	土製品	手苔ね土器				外: 灰白色 内: 淡灰褐色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
73	17	50	D2	上部割り A群	土製品	手苔ね土器	2.5	1.8		外: 黑色 内: 深灰色	10YR2/1 10YR2/1	0.5mm以下の砂粒を微量 含む	
73	18	50	D2	上部割り A群	土製品	手苔ね土器			4.2	外: に赤い 内: に赤い淡褐色	10YR7/4 10YR7/4	1mm以下の砂粒を少 量含む	
73	19	50	D2	上部割り A群	土製品	鍛錬陶器	折腰	7.1	(4.9)	厚さ 外: 淡黃褐色 内: 淡黃褐色	10YR6/2 10YR6/2	2mm以下の砂粒を少 量含む	
73	20	50	D3	上部割り A群	土製品	上鉢	厚さ 4.0	3.2	3.2	外: 淡白色 内: 淡白色	2.5Y8/2 2.5Y7/2	砂粒含まない	重量: 42.0g 一部黒度
73	21	50	D3	上部割り A群	土製品	上鉢	厚さ 3.8	3.2	3.0	外: 淡白色 内: 深灰色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm以下の白色砂粒を 微量含む	重量: 59.0g 一部黒度
73	22	50	D3	上部割り A群	土製品	上鉢	厚さ 4.2	3.2	3.2	外: 灰褐色 内: 灰褐色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	砂粒含まない	重量: 47.5g 一部黒度
74	1	53	D3	上部割り A群	土器部	甌				外: 灰白色 内: 灰白色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
74	2	53	D2	上部割り A群	土器部	甌	(18.0)			外: 灰白色 内: 灰白色	2.5Y7/2 10YR8/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	
74	3	53	D3	上部割り A群	土器部	甌または壺	(18.0)			外: に赤い 内: に赤い	7.5YR7/7 7.5YR6/4	3mm以下の砂粒を微量 含む	内外: 剥付着
74	4	53	D3	上部割り A群	土器部	甌	(15.6)			外: に赤い 内: に赤い	7.5YR6/3 7.5YR6/3	1mm以下の砂粒を多く 含む	外: 剥付着
74	5	51	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.6)			外: 淡白色 内: 淡白色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	5mm以下の白色砂粒を 多く含む	
74	6	51	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.4)			外: に赤い 内: に赤い	7.5YR7/3 7.5YR7/3	1mm以下の砂粒を多く 含む	内外: 剥付着
74	7	53	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.6)			外: に赤い 内: に赤い	10YR5/3 7.5YR7/4	1mm以下の砂粒を少 量含む	外: 剥付着
74	8	51	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.4)			外: 淡白色 内: 淡白色	7.5YR6/8 7.5YR7/8	5mm以下の白色砂粒を 多く含む	外: 剥付着
74	9	53	D2	上部割り A群	土器部	甌か	(19.5)			外: に赤い 内: に赤い	7.5YR7/4 7.5YR7/4	2mm以下の砂粒を微量 含む	
74	10	53	D3	上部割り A群	土器部	甌	(18.0)			外: 灰白色 内: 灰白色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	3mm以下の砂粒を微量 含む	
74	11	51	D3	上部割り A群	土器部	甌	(15.4)			外: 淡褐色 内: 淡褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	1mm以下の砂粒を微量 含む	
74	12	53	D2	上部割り A群	土器部	甌または壺	(27.5)			外: に赤い 内: に赤い	10YR7/3 10YR7/3	3mm以下の砂粒を行す る	外: 剥付着
74	13	51	D3	上部割り A群	土器部	甌か	(11.8)			外: に赤い 内: に赤い	10YR7/3 10YR8/3	3mm以下の砂粒を行す る	
75	1	51	D2	上部割り A群	土器部	甌	20.0			外: に赤い 内: 明灰褐色	5YR7/4 N3/	5mm以下の砂粒を少 量含む	口縁部以外二次利用か 熱熱により全変色
75	2	51	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.2)			外: 灰白色 内: 明赤褐色	10YR8/2 10YR7/3	1mm以下の砂粒を行す る	内外: 剥付着
75	3	51	D2	上部割り A群	土器部	甌	(19.0)			外: に赤い 内: に赤い	10YR7/4 7.5YR7/6	3mm以下の砂粒を行す る	外: 剥付着
75	4	52	D3	上部割り A群	土器部	甌	(17.0)			外: 灰白色 内: 淡黄褐色	2.5Y8/2 7.5YR8/3	3mm以下の砂粒を行す る	熱熱により変色 二次利用か

Rg	固有 番号	万能 番号	出上地番	出上地番	種類	品種	口耕 (mm)	高さ (mm)	底座 (mm)	色調	動土	参考	
75	5	53	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(16.0)			外：緑色 内：濃い緑色	2.5YR6/6 7.5YR7/4	5mm以下の砂粒を少量含む	外：爆付着
75	6	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	13.3			外：緑色 内：濃い緑色	7.5YR7/6 7.5YR7/4	2mm以下の白色砂粒を多く含む	外：爆付着
75	7	53	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(14.2)			外：濃い緑色 内：底紅色	10YR7/2 2.5YR1	1mm以下の砂粒を若干含む	内：爆付着
75	8	53	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(24.8)			外：緑色 内：底黃色	2.5Y7/3 2.5Y7/2	2mm以下の白色砂粒を微量含む	外：爆付着
75	9	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	16.4			外：濃い緑色 内：底紅色	7.5YR7/4 7.5YR7/3	3mm以下の砂粒を多く含む	外：煮焼きによる吹きこぼれ、爆付着
75	10	52	D2	上園取り A群	上耕器	葉		4.5		外：底紅色 内：底黒色	10YR8/2 10YR8/1	2mm以下の砂粒を多く含む	内：黒度 外：次利用の可能性
75	11	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(27.4)	22.4		外：底紅色 内：底黒色	5YR8/2 7.5YR8/1	2mm以下の砂粒を多く含む	内：黒度
75	12	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(14.0)			外：底紅色 内：底黒色	10YR8/1 10YR8/1	3mm以下の白色砂粒を多く含む	内：爆付着
75	13	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	(11.0)			外：底紅色 内：底黒色	7.5YR7/6 10YR7/4	5mm以下の白色砂粒を若干含む	内：爆付着
75	14	52	D2	上園取り A群	上耕器	葉	(12.0)			外：底青緑色 内：底黒色	2.5YR7/4 10YR7/3	6mm以下の砂粒を多く含む	内：爆付着
75	15	52	D3	上園取り A群	上耕器	葉	13.0	13.8		外：濃い緑色 内：底黒色	5YR7/4 2.5YR3/1	2mm以下の白色砂粒を多く含む	外：煮焼きによる吹きこぼれ、爆付着 内：被照により黒度
76	1	53	D3	上園取り A群	上耕器	瓶	(29.0)	28.6		外：濃い緑色 内：底黒色	10YR7/4 7.5YR7/6	4mm以下の砂粒を多く含む	外：一部黒度
76	2	54	D3	上園取り A群	上耕器	瓶	(24.4)	23.4	(6.0)	外：底黒色 内：底黒色	10YR8/6 10YR8/6	5mm以下の砂粒を若干含む	外：底部構造の様の可能性 内：爆付着
76	3	53	D3	上園取り A群	上耕器	瓶	(30.2)	25.3	(11.0)	外：濃い緑色 内：底黒色	10YR7/3 10YR8/3	3mm以下の砂粒を多く含む	外：爆付着
76	4	54	D2	上園取り A群	上耕器	瓶	(29.2)		(10.2)	外：濃い緑色 内：底黒色	10YR7/2 7.5YR7/6	4mm以下の砂粒を若干含む	外：一部黒度
76	5	54	D3	上園取り A群	上耕器	瓶	(22.3)			外：底青緑色 内：底黒色	7.5YR8/6 2.5YR6/2	2mm以下の砂粒を若干含む 把手の丸窓がっている	
76	6	54	D2	上園取り A群	上耕器	瓶				外：底紅色 内：底黒色	10YR5/4 10YR7/2	2mm以下の砂粒を多く含む	外：赤形 内：一部黒度
76	7	53	D3	上園取り A群	上耕器	罐		(22.0)		外：底青緑色 内：底黒色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	1mm以下の砂粒を少量含む	内：爆付着
76	8	54	D3	上園取り A群	上耕器	罐				外：底青緑色 内：底黒色	10YR8/6 10YR8/6	5mm以下の砂粒を少量含む	外：爆付着
77	1	54	D3	上園取り A群	上耕器	罐				外：底紅色 内：底黒色	5YR7/6 5YR7/6	3mm以下の砂粒を多く含む	内：爆付着
78	1	55	D6	上園取り C群	直進器	高杯	17.6	14.0	13.8	外：底紅色 内：底灰紅色	5Y3/1 2.5Y6/1	3mm以下の白色砂粒を多く含む	外：脚部2段直方2方通し、2.2米沈降
78	2	55	D6	上園取り C群	直進器	葉	(21.8)	32.4	6.4	外：底紅色 内：底灰紅色	2.5Y3/1 NO/1	2mm以下の砂粒を少量含む	外：脚部2段2.2米沈降に区画された波状文
78	3	55	D6	上園取り C群	上耕器	高杯	(18.0)	15.0	13.7	外：底青緑色 内：底黒色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を少量含む	内：赤形
78	4	55	D6	上園取り C群	上耕器	葉	(18.2)			外：底紅色 内：底灰紅色	10YR3/1 10YR4/2	5mm以下の白色砂粒を少く含む	
78	5	55	D6	上園取り C群	直進器	瓶	12.8		34.8	外：底紅色 内：底灰紅色	SPB5/1 SPB5/1	4mm以下の砂粒を少量含む	
78	6	55	D6	上園取り C群	直進器	罐				外：底紅色 内：底灰紅色	N7/ N4/	2mm以下の砂粒を少量含む	
78	7	55	D6	上園取り C群	上耕器	瓶	(25.4)		10.3	外：底青緑色 内：底黒色	10YR7/4 10YR7/4	4mm以下の砂粒を多く含む	外：2.2号赤、一部黒度
78	8	55	D6	上園取り C群	上耕器	高杯		8.5		外：濃い緑色 内：底灰紅色	7.5YR7/7 7.5YR7/7	1mm以下の砂粒を少量含む	内：赤形
78	9	55	D6	上園取り C群	上耕器	高杯	15.4			外：底紅色 内：底青緑色	2.5Y8/2 2.5Y8/5	2mm以下の砂粒を多く含む	内：赤形
78	10	55	D6	上園取り C群	上耕器	瓶	8.2	5.2	8.2	外：底青緑色 内：底灰紅色	10YR8/3 7.5YR8/3	4mm以下の白色砂粒を少く含む	外：底部木葉痕
79	1	56	D6	上園取り C群	上耕器	罐	29.8	33.7		外：底青緑色 内：底灰紅色	7.5YR7/4 10YR7/3	3mm以下の白色砂粒を多く含む	内：爆付着 前輪回転
79	2	56	D6	上園取り C群	共生土搬	葉	(26.0)			外：底紅色 内：底灰紅色	10YR4/1 10YR4/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む	外：1.5輪部 2.2米回転 振幅 制限
79	3	56	D6	上園取り C群	直進器	コップ形土搬	11.0	15.1	7.3 × 8.0	外：オーバーフロウ 内：オーバーフロウ	2.5GVS/1 2.5GVS/1	2mm以下の砂粒を若干含む	底部やや横円形
79	4	56	D6	上園取り C群	上耕器	高杯			(10.2)	外：底青緑色 内：底灰紅色	2.5Y4/1 2.5Y4/1	1mm以下の砂粒を若干含む	外：赤形
79	5	56	D6	上園取り C群	上耕器	葉	16.3	30.2		外：底紅色 内：底灰紅色	10YR8/2 10YR8/2	3mm以下の砂粒を多く含む	
79	6	56	D6	上園取り C群	上耕器	葉	17.4			外：底青緑色 内：底灰紅色	7.5YR8/8 7.5YR8/8	5mm以下の砂粒を多く含む	
80	1	56	D7	上園取り D群	直進器	罐	12.7	28.9		外：底紅色 内：底灰紅色	NS/1 NS/1	1mm程度の白色砂粒を多く含む	内：緑色の自然触着
80	2	56	D7	上園取り D群	直進器	罐	9.2	26.0		外：底紅色 内：底灰紅色	NS/1 NS/1	1mm以下の白色砂粒を幾量含む	
80	3	56	D7	上園取り D群	直進器	罐	9.3			外：底紅色 内：底灰紅色	NS/1 NS/1	2mm以下の白色砂粒を幾量含む	内：赤形
80	4	56	D7	上園取り D群	直進器	高杯	(20.0)	12.3	12.8	外：底紅色 内：底灰紅色	7.5YR7/4 10YR8/3	2mm以下の砂粒を微量含む	
80	5	56	D7	上園取り D群	直進器	罐				外：底紅色 内：底灰紅色	NS/1 NS/1	2mm以下の白色砂粒を幾量含む	内：赤形

Fig	器物番号	写真番号	出土地点	出土層位	種別	出目	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	出土	参考
85	1	58	D4	SD04	須恵器	坪(身)	(12.4)	4.3		外:灰白色 内:灰白色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を微量含む 内外:使用痕
85	2	58	D3	SD04	須恵器	坪(身)	(10.3)	3.3		外:灰白色 内:灰白色	10Y8/1 10Y8/1	1mm以下の砂粒を微量含む 内外:使用痕
85	3	58	D5	SD04	須恵器	蓋	(42.3)			外:灰白色 内:灰白色	N5/ N5/	1mm以下の砂粒を多く含む 外:頭部波状文
85	4	58	D7	SD04	土師器	坪	(15.3)	5.8		外:灰白色 内:に赤い褐色	2.5YR/2 2.5YR/3	3mm以下の砂粒を微量含む 外:一部底面 内外:赤彩
85	5	58	D4	SD04	土師器	蓋	(22.2)			外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色	10Y8/3 10Y8/3	3mm以下の砂粒を微量含む 外:縁付蓋
88	1	58		SD13	須恵器	壺	(27.2)			外:灰白色 内:灰白色	N6/ N6/	1mm以下の白色砂粒を微量含む
88	2	58		SD13	土製品	土器		幅3.2	厚さ2.7	黒色	N1.5/	4mm以下の砂粒を少額含む 重量:(30.0g) 空孔ありか
90	1	59	C2	SD06	須恵器	坪(蓋)	(16.2)			外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	4mm以下の砂粒を微量含む
90	2	59		SD06	須恵器	坪(身)	(13.5)	3.4		外:灰白色 内:灰白色	N8/ N8/	1mm以下の砂粒を微量含む
90	3	59	C2	SD06	須恵器	筒(身)				外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒を微量含む 扁平なボタン状
90	4	58	C3	SD06	須恵器	瓶				外:灰白色 内:灰白色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を微量含む 外:頭部沈線2条間に刺突文
90	5	59		SD06	土師器	高坪	(19.8)	14.9	(13.0)	外:赤色 内:灰白色	10Y8/2 2.5YR/2	2mm以下の砂粒を微量含む 内外:赤彩
90	6	58		SD06	土師器	高坪	(18.0)			外:灰白色 内:浅紫褐色	10Y8/2 10Y8/3	3mm以下の砂粒を少額含む 3mm以下の砂粒を少額含む
90	7	58		SD06	土師器	甕	(16.9)			外:に赤い黄褐色 内:相模	10Y7/4 2.5YR/2	3mm以下の砂粒を少額含む 3mm以下の砂粒を少額含む
90	8	59		SD06	土師器	甕	(18.5)			外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色	10Y8/4 10Y8/4	3mm以下の砂粒を少額含む 3mm以下の砂粒を少額含む
90	9	59	C2	SD06	土製品	鋸輪車	(4.6)	直径 (D.2)	厚さ (D.2)	浅黄褐色	10Y8/3 2.5YR/2	5mm以下の白色砂粒を少額含む 重量:(26.5g)
90	10	59	C2	SD06	土製品	土器	長2.5 幅5.1	幅3.1	厚さ3.1	に赤い褐色	7.5YR/4	1mm以下の砂粒を微量含む 一次焼成窓ける
90	11	59	C2	SD06	土製品	土器	長2.5 幅4.2	幅4.2	厚さ3.2	に赤い褐色	7.5YR/3	3mm以下の砂粒を少額含む 一次焼成窓ける
90	12	59	C2	SD06	土製品	土器	長2.5 幅4.1	幅4.1	厚さ4.0	浅黄褐色	10Y8/4 2.5YR/2	砂粒含まない 孔径:0.4cm 重量:78.09g 一次焼成窓ける
90	13	59	C2	SD06	土製品	土器	長2.5 幅6.2	幅4.2	厚さ3.7	褐色	5YR/2	2mm以下の白色砂粒を少額含む 孔径:0.5cm 重量:88.67g 一次焼成窓ける
94	1	59	F5	SD01	須恵器	坪(高台付)				外:灰白色 内:朱色	N6/ N6/	1mm以下の白色砂粒を微量含む
94	2	59	F4	SD01	須恵器	壺				外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒を少額含む
94	3	59	F5	SD01	土師器	甕	10.5			外:に赤い黄褐色 内:に赤い黄褐色	10Y8/4 10Y8/4	1mm以下の白色砂粒を少額含む 1mm以下の白色砂粒を少額含む
98	1	60		SK05	須恵器	坪(蓋)	(11.4)	天井径 7.4	厚さ 3.0	灰白色 内:灰白色	5YR/1 N6/	0.5mm以下の白色砂粒を少額含む
98	2	60		SK05	須恵器	高坪				外:オリーブ灰白色 内:オリーブ灰白色	2.5G/1 2.5G/1	1mm以下の砂粒を微量含む 外:長方形2方通かし
98	3	60		SK05	須恵器	壺	(11.8)			外:和田色 内:和田色	3YR/4/1 10Y8/1	1mm以下の白色砂粒を少額含む 外:頭部波状文
98	4	60		SK05	土師器	甕	(20.6)			外:褐色 内:褐色	5YR/5 3.5YR/8	3mm以下の砂粒を多く含む 3.5YR/8
100	1	60		SK07	土製品	土器	長さ 6.2	幅 4.6	厚さ 3.0	浅褐色	2.5Y/7/4	1mm以下の砂粒を少額含む 孔径:0.6cm 重量:78.6g 一塗墨度
103	1	59	P316	土師器	圓腹坪	(15.4)				外:浅褐色 内:浅褐色	2.5Y/7/3 2.5Y/7/3	1mm以下の砂粒を微量含む 1mm以下の砂粒を微量含む
103	2	59	P316	土師器	圓型蓋器					外:浅褐色 内:浅褐色	10Y8/3 10Y8/3	1mm以下の砂粒を微量含む 1mm以下の砂粒を微量含む
104	1	60		P37	須恵器	直口壺	(10.3)			外:灰白色 内:灰白色	N8/ N7/	1mm以下の砂粒を含む 孔径:0.4cm
104	2	60		P105	須恵器	坪(蓋)	(10.6)	天井部 (5.4)	厚さ 3.2	外:灰白色 内:灰白色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒を少額含む 内:使用痕
104	3	60		P105	土師器	甕	(23.8)			外:に赤い褐色 内:相模	7.5YR/5/4 5YR/8	4mm以下の砂粒を多く含む 5YR/8
104	4	60		P117	土師器	甕	(25.7)			外:明赤褐色 内:明赤褐色	5YR/5 5YR/8	3mm以下の砂粒を多く含む 5YR/8
104	5	60		P153	兔生土器	甕または壺				外:褐色 内:淡黄褐色	7.5YR/7/6 7.5YR/8/4	3mm以下の砂粒を多く含む 7.5YR/8/4
104	6	60		P177	土師器	高坪	(15.8)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	7.5YR/3/3 7.5YR/3/3	1mm以下の砂粒を少額含む 1mm以下の砂粒を少額含む
104	7	60		P187 P188	須恵器	坪(蓋)	(15.8)			外:に赤い黄色 内:灰白色	2.5Y/5/3 N7/3	1mm以下の砂粒を含む 1mm以下の砂粒を含む
104	8	60		P196	土師器	甕	(9.0)			外:明赤褐色 内:明赤褐色	5YR/5 5YR/8	4mm以下の白色砂粒を多く含む 5YR/8
104	9	60		P233	土師器	高坪	(9.0)			外:淡黄褐色 内:淡黄褐色	10Y8/3/1 10Y8/3/1	1mm以下の砂粒を含む 10Y8/3/1
105	1	61	D4	須恵器より下剥	須恵器	坪(蓋)	(15.8)	4.8		外:灰白色 内:灰白色	2.5Y/7/1 2.5Y/7/1	2mm以下の砂粒を少額含む 内外:赤彩
105	2	61	D5	須恵器より下剥	須恵器	坪(蓋)	(15.8)	3.9		外:灰白色 内:灰白色	N5/ N5/	2mm以下の砂粒を微量含む 内外:使用痕

Rg	固有番号	万能角	出上地點	出上地層	樹種	口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	色調	歯士	備考	
105	3	61	D5	羽根野上り下層	赤松上層	費	(18.0)	19.2	(5.8)	外: 棕色 内: 淡い褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/4	2mm以下の砂粒を多く含む 内外: 塗材着
105	4	61	F7	羽根野上り下層	上部層	高杯	(19.7)	14.0	(13.0)	外: 深緑褐色 内: 深緑褐色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	3mm以下の砂粒を多く含む 内外: 赤茶
105	5	61	C6	羽根野上り下層	土製品	手ぬね上層	(4.0)	3.5		外: 棕色 内: 淡い褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/3	1mm以下の砂粒を少量含む 外: 一部黒度
105	6	61	C4	羽根野上り下層	土製品	手ぬね上層				外: 深緑褐色 内: 深緑褐色	10YR5/3 10YR4/1	1mm以下の砂粒を少量含む 内外: 塗材着
105	7	61	D4	羽根野上り下層	土製品	罐	(25.0)			外: 深緑褐色 内: 深緑褐色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	2mm以下の砂粒を多く含む 内外: 塗材着
107	1	61	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(16.4)	3.6		外: 深褐色 内: 淡白色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む 内外: 塗材着
107	2	61	D5	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(14.5)	3.3		外: 深灰色 内: 淡白色	5P5/1 5P5/1	5mm以下の白色砂粒を多く含む 内外: 使用歴
107	3	61	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(14.4)	4.8		外: 深褐色 内: 淡白色	2.5Y6/1 2.5Y6/1	2mm以下の砂粒を若干含む 内外: 塗材着
107	4	61	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(13.9)	4.1	8.8	外: 深褐色 内: 淡白色	NG/ NG	1mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	5	61	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(15.0)	3.2		外: 淡白色 内: 淡白色	NW/ SY7/1	3mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	6	61	C4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(13.1)	3.5	9.0	外: 深灰色 内: 淡白色	10BG6/1 10BG6/1	2mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
107	7	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(11.9)			外: 深灰色 内: 淡白色	5P5/1 5P5/1	2mm以下の砂粒を若干含む 内外: 塗材着
107	8	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (蓋)	(11.9)	3.9	5.6	外: 淡白色 内: 淡白色	SY7/1 SY7/1	砂粒含まない 内外: 使用歴
107	9	63	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	蓋	(8.3)	2.9		外: 淡白色 内: 淡白色	NW/ SY6/8	1mm以下の砂粒を少量化 宝瓶つまみ
107	10	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (身)	(12.4)	3.5	8.0	外: 深褐色 内: 淡白色	NS/ NS	4mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	11	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	3F (身)	9.6	3.7	6.2	外: 深褐色 内: 淡白色	NS/ NS	1mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 塗材着
107	12	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	片 (蓋付)	(15.6)			外: 深褐色 内: 淡白色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	3mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
107	13	63	D5	第VI、Ⅵ層	直樹層	片 (蓋付)				外: 深褐色 内: 淡白色	NW/ NW	2mm以下の砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	14	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯	(13.4)	8.1	(11.2)	外: 深灰色 内: 淡灰色	SPB6/1 SPB6/1	1mm以下の白色砂粒を多く含む 外: 頭部 長方形三方透かし 内: 使用歴
107	15	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯	(11.7)			外: 深灰色 内: 淡灰色	SPB6/1 SPB6/1	1mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	16	62	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯	(10.9)	11.3	10.8	外: 深褐色 内: 淡褐色	NG/ N7/7	2mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 使用歴
107	17	63	D5	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯				外: 深褐色 内: 淡褐色	NS/ NS	3mm以下の砂粒を少量化 外: 頭部 深緑2条間に斜刺文
107	18	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯				外: 深褐色 内: 淡褐色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	3mm以下の砂粒を少量化 外: 頭部 二方斜状透かし 内: 使用歴
107	19	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	高杯				外: 深褐色 内: 淡褐色	NG/ N7/7	砂粒含まない 外: 頭部 二方斜状透かし
107	20	63	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	蘿	(14.0)			外: 深褐色 内: 淡褐色	N4/ N5/5	砂粒含まない 外: 1頭部 横状工具による縦方向の直線文
107	21	62	C4	第VI、Ⅵ層	直樹層	蘿				外: 深褐色 内: 淡褐色	NG/ SPB7/1	1mm以下の白色砂粒を少量化 外: 回頭2葉沈降間に斜刺文
107	22	62	D4	第VI、Ⅵ層	直樹層	苔頭壺				外: 深褐色 内: 淡褐色	N4/ N4/7	1mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
107	23	61	D6	第VI、Ⅵ層	直樹層	コップ形上層	12.5	16.9	8.6	外: 深オリーブ色 内: 深オリーブ色	7.5Y6/2 7.5Y6/2	2mm以下の白色砂粒を少量化 内外: 厚く自然転かせる
107	24	63	D6	第VI、Ⅵ層	直樹層	裏	(22.0)			外: 深褐色 内: 淡褐色	NS/ 7.5Y5/1	3mm以下の砂粒を少量化 打ち欠きか
107	25	63	D3	第VI、Ⅵ層	直樹層	把手 (提箱)				外: 深褐色 内: 淡褐色	NS/ NS/5	1mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
108	1	62	D4	第VI、Ⅵ層	土師器	坪	(13.0)	5.4	7.2	外: 淡白色 内: 淡白色	10YR6/1 7.5YR6/2	2mm以下の砂粒を少量化 2mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
108	2	62	C3	第VI、Ⅵ層	土師器	坪	(13.6)	5.8	6.0	外: 深緑褐色 内: 深緑褐色	7.5YR6/3 2.5YR6/2	1mm以下の砂粒を多く含む 内外: 赤茶
108	3	64	D4	第VI、Ⅵ層 (黑色土器)	土師器	坪				外: 深緑褐色 内: 黒褐色	10YR4/2 10YR3/1	0.5mm以下の砂粒を若干含む 内外: 保護吸水頭部(坪身の模様)
108	4	64	D4	第VI、Ⅵ層	土師器	坪 (蓋付)				外: 淡白色 内: 淡白色	2.5Y8/1 2.5Y8/2	1mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
108	5	62	D3	第VI、Ⅵ層	土師器	低腹坪				外: 淡白色 内: 淡白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	2mm以下の砂粒を少量化 内外: 塗材着
108	6	62	D6	第VI、Ⅵ層	土師器	高杯	(17.4)	11.7	12.0	外: 淡褐色 内: 淡褐色	10YR5/8 10YR5/2	1mm以下の砂粒を少量化 内外: 赤茶
108	7	62	E4	第VI、Ⅵ層	土師器	高杯	(16.0)	11.5	8.4	外: 深緑褐色 内: 深緑褐色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	1mm以下の砂粒を多く含む 内外: 赤茶
108	8	62	D4	第VI、Ⅵ層	土師器	高杯	(17.4)		10.7	外: 淡白色 内: 淡褐色	2.5Y8/1 10RG6/8	3mm以下の砂粒を少量化 内外: 赤茶
108	9	62	D5	第VI、Ⅵ層	土師器	高杯				外: 淡白色 内: 淡褐色	10YR6/8 10YR6/2	2mm以下の砂粒を少量化 内外: 赤茶
108	10	64	D3	第VI、Ⅵ層	土師器	蹄	9.8	5.2	6.4	外: 淡白色 内: 淡褐色	7.5YR8/2 7.5YR8/1	4mm以下の砂粒を若干含む 被熱により劣化
108	11	64	D4	第VI、Ⅵ層	土師器	手ぬね上層	(8.2)			外: 淡褐色 内: 棕色	SYR6/8 SYR6/8	2mm以下の砂粒を若干含む 内外: 被熱

Fg	面積 面積	面積 面積	出土 地点	出土 部位	種類	形態	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	出土	参考
108	12	64	D5	第M、壁壇	土製品	小切妻 または直	(5.4)	8.1		外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	4cm以下の砂利を多く含む
108	13	63	D3	第M、壁壇	土製品	手捏ね土器	(5.4)	4.5		外：灰・灰黄褐色 内：灰・灰黄褐色	10YR7/3 10YR7/3	1cm以下の砂利を少量含む
108	14	62	E4	第M、壁壇	土製品	手捏ね土器				外：灰・灰黄褐色 内：灰・灰黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	1cm以下の砂利を若干含む
108	15	64	D3	第M、壁壇	土製品	甕	(20.2)			外：灰・灰・褐色 内：褐色	5YR7/4 5YR7/4	4cm以下の砂利を多く含む
108	16	64	C6	第M、壁壇	土製品	煮または瓶	(16.8)			外：灰褐色 内：灰・灰黄褐色	2.5YV6/1 10YR7/2	1cm以下の砂利を微量含む
108	17	64	C2	第M、壁壇	土製品	甕	(17.1)			外：灰・灰黄褐色 内：灰・灰黄褐色	10YR6/4 10YR5/3	1cm以下の砂利を少額含む
108	18	64	D3	第M、壁壇	土製品	甕	(16.4)			外：灰白色 内：灰白色	2.5YV6/2 2.5YV6/2	1cm以下の砂利を微量含む
108	19	64	D3	第M、壁壇	土製品	甕	(15.2)			外：赤褐色 内：灰白色	10YR8/8 2.5YR8/2	1cm以下の砂利を微量含む
108	20	64	D3	第M、壁壇	土製品	甕	(15.6)			外：浅黃褐色 内：淡黃褐色	7.5YR8/4 10YR8/3	4cm以下の砂利を微量含む
108	21	63	C2	第M、壁壇	土製品	甕	(18.0)	24.0		外：褐色 内：褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	5cm以下の砂利を多く含む
108	22	64	D4	第M、壁壇	土製品	煮または瓶	(23.0)			外：灰褐色 内：灰褐色	10YR4/2 10YR4/1	3cm以下の砂利を少額含む
108	23	63	C2	第M、壁壇	土製品	甕	(18.6)			外：灰・灰褐色 内：褐色	7.5YR7/4 7.5YR6/6	2cm以下の白色砂利を多く含む
108	24	63	C2	第M、壁壇	土製品	甕	21.3			外：黑褐色 内：褐色	7.5YR3/1 7.5YR7/6	7cm以下の砂利を多く含む
109	1	65	D4	第M、壁壇	土製品	瓶	(26.6)			外：浅黃褐色 内：灰白色	10YR8/3 10YR8/2	3cm以下の砂利を少額含む
109	2	65	D4	第M、壁壇	土製品	瓶	(23.4)	21.6	(10.0)	外：灰・灰褐色 内：灰・灰褐色	10YR7/2 10YR7/2	6cm以下の砂利を多く含む
109	3	65	D4	第M、壁壇	土製品	瓶	(23.4)	21.6		外：灰白色 内：淡褐色	7.5YR9/2 5YR8/4	5cm以下の砂利を多く含む
109	4	65	D4	第M、壁壇	土製品	土製文部	(10.8)	(11.2)		明赤褐色	2.5YR5/8	1cm以下の砂利を少額含む
109	5	65	E側溝	第M、壁壇	土製品	土製文部		17.0	13.6	明赤褐色	2.5YR5/6	1cm以下の砂利を多く含む
109	6	65	D4	第M、壁壇	土製品	土製文部		14.9		灰白色	10YR8/8	2cm以下の砂利を行子含む
110	1	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 4.8	幅 4.0	厚さ 3.0	黄褐色	10YR8/8	1cm以下の砂利を行子含む
110	2	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 4.7	幅 3.7	厚さ 2.4	灰白色	2.5YR1/1	1cm程度の砂利を行子含む
110	3	65	C3	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 5.5	幅 3.9	厚さ 2.8	灰白色	7.5YR8/1	1cm程度の砂利を行子含む
110	4	65	C3	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 5.2	幅 4.0	厚さ 2.3	に赤い褐色	7.5YR7/4	1cm程度の砂利を行子含む
110	5	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 4.6	幅 4.2	厚さ 2.5	に赤い褐色	7.5YR7/3	2cm以下の白色砂利を行子含む
110	6	65	D5	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 6.0	幅 4.0	厚さ 2.8	灰白色	2.5YR8/2	砂利含まない
110	7	65	D6	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 6.2	幅 3.3	厚さ 2.3	灰白色	10YR8/2	1cm以下の砂利を若干含む
110	8	65	E4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 5.5	幅 3.0	厚さ 2.6	に赤い褐色	10YR7/3	1cm程度の砂利を行子含む
110	9	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.5	厚さ 3.0		浅黃褐色	7.5YR8/4	1cm程度の砂利を行子含む
110	10	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 2.8	厚さ 2.6		灰白色	10YR8/2	1cm以下の砂利を行子含む
110	11	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶内腹	深さ 5.7			に赤い褐色	10YR7/3	1cm程度の砂利を微量含む
110	12	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 8.2	幅 5.7	厚さ 1.8	灰褐色	2.5YR8/3	1cm以下の砂利を行子含む
110	13	65	C4	第M、壁壇	土製品	土瓶		幅 4.8	厚さ 1.5	暗灰褐色	N3/	砂利含まない
110	14	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	長さ 5.5	幅 4.5	厚さ 1.2	灰白色	2.5YR8/2	砂利含まない
110	15	65	D5	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 5.2	幅 4.8	厚さ 1.1	灰白色	7.5YR8/2	砂利含まない
110	16	65	C4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 4.8	厚さ 1.1		に赤い褐色	5YR8/4	0.5cm以下の砂利を若干含む
110	17	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 4.2	厚さ 1.5		灰白色	10YR8/2	0.5cm以下の砂利を行子含む
110	18	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.3	厚さ 1.3		灰白色	2.5YR8/2	砂利含まない
110	19	65	D4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.3	厚さ 1.3		淡黃褐色	2.5YR8/3	1cm以下の砂利を多く含む
110	20	65	E4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.4	厚さ 1.3		灰白色	10YR8/2	1cm以下の白色砂利を多く含む
110	21	65	E4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.0	厚さ 2.8		に赤い褐色	10YR7/3	1cm以下の白色砂利を多く含む
110	22	65	E4	第M、壁壇	土製品	土瓶	幅 3.2	厚さ 3.1		灰褐色	2.5YR7/2	2cm以下の砂利を行子含む

Rg	固有番号	万能	出土地點	出土層位	樹齢	断面	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	出土	備考	
110	23	65	D4	第VI-VII层	土器部	土器部	2.3	厚さ 1.9	灰白色	2.5YR8/1	1mm程度の砂粒を若干含む	孔径：0.5cm 重量：14.0g	
113	1	68	C6	第VI-VII层 N層	直筒器	环(蓋)	(14.0)			S7Y/1 S7Y/2	1mm以下の砂粒を微量含む	内：使用痕	
113	2	68	F7	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)	9.4	3.5	尖脚部 4.2	外：青灰色 内：青白色	SPB5/1 SPB5/1	1mm以下の砂粒を若干含む	内：天井部「×」へウ記号 内：使用痕
113	3	68	D3	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)	(11.4)	5.95	外：青灰色 内：青白色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	砂粒含まない		
113	4	68	C7	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)	11.4			NG/ NG/	4mm以下の砂粒を少量含む	内：使用痕 つまみ灰鉢	
113	5	68	C7	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)	(14.7)			SPB7/1 SPB7/1	3mm以下の砂粒を少量含む	内：使用痕 つまみ灰鉢	
113	6	68	D3	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)	15.3	2.9	外：青灰色 内：灰白色	10YR7/1 10YR7/3	3mm以下の砂粒を少量含む	幅延つまみ (つまみ径：4.5cm)	
113	7	68	C5	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)				NG/ NG/	1mm以下の砂粒を少量含む	外：天井部「+」へウ記号 幅延つまみ (つまみ径：4.6cm)	
113	8	68	F5	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)				7.5Y6/1 7.5Y6/1	3mm以下の砂粒を微量含む	幅延つまみ (つまみ径：4.1cm)	
113	9	68	D5	第VI-VII层	直筒器	环(蓋)				7.5Y5/2 7.5B6/2	1mm以下の砂粒を微量含む	幅延つまみ (つまみ径：7.4cm)	
113	10	68	D5	第VI-VII层	直筒器	蓋	(11.0)	3.1	尖脚部 1.9	10YR7/3 5B6/1	1mm以下の砂粒を微量含む	打ち欠き	
113	11	68	C6	第VI-VII层	直筒器	环(身)	(11.8)	3.8	外：青灰色 内：青灰色	SPB6/1 SPB6/1	1mm以下の砂粒を多く含む		
113	12	68	D6	第VI-VII层	直筒器	環脚H (高台付)	(16.7)	4.6	8.8	外：青灰色 内：青灰色	NG/ NG/	1mm以下の白色砂粒を少量化含む	内：使用痕
113	13	68	C7	第VI-VII层	直筒器	环(高台付)			(8.8)	7.5Y5/1 7.5Y5/1	1mm以下の砂粒を微量含む		
113	14	68	E4	第VI-VII层	直筒器	环(高台付)			(8.6)	7.5Y6/1 7.5Y6/1	1mm以下の白色砂粒を微量含む		
113	15	68	D6	第VI-VII层	直筒器	环(高台付)			(9.0)	外：青灰色 内：青灰色	NG/ NG/	1mm以下の白色砂粒を微量含む	内：漆附着
113	16	68	D6	第VI-VII层	直筒器	环	(13.6)	4.8	6.0	外：深褐色 内：深褐色	5YR7/1 2.5YR6/1	1mm以下の砂粒を少量含む	
113	17	68	G6	第VI-VII层	直筒器	环			(9.2)	外：青灰色 内：青灰色	NG/ NG/	2mm以下の砂粒を少量化含む	内：使用痕
113	18	67	C5	第VI-VII层	直筒器	环	(14.3)	7.5	9.0	外：青灰色 内：青灰色	NG/ NG/	1mm以下の砂粒を少量化含む	
113	19	68	C6	第VI-VII层	直筒器	环			(7.0)	外：青灰色 内：青灰色	5B5/1 5B5/1	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
113	20	68	D6	第VI-VII层	直筒器	高环				NG/ NG/	砂粒含まない	内：使用痕	
113	21	68	F6	第VI-VII层	直筒器	高环				5Y7/4 2.5Y7/4	1mm以下の砂粒を少量化含む	外：胴部3差沈継間に刻文	
113	22	68	F5	第VI-VII层	直筒器	罐				NG/ NT/	1mm以下の砂粒を少量化含む	外：頭部 刻文、2差沈継	
113	23	67	F6	第VI-VII层	直筒器	罐				5Y6/1 5Y6/1	3mm以下の砂粒を少量化含む	外：円形孔	
113	24	67	G7	第VI-VII层	直筒器	壺	12.0	22.2		外：圓切口 内：圓切口	2.5Y7/1 2.5Y7/1	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
113	25	68	D5	第VI-VII层	直筒器	壺	(19.2)			外：青灰色 内：青灰色	7.5Y3/1 7.5Y3/1	1mm以下の砂粒を少量化含む	外：頭部2差2差沈継に区画された刻文
113	26	68	F6	第VI-VII层	直筒器	壺	(20.4)			外：青灰色 内：青灰色	SPB6/1 SPB5/1	1mm以下の砂粒を少量化含む	外：1差沈継-頭部 刻文変、2差沈継 頭部に刻印された数
114	1	69	F6	第VI-VII层	泡生土器	甕			(11.0)	外：オーバーブラック 内：青褐色	5Y3/1 10YR6/6	3mm以下の砂粒を微量含む	
114	2	69	F7	第VI-VII层	泡生土器	甕				外：深褐色 内：青褐色	10YR9/3 10YR9/6	5mm以下の砂粒を少量化含む	外：頭部 指紋捺痕文
114	3	67	F6	第VI-VII层	泡生土器	甕				外：深褐色 内：青褐色	10YR8/6 10YR8/6	5mm程度の砂粒を少量化含む	外：1頭部 刻文変を施す浮文、3条回線文 頭部付近刻文变 刻部 刻文変、頭部 刻文変
114	4	67	F7	第VI-VII层	上部器	甕	11.6	5.4		外：青灰色 内：青灰色	2.5Y8/6 2.5Y8/6	1mm以下の砂粒を微量含む	内：頭部 外：赤色
114	5	69	F7	第VI-VII层	上部器	甕	(11.4)		(8.0)	外：青灰色 内：青灰色	10YR7/3 10YR7/3	1mm以下の砂粒を微量含む	外：底部 黑色付着物
114	6	69	C5	第VI-VII层	上部器	環嘴罐	(9.8)			外：青灰色 内：青灰色	NG/ NG/	1mm以下の砂粒を微量含む	外：一部黒化 黒変、黑色物質付着
114	7	67	E8	第VI-VII层	上部器	高环			(10.0)	外：深褐色 内：深褐色	10YR8/4 2.5Y8/3	1mm以下の砂粒を微量含む	内：頭部 外：赤色
114	8	67	F6	第VI-VII层	上部器	高环				外：深褐色 内：深褐色	10YR7/6 10YR7/8	3mm以下の砂粒を微量含む	内：頭部 外：赤色
114	9	67	F6	第VI-VII层	上部器	小形丸底甕	7.4	8.7	1.2	外：青灰色 内：青灰色	7.5Y8/6 7.5Y8/8	3mm以下の砂粒を少量化含む	外：一部黒化 黒変、黑色物質付着
114	10	67	F6	第VI-VII层	上部器	小形丸底甕	(8.8)			外：青灰色 内：青灰色	7.5Y8/7/4 7.5Y8/7/4	3mm以下の砂粒を少量化含む	打ち欠き
114	11	69	F6	第VI-VII层	上部器	小形丸底甕			(2.4)	外：青灰色 内：青灰色	7.5Y8/6/6 7.5Y8/7/8	1mm以下の砂粒を少量化含む	
114	12	67	G7	第VI-VII层	土器部	不明			6.5	外：青灰色 内：黑褐色	7.5Y8/6/6 7.5Y8/3/1	2mm以下の砂粒を若干含む	外：一部黒化 黒変、黑色
114	13	69	F5	第VI-VII层	土器部	甕			(4.8)	外：青灰色 内：青褐色	10YR7/4 10YR7/4	1mm以下の砂粒を微量含む	
114	14	69	F8	第VI-VII层	土器部	甕	(17.8)			外：青灰色 内：青褐色	10YR7/4 7.5Y8/7/6	1mm以下の砂粒を微量含む	

Fig	器物 番号	直高 （mm）	出土 地点	出土 経緯	種類	用途	口径 （mm）	高さ （mm）	底径 （mm）	成形 方法	色調	出土	参考	
114	15	67	F7	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土器	甕	14.0				外：黄褐色 内：黄褐色	7.5YR7/8 7.5YR7/8 含む	5mm以下の砂利を少量 含む	外：燐灰岩
114	16	67	C2	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土器	甕	(15.4)				外：明赤褐色 内：明赤褐色	2.5YR5/8 5YR5/8 含む	5mm以下の砂利を少量 含む	
114	17	69	C2	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土器	甕	(13.7)				外：褐色 内：褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6 含む	1mm以下の砂利を少量 含む	
114	18	67	E4	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土器	甕	(20.8)				外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2 含む	1mm以下の砂利を少量 含む	
114	19	67	E8	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土器	甕		(10.0)			外：黄褐色 内：褐色	10YR8/6 7.5YR8/6 含む	1mm以下の砂利を少量 含む	外：穿孔 内：黒変
115	1	67	E4	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土質支拂		14.2			外：灰白色 内：浅黃褐色	10YR8/2 10YR8/3 含む	5mm以下の砂利を少量 含む	刷毛 質造孔
115	2	69	F7	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂	長さ 6.5	幅 4.7	厚さ 2.1	灰白色		10YR8/2 10YR8/2 含む	1mm以下の砂利を若干 含む	孔径：0.5cm 重量：145.4g 二次焼成受け黒変
115	3	69	D6	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂	長さ 6.4	幅 3.1	厚さ 2.2	褐色		5YR7/6 5YR7/6 含む	1mm以下の砂利を微量 含む	孔径：0.6cm 重量：42.51g
115	4	69	F6	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂	長さ 4.5	幅 (3.9)	厚さ 2.7	浅黃褐色		10YR8/3 砂粒含まない	1mm以下の砂利を若干 含む	孔径：0.5cm 重量：31.0g
115	5	69	F7	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂		幅 4.5	厚さ 2.0	褐色		7.5YR7/6 2mm以下の白色砂利を 少額含む	孔径：0.7cm 重量：79.5g	
115	6	69	D5	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂		幅 3.8	厚さ 1.6	褐色		5YR7/4 1mm程度の白色砂利を 多く含む	2孔、孔径：0.4 × 0.3cm 重量：58.64g 二次焼成受け劣化	
115	7	69	E5	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂	長さ 7.5	幅 5.1	厚さ 2.1	灰白色		10YR8/2 10YR8/2 含む	1mm程度の砂利を若干 含む	孔径：0.5cm 重量：47.12g 二次焼成受け劣化
115	8	69	D5	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂		幅 4.1	厚さ 1.5	褐色		5YR7/4 1mm程度の白色砂利を 多く含む	1mm程度の白色砂利を 多く含む	孔径：0.5cm 重量：35.47g 二次焼成受け劣化
115	9	69	D5	第Ⅴ・Ⅵ・ DC層	土製品	土拂		幅 1.9	厚さ 1.0	褐色		5YR7/4 1mm程度の白色砂利を 多く含む	1mm程度の白色砂利を 多く含む	孔径：0.5cm 重量：19.0g 二次焼成受け劣化
116	1	71	D7	第Ⅵ層	須恵器	円（蓋）	(13.8)				外：灰白色 内：灰白色	N8/ N6/ 含む	5mm以下の砂利を微量 含む	つまみ欠け
116	2	71	C6	第Ⅵ層	須恵器	円（蓋）					外：灰白色 内：明黄色	N7/ SP8/7/ 含む	輪状つまみ（つまみ径：5.1cm） 使用痕	
116	3	71	C5	第Ⅵ層	須恵器	円（蓋）					外：明青灰色 内：明黄色	SP9E/1 SP9S/5/ 含む	輪状つまみ（つまみ径：4.8cm） 使用痕	
116	4	71	B3	第Ⅵ層	須恵器	円（蓋）					外：明赤色 内：灰赤色	SP8/4/ SP8/5/ 含む	2孔、孔径：0.4 × 0.3cm 重量：47.12g 輪状つまみ（つまみ径：6.2cm） 使用痕	
116	5	71	G7	第Ⅵ層	須恵器	円（身）	(10.0)				外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N5/ 含む	1mm程度の白色砂利を 少額含む	外：底部 板状汎痕 使用痕
116	6	71	D3	第Ⅵ層	須恵器	円（身）	(12.4)				外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/ 含む	2mm以下の砂利を微量 含む	
116	7	71	E7	第Ⅵ層	須恵器	直					外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/ 含む	砂粒含まない	外：底部 2条沈痕間に状文
116	8	71	C5	第Ⅵ層	土器	土器（ 注口上部）					外：明青灰色 内：灰褐色	10YR8/2 10YR8/2 含む	2mm程度の白色砂利を 多く含む	
116	9	71	C6	第Ⅵ層	土製品	土拂	長さ 5.7	幅 5.0	最大幅 2.8	最大厚 2.8	内：灰褐色	7.5YR8/3 2mm以下の白色砂利を 多く含む	2mm以下の白色砂利を 多く含む	孔径：0.6 × 0.5cm 重量：75.3g
116	10	71	D5	第Ⅵ層	土製品	土拂	長さ 5.1	幅 3.5	最大幅 2.8	最大厚 2.8	内：灰褐色	7.5YR8/2 1mm以下の砂利を微量 含む	2孔、孔径：0.3cm 重量：38.37g 二次焼成受け劣化	
116	11	71	C5	第Ⅵ層	土製品	土拂		幅 4.0	厚 1.8		内：灰褐色	10YR8/5 1mm程度の白色砂利を 多く含む	1mm程度の白色砂利を 多く含む	孔径：0.5cm 重量：67.03g 二次焼成受け劣化
116	12	71	D6	第Ⅵ層	土製品	土拂		幅 1.3	厚 1.0		内：明褐色	7.5YR8/6 1mm程度の白色砂利を 多く含む	1mm程度の白色砂利を 多く含む	孔径：0.6cm 重量：16.63g 二次焼成受け劣化
116	13	71	F5	第Ⅵ層	土製品	土拂	長さ 6.9	幅 2.7	最大幅 2.8	最大厚 2.8	内：灰褐色	7.5YR8/3 1mm以下の白色砂利を 多く含む	1mm以下の白色砂利を 多く含む	孔径：0.6 × 0.7cm 重量：33.5g 二次焼成受け劣化
116	14	71	D6	第Ⅵ層	土製品	土拂	長さ 4.0	幅 1.6	厚 1.5	厚 1.5	内：灰褐色	7.5YR8/1 砂粒含まない	1mm以下の砂利を若干 含む	孔径：0.5cm 重量：8.0g
116	15	71	D4	第Ⅵ層	土製品	土拂		幅 2.3	厚 2.1		内：灰褐色	7.5YR8/3 1mm程度の砂利を若干 含む	1mm以下の砂利を若干 含む	孔径：0.5cm 重量：21.33g 二次焼成受け劣化
116	16	71	F7	第Ⅵ層	土製品	土拂		幅 1.8	厚 1.8		内：灰白色	10YR8/1 1mm以下の砂利を微量 含む	1mm以下の砂利を微量 含む	孔径：0.8 × 0.6cm 重量：12.5g 二次焼成受け劣化
116	17	70	G5	第Ⅵ層	磁器	白磁皿					透明釉	5Y7/1	灰白色	外：底部 輪削ぎ 内壁：輪削痕 14 ~ 15世紀
116	18	70	D3	第Ⅵ層	磁器	白磁皿					透明釉	2.5Y8/1	灰白色	D面 底面：中国
116	19	70	C5	第Ⅵ層	磁器	白磁皿	(15.6)				透明釉	10Y8/1	灰白色	内壁 底面：中国
116	20	70	C5	第Ⅵ層	磁器	青磁皿	(15.0)				青磁釉	N7/	灰白色	文様：模様入り 洋耕文 底面：施釉系
116	21	70	G6	第Ⅵ層	磁器	青磁皿	(15.8)				青磁釉	5Y8/1	灰白色	底面：施釉系
116	22	70	G6	第Ⅵ層	磁器	青磁碗		(11.0)			透明釉	5Y8/1	灰白色	文様：透彫文、二重脚線 底面：施釉系
116	23	70	E5	第Ⅵ層	磁器	青磁盤					青磁釉	N8/	灰白色	文様：透彫文及び其文 底面：施釉系
116	24	70	E8	第Ⅵ層	磁器	青花皿					透明釉・青料	白色	底面：施釉系	
116	25	70	E8	第Ⅵ層	磁器	丸皿	(10.3)	2.0	5.6	所拂	5Y8/1	灰白色	底面：施釉系	
116	26	70	C6	第Ⅵ層	磁器	灰輪小皿	(5.8)	1.4	1.2	所拂	5Y7/1	灰白色	底面：施釉系	
116	27	70	E4	第Ⅵ層	磁器	小杯		(4.2)	わら灰輪		2.5Y6/1	蘭灰色	底面：施釉系	

Rg	目録番号	分類	出土地点	出土層位	種類	部類	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	色調	地土	備考	
116	28	70	FB	第Ⅲ層	陶器	甕				10YR8/1 N6/	灰褐色	高地；偏前系	
116	29	70	EB	第Ⅲ層	陶器	瓶				5PB6/1 N6/	赤褐色	標高17米以上 产地；偏前系	
116	30	70	FB	第Ⅲ層	陶器	瓶	(33.4)			5Y6/1 N6/	灰褐色	標高8米 产地；偏前系	
116	31	70	FB	第Ⅲ層	陶器	瓶				N6/	灰褐色	標高4米以上 产地；偏前系	
116	32	70	F7	第Ⅲ層	陶器	瓶				5PB6/1 N6/	赤褐色	標高17米以上 产地；偏前系	
116	33	70	EB	第Ⅲ層	灰質土器	罐				N3/	暗灰褐色		
118	1	C1	標位不明	頂部	SF(蓋)	(14.5)	3.9	丸井部 9.0	外：黒褐色 内：灰白色	10YR3/1 N6/	2mm以下の白色砂粒を 混じる	内：使用痕 打ち込み	
118	2	E9	標位不明	頂部	SF(蓋)	(13.8)	(4.4)	外：灰褐色 内：灰褐色	7.5YR6/1 7.5YR7/1	1mm以下の白色砂粒を 混じる	内：使用痕 打ち込み		
118	3	D3	標位不明	頂部	SF(蓋)	11.8	4.0	外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6/	2mm以下の砂粒を若干 含む	外：丸井部 不定方向の軋いやケズリ 打ち込み		
118	4	E11	標位不明	頂部	SF(蓋)	(11.6)	3.5	外：灰褐色 内：暗青灰褐色	5PB6/1 5PB7/1	1mm以下の白色砂粒を 混じる	内：使用痕 打ち込み		
118	5	D7	標位不明	頂部	SF(蓋)			外：灰褐色 内：灰褐色	N7/ N7/	1mm以下の白色砂粒を 多く含む	輪状つまみ (つまみ径：4.5cm)		
118	6	D1	標位不明	頂部	SF(蓋)	(14.5)		外：灰褐色 内：灰褐色	N7/ N8/	1mm以下の白色砂粒を 少く含む	輪状つまみ (つまみ径：5.6cm) 内：使用痕		
118	7	D1	標位不明	頂部	SF(蓋)			外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N7/	1mm以下の砂粒を少量 含む	輪状つまみ (つまみ径：4.4cm)		
118	8	A3	標位不明	頂部	蓋	(5.8)	(2.8)	丸井部 6.0	外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N6/	1mm以下の白色砂粒を 混じる		
118	9	B5	標位不明	頂部	SF(蓋)			外：灰褐色 内：灰褐色	N7/ N7/	1mm以下の白色砂粒を 少く含む	内：天井部 ヘラ記号		
118	10	E9	標位不明	頂部	SF(身)	(12.9)	3.4	(9.4)	外：灰褐色 内：灰褐色	5PB6/1 5PB6/1	2mm以下の砂粒を少量 含む	外：底部「×」ヘラ記号	
118	11	D4	標位不明	頂部	身(高台付)	(14.7)	5.3	(10.0)	外：灰褐色 内：灰褐色	5Y7/1 N7/	2mm以下 白色砂粒を 混じる		
118	12	D1	標位不明	頂部	高杯			外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒を少量 含む	外：脚部2条沈線		
118	13	T2	標溝 E9	標位不明	頂部	盛または 皿			外：暗青灰褐色 内：灰褐色	5PB7/1 5PB5/1	0.5mm以下の砂粒を費 外：脚部 2条以上沈線 脚部2条沈線間に 樹突痕		
118	14	T2	表土	標位不明	頂部	蓋			外：灰褐色 内：灰褐色	5PB6/1 5PB6/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	内：表土着 漆皮膜	
118	15	T2	C5	標位不明	頂部	不明			外：灰褐色 内：灰褐色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒を少量 含む		
118	16	T1	標溝 E9	標位不明	頂部	罐	(9.4)	21.8	外：灰褐色 内：灰褐色	5BS/1 5BS/1	1mm以下の砂粒を少量 含む	打ち込み	
118	17	T1	E3	標位不明	頂部	坪または跡	(18.0)		外：灰褐色 内：灰褐色	10BG6/1 10BG6/1	3mm以下の白色砂粒を 少く含む		
118	18	T2	D4	標位不明	頂部	(打明透形)	(8.8)	3.2	6.0	外：灰褐色 内：灰褐色	10YR9/1 10YR7/1	1mm以下の砂粒を費塗	内：墨痕
118	19	T2		標位不明	頂部	蓋			外：灰褐色 内：灰褐色	N5/ N6/	1mm以下の白色砂粒を 混じる	外：脚部 2段1条～2条沈線に区別された 樹突痕	
118	20	T2	埋土	標位不明	頂部	陶か			外：灰褐色 内：灰褐色	N6/ N6/	1mm以下の白色砂粒を 混じる	瓦質風土器	
119	1	T3	F6	標位不明	縫文土器	深鉢			外：灰褐色 内：灰褐色	7.5YR5/2 7.5YR5/2	2mm以下の砂粒を多く 含む	外：T3H 鏡鏡文	
119	2	T3	G10	標溝 G10	免生土器	甕	(19.0)			外：灰褐色 内：灰褐色	10YR7/3 10YR7/3	2mm以下の砂粒を少く含む	外：T3H部 15集錦鏡文 縫部直線文
119	3	T3	G10	免生土器	縫形窯台		(20.0)			外：灰褐色 内：灰褐色	7.5YR7/8 7.5YR7/8	1mm以下の砂粒を多く含む	
119	4	T3	D4	標位不明	上部器	壺			外：灰褐色 内：灰褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量 含む	外：脚部 帛帶文	
119	5	T3	D4	標位不明	上部器	直			外：灰褐色 内：灰褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を少く含む	外：T3H部 竹貫文	
119	6	T3		標位不明	上部器	特殊焼成物			外：灰褐色 内：灰褐色	2.5YR5/3 2.5YR5/3	1mm以下の砂粒を含む		
119	7	T3	D2	標位不明	上部器	壺	(22.6)			外：灰褐色 内：灰褐色	5.5YR7/4 5.5YR7/4	3mm以下の砂粒を少く含む	外：T3H部 竹貫文
119	8	T2	I9	標溝 I9	標位不明	上部器			外：灰褐色 内：灰褐色	2.5YR7/1 10YR8/2	1mm以下の砂粒を微量 含む	外：脚部 烧成文	
119	9	T2	E9	標位不明	上部器	坪	11.3	3.7	5.5	外：灰褐色 内：灰褐色	10YR7/1 10YR8/4	6mm以下の砂粒を少く含む	内：赤彩
119	10	T3	B2	標位不明	上部器	坪	(12.2)	(6.3)		外：淡黃褐色 内：淡黃褐色	7.5YR8/3 10YR8/3	3mm以下の淡黃色砂粒を 多く含む	外：赤彩
119	11	T3	G5	標位不明 (黑色土器)	上部器	蓋	(13.0)	(3.8)		外：灰褐色 内：灰褐色	2.5YR2/2 2.5YR2/2	1mm以下の白色砂粒を 多く含む	頭部器盤直器 (环茎の根拠)
119	12	T2	F6-G6 ベルト	標位不明	上部器	高杯	9.0			外：灰褐色 内：淡黃褐色	10YR7/4 10YR7/6	1mm以下の砂粒を微量 含む	
119	13	T3	F5	標位不明	上部器	高杯				外：灰褐色 内：灰褐色	10YR4/1 10YR4/1	1mm以下の砂粒を微量 含む	内：赤彩
119	14	T2	G10	標溝 G10	標位不明	上部器	(19.0)	14.4	13.5	外：灰褐色 内：灰褐色	7.5YR7/6 7.5YR8/8	1mm前後の赤褐色砂粒 を多く含む	脚部を打明帯として二次使用が 内：黒褐色物質付着
119	15	T2	E3	標位不明	上部器	高杯	(9.4)			外：淡黃褐色 内：淡黃褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の白色砂粒を 少く含む	内：赤彩

Fg	番号	直高 mm	出土 地点	出土層位	種類	寸幅 (mm)	厚さ (mm)	底面 (mm)	色調	出土	備考	
119	16	73	D2	樹根 不明	上部器	高坪	(10.3)	7.4	6.3	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を少量含む
119	17	72	側溝 E列	樹根 不明	上部器	高坪または 樹根		7.0		外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	10YR7/3 10YR7/3	4mm以下の砂粒を少量含む
119	18	73	D4	樹根 不明	上部器	环か				外：灰白色 内：灰白色	2.5YR8/2 2.5YR8/2	0.5mm以下の砂粒を微量含む
119	19	73	側溝 E列	樹根 不明	上部器	裏	(16.2)			外：にぶい黄褐色 内：淡黄色	10YR7/4 2.5YR8/4	1mm以下の砂粒を少量含む
119	20	72	E3	樹根 不明	上部器	裏	(17.0)			外：明赤褐色 内：明赤褐色	2.5YR8/6 2.5YR8/6	5mm以下の砂粒を微量含む
119	21	72	E3	樹根 不明	上製品	土質支脚		11.5		褐色	7.5YR8/8	5mm以下の砂粒を多く含む
119	22	73	側溝 E列	樹根 不明	上製品	土質支脚					2.5YR8/3	鉄部非貫通孔
119	23	73	F5	樹根 不明	上部器	坪		6.5		外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	1mm以下の砂粒を若干含む
119	24	72	側溝 G列	樹根 不明	上部器	坪(高台付)		6.0		外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	1mm以下の砂粒を若干含む
120	1	74	B6	樹根 不明	上製品	上坪		6.0		深褐色	10YR8/3	2mm以下の白色砂粒を多く含む
120	2	74	E5	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 4.9	幅 3.5	厚さ 3.6	灰白色	2.5YR8/2	1mm以下の白色砂粒を若干含む
120	3	74	側溝 E列	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 6.3	幅 4.7	厚さ 4.4	灰白色	2.5YI7/1	1mm以下の白色砂粒を微量含む
120	4	74	E4	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 5.7	幅 3.7	厚さ 3.4	灰白色	2.5YI7/1	1mm以下の白色砂粒を微量含む
120	5	74	A4	樹根 不明	上製品	上坪		3.7		褐色	5YR6/6	2mm以下の砂粒を若干含む
120	6	74		樹根 不明	上製品	上坪	長さ 4.3	幅 3.4	厚さ 3.3	褐色	5YR7/6	2mm以下の砂粒を少し含む
120	7	74	D3	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 4.8	幅 3.4	厚さ 3.0	褐色	7.5YR8/3	2mm以下の砂粒を微量含む
120	8	74	D3	樹根 不明	上製品	上坪		3.8		浅黄褐色	10YR8/3	1mm以下の砂粒を微量含む
120	9	74	側溝 E列	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 5.2	幅 2.7	厚さ 1.5	灰白色	10YR8/2	1mm前後の砂粒を微量含む
120	10	74	C5	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 4.1	幅 2.7	厚さ 1.0	褐色	7.5YR4/6	2mm以下の白色砂粒を多く含む
120	11	74	E4	樹根 不明	上製品	上坪			2.1	灰白色	2.5YB2/2	2mm以下の白色砂粒を多く含む
120	12	74	C6	樹根 不明	上製品	上坪		4.4		灰白色	10YR8/1	砂粒含まない
120	13	74	D4	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 6.8	幅 3.4	厚さ 3.3	灰白色	2.5YI1/1	1mm以下の砂粒を若干含む
120	14	74	A4	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 4.8	幅 1.6	厚さ 0.9	灰白色	2.5YI1/1	砂粒含まない
120	15	74	G6	樹根 不明	上製品	上坪	長さ 3.4	幅 1.3	厚さ 0.5	にぶい赤褐色	5YR5/4	砂粒含まない
120	16	74	K2部	樹根 不明	周部	上坪	長さ 7.5	幅 4.9	厚さ 4.7	鐵輪	5YR4/3	にぶい赤褐色
120	17	74		樹根 不明	周部			5.3		鐵輪	5Y7/1	灰白色
120	18	74		樹根 不明	周部	青磁櫻花皿	(11.8)			青磁釉	N7/	灰白色
120	19	74	側溝 H列	樹根 不明	周部	鐵輪						直径8.2 底径：側溝系
120	20	74	F6	樹根 不明	周部	天目皿	(12.0)			鐵輪	10YR8/1	同白色
120	21	74	E4	樹根 不明	周部	碗				鐵輪	5Y7/1	同白色
120	22	74	F6	樹根 不明	周部	青磁鉢 (1件)		(6.4)		鐵輪、錫輪、透明輪	2.5YR8/2	同白色
											文様：土刺、わらび 用途：施肥・美濃系	

第3表 平ノ前遺跡 出土石製品観察表

Fg	番号	直高 mm	出土 地点	出土層位	種類	寸幅 (mm)	厚さ (mm)	底面 (mm)	重量 (g)	石材	備考
11	12	28	D3	S801	磨擦車	下坪	3.6	下邊 3.6	孔径 0.7	52.0	凝灰岩
15	14	29	S803	石漿		2.8	1.3		2.0	サヌカイト	先端欠損
26	2	31	S802	打制石片		11.6	4.4	1.8	149.0	安山岩	
31	1	31	SD05(新)	磨製石片		13.3	5.0	3.0	362.0	島壁性片岩	先端欠損 対刃部こぼれ
31	2	31	B4	SD05(新)	石漿	9.3	7.9	2.2	253.0	デイサイト	両端打ち欠き
31	3	31	3	SD05(新)	凹凸	10.5	9.8	4.6	565.5		凹部周辺削面

Pg	番号	写真	出土地點	出土層位	岩種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 kg	石材	備考
31	4	31		SD05(新)	凹石	11.2	10.5	7.0	1,033	デイサイト	一面に敲打痕
31	5	31		SD05(新)	磨石	9.0	8.8	4.4	567.0	閃緑岩	一面に敲打痕 全面研磨
31	6	31		SD05(新)	磨石	10.8	11.4	4.8	925.0	淡灰岩	表面面研磨
31	7	31	B2 C2	SD05(新)	磨石/礫石	残存 7.9	9.8	6.2	650.0	デイサイト	片面と側面部に敲打痕 一面に擦痕
32	1	33		SD05(新)	硃石	10.4	9.3	2.2	220.0	砂岩	全面使用 一部敲打痕
32	2	33	A5	SD05(新)	硃石	13.7	7.5	(6.1)	819.0	淡灰岩	一方の端部に敲打痕 各所欠損
32	3	33		SD05(新)	硃石	16.5	8.2	6.6	1,156	闊岩	一方の端部欠損 反対端部に敲打痕
32	4	33		SD05(新)	凹石	16.0	9.4	7.9	1,361	淡灰岩	一方の端部に弱い敲打痕
32	5	33		SD05(新)	台石か	20.2	14.7	6.7	292.5	デイサイト	片面磨り込まれた面
33	1	31	A5	SD05(新)	麻製石	27.4	23.5	12.2	9,740	安山岩	一部欠損 三面にわたり字状の縦割を施す
46	1	34	B4	SD05(古)	スクライバー	残存 4.3	残存 3.1	残存 0.6	7.22	安山岩	石造状 刃部欠損
46	2	34	B5	SD05(古)	二次加工石器	残存 4.5	7.4	2.2	102.0	淡灰岩	齊石の二次利用 片面に磨痕
46	3	34	A5	SD05(古)	磨製石斧	残存 10.7	4.2	3.1	228.0	珪質片岩	基部欠損 全面磨打痕
46	4	34	B4	SD05(古)	石斧	9.0	7.8	2.4	260.0	淡灰岩	側面4分野に嵌在痕
46	5	34	B3	SD05(古)	磨石/礫石	残存 9.0	5.7	2.7	229.5	表裏面磨痕 側面辺に敲打痕	
46	6	34	B4	SD05(古)	磨石/礫石	13.3	4.3	3.8	350.0	淡灰岩	両端部に敲打痕
46	7	34	B4	SD05(古)	磨石/礫石	13.6	8.6	8.2	1,420	デイサイト	片面磨り込まれた 一方の端部に磨痕
46	8	34	B4	SD05(古)	磨石/礫石	9.6	7.2	5.6	555.8	デイサイト	両端部に敲打痕
47	1	34		SD05(古)	凹石	10.1	8.7	5.5	560.0	安山岩	全面磨打痕
47	2	34		SD05(古)	石斧	11.2	6.1	2.3	251.0	淡灰岩	表裏面に敲打痕
47	3	34	B3	SD05(古)	石斧	9.1	8.0	3.7	353.0	デイサイト	両側面部に敲打痕
47	4	34		SD05(古)	石斧	10.7	9.3	4.3	570.0		二方向に凹み 突出部に弱い敲打痕
47	5	34	B4	SD05(古)	硃石	残存 11.8	6.0	4.2	424.0	闊岩	一方の端部欠損 4面使用 一面に敲打痕
48	1	34	B4	SD05(古)	硃石	34.3	14.7	12.8	7,900	砂岩	3面使用
48	2	34	B4	SD05(古)	杭状石器類	17.7	7.9	4.7	698.0	デイサイト	一方の端部尖る
62	18	38	D5	上部層の B面	磨製石斧	19.0	5.6	4.5	801.0	珪質片岩	月部欠損の前打痕
68	1	44	D4	上部層の B面	磨石 / 褐石	残存 12.0	残存 11.8	6.4	1,104	安山岩	表裏面に敲打痕、磨痕 一部赤色の付着物あり 大粒部分多い
68	2	44		上部層の B面	硃石	8.8	残存 7.4	4.6	302.0	砂岩	一方の端部欠損 全面使用
68	3	44	D4	上部層の B面	敲石	12.1	11.0	5.5	1,338	安山岩	表裏面、両側面部に敲打痕
68	4	44	D5	上部層の B面	磨石 / 褐石	15.0	9.4	4.2	909.0	安山岩	表裏面磨痕、両側面部に敲打痕
69	1	44	D5	上部層の B面	磨石 / 褐石	21.2	8.2	5.1	1,268	安山岩	表裏面磨痕 表裏面、側面部全部に敲打痕
69	2	44	D5	上部層の B面	礫石 / 磨石	14.6	8.3	4.3	880.0	安山岩	表裏面、側面部に敲打痕 両側面部に磨痕
69	3	44	D5	上部層の B面	敲石	11.3	7.4	4.7	570.0	安山岩	表裏面、側面部に敲打痕
69	4	44	D5	上部層の B面	硃石	10.3	7.1	6.5	899.0	安山岩	両端部に敲打痕
69	5	44	D5	上部層の B面	磨石	残存 10.1	残存 5.6	残存 5.2	残存 314.0	安山岩	大部分欠損 残存部分磨面
69	6	44	D5	上部層の B面	硃石	残存 3.7	3.75	2.1	36.0	淡灰岩	一方の端部欠損 4面使用
77	2	54	D3	上部層の A面	磨石	11.8	8.2	7.5	934.5	安山岩	表裏面、両端部、側面部に敲打痕
77	3	54	D3	上部層の A面	磨石 / 褐石	13.1	8.8	3.9	629.0	安山岩	表裏面に磨痕
77	4	54	D3	上部層の A面	硃石	残存 7.3	残存 5.1	4.1	105.0	淡灰岩	一方の端部欠損 4面使用
111	2	66	D5	第VI. 頂層	石核(残核)	5.8	4.8	3.8	76.5	緑色闊岩	
111	3	66	D4	第VI. 頂層	硃石	12.26	4.1	1.55	109.0	頁岩	表裏面、両側面部に磨面

Fig	番号	写真 写真	出土 地点	出土層位	基盤	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	重量 (kg)	石材	備考
111	4	66	C4	第M、Ⅷ層	石躰	残存 0.16	1.1	0.25	0.36	安山岩	先端、右基部わずかに欠損
111	5	66	E5	第M、Ⅷ層	砾石	残存 5.0	5.8	残存 3.2	113.5	流紋岩	一方の端部欠損 3面使用
111	6	66	D3	第M、Ⅷ層	砾石	残存 11.7	4.2	1.9	158.0	珪化木	一方の端部欠損 3面使用
111	7	66	E4	第M、Ⅷ層	石躰	14.0	残存 10.3	5.5	974.5	凝灰岩	片面研磨
111	8	66	D6	第M、Ⅷ層	石躰	8.6	5.8	5.5	368.0	デイサイト	一方の端部付近欠損
115	10	69	C5	断面、Ⅹ層	巖石	10.7	3.5	2.6	143.0	デイサイト	両端部、他2面に磨削 断面部に最粗
115	11	69	F6	断面、Ⅹ層	巖石	残存 8.4	残存 6.4	残存 1.2	92.0	デイサイト	一部風化残存
117	1	71	C5	第Ⅷ層	磨削石所	残存 7.1	残存 4.3	残存 2.9	136.5	珪化木片岩	柄部欠損 表面に磨削痕(一次使用か)
117	2	71	D3	第Ⅷ層	磨石	11.1	3.5	2.5	145.0	砂岩	表表面に浅い磨削痕
121	1	74		被信 不明	スクレーパー	3.8	残存 8.7	0.8	27.38	安山岩	若干欠損
121	2	74	B4	被信 不明	被削石器	残存 3.0	1.7	0.9	3.0	黑曜石	先端部欠損
121	3	74	B5	被信 不明	巖石	9.0	7.8	4.5	466.5	凝灰岩	両端部、両側斜面に磨削痕
121	4	74	D2	被信 不明	巖石	10.3	4.4	2.7	183.0	安山岩	両端部、両側斜面に磨削痕
121	5	74		被信 不明	巖石	残存 11.4	6.2	6.2	573.0	流紋岩	一方の端部欠損 一面使用

第4表 平ノ前遺跡 出土玉製品觀察表

Fig	番号	写真 写真	出土 地点	出土層位	基盤	長さ / 振幅 (m)	幅 / 高径 (m)	厚さ (m)	孔径 (mm)	重量 (kg)	色調	石材	備考
B1	2	58	D3	SD17	丸玉	34.07	20.62	9.40	1.0	8.87	明青灰色	滑石	
B1	3	58	D3	SD17	丸玉	12.1	10.87	9.41	2.0	1.32	褐灰色	土質	
B1	4	58	D3	SD17	丸玉	11.25	9.52	10.14	2.25	0.96	にぶい赤褐色	土質	
B1	5	58	D3	SD17	丸玉	9.39	8.84	7.24	3.5	0.53	黒色	土質	
B1	6	58	D3	SD17	丸玉	残存 9.27	8.85	7.56	2.0	0.55	黒色	土質	一部欠損
B1	7	58	D4 D5	SD17	丸玉	6.41	5.88	5.46	0.75	0.20	にぶい黄褐色	鄧藻質	
B1	8	58	D3	SD17	丸玉	上曲径 4.45	F曲径 4.31	5.57	1.5	0.28	灰オリーブ色	鹿角	
B1	9	58	D2	SD17	円玉	6.80	6.80	1.97	2.0	0.11	灰オリーブ色	真岩	側面研磨 一部欠損
B1	10	58	D3	SD17	円玉	5.41	5.41	2.63	1.75	0.11	灰オリーブ色	真岩	側面研磨
B1	11	58	D3	SD17	円玉	5.60	5.60	1.57	2.0	0.07	灰オリーブ色	真岩	側面研磨
B1	12	58	D3	SD17	円玉	5.25	5.25	1.63	1.74	0.06	灰オリーブ色	真岩	側面研磨 一部欠損
B1	13	58	D3	SD17	円玉	5.8	5.8	1.58	1.6	0.06	緑灰色	真岩	側面一部研磨 一部欠損
B1	14	58	D3	SD17	円玉	8.7	8.7	2.98	2.3	0.36	灰オリーブ色	真岩または綈密な 安山岩	
B1	15	58	D3	SD17	円玉	7.45	7.45	1.70	2.0	0.13	灰オリーブ色	変質した丸山岩か 貝殻	側面一部研磨底
B1	16	58	D3	SD17	円玉	5.12	5.12	2.93	1.5	0.10	灰オリーブ色	安山岩または 流紋岩YI	側面研磨
B1	17	58	D3	SD17	円玉	5.0	5.0	2.14	1.4	0.06	灰オリーブ色	安山岩または 流紋岩YI	側面研磨
B1	18	58	D3	SD17	円玉	4.93	4.93	1.62	1.6	0.04	灰オリーブ色	安山岩または 流紋岩YI	側面研磨
B1	19	58	D3	SD17	円玉	4.95	4.95	1.43	1.4	0.04	深闇オリーブ色	安山岩または 流紋岩	側面研磨
B1	20	58	D3	SD17	円玉	5.13	5.13	2.68	1.3	0.11	淡闇オリーブ色	滑石系	
B1	21	58	D3	SD17	円玉	4.33	4.33	2.76	1.0	0.09	淡黄灰色	滑石系	表面一部欠損 側面一部研磨底
B1	22	58	D3	SD17	円玉	4.17	4.17	2.13	1.3	0.07	淡黄灰色	滑石系	側面研磨
B1	23	58	D3	SD17	円玉	(4.8)	4.5	2.37	1.9	0.06	深闇オリーブ色	滑石系	半分欠損
B1	24	58	D3	SD17	円玉	4.39	4.39	2.21	1.4	0.07	暗オリーブ色	鄧藻質	
B1	25	58	D4 D5	SD17	円玉	4.58	4.58	3.26	2.0	0.10	灰オリーブ色	滑石系	側面研磨 上下2段研磨 側面中央やや低む

Fig	番号	写真 No.	出土 地点	出土層位	種類	長さ / 高径 (cm)	幅 / 厚径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	石材	備考
81	26	58	D6	SD17	白玉か	4.83	4.83	2.83	0.8	オーリーブ灰色	御影石	
111	1	66	C7	第VI、Ⅴ層	白玉	36.09	21.57	11.47	2.0-3.0	10.33	暗緑色	碧玉
Fig	番号	写真 No.	出土 地点	出土層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考	
123	1	76	D3	SD17	剥片	塊核	2.75	3.65	1.15	12.0	碧玉	剥片を探された塊核
123	2	76	D5	SD17	剥片	素材剥片	6.05	2.77	1.50	28.0	碧玉	二次加工のある剥片
123	3	76	F6	SD17	剥片	(白玉和水晶)	2.92	1.70	0.43	2.0	碧玉	
123	4	76	F7	SD17	丸玉未品か	研磨工程未完成	1.26	1.22	1.04	2.0	緑色湖田石	各面に研磨痕
123	5	76	D3	P254	碧玉未品か	研磨工程	1.84	0.80	0.80	2.0	碧玉か	側面は多角形に整形 各面に研磨痕
124	1	77	C5		剥片	素材剥片	5.20	2.52	1.23	11.0	碧玉	
124	2	77	D5		碧玉未品	角柱状加工品	3.67	1.45	1.23	8.0	碧玉	側面に調整削離痕
124	3	77	C6		剥片	素材剥片	4.43	2.60	0.78	10.0	碧玉	
124	4	77	E4		碧玉未品	角柱状加工品	2.49	1.37	0.71	3.0	碧玉	
124	5	77	F3		碧玉未品	素材剥片	2.20	1.72	1.05	6.0	碧玉	
124	6	77	D7		碧玉未品	角柱状加工品	1.52	1.51	1.26	5.0	碧玉	
124	7		D7	第VI、Ⅴ層	石器	内齊砾石	12.1	4.4	1.2	89.5	石英片岩	両側面に摩耗
石1			B2		剥片		3.33	2.52	9.0	6.4	碧玉	

第5表 平ノ前遺跡 出土獸骨観察表

Fig	番号	写真 No.	出土 地点	出土層位	種類	部位	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
77	5	54	D2 D3	上端面 A面	骨	角	9.2	最大3.7	最小1.2	被熱により焦げ跡あり 部材を取り出した残りか(加工痕あり)		

第6表 平ノ前遺跡 出土金属製品観察表

Fig	遺物番号	写真 No.	出土地点	出土層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
81	1	57	D5	SD17	金剛製半管付 空玉	径 9.3 ~ 9.4			11.3		歩様長さ 10.11m 幅最大 5.6m
110	24	66	E3	第VI・Ⅴ層	耳環	2.67	2.44	径 0.78 ~ 0.60	11.14	鋼製薄板張りか	
110	25	66	04	第VI・Ⅴ層	鑽	径 11.5	3.2		17.05		
115	12	69	F6	第VI・Ⅴ層、 改層	鑽先	径 13.0	最大 4.2	0.99	264.91 (サビ含む)		
121	6	74	B2	層位不明	鑽または指環	径 2.4	径 2.1	0.3	4.83 (サビ含む)		
121	7	74	C1	層位不明	棒状鉄製品	径 4.2	0.6	0.6	5.56 (サビ含む)		
121	8	74	C6	層位不明	棒状鉄製品	径 9.2	1.1	0.89	26.35 (サビ含む)		

第7表 平ノ前遺跡 出土鍛冶関係遺物観察表

Fig	遺物 番号	写真 No.	出土 地点	出土層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他寸法 (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
122	1	75	D4	SD04	羽13	6.4	6.5	6.6	内径 2.0 (ほぼ円形)	210	4	調化	先端部ガラス質化（垂れ）
122	2	75	D4	SD04	羽13	最大 6.7	最大 6.3	最大 6.0	内径 2.8 × 2.2	178	4	調化	先端部ガラス質化（垂れ一部陥没）
122	3	75	D4	SD04	羽13	5.6	6.8	7.0	内径 2.8 × 3.5	170	3	調化	先端部ガラス質化（垂れ、小気泡あり）
122	4	75	D4	底上1 (羽13) #1	羽13	6.8	7.7	6.8	内径 2.9 × 2.4	226	5	調化	先端部ガラス質化（垂れ）
122	5	75	D4	底上1 (羽13) #1	羽13	最大 11.9	最大 7.5	最大 7.9	内径 3.3 × 3.9	452	4	H	先端部ガラス質化（垂れ）
122	6	75	D4	第VI層 (底上3) #2	羽13	径 4.2	径 3.5	径 3.2	内径 (2.4)	27	3	調化	先端部ガラス質化（垂れ）
122	7	75	D4	SD04	鏡形澤	6.5	9.1	3.9		178	6	調化	底面底面多數付着
122	8	75	E4	第VI層 (底上)	鏡形澤	9.5	12.3	3.0		346	7	H	底面底面多數付着

Fig	遺物 番号	写真 回数	出土 地点	出土部位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他の寸法 (cm)	重量 (g)	磁石度	メタル度	備考
122	9	75	E4	以降約3 (上層) ①	鏡形浮	6.6	9.1	4.2		244	5	H	底面粘土が剥着
122	10	75	D4	第Ⅴ層 (地上層) ②	鏡形浮	5.3	7.5	3.3		132	6	H	底面 5mm以下約砂多く付着
122	11	75	D3	第VI、残層	鏡形浮	4.6	6.1	2.4		54	4	H	誤化
122	12	75	D4	第Ⅴ層	鏡形浮	9.0	11.6	5.5		422	5	H	誤化
122	13	75	D4	第Ⅴ層上面	鏡形浮	6.8	6.1	3.1		132	4	H	底面粘土付着
122	14	75	E4		鏡形浮	6.8	8.6	4.5		216	4	H	誤化

* 1 岩盤り 1, 岩削り 2, 岩削り 3の割合は第101回参照。

* 2 燐土層、無土層 2は炭削り 1、炭削り 2付近の層位。

第8表 平ノ前遺跡 出土木製品観察表

Fig	遺物 番号	写真 回数	出土 地点	出土部位	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	種 (cm)	その他寸法	木取り	備考
26	13	78		S807	柱頭	30.0+			40.0 × 33.1		丸丸材	分析 斜葉縞
34	1	78		S905 (新)	楕	直径 13.7		1.3	Ø7.2) × (17.0)		板目	ひずみあり
34	2	78		S905 (新)	楕	直径 12.5	残 15.5	幅大 1.2 幅小 1.4			板目	
34	3	78		S905 (新)	楕	31.6	24.0	幅大 2.4			板目	把手付 内面黒色物質付着 斜葉縞
34	4	78		S905 (新)	楕	26.8	残 20.2	幅大 2.3			板目	内面黒色物質付着
34	5	79		S905 (新)	桶底板	最大 13.8	最大 7.3	幅大 0.9			板目	桶の底板を転用か 3孔
35	1	79	A6	S905 (新)	田下駄	28.8	32.0	2.2			二方極か	4孔 結束部あり
35	2	79		S905 (新)	田下駄	35.0	33.0	0.7			板目	一部地痕 深くて破壊あり
35	3	79		S905 (新)	板状木製品	直径 36.0	残 6.4	0.7			板目	田下駄または楕木の一端か軋か
35	4	79		S905 (新)	板状木製品	43.0	残 21.0	1.3			板目	1/2 存在 (人足) 残 2孔 加工痕 表面で使用跡が異なる
35	5	79		S905 (新)	板状木製品	直径 42.3	残 7.5	1.5			板目もしくは 二方極か	板材 (田下駄か) を転用か
35	6	79		S905 (新)	板状木製品	直径 37.8	6.3	1.4			板目	田下駄 (人足) を転用か
35	7	79		S905 (新)	板状木製品	50.7	5.2	1.3			板目	田下駄 (人足) の一部を転用か
35	8	79		S905 (新)	板状木製品	24.8	残 7.1	1.1			板目もしくは 二方極か	転用材か 残 1孔 田下駄か踏の一部か 加工痕
35	9	79		S905 (新)	手毬	直径 28.7	残 12.6	2.6			板目	ひずみあり
35	10	79	A5	S905 (新)	手毬	直径 62.8	残 14.0	2.0			板目	田舟状もしくはとよ狀か
36	1	80		S905 (新)	稚木本製品	35.4	1.0	0.9			板目もしくは 二方極か	縫、内舟底の縫 両端部に加工痕
36	2	80		S905 (新)	稚木本製品	41.5	1.5	1.3			板目もしくは 二方極か	縫、内舟底の縫 端部折か 転用材 板材を削ったものか
36	3	80		S905 (新)	稚木本製品	直径 17.2	3.1	1.8			板目か	縫部に施溝
36	4	80	A5	S905 (新)	稚木本製品	直径 49.3	3.2	2.2			芯持材	断面は薄斜状 縫部に粘着溝 加工痕
36	5	80		S905 (新)	稚木本製品	48.5	6.7	1.7			板目	農耕具を転用か 孔 2箇所 斜葉縞か
36	6	80		S905 (新)	建築部材	直径 82.0	最大 13.3	幅大 1.7	孔 2.1 × 2.5		板目	板状木製品を楕木に転用か 孔 1箇所 (使用痕)
36	7	80		S905 (新)	板材	87.7	最大 17.2	2.2	孔径最大 1.5		板目もしくは 二方極か	孔 1箇所 一部削痕
36	8	80		S905 (新)	板材	直径 56.8	最大 11.7	幅大 1.7			板目	孔 1箇所 加工痕 一部地痕
36	9	80		S905 (新)	稚木本製品	58.0			2.3 × 2.0		板目	楕木か
36	10	80		S905 (新)	稚木本製品	115.6	2.0	1.3			板目か	楕木か
36	11	80		S905 (新)	稚木本製品	113.3			直径 5.3 × 4.3		板目	稚木本製品を転用か 加工痕 一部誤化
37	1	81		S905 (新)	机	108.2	最大 9.5	5.7			板目	建築部材を転用か 長方形の孔 一部誤化
37	2	81		S905 (新)	机	75.0	6.4	1.7			板目	板状木製品を転用か
37	3	81		S905 (新)	机	80.7			直径 3.7		板目	稚木 建築部材を転用か 加工痕 使用痕
37	4	81		S905 (新)	机	71.5	16.7	5.8			板目	建築部材を転用か 加工痕

Fig	器物番号	実存箇所	出土場所	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (mm)	その他の寸法	木取り	備考
37	5	81		SD05 (鉄)	杭	69.5	最大 9.0	2.7		板目	建築部材を転用か 加工痕
37	6	81		SD05 (鉄)	杭	59.8	9.0	6.0		ミカン削材	建築部材を転用か 加工痕 一部焼痕
37	7	81		SD05 (鉄)	杭	86.5			4.9 × 4.7	芯持材	加工痕 一部研磨痕存
37	8	81		SD05 (鉄)	杭	120.3			4.0 × 3.6	芯持材	横木か 加工痕 一部焼痕 使用痕
37	9	81		SD05 (鉄)	柱材	91.4			中程 10.0 × 9.4	芯持材	又部に当たり痕
37	10	81		SD05 (鉄)	柱材	201.2			端大 18.0 × 13.0 小窄 10.6 × 10.5	芯持材	先端部加工 加工痕
49	1	82		SD05 (古)	杭	55.5	8.3	2.4		板目	板材を転用か 加工痕
49	2	82		SD05 (古)	杭	53.8	8.6	2.1		板目 ミカン削材か	板材を転用 加工痕
49	3	82		SD05 (古)	杭	43.8	14.7	2.0		板目	板材を転用 加工痕
49	4	82		SD05 (古)	杭	30.3	最大 11.5	4.0		板目 ミカン削材か	板材を転用か
49	5	82		SD05 (古)	杭	70.2	最大 12.8	2.2		板目	板材を転用か 加工痕
49	6	82		SD05 (古)	杭	57.1	最大 14.3	3.0		板目もしくは 二方削か	板材を転用か 加工痕
49	7	82		SD05 (古)	杭	51.7	14.0	3.2		板目	板材を転用か 加工痕
49	8	82		SD05 (古)	杭	22.6	10.5	2.5		板目	板材を転用 使用痕
49	9	82		SD05 (古)	杭	27.5	10.1	1.8		板目	板材を転用か 加工痕
49	10	82		SD05 (古)	楔か	15.5	5.7	3.3		ミカン削材	加工痕
49	11	82		SD05 (古)	横木	44.2	6.3	1.6		板目	板材を転用か 表面凹化
49	12	82		SD05 (古)	板材	106.5	7.5	1.5			建築部材か 芳香剤り成形痕 一部焼痕 当たり痕
49	13	83		SD05 (古)	板状木製品	310.2	最大 12.0	2.0		板目	横木か 一部凹化
50	1	83		SD05 (古)	矢板	41.4	9.4	4.1		板目もしくは 二方削か	板材を転用か 一部焼痕 加工痕
50	2	83		SD05 (古)	杭	41.42.0	9.6	3.7		板目か	板材を転用か 加工痕
50	3	83		SD05 (古)	杭	45.7	10.6	2.9		板目	板材を転用か 加工痕
50	4	83		SD05 (古)	矢板	41.454.0	9.5	最大 3.1		ミカン削材	板材を転用か 俺溝 加工痕
50	5	83		SD05 (古)	杭	93.3	最大 10.0	4.5		板目	板材を転用か 加工痕 使用痕
50	6	83		SD05 (古)	矢板	90.0	最大 12.0	5.6		板目 ミカン削材	板材を転用か 加工痕
50	7	83		SD05 (古)	杭	86.0	最大 8.8	4.8			建築部材を転用 矢板がわりか 加工痕 孔版
50	8	83		SD05 (古)	杭	61.3			最大 15.4 × 14.0	芯持材か	崩け→軋して成形 曲あり 加工痕
50	9	83		SD05 (古)	杭	61.4	10.4	8.7		ミカン削材	木材を転用か 加工痕 一部焼痕
51	1	84		SD05 (古)	杭	残 48.4			最大 4.3 × 4.2	ミカン削材か	板材を転用か 滲出に施調 加工痕
51	2	84		SD05 (古)	杭	56.7	4.8	3.0		ミカン削材	表面凹化 加工痕
51	3	84		SD05 (古)	杭	最大 59.5	最大 7.7	最大 3.6		ミカン削材	加工痕
51	4	84		SD05 (古)	杭	65.0	最大 5.4	最大 2.7		ミカン削材	加工痕
51	5	84		SD05 (古)	杭	65.0	最大 7.6	最大 4.8			建築部材を転用 外板がわりか
51	6	84		SD05 (古)	杭	残 55.7	最大 5.4	最大 4.6			建築部材を転用か
51	7	84		SD05 (古)	杭	40.3	最大 6.1	2.0		板目か	建築部材を転用か 板状 表面凹化
51	8	84		SD05 (古)	杭	33.9	最大 5.8	2.6		ミカン削材	板材を転用か 加工痕
51	9	84		SD05 (古)	杭	60.5	最大 5.0	2.5		ミカン削材か	板材を転用か 加工痕 使用痕
51	10	84		SD05 (古)	杭	63.4	3.5	3.0		二方削か	板材を転用か 加工痕
51	11	84		SD05 (古)	杭	52.2	最大 6.4	最大 5.3		ミカン削材	建築部材を転用か 加工痕
51	12	84		SD05 (古)	杭	残 50.3	7.2	3.9		ミカン削材	加工痕
51	13	84		SD05 (古)	杭	46.1	7.3	3.0		板目	板材を転用か 加工痕

Pg	遺物番号	有り無し	出土地点	出土部位	品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	径(cm)	その他の寸法	木取り	備考
51	14	84		S005 (古)	杭	50.5	7.4	4.7			ミカン削材	建築部材を転用か 加工痕
51	15	84		S005 (古)	杭	63.4	最大7.0	3.0			板目か	板材を転用か 加工痕
51	16	85		S005 (古)	杭	74.0	最大8.0	4.1			ミカン削材	板材を転用か 加工痕
52	1	85		S005 (古)	杭	106.9	10.3	最大5.4			ミカン削材	加工痕
52	2	85		S005 (古)	杭	95.0	最大8.2	7.0			ミカン削材	
52	3	85		S005 (古)	杭	87.7	8.6	5.7			ミカン削材	建築部材を転用か 加工痕
52	4	85		S005 (古)	杭	95.0	最大9.5	4.6			ミカン削材	一部削皮残存 加工痕
52	5	85		S005 (古)	杭	残87.0			10.3 × 7.7		芯持材	木材を転用 一部削皮残存 加工痕
52	6	85		S005 (古)	杭	残69.2			8.0 × 7.5		芯持材	木材を転用 一部削皮残存 加工痕
52	7	85		S005 (古)	杭	残40.5			4.3 × 4.1		芯持材	溝孔の痕 一部削皮残存 加工痕
52	8	85		S005 (古)	杭	51.6			6.6 × 6.2		芯持材	一部削皮残存 加工痕
52	9	85		S005 (古)	杭	59.3			7.2 × 6.1		芯持材	一部削皮残存 加工痕
52	10	85		S005 (古)	杭	47.8	最大3.5	最大3.0			芯持材	自然の枝木を机としたもの
52	11	85		S005 (古)	不明	22.5			12.1 × 10.8		芯持材	ノミあり 杖材を転用材か 両端の桟辺部に埋められた痕跡が残る(使用痕か)
82	1	86	D5	SD17	板材	10.7	13.0	2.5 ~ 2.7				桁材か 斜め方向のぼぞ穴
82	2	86	D5	SD17	諭先か	残26.5	残10.6	最大2.7				
82	3	86	D4	SD17	板状木製品	残4.8	2.1	0.5				墨書き
82	4	86		SD17	板材	17.7	2.8	0.3 ~ 0.6				鉛筆の底板のようなものか
82	5	86	D6	SD17	板材	残12.5	3.0	0.9			板目	保護あり
82	6	86	D4	SD17	棒状木製品	残1.8	1.9	0.8				把手の柄か 固化
82	7	86	D5	SD17	曲物の底板か	残32.2	残3.1	最大1.3			板目	棒の底板か
82	8	86		SD17	板状木製品	残14.1	2.4	1.0			板目	折れあり 転用の可能性あり 用途不明
82	9	86	D4	SD17	板状木製品	残3.7	残2.3	残0.5				薄板状 孔1箇所 用途不明
82	10	86	D6	SD17	手毬	26.9	4.2	1.1				転用か 用途不明
82	11	86	D5	SD17	棒状木製品	残35.8	残縦2.3	1.6 ~ 2.3			板目	用途不明
82	12	86	D5	SD17	部材か	残23.5	縦1.34	最大1.6				部材の一部か 日本木か不明 一端部に構造
83	1	87	D4	SD17	杭 もしょくは垂木	残126.1			4.5 × 6.6		芯持材	
83	2	87	D4	SD17	杭	残46.0			最大4.0		芯持材	
83	3	87	D4	SD17	杭	残33.3			最大6.0 × 4.6		芯持材	
83	4	87	D5	SD17	杭	35.4	最大10.8	最大7.0			芯持材	
83	5	87	D3	SD17	杭	残46.5	4.3	3.0	約6.05		建築部材を転用	斜穴あり
83	6	87	D5	SD17	杭	残27.4	残6.2	残1.8				建築部材を転用か
83	7	87	D5	SD17	杭	残10.8			最大6.0		芯持材	端部のみ(先端欠陥)
83	8	87	D5	SD17	杭	51.4	5.0	4.8			板目か	角材を転用
85	6	88	D5	SD04	棒状木製品	32.8	最大0.9	最大0.8				燃えさし
85	7	88	D5	SD04	棒状木製品	32.5	最大1.2	最大0.8				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕
85	8	88	D5	SD04	棒状木製品	33.8	0.9	0.7				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕
85	9	88	D5	SD04	棒状木製品	32.8	最大1.2	最大1.1				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕
85	10	88	D5	SD04	棒状木製品	32.3	1.0	0.6				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕
85	11	88	D5	SD04	棒状木製品	29.7	1.1	0.9				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕
85	12	88	D5	SD04	棒状木製品	29.2	1.0	0.7				燃えさし 繋った痕あり 加工した方の端部痕

Fig	標物番号	穿孔深度	出土地点	出土状況	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)	その他の寸法	木取り	備考
85	13	88	D5	SD04	棹状木製品	29.6	最大0.8	最小0.6			燃えさし	加工した方の端部焼痕
85	14	88	D5	SD04	棹状木製品	30.5	最大1.1	最小1.0			燃えさし	加工した方の端部焼痕
85	15	88	D4	SD04	棹状木製品	29.8	最大1.2	最小1.0			燃えさし	焼った面あり 加工した方の端部焼痕
85	16	88	D5	SD04	棹状木製品	27.0	最大1.3	最小0.8			燃えさし	加工した方の端部焼痕
85	17	88	D4	SD04	棹状木製品	28.5	最大1.0	最小0.7			燃えさし	焼った面あり 加工した方の端部焼痕
85	18	88	D5	SD04	棹状木製品	27.3	最大1.1	最小0.5			燃えさし	
85	19	88	D4	SD04	棹状木製品	27.2	最大1.0	最小0.6			燃えさし	加工した方の端部焼痕
85	20	88	D5	SD04	棹状木製品	16.4	最大0.9	最小0.8			燃えさし	焼った面あり 加工した方の端部焼痕
85	21	88	D6	SD04	棹状木製品	残26.4	最大1.0	最小1.1			燃えさし	焼った面あり
85	22	88	D5	SD04	棹状木製品	残25.1	1.1	0.9			燃えさし	当たり面(削い凹凸)あり
85	23	88	D5	SD04	棹状木製品	残26.1	最大1.2	最小1.2			燃えさし	
85	24	88	D4	SD04	棹状木製品	残13.7	最大1.0	最小0.7			燃えさし	
85	25	88	D5	SD04	棹状木製品	残14.2	最大0.9	最小0.7			燃えさし	
86	1	89	D4	SD04	角材	48.7	10.5	6.8		ぼぞ六多角形板 3.3 × 3.4	ぼぞ六 切り面あり 焼跡で成形 一部焼痕有り	ぼぞ六 切り面あり 焼跡で成形 一部焼痕有り
86	2	89	D4	SD04	柄	11.7	3.2	2.0		目打穴(目4)	刀子などの柄か 表面何か埋めか	
86	3	89	D4	SD04	板材	残27.3	最大2.7	最大1.0			一部焼痕残存	
86	4	89	D4	SD04	杭	39.4	最大2.6	最大2.6			芯持材か	自然木を机としたもの 加工痕
86	5	89	D4	SD04	杭	41.0			4.3		芯持材か	加工痕 滑溜感
86	6	89	D5	SD04	杭	62.2	最大7.6	最大4.8			全体的に地痕	建築部材を転用か
86	7	89	D6	SD04	棹状木製品	残25.9	3.8	2.9			板目	用途不明 何かの部材を削って棹状にしている
86	8	89	D4	SD04	不明	残30.4	最大2.1	最大1.2			用途不明	加工痕 目打穴と思われる凹みあり
86	9	89	D4	SD04	机か	残117.4	最大5.3	1.8			板目か	建築部材を転用
86	10	89	D4	SD04	杭	残126.6			4.5 ~ 5.5		芯持材	粗皮保存 加工痕
106	1	90	D4	第Ⅳ層より下層	杭	残113	複5.5	1.5				鍬などの農具の可能性あり
106	2	90	D7	第Ⅳ層より下層	板材	残41.0	最大10.1	最大7.8			角材(建築部材か)	を転用 削い刃物工具で大きくカットされている
112	1	90	C7	第VI・Ⅶ層	棹状木製品	残14.3	複9.0	最大1.9				ノミ状加工痕
112	2	90	D6	第VI・Ⅶ層	杭	残45.8			2.7		芯持材	加工痕
112	3	90	D4	第VI・Ⅶ層	棹状木製品	残68.4	最大8.1	最大1.6				

第5章 自然科学的分析

第1節 平ノ前遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

平ノ前遺跡は、島根県大田市静間町に所在し、静間川河口付近の標高約4～5.5mの平地に位置する。測定対象試料は、掘立柱建物跡や溝跡等から出土した炭化材7点と木片2点の合計9点である(表1)。

遺跡の南西は丘陵で、15世紀後半から16世紀前半の静間城跡が位置しており、遺跡全体として縄文時代後期以降から16世紀頃の遺物が出土している。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時は「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO₂II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(OyrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年

代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類よって結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3 軟件 (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、 $1780 \pm 20\text{yrBP}$ (試料9(炭9)) から $1410 \pm 20\text{yrBP}$ (試料8(炭8)) の間にある。历年較正年代 (1σ) は、最も古い試料9(炭9)が $225 \sim 324\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、最も新しい試料8(炭8)が $625 \sim 655\text{cal AD}$ の範囲で示され、弥生時代後期から古墳時代終末期頃に相当する (佐原 2005、小林 2009)。

なお、今回測定された試料の年代値については、次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された9点の試料には樹皮が確認されていないことから、これらの木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

また、試料9(炭9)が含まれる1～3世紀頃の历年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾崎 2009、坂本 2010など)。その日本産樹木のデータを用いてこの試料の測定結果を历年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて 47% 以上の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻
弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82

尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾慎一郎、松木武彦編、弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分、佐原真、ウェルナー・シュタインハウス監修、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集、ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻、学生社、14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へー、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株) 加速器分析研究所、85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 補正值)						
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態 方法	$\delta^{14}\text{C}$ (%) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正値 Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-180216	試料1(炭1)	炭縁り1 PNo.277	炭化材 Aaa	-27.75 ± 0.39	1,520 ± 20	82.74 ± 0.23
IAAA-180217	試料2(炭2)	炭縁り1 PNo.278	炭化材 Aaa	-26.10 ± 0.33	1,450 ± 20	83.46 ± 0.25
IAAA-180218	試料3(炭3)	SD12 PNo.279	炭化材 Aaa	-25.87 ± 0.40	1,480 ± 20	83.14 ± 0.24
IAAA-180219	試料4(炭4)	炭縁り1より下の暗灰色粘質土 PNo.280	炭化材 Aaa	-24.74 ± 0.33	1,470 ± 20	83.23 ± 0.25
IAAA-180220	試料5(炭5)	SBO4 PG4 柱根	木片 Aaa	-26.78 ± 0.36	1,510 ± 20	82.85 ± 0.23
IAAA-180221	試料6(炭6)	SBO4 PI27 柱根	木片 Aaa	-31.25 ± 0.41	1,440 ± 20	83.56 ± 0.25
IAAA-180222	試料7(炭7)	SI01 焙道内	炭化材 Aaa	-27.06 ± 0.31	1,430 ± 20	83.71 ± 0.25
IAAA-180223	試料8(炭8)	SI03 (燒土痕の上)	炭化材 AAA	-25.02 ± 0.26	1,410 ± 20	83.93 ± 0.24
IAAA-180224	試料9(炭9)	SI02 中央	炭化材 AAA	-27.85 ± 0.41	1,780 ± 20	80.13 ± 0.23

[IAA 登録番号 : #9093]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-180216	1,570 ± 20	82.27 ± 0.22	1,522 ± 22	474calAD - 485calAD (6.5%)	430calAD - 493calAD (25.8%)
				536calAD - 590calAD (61.7%)	530calAD - 602calAD (69.6%)
IAAA-180217	1,470 ± 20	83.27 ± 0.24	1,452 ± 23	996calAD - 640calAD (68.2%)	569calAD - 648calAD (95.4%)
IAAA-180218	1,500 ± 20	82.99 ± 0.23	1,483 ± 23	561calAD - 607calAD (68.2%)	544calAD - 633calAD (95.4%)
IAAA-180219	1,470 ± 20	83.27 ± 0.24	1,474 ± 23	566calAD - 615calAD (68.2%)	550calAD - 640calAD (95.4%)
					433calAD - 459calAD (5.3%)
IAAA-180220	1,540 ± 20	82.55 ± 0.22	1,511 ± 22	542calAD - 590calAD (68.2%)	467calAD - 489calAD (5.6%)
					532calAD - 610calAD (84.5%)
IAAA-180221	1,550 ± 20	82.49 ± 0.24	1,442 ± 23	604calAD - 641calAD (68.2%)	576calAD - 650calAD (95.4%)
IAAA-180222	1,460 ± 20	83.36 ± 0.24	1,427 ± 23	613calAD - 647calAD (68.2%)	591calAD - 656calAD (95.4%)
IAAA-180223	1,410 ± 20	83.93 ± 0.23	1,406 ± 22	625calAD - 655calAD (68.2%)	606calAD - 661calAD (95.4%)
IAAA-180224	1,830 ± 20	79.67 ± 0.22	1,779 ± 23	225calAD - 259calAD (33.3%)	142calAD - 196calAD (10.2%)
				281calAD - 324calAD (34.9%)	209calAD - 333calAD (85.2%)

[参考値]

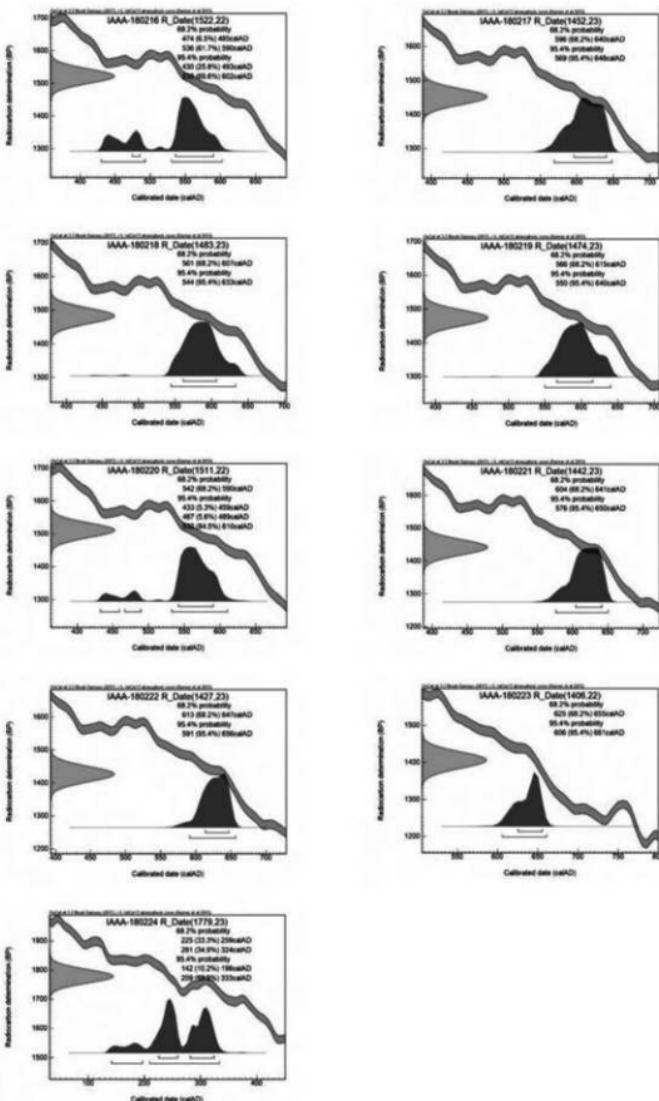


図1 历年較正年代グラフ（参考）

第2節 平ノ前遺跡出土小玉の自然科学的調査

田村朋美（奈良文化財研究所）

1 はじめに

平ノ前遺跡から出土した小玉について、材質に関する自然科学的調査をおこなった。以下その結果について報告する。

2 資料と方法

本調査の対象は、平ノ前遺跡から出土した小玉1点である。扁平な算盤玉状を呈し、色調は暗緑色半透明でガラス光沢を有する。保存状態は良好である（図1）。本資料について下記の非破壊調査を実施した。

まず、実体顕微鏡観察およびマイクロフォーカスX線ラジオグラフィ（CR法）による内部観察をおこなった。次にアルキメデス法により比重を測定するとともに、蛍光X線分析による非破壊材質調査を実施した。測定に用いた装置は、エダックス社製EAGLE IIIである。励起用X線源はRh管球、管電圧は20 kV、管電流は200 μA、X線照射径は50 μm、計数時間は300秒とした。測定は真空中で実施した。

3 結果と考察

顕微鏡観察およびCR法による内部観察の結果、内部に気泡はまったく認められなかった（図2・図3）。針状または柱状の組織が確認できる（図4）。孔径は両端面で異なり、孔は片側からの穿孔による。ただし、孔がやや屈曲していること、孔径の大きい側の開孔部が橢円系を呈する（図5）ことから、穿孔の際に回転軸に修正が加えられている。顕微鏡下では、赤褐色の不純物が僅かに含まれていることがわかる（図6）。

蛍光X線分析の結果、主成分はアルミニウム(Al)とケイ素(Si)である。その他に、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)および鉄(Fe)が検出された（図7）。また、およそ3～13 keVの範囲に回折線と考えられるピークが認められる。比重は3.16であった。

以上のことから、本資料は上記の成分を主体とする結晶物質（鉱物）であり、色調および比重などを考慮すると緑簾石の可能性が指摘できる。ただし、本調査では水素(H)～ネオン(Ne)までの軽元素を測定することができないため、ホウ素(B)やベリル(Be)を含む鉱物の可能性も否定できない。鉱物種の同定には決め手を欠くため、ここでは可能性



図1 顕微鏡写真（落射光）



図2 顕微鏡写真（透過光）



図3 CR画像（側面から）



図4 針状の組織（落射光）



図5 開孔部（大）



図6 赤褐色部分

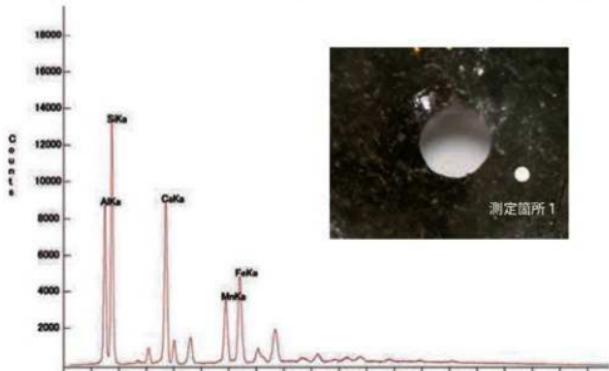


図7 萤光X線スペクトル（暗緑色部）

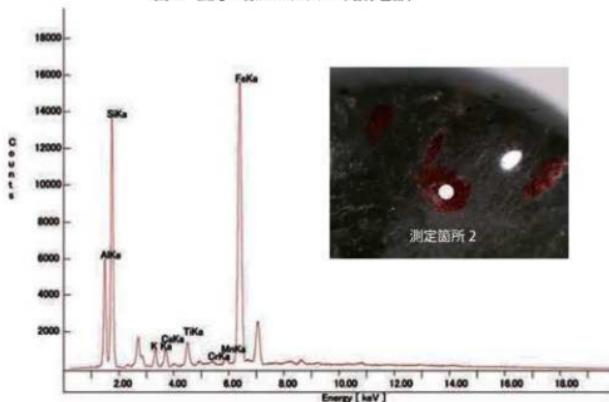


図8 萤光X線スペクトル（赤褐色部）

を提示するにとどめる。

なお、赤褐色不透明部分については、鉄(Fe)の含有量が極めて多く、赤色は鉄に由来すると考えられる(図8)。さらに、緑色部分と比較してカルシウム(Ca)の検出強度が小さく、カリウム(K)が検出されるという差異が認められた。さらに、マンガン(Mn)の検出強度も極めて小さい。

第6章 総括

今回の調査では、この地域における弥生時代から古代までの新たな知見を得ることができた。本章では、確認された遺構と遺物のうち重要と考えられるものについて述べたあと、時期的な変遷を示しながら考察していきたい。

第1節 主な遺構

弥生時代の溝

弥生時代前期末から中期初めにかけて機能する SD10 と、同位置で中期末から後期前半にかけて機能する SD05 である。

SD05 は新・古の二段階に分かれ、さらに古段階には改修された形跡がみられた。SD05（古）は矢板や杭などによって築造された分水と導水を兼ねた水利施設を作っていた。矢板と杭列には、流路に斜交するもの（矢板・杭列 1）、直交するもの（矢板・杭列 2・3・5）、平行するもの（矢板・杭列 4・6）があり、施設の構造を復元できる状況をよく残していた。特に、溝の北側で確認された矢板・杭列 2～6 からなる一連の施設からは、流路に直交する矢板と杭で堰き止めた水を、岸に沿って作られた横板（第 49 図 13）を伴う細い溝に流すという構造が理解できた。散逸したり破損したりした部分もあるが、復元できた構造からは灌漑技術の一端をうかがい知ることができた。水利施設は、矢板・杭列 5・6 の一部が SD05（古）の改修前の溝に伴うことから、掘削当初から設置されていたものと思われる。また、改修に合わせて水利施設も作り直された形跡がうかがえるが、その存続期間は短かったようで、弥生時代後期の前半には埋没する。

弥生時代の静間川の流路が現在と大きな違いがないものと仮定するならば、これら 2 条の溝が延長して静間川と接する地点に取水口を設けて水を引いていたと想定できる。本調査区では当該期の水田跡が確認されていないため、どのように配水されていたかは不明であるが、用水は遺跡の北側に広がっていたであろう水田に送られていたものと考えられる。当該期における水利施設は、県内では、上小紋遺跡⁽¹⁾（松江市）や山持遺跡Ⅲ区⁽²⁾（出雲市）などでみられる程度であり、SD05 は施設の構造を把握できる貴重な調査成果となった。重複する SD10 は SD05 の前段階の水路であり、この時期（弥生時代前期末から中期初めにかけて）から灌漑技術によってこの地域の農地開発が進んだものと考えられる。

なお、SD05（新）からは、桶や田下駄などの生活具の他、柱材などが出土している。また、SD05（古）の水利施設に用いられた矢板や杭列のほとんどは、施設部材からの転用材であった。その加工痕の観察から鉄製刃器の使用が推測され、鉄製品を研いだと考えられる大型砥石（第 48 図 1）の出土から、水利施設周辺でその作業が行われたと考えられる。また、溝内からは周辺の丘陵や海岸で採取されたと思われるものを含め大小様々な礫が多量に出土し、なかには石斧や石錘などの石器が含まれていた。以上のような施設部材や石器および多量の礫などから、調査区周辺に建物等を含む当該期の遺構が存在していたことが推測される。今後、周辺の調査が進めば、SD05 のような灌漑水路を造って農地經營をしていた集落の様相が明らかになっていくものと思われる。

古墳時代の溝

古墳時代の溝のうち、SD17、SD04、SD18 について述べる。先の SD05・10 より 10～20 m 東側で南北方向に確認される。

SD17は埋土の堆積状況から上層部と下層部の2時期に分かれる。古墳時代後期初め（5世紀末）に始まる初段階の様相は、南北方向に直線的に延びる流路と考えられ、幅4 m以上、深さ1.6 m以上の規模が推測される。時期については、下層部から出土する遺物に5世紀後半代の土器が含まれることや、遺構底面の検出に至っていないこともあり、中期末に遡る可能性が指摘される。A群から、壺、高壺、甕、甑、移動式竈など多量の供膳具・調理具のほか、勾玉や白玉などの玉類、ミニチュア土器や獸骨、ガラス滓などが出土している。出土した土器はほぼ完形に復元できる個体が多く、意図的に打ち欠いたとみられる個体もあることから、玉類や獸骨とともに、この地で祭祀が行われたものと考えられる。SD17の下層部は6世紀前半頃までに埋没していくが、この後に起こった静間川の氾濫によって、遺構の多くが破壊されたものと考えられる。

その後、幅約5 m、深さ約1.2 mの規模の水路として掘り直され、6世紀代のある段階には、径70cm、長さ約5 mの大木が設置される。西肩法面から大木にかけての標高2.7～2.8 mには粘土が張り付けられており、これを底面としてこの時期、SD17は埋まりながらも浅い溝として機能していたものと考えられる。この大木周辺は祭祀的要素の強い多量の土器や獸骨を含む遺物が出土し（B群）、その東端部から金銅製歩搖付空玉が出土している。また、C・D群では6世紀後葉の遺物を中心とすることから、祭祀は時期とともに場所を移動しながら行われていた可能性がある。県内での古墳時代の溝及び河道における祭祀遺跡としては、大家八反田遺跡⁽³⁾（大田市）や前田遺跡⁽⁴⁾（第II調査区）（松江市）などが報告されており、いずれも取水堰の脇から祭祀遺物が出土している。灌漑水路での祭祀は稻作儀礼に関連することが指摘されており、SD17でみられた祭祀も調査区の北側に展開する水田開発に伴うものと考えられる。なお、遺構内からは垂木や棟材と思われる建築部材（82図1、83図1）が出土しており、次代に確認されるSB01・07のような建物と祭祀との関連性を考慮する必要があろう。

SD17は、6世紀末には洪水により廃絶する。その後、SD18、SD04として灌漑水路は継続するが、規模は幅1 m前後に縮小することから、上流部により安定した水利施設が置かれた可能性もある。

竪穴建物

確認された5棟の竪穴建物は、古墳時代前期が2棟、後期が3棟である。

前期のSI02とSI05については、切り合い関係からSI05がSI02に先行し、同規模に復元できることから、SI05が建て替え前の建物と捉えられる。この2棟は1辺が5.1～5.5 mほどの隅丸方形で、SI02は中央ピットをもつ建物である。出土遺物は少ないが、ミニチュア土器（第13図8・9）や出雲地域とのつながりがうかがえる搬入品と考えられる壺（第13図1）が見られる。出土遺物はいずれも小谷3期で、SI02床面検出の炭化物の¹⁴C年代測定値AD209～333年と合致することから、SI02は古墳時代前期前半代の建物と考えられる。

後期では、SD17が埋没した後、SI01・03・04の3棟が確認される。SI01は、今回確認した建物の中で唯一造り付け竈を有する建物である。造り付け竈を有する建物はこれまで山間部で主流とされていたが、大田市域では市井深田遺跡、城ヶ谷遺跡、御堂谷遺跡、鰐淵遺跡など近年、平野部においても検出例が増えており、本例は石見地方沿岸部における古墳時代の竪穴建物炊飯様式を検討するうえで貴重な資料となった。SI04は隅丸方形の4本柱の構造で、SI03はこれに後続するが、長辺が6.2 mと縦長の平面形から、SI04とは異なる性格が考えられる。SI03で特筆すべきは、覆土に遺構の年代より古い遺物が多量に含まれていたことで、接合資料（第15図2）等から、SI03

の廃絶後に SD17 を含む SI03 周辺の土が埋め土に使われたことが指摘できる。この造成行為は後述する掘立柱建物群の基盤作りと考えられよう（第4章第1節参照）。出土遺物は、古相の遺物を含むものの概ね石見4期に属する。また、SI01 の煙道内炭化物と SI03 検出の炭化物の¹⁴C 年代測定値はそれぞれ A.D. 591 ~ 656 年、A.D. 606 ~ 661 年であったことから、これら 3 棟の建物は 6 世紀末から 7 世紀前半で帰属するものと考えられる。SI01 は軸方位が他 2 棟と若干ずれるこどから、時期差があると考えられ、炭化物の測定年代から他 2 棟より若干古いものと思われる。

掘立柱建物群

掘立柱建物は 6 棟 (SB01 ~ 05, 07) 検出されている。

掘立柱建物の構造的特徴により、3 タイプに分類して検討する。SB01、SB07 は、2 間 × 2 間の総柱建物（掘立柱建物 A 類）、SB02、SB04 は梁行が 3 間となる大形掘立柱建物（掘立柱建物 B 類）、SB05 は、2 間 × 3 間の掘立柱建物（掘立柱建物 C 類）とする。なお、SB03 は、建物の一部のみの検出であり、全体の構造が分からないので分類には含めないものとする。

A 類の SB01、SB07 は A3、A4、B3 グリッド付近の比較的近い位置で検出された。この 2 棟は軸方向もほぼ同じであることから、同時期に併存していた可能性が高いと考えられる。SB07 の P1 に直径 40cm の柱材が残存しており、堅牢な高床式倉庫であったことが想定される。この柱材で酸素同位体年代測定を実施したところ、年輪の最外部分が 560 年という測定値が出ている。ピットからは石見 4 期の遺物が出土していることから、SB07 の築造年代は 6 世紀末から 7 世紀前葉に比定されるが、柱材の 560 年という測定値は若干先行する。これについては、この柱材を用いた建物が別の位置に建てられており、その古材を利用して石見 4 期に現位置に移築されたと考えることができよう。移築前の建物の上限は石見 3 期とするのが妥当とみられ、同構造の建物であったとすれば、A 類の建物は B、C 類に先行すると考えられる。また平面形が正方形の SB01 に対して SB07 は長方形を呈しており、柱材も 40cm と大規模であるなど、二つの建物は機能が異なるものと考えられる。

B 類の SB04 は、第 VI 層上面より上の遺構と考えられる。第 VI 層の下限の遺物は石見 7 期であるので SB04 の上限は石見 7 期と考えられる。SB02 の検出面は、第 XIV、XV 層および SD05 が埋まった部分で検出された。ピットからは古墳時代後期頃の遺物の破片が出土している。時期を決定できる資料は分からなかったが、D2・D3 グリッド付近の第 VI 層で出土する土師器・甕と特徴が似ている遺物が含まれており、SB02 の時期は、SB04 とほぼ同じ時期と推測される。

C 類の SB05 はピットの重複関係より SB04 より新しい建物である。建物の規模や軸方向も異なっている。しかし、ピットから出土する遺物の状況は SB04 と同じような傾向であり、SB04 廃絶からあまり時間がたっていない可能性も考えられる。

SB07 や SB04 で行った年代測定で柱材はそれぞれ 6 世紀、6 世紀後半から 7 世紀前半の時期と分かっており、A 類は 6 世紀末から 7 世紀頃、B、C 類は 7 世紀後半頃と推測される。

A 類は総柱建物であり、倉庫跡の可能性が考えられる。それを補完する資料は以下のとおりである。6 世紀末から 7 世紀前半の水路跡 SD04 で、倉庫の扉材の可能性が考えられる焼失した建築材（第 86 図 1）が出土している。古墳時代の遺跡では、河辺の祭祀を行った周辺には祭器を納めていた倉庫が建てられていることが指摘されており、A 類の建物についてもその可能性が考えられる。また、SB01 と SB07 には規格差があり、それぞれを補完する建物であった可能性も考えておきたい。

B類は梁行3間で、床面積が40m²を超える大形建物である。岩橋孝典氏は出雲地域における飛鳥・奈良時代の掘立柱建物について集成し、律令期以前（6世紀から7世紀）の梁行3間の建物で床面積が40m²を超える例は、芝原遺跡⁽¹²⁾（松江市福原町）、と古志本郷遺跡⁽¹³⁾（出雲市古志町）で2棟ずつあげられている。両者とも豪族居館と考えられている。芝原遺跡は律令期の島根郡郡家の可能性も指摘されており、古志本郷遺跡は神門郡の郡家に比定されている。本遺跡で確認された梁行3間の大形建物は石見地域では類例がなく、床面積85.8m²を測るSB04は県内最大の規模を有している。⁽¹⁴⁾ 本遺跡は静間川という比較的大規模な河川の河口部に位置し、律令期の安濃郡家推定地（大田市長久町稻用）から近い位置にある。これらのことから、B類の建物は、7世紀後半頃の当地に影響力のあった豪族の居館であった可能性が考えられる。本遺跡は地形的な制約などから郡家には不適であったかもしれないが、状況によっては郡家の津に相当するような役割であったと推測される。

C類（SB05）については不明な部分が多い。しかし建物の軸方向がSB04と異なっており、SB05が建てられていた時期にはB類の大形建物が建っていたときの機能が終息していた可能性も考えられる。なお、本調査区で確認された古墳時代の建物は、竪穴建物から掘立柱建物へ居住形態の変遷が追える稀有な事例といえる。

第2節 主な遺物

コップ形須恵器

平ノ前遺跡では、コップ形の須恵器がSD17と包含層中から複数点出土している。SD17では土器渦りB群の大木付近（第57図8、第64図9～12）、A群（第71図3）、C群（第79図3）である。コップ形の須恵器は石見地域の5つの遺跡で出土しており、現状では出雲地域の遺跡で出土していないことから、石見地域に分布の中心がある。⁽¹⁵⁾ その中で平ノ前遺跡では出土点数が多いことが注目される。

移動式竈・櫃について

平ノ前遺跡からは、移動式竈および櫃が出土している。まとまって出土するのはSD17の下層（第XI層）と第XI層に対応する層からと考えられ、古墳時代後期から終末期を中心に使用されていたと考えられる。用途について参考になる例はSD17下層（第XI層）出土櫃（第76図6）があげられる。赤彩の櫃であり、祭祀など特別な場合に使用されたと推測される。古墳時代の祭祀遺跡では移動式竈、櫃が出土している例があり、本遺跡でも水辺の祭祀で使用されたと推測され、平ノ前遺跡の性格を考えていく上で重要な要素の一つである。

黒色磨研土器

今回の調査では、須恵器模倣の黒色磨研土器が少なくとも16個体出土した（第72図1～16）。これらはSD17下層の土器渦りA群で集中して出土しており、5世紀中頃から6世紀前葉の遺物と共に、环身模倣品より环蓋模倣品の方が多数を占める状況がみられる。⁽¹⁷⁾ この土器は5世紀末から6世紀にかけて関東地方や九州北部の有明海沿岸地域に偏って分布しており、中国地方・近畿地方など西日本には類例がない。⁽¹⁸⁾ 島根県内では平ノ前遺跡の他、高津遺跡（江津市）、只谷Ⅲ遺跡（出雲市）等で出土例が確認されている。⁽¹⁹⁾ 特に高津遺跡では有明海沿岸地域に起源を持つIV類土製支脚も併せて出土していることから、有明海沿岸地域からの搬入品も含まれていると考えられる。

これらの黒色磨研土器は北部九州との交易によりもたらされたことがうかがえ、平ノ前遺跡が北部九州との海上ルートにおいて重要な位置を占めていたことが示唆されるといえよう。

口縁部が欠損する土器

平ノ前遺跡では、SD17 出土資料をはじめ完形に近い状態の須恵器・土師器が多数出土している。これらの土器には口縁端部の一部が欠損するものが多く含まれており、中には土器溜まり B-3 群出土土師器甕（第 59 図 10）や土器溜まり A 群出土の土師器碗（第 73 図 11）のように、口縁部が「U」字状に欠損するなど意図的に打ち欠いたと見受けられる資料も含まれている。

完形土器の口縁端部が欠損する資料は、SD17 の土器溜まり出土遺物に多く認められる。このような特徴をもつ土器が土器溜まり群に集積する状況を積極的に捉えるなら、祭祀において土器を意図的に打ち欠く行為が行われた可能性も考えられよう。ただし、この行為が祭祀の場で実際に行われていたかについては、他の祭祀遺跡出土品の再検討や類似資料の増加を待って判断したい。

土錘

平ノ前遺跡では、土錘が大量に出土している。形状は分銅形、円柱形、円盤 1 孔形、円盤 2 孔形、長方形 2 孔形、円筒形などがあげられる。分銅形土錘だけで 30 点以上出土しており、その他の形状も含めると 60 点以上出土している。出土する層位は第 VI・VII 層が多く、6 世紀末から 7 世紀を中心に使用されていたと考えられる。

金銅製歩搖付空玉

SD17 から出土した金銅製歩搖付空玉（第 81 図 1）は、島根県では安来市鷺ノ湯病院跡横穴墓出土⁽²¹⁾の金銅製空玉に次いで 2 例目の出土となる。古墳や横穴墓ではなく溝から出土した、という点で特徴的である。

歩搖付空玉は、耳飾りや首飾り、腕飾りなどの装飾品を飾るために取り付けられたもので、朝鮮半島に多いものであり、特に慶州市などの「新羅」地域で集中している。朝鮮半島の 5 ~ 6 世紀の王墓や地域の首長墓から出土し、金製の歩搖付空玉が多いことが特徴である。⁽²²⁾

金銅製歩搖付空玉の製作地は不明であるが、出土例の少なさから朝鮮半島製か、もしくは朝鮮半島製の製品をもとに国内で製作された可能性がある。仮に後者の場合でも、朝鮮半島の強い影響を受けて製作されたものであると考えられる。日本でも朝鮮半島でも地域の首長墳から出土するような逸品が、大規模な古墳の存在が顕著ではない大田市静間町から出土したという点は興味深く、当時の朝鮮半島と平ノ前遺跡の位置する日本海沿岸地域との交流をうかがうことができる貴重な資料である。⁽²³⁾

玉作関連遺物

平ノ前遺跡で出土した玉作関連遺物のうち、玉未成品は剥片を含めて約 40 点確認することができた（第 123・124 図）。石材はほぼ碧玉に限定され、出雲地方における古墳時代の玉生産を特徴づける瑪瑙製や水晶製の未成品は認められない。遺跡からは明確な玉作工房跡は検出されていないが、未成品は SD17（下層）やビットの埋土、遺物包含層から出土しており、SD17 の共伴遺物から少なくとも 5 世紀末から 6 世紀前半にかけて玉作りが行われたとみられる。

製作器種は、管玉（研磨工程品・角柱状加工品・素材剥片）や丸玉 1 点（研磨工程品第 123 図 1）の他、勾玉の可能性のある未成品（研磨痕のある剥片第 123 図 3）も 1 点含まれており、紅簾石片岩製の内磨砥石（第 124 図 7）も出土することから、勾玉・管玉生産が主体であったことがう

かがえる。また肉眼観察によれば、碧玉は硬質で濃緑色を呈することから花仙山産と思われる。これらから、平ノ前遺跡における玉生産の規模は小さいが、当該期に出雲の工人が向いて玉作りを行っていたことが想定されよう。^[24]

これまで山陰地方における玉作りは、弥生時代前期後葉に始まり古墳時代を通じ一貫して玉生産が行われる中、古墳時代前期に山陰西部の玉作りは途絶え、古墳時代後期以降は玉作工房が出雲部の花仙山周辺に集約されることが論じられてきた。^[25]一方、石見地方は断片的な剥片等の出土は認められてきたが、玉生産の空白地帯として理解されてきたように思われる。平ノ前遺跡の玉作りは、石見地方における玉作り遺跡の初例といえ、碧玉製品に特化した勾玉・管玉主体の玉生産を行っていることが特徴的といえる。

平ノ前遺跡で玉作りが行われた5世紀末から6世紀前半は、出雲の玉作りは松江市玉湯町の花仙山周辺に玉作遺跡が集約してさらに発展するとともに、大和政権が深く関わったと評価される奈良県曾我遺跡の玉作りと結びつきが強くなる。そうした中、平ノ前遺跡の玉作りは花仙山から西へ約56kmも離れた石見地方でありながら、玉作りの内容や技術が出雲と共通する点は注目される。今回の調査は、なぜこの時期に花仙山周辺地から遠く離れたこの地で玉作りが行われたかを含め、当該期における出雲の玉作りや流通の実態を解明する上で、新たな検討材料を加えたといえる。

鍛冶関連遺物

平ノ前遺跡では、鍛冶関連遺物として輪羽口や椀形鍛冶滓が出土している（第122図）。いずれもD4グリッドのSD04埋土や遺物包含層に集中して出土おり、共伴遺物からこれらは7世紀代に属するとみられる。遺跡からは明確な鍛冶構造は検出されていないが、出土状況から付近で鍛冶が行われていたと考えられる。また鍛冶滓は小型のものが多く、鉄素材を持ち込んで製品生産を行う鍛錬鍛冶が中心に行われたことがうかがえる。

これまで県内における古代の鍛冶関連遺跡は、出雲部を中心に多数報告されているが、石見部ではわずかに邑智郡美郷町の7世紀代とみられる長尾原遺跡西側特殊遺構しか確認されていない。^[27]また近年、神谷遺跡（大田市久手町）において、7世紀半ばから8世紀前半に操業されたとみられる横口付き製炭窯が4基検出されている。^[28]横口付き製炭窯は製鉄炉で必要とされる大量の炭を供給するための炭窯であったと指摘されており、周辺に同時期の製鉄遺跡が存在する可能性が高い。^[29]

長尾原遺跡では炉跡や水路、溜池などが検出されているのに対し、平ノ前遺跡では明確な鍛冶構造は明らかでないが、從来不明瞭であった石見海岸部における古代の鉄生産の実態を検討する上で、貴重な材料を提供したといえる。

第3節 遺跡の変遷

1. 弥生時代（第126図）

遺構の変遷を追うと、弥生時代以降この地の開発が行われたことが、南東から北西方向に延びるSD05やSD10からみてとれる。弥生時代前期末から中期初めにまでは、旧静間川から取水するための灌漑水路としてSD10が掘削される。その後、中期末から後期初めにかけて重複してSD05が掘削される。SD05は水利施設を伴っており、転用された多数の矢板や杭によって構築された施設の復元状況からは、静間川から取水された水を下流域に導水する灌漑技術をうかがい知ることができた。SD05は弥生時代後期の前半代には埋没するが、水利施設に多くの転用材が使われたことから、

農地開発を進めた集団は本調査区周辺に集落を営んでいたものと考えられる。

2. 古墳時代前期から後期（第 127 図）

SD05 が廃絶した後には目立った遺構は確認されない。調査区の東側には洪水砂が堆積していることから、静間川の氾濫によって遺構が破壊された可能性も考えられる。

古墳時代前期の前半に、埋没した SD05 の東側で竪穴建物（S102・05）が確認され、静間川の岸辺近くに生活の場が築かれる。当該期の主な遺構はこれら 2 棟の建物のみであるが、氾濫原に近い場所に造られていることは、水利や交易などによる静間川との関係が強い現れといえる。

古墳時代前期後半から中期にかけては主な遺構は見当たらない。しかし、包含層や古墳時代後期の SD17 からは、当該期の遺物がある程度出土することから、周辺に古墳時代中期の遺構が存在する可能性は高いといえよう。

後期初めに、SD17 が南北方向に確認される。後世の洪水によって東肩部が破壊されているため全容は把握できないが、初段階の状況は、幅 4 m 以上、深さ 1.6 m 以上の規模が推定され、前代の SD05・10 と同じ灌溉水路として掘削された溝と考えられる。開削時期は下層部の出土遺物から、中期末に遡る可能性がある。SD17 では、5 世紀末から 6 世紀前半に、主に静間川に近い場所（A 群）で多数の土器廃棄とともに玉類を伴う祭祀が行われている。幾度かの洪水による浸食と堆積の後、幅約 5 m、深さ約 1.2 m の溝として掘り直される。この段階の遺構内からも、祭祀的色彩の強い土器が大量に出土し、西肩部から溝内に設置された大木の周辺（B 群）を中心に祭祀が行われている。

3. 古墳時代後期：6 世紀末から 7 世紀前半（第 128 図）

洪水によって調査区の東半分が浸食を受け堆積物に覆われた後、埋没した SD17 の後継水路として SD04 と SD18 が同軸方向に掘削される。調査区西側では倉庫に推定される SB01・07 が確認され、東側は静間川の氾濫による浸食と堆積によってできた落込みが広がる状況である。

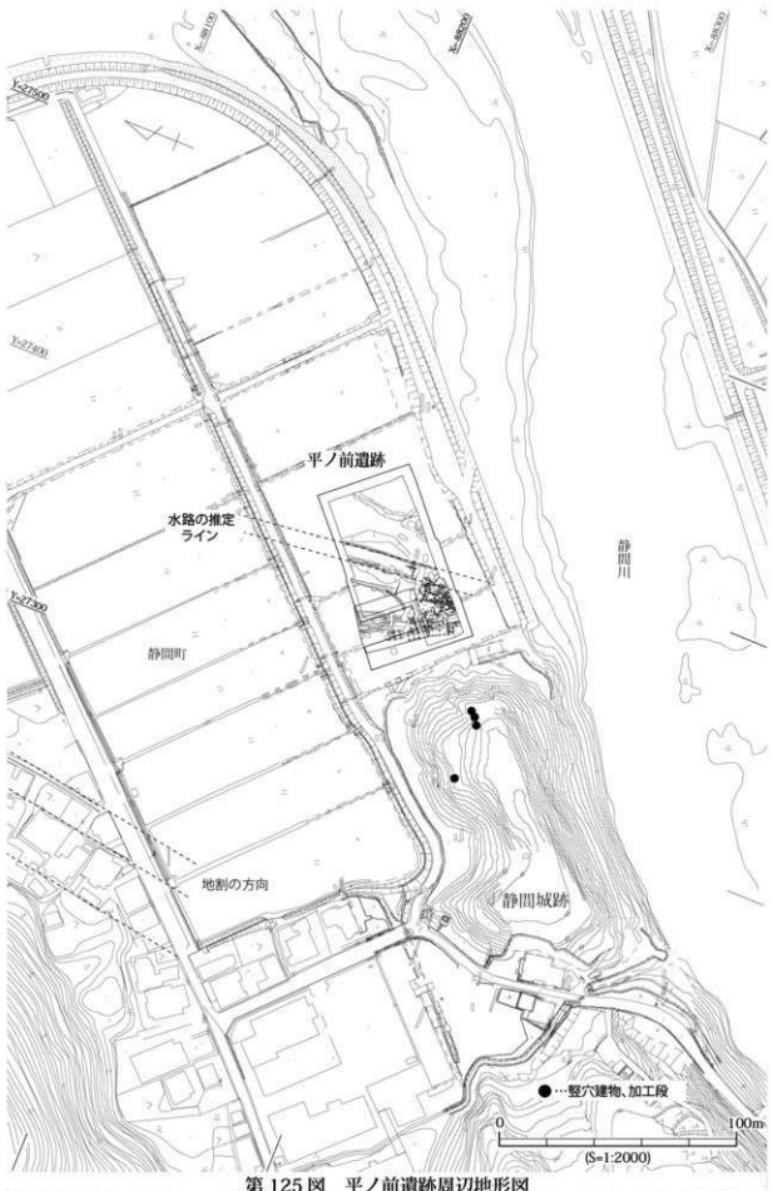
静間川近くの区域は造成され、3 棟の竪穴建物（S101・03・04）や区画的な溝（SD06・07・11・12・13）が確認される。また、SK01・02・05・07などの土坑や炭溜りが重複して確認される。SD04 周辺の炭溜りや包含層からは鉄滓や羽口など鍛冶関連遺物が出土しており、付近で鍛冶が行われたことが推測される。建物のうち造り付け窓をもつ S101 が確認されたことは、造り付け窓をもつ集団の海岸部への進出状況を示すものといえる。しかし、ほどなく竪穴建物は埋め立てられる。

なお、本調査区西側にある小丘陵上に築かれた「静間城跡」の調査では、古墳時代の竪穴建物や加工段などが確認されたことから、この小丘陵を含めた周辺に集落が展開していたものと考えられる。

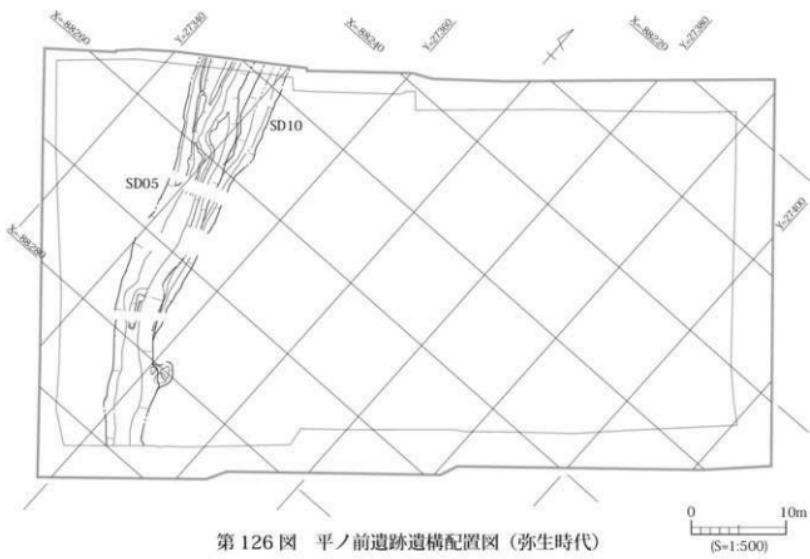
4. 7 世紀後半以降（第 129 図）

竪穴建物が埋まり造成された後、古墳時代終末期において、大形建物などが配された掘立柱建物群（SB02～05）の出現を見る。建物群の造営に際しては、S103 の埋め土の検証から、周辺の土を掘り返して基盤を造る地業が行われている。掘立柱建物群は豪族の居館を想像させるもので、その中の 3 × 6 間（85.8 m²）の大型建物（SB04）は宮衙に匹敵する建物であり、その建立は、川辺に築かれた本遺跡が水利と交易を通して静間川下流域を統括する拠点となった現れといえよう。SD17 埋没以降の竪穴建物から掘立柱建物群への変容は劇的でもあり、律令国家成立期の現象と捉えておきたい。

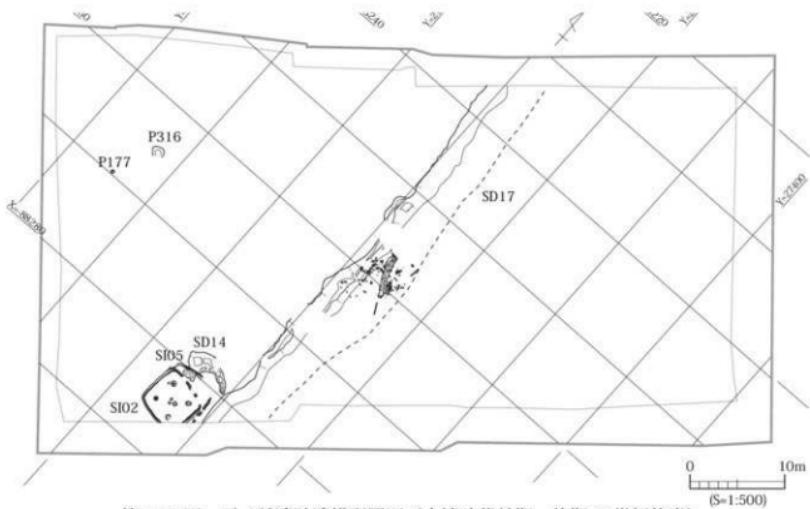
その後、SB04 に重複して掘立柱建物（SB05）が 1 棟確認される。以降、調査区内では SB05 以



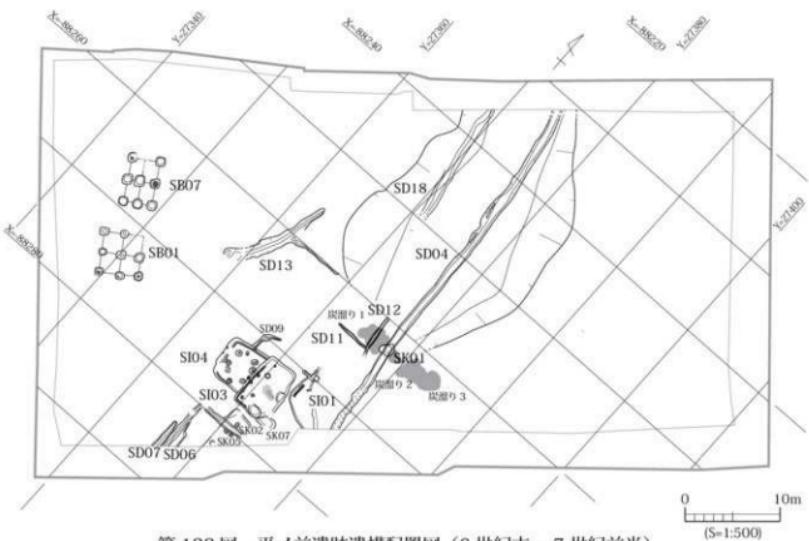
第125図 平ノ前遺跡周辺地形図



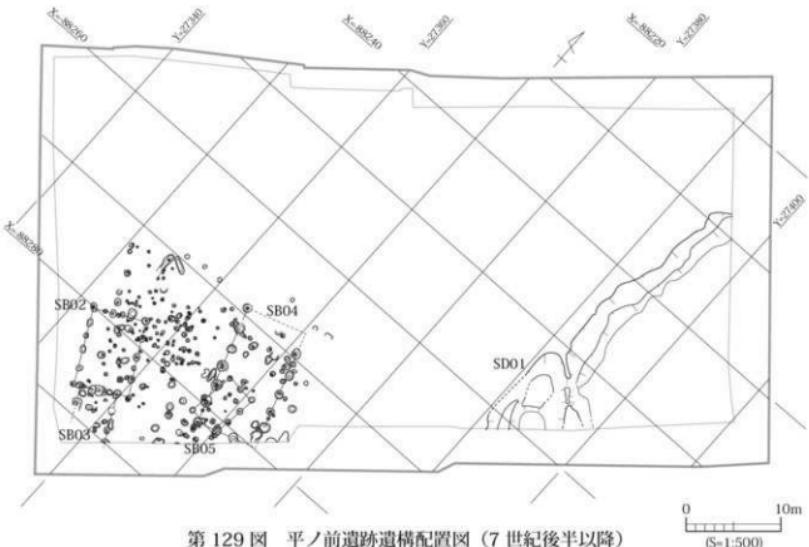
第126図 平ノ前遺跡遺構配置図（弥生時代）



第127図 平ノ前遺跡遺構配置図（古墳時代前期～後期：6世紀後半）



第128図 平ノ前遺跡遺構配置図（6世紀末～7世紀前半）



第129図 平ノ前遺跡遺構配置図（7世紀後半以降）

外に目立った遺構は確認されないが、本遺跡から約400m東の静間川の対岸では、大田市教育委員会によって調査された鰐淵遺跡から、古代の土器類とともに土馬が発見され⁽³¹⁾、静間川河口域における古代遺跡の存在が示された。今回の調査では、包含層から墨書き土器や転用硯など当該期の遺物が確認されており、後世の削平によって遺構が消失した可能性を考慮すれば、本遺跡は前代より引き続き静間川下流域の拠点として存在していたものと推測される。

中世以降の本調査区内は水田として活用され、現在に至る。なお、戦後（1947年）の米軍による航空写真（写真1）をみると、検出された遺構の軸方位は撮影時の畦畔及び水路の地割とほぼ合致するものであった。圃場整備前の空撮写真（1975年撮影）でもほぼ変化はなく、現在の遺跡周辺の地形測量図（第125図）においても、街路の地割に痕跡が残っていることも注目される。この地割が古代から古墳時代、さらには弥生時代まで遡れるものなのか、周辺の調査成果の積み重ねが必要と考えられる。

第4節　まとめ

前節において、調査成果をふまえた本遺跡の変遷を概略的に述べた。ここでは、遺構配置からみた本遺跡の様相を考察し、まとめとしたい。

本遺跡では調査区西側以外は溝を除いて遺構の分布が少ない。その理由としては、旧静間川の氾濫によって調査区の東半分で浸食と堆積が繰り返されたことがあげられる。それを考慮したうえで、各時代を通じて調査区の南西側に遺構が集中している意義を以下に述べる（第4・125図）。

弥生時代前期末から中期初めにかけて、静間川から取水する灌漑水路SD10を初現とし、低湿地であった静間川河口域の水田開発が行われたことがうかがえる。弥生時代中期末から後期前半には、水利施設を作った水路SD05によって、水田開発は進んだものと思われる。

古墳時代前期には竪穴建物がみられ、水利や交易などに直接的に関係する静間川の岸辺に生活の場が築かれたことがわかる。古墳時代後期に至って、この区域は大型の灌漑水路SD17で、多量の土器廃棄や玉類を伴う祭祀が行われる特別な場所となった。SD17では北部九州から搬入された土器もみられ、他地域との活発な交流がうかがえる。また、朝鮮半島との関係性が強く感じられる金銅製歩葉付空玉の出土については、本遺跡では1個体のみ出土しているが、類例では複数点を連にして流通・使用するのが一般的であることから、本来は本遺跡でも連として保管されていたことが想定される。極めて稀少な金銅製品が献じられている事例は、全国的に見ても、金装円頭大刀が伊場大溝から出土した鳥居松遺跡（浜松市）などごく一部に限られる。祭祀主体が広域交通に関与する極めて高い階層者であったことを示唆するといえ、そのような支配者層によって地域経営が執り行われたものと考えられる。⁽³²⁾

その後に続く竪穴建物跡と掘立柱建物群については、南側の静間川からは30～50mの距離にあって、30m四方の範囲内にある。氾濫源である静間川に近い区域で基盤造りの地業を繰り返し築造されることからは、時代の推移とともに海上及び河川交通の要衝として発展していく重要な位置であったことがみてとれる。また、玉作りや鍛冶が行われていたことは、石見地域における本遺跡の特異性を示している。特に玉作りについては、使用石材がほぼ碧玉に限定される点や、花仙山周辺地から遠く離れたこの地に出雲の工人が出向いて玉作りが行われるなど、極めて特異な状況が明らかとなった。なぜ平ノ前遺跡で玉作りが行われたかについては、玉作りが小規模で長期間行わ

れた形跡が認められないことや、現状で出雲西部以西では玉作り遺跡が全く確認されていないことを踏まえると、単発的な生産ながら、この地で玉作りを行う必要性があったからと考えられる。その理由は推測の域を出ないが、SD17での祭祀に必要な玉を自ら製作する必要性があったことが考えられよう。いずれにせよ、周辺地域の調査状況を見極めた上で慎重に検討する必要がある。古墳時代終末期に造営される官衙的性格の強い大形掘立柱建物群には、津（港湾）的な役割をみることができ、平ノ前遺跡は静間川下流域の生産と流通を統括する拠点としての性格を有していたものと考えられる。

静間川は、日本海から内陸の大田平野、さらに山間部へとつながる物流の道として古代よりこの地域の発展に貢献してきた。平ノ前遺跡では、弥生時代から水利施設を持つ灌溉水路が造られ、地域開発が行われた。古墳時代には、首長層が関与していたと考えられる祭祀や玉作及び鍛冶を行う集落が成立していた。古代には、初期の律令官衙的性格をもつ施設に統括機能は継続されたものと考えられる。

静間川の岸辺に造営された平ノ前遺跡は、石見地域のみならず、出雲地域や北部九州をはじめとした日本海沿岸地域と交流し、さらに遠く朝鮮半島との繋がりがうかがえる、日本海沿岸地域の重要な拠点のひとつとして位置づけられよう。

註

- (1) 上小絞遺跡 SK01。島根県教育委員会 1987『北松江幹線新設工事松江連絡新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (2) 山持遺跡Ⅲ・2区 SX03・04。島根県教育委員会 2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 Vol.2』『国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘 調査報告書Ⅳ』
- (3) 松尾充晶 2015「古墳時代の水利と祭祀」『古代文化研究』23 島根県古代文化センター
- (4) 前田遺跡（第Ⅱ調査区）河道Cで祭祀遺物が確認されている。八雲村教育委員会 2001『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』『八雲村文化財調査報告書19』
- (5) 松尾充晶 2018「古墳時代「地域開発」の実態」島根県立古代出雲歴史博物館展「古墳は語る 古代出雲誕生」島根県立古代出雲歴史博物館
- (6) 篠生衛氏のご教示を得た。
- (7) 市井深田遺跡では5基の造り付け竈が確認されている。「市井深田遺跡」『一般国道9号（朝山大田道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- (8) 城ヶ谷遺跡では3基の造り付け竈が確認されている。島根県教育委員会 2016『城ヶ谷遺跡（1区） 神谷遺跡、涼見E遺跡』『一般国道9号（朝山大田道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- (9) 島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡 諸友大師山横穴IV群1号穴』『一般国道9号（大田静間道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- (10) 大田市教育委員会 2017『飼溜遺跡』『一般国道9号（朝山大田道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (11) 篠生衛氏のご教示を得た。
- (12) 芝原遺跡 SB02、SB14 松江市教育委員会 1989『芝原遺跡』
- (13) 古志本郷遺跡 H II区 SB09、J区 SB01 島根県教育委員会 2001『古志本郷遺跡II』
- (14) 岩橋孝典 2005『出雲地域における飛鳥・奈良時代集落について 一船根郡朝駒郷の村落景観復元模型製作のための一考察ー』『古代文化研究』13 島根県古代文化センター
- (15) 岩橋孝典氏のご教示を得た。 岩橋孝典 2010『島根県の古墳時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡集成 一六世紀～

- 十四世紀の様相を中心にー』『出雲大社の建築考古学』 深川滋男 島根県古代文化センター編
- (16) 岩本真実氏のご教示を得た。
- (17) 黒色磨研土器の特徴や評価については、岩橋孝典氏のご教示を得た。
- (18) (17)と同じ
- (19) 高津遺跡では黒色磨研土器が44個体以上出土している。江津市教育委員会 2005「高津遺跡」『都治地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書』
- (20) 西尾克己・野坂俊之 1995「神西湖周辺の集落遺跡『湖陵町誌研究』4 湖陵町教育委員会
- (21) 山本清 1984「横穴被葬者の地位をめぐって」『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会
- (22) 井上主税氏のご教示を得た。
- (23) 松尾充晶氏のご教示を得た。
- (24) 玉作関連資料の特徴や評価については、米田克彦氏のご教示を得た。
- (25) 島根県古代文化センター 2004「古代出雲における玉作の研究—中国地方の玉作関連遺跡集成ー」『島根県古代文化センター調査研究報告書22』
- (26) 石見地方では、大田市仁摩町の川向遺跡（古代文化センター 2004）で碧玉製の剝片、浜田市の道休烟遺跡で瑪瑙製の剝片、益田市の中小路遺跡では弥生時代後期前葉の堅穴建物S102から碧玉製とみられる剝片が数点出土している。
島根県教育委員会 2010「道休烟遺跡」『一般国道9号（浜田・三隅道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』
益田市教育委員会 2012「中小路遺跡・羽場遺跡」『一般県道白上横田線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- (27) 角田徳幸 1999「山陰における古代・中世の鉄生産」『田中義昭先生退官記念論集 地域に根ざして』田中義昭先生退官記念事業会
論文では精鍛鍛冶・鍛鍊鍛冶を含め21例が集成されている。
- (28) 註8と同じ
- (29) 八沢義功 1984「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』8
上柳武 2001「横口式窯跡の基礎的研究」『たたら研究』4
- (30) 瑞穂町教育委員会 1976『瑞穂町誌』
- (31) 註10と同じ
- (32) 鈴木一有 2009「鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜」『鳥居松遺跡5次』円頭大刀編 浜松市文化振興財團
- (33) 松尾充晶氏のご教示を得た。

参考文献

古墳時代の溝

新原佑典 2009「出雲の祭祀とその道具（予祭）」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要第1号』

コップ形須恵器

大川清・田中義昭・西垣丹三 1958「島根県益田市西平原窯址」『古代』第29・30合併号、早稲田大学考古学会、46-59頁
島根県旭町教育委員会 1991「山ノ内28号墳発掘調査報告書」

島根県古代文化センター 2015「益田市内における古墳の調査 金山古墳・鶴ノ鼻古墳群・北長迫横穴墓群」

島根県教育委員会 2010「久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西I遺跡・久城西II遺跡・原浜遺跡」

島根県教育委員会 2000「神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓」

移動式竈・櫃

島根県立古代出雲歴史博物館 2018「企画展 古墳は語る古代出雲誕生」

岩橋孝典 2019「古墳時代後期の炊爨文化からみた地域相－出雲西部地域と石見東部地域を事例として－」『島根県古代文化センター研究論集第22集』 島根県古代文化センター

写真図版



1. SII01 完掘状況(煙道除く)(東から)



2. SII01 窓断面(北東から)



3. SII01 窓調査状況(北東から)



4. SII01 遺物出土状況 奥に SII03(東から)



5. SII01 煙道縦断面(南東から)



1. SiO₂、SiO₅ 完掘・SiO₅周辺検出(南から)



2. SiO₂、SiO₅ 検出状況(南から)



3. SiO₂ 完掘状況(北から)



4. SiO₂ 炭範囲、遺物出土状況(東から)



5. SiO₅ 西側完掘状況(東から)



1. SIO3 完掘状況(北から)



2. SIO4 完掘状況(南から)



1. SBO1 完掘状況(南から)



2. SBO2 完掘状況(西上から)



1. SBO2 完掘状況(南から)



2. SBO3 完掘状況(南から)



1. P64(SB04) 半裁状况



2. P64(SB04) 完掘状况



3. P77(SB04) 半裁状况



4. P77(SB04) 完掘状况



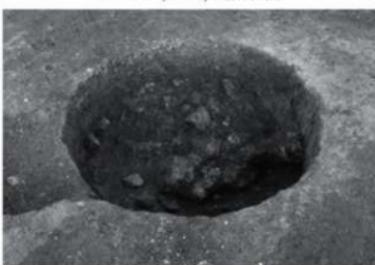
5. P86(SB04) 半裁状况



6. P86(SB04) 完掘状况



7. P91(SB04) 完掘状况



8. P94(SB04) 完掘状况



1. SB04 完掘状況(南から)



2. SB04 完掘状況(西から)



1. SBO5 完掘状況(南から)



2. 挖立柱建物群(西から)



1. SB07 完掘状況(西から)



2. P1(SB07) 半裁状況



3. P1(SB07) 完掘状況(東から)



4. P1(SB07) 柱根



5. P5(SB07) 半裁状況



1. SD05 南側検出状況(南東から)



2. SD05(新) 北側上層遺物出土状況(北西から)



1. SD05(新) 北側上層遺物出土状況



2. SD05(新) 出土桶(東から)



3. SD05(新) 出土線刻石



4. SD05(新) 北側下層遺物出土状況(南東から)



1. SD05 (古) 南側調査状況 (南東から)



2. SD05 トレンチ A 土層断面 (南東から)



1. SD05(古) 北側完掘状況(南から)



2. SD05(古) 北側水利施設(北から)



1. SD05(古) 矢板、杭列 1(北から)



2. SD05(古) 矢板、杭列 2 ~ 6(南東から)



1. SD05(古) 矢板、杭列 2・3(西から)



2. SD05(古) 矢板、杭列 2 部分(南東から)



1. SD05(古) 矢板、杭列 2~5(北から)



2. SD05(古) 矢板、杭列 4(西から)



3. SD05(古) 矢板、杭列 5(南から)



4. SD05(古) 矢板、杭列 4・5(南から)



1. SD05(古) 矢板、杭列3～5(北から)



2. SD05(古) 矢板、杭列2～6(北から)



3. SD05(古) 出土壺



4. SD05(古) 踏溜り(東から)



5. トレンチB(SD05部分、SD10) 土層断面



1. SD05(古) 北側、SD10 北側完掘状況(南から)



2. SD05(古) 南側完掘状況(西から)



1. SD17 南東壁土層断面(北西から)



2. SD17 4 ライン土層断面(南西から)



1. SD17 調査風景



2. SD17 大木周辺調査状況



1. SD17 金銅製歩搖付空玉出土地点周辺(西から)



2. SD17 出土金銅製歩搖付空玉(西から)



3. SD17 出土勾玉



4. SD17 出土甕、甕(北東から)



5. SD17 遺物出土状況(北から)



1. SD17 南側遺物出土状況 (北から)



2. SD17 調査終了状況 (北から)



1. SDO4(南から)



2. SDO4 出土木製品①(南から)



3. SDO4 出土木製品②(南から)



1. SD06 遺物出土状況(東から)



2. SD06、07 完掘状況(南東から)



1. SD01 完掘状況(南から)



2. SD01 東側落ち込み(北東から)



1. SKO1周辺炭溜り遺物出土状況(南西から)



2. SKO1、炭溜り1～3検出状況(西から)



1. SK01 完掘状況



2. SK02 完掘状況



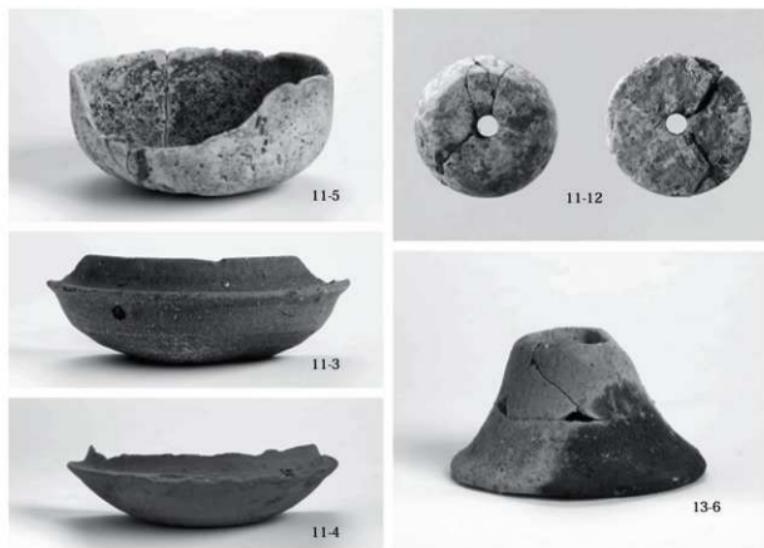
3. SK05 完掘状況 (南東から)



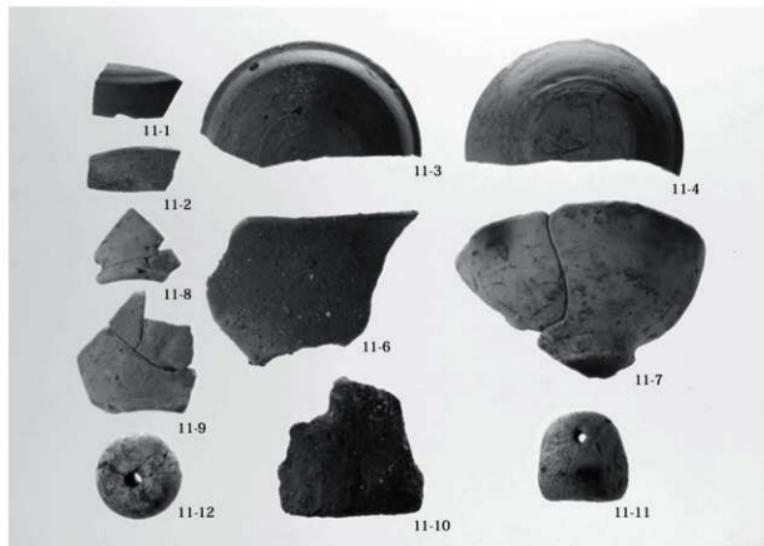
4. SK07 完掘状況



5. P316 完掘状況



1. SI01、02 出土遺物（第11、13図）



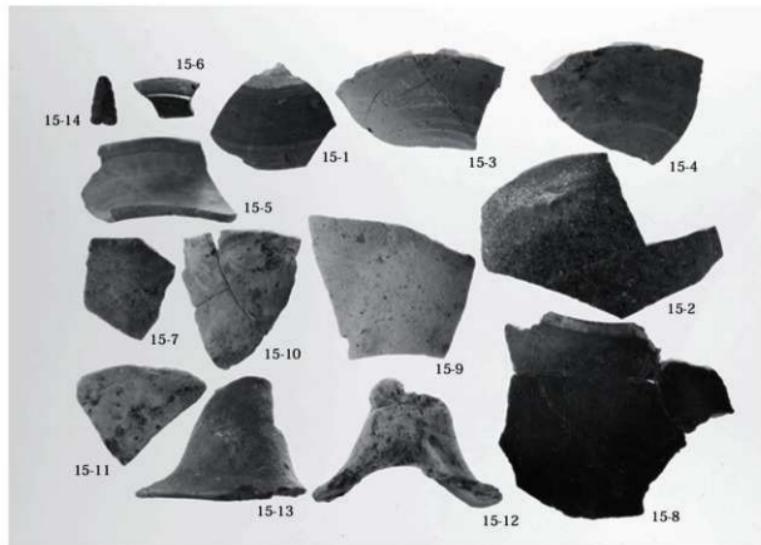
2. SI01 出土遺物（第11図）



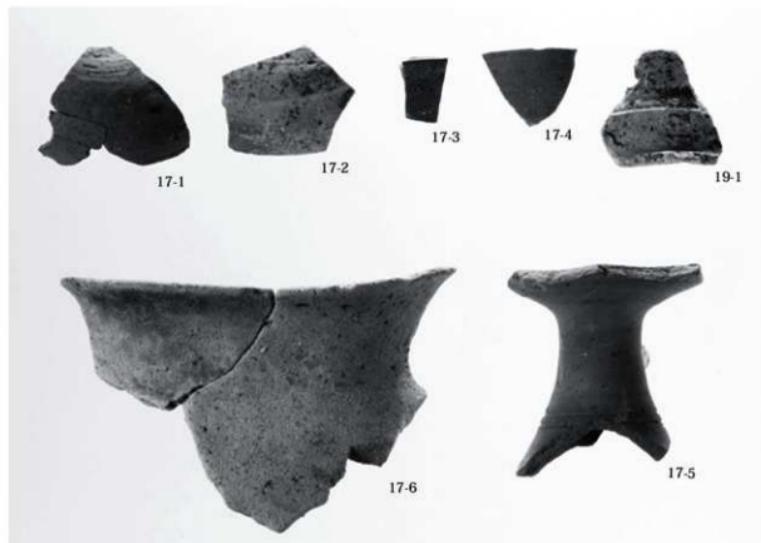
1. SiO₂ 出土遺物（第13図）



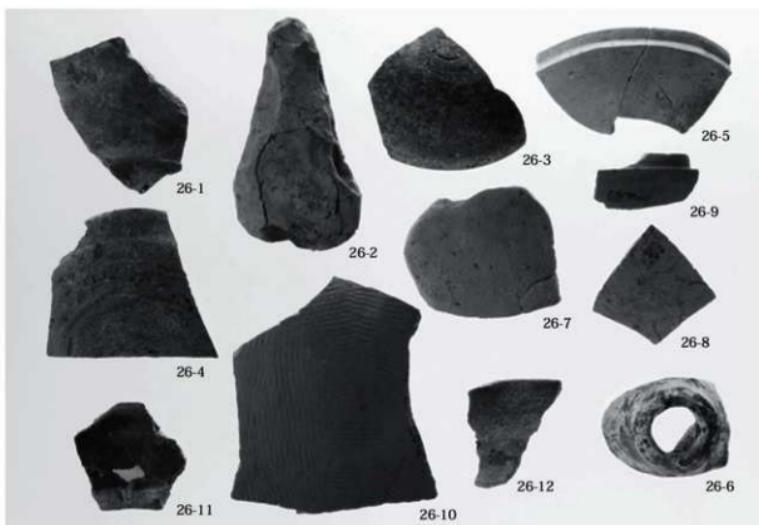
2. SiO₃, 04 出土遺物（第15、17図）



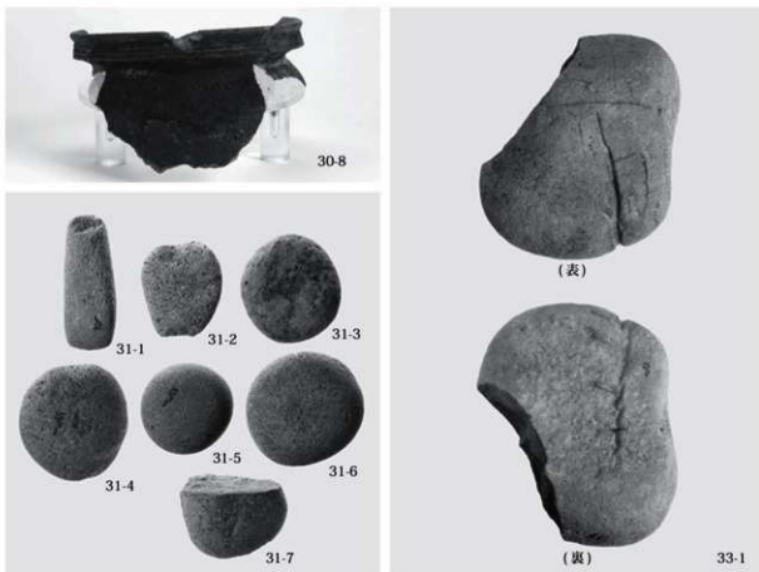
1. S103 出土遺物 (第 15 図)



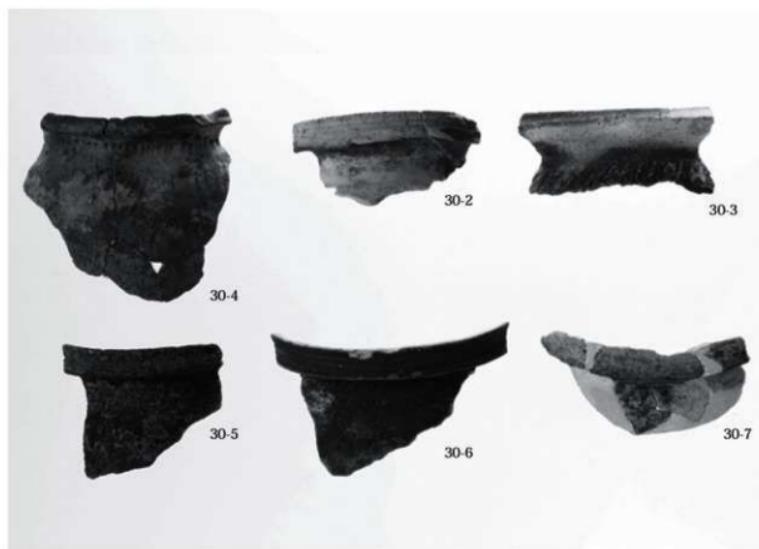
2. S104、05 出土遺物 (第 17、19 図)



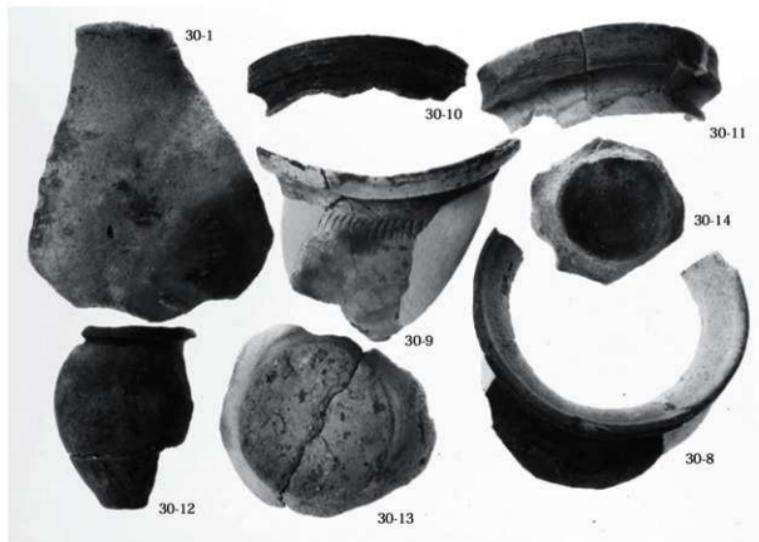
1. 挖立柱建物出土遺物（第26図）



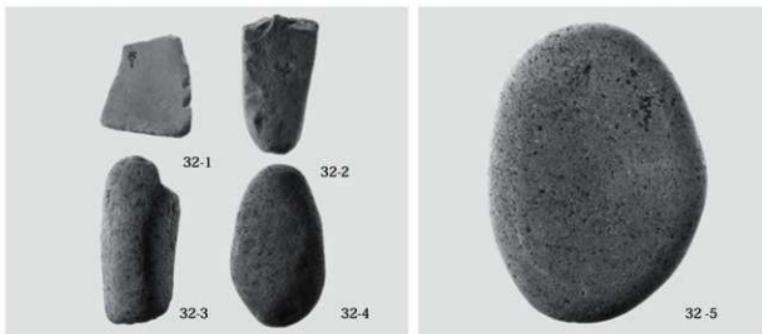
2. SD05(新)出土遺物(1)（第30、31、33図）



1. SD05(新) 出土遺物(2) (第30図)



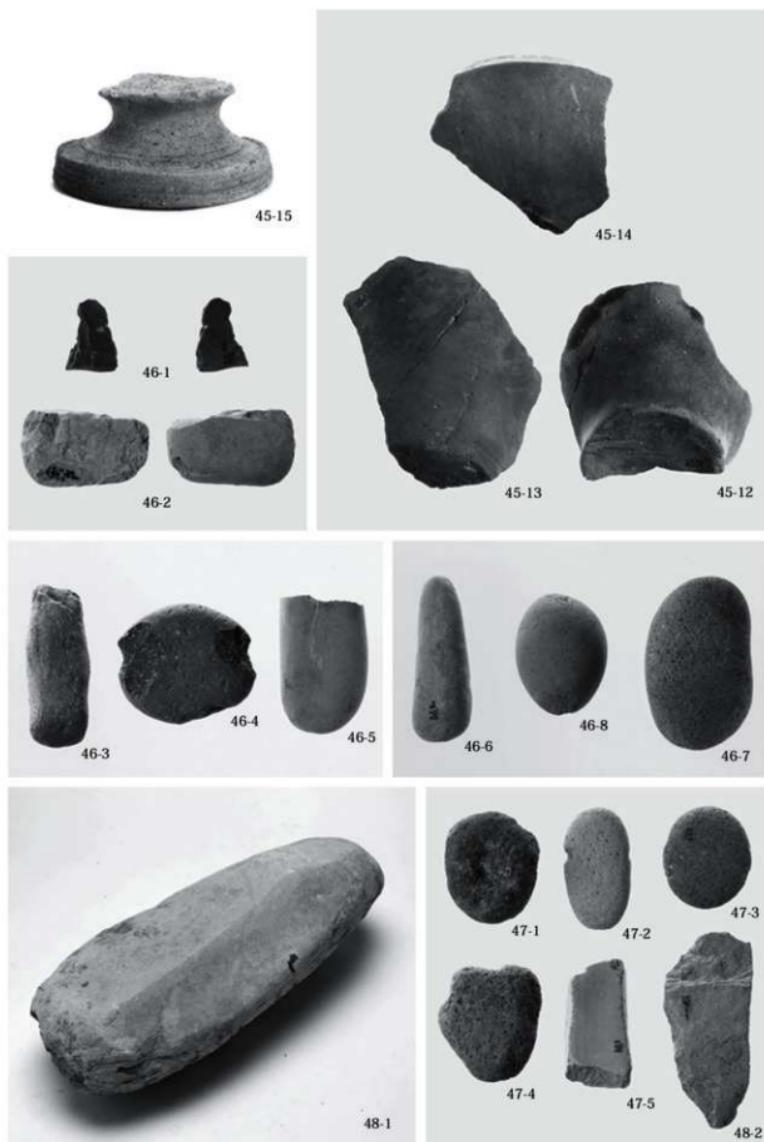
2. SD05(新) 出土遺物(3) (第30図)



1. SD05(新) 出土遺物(4) (第32図)



2. SD05(古) 出土遺物(1) (第45図)



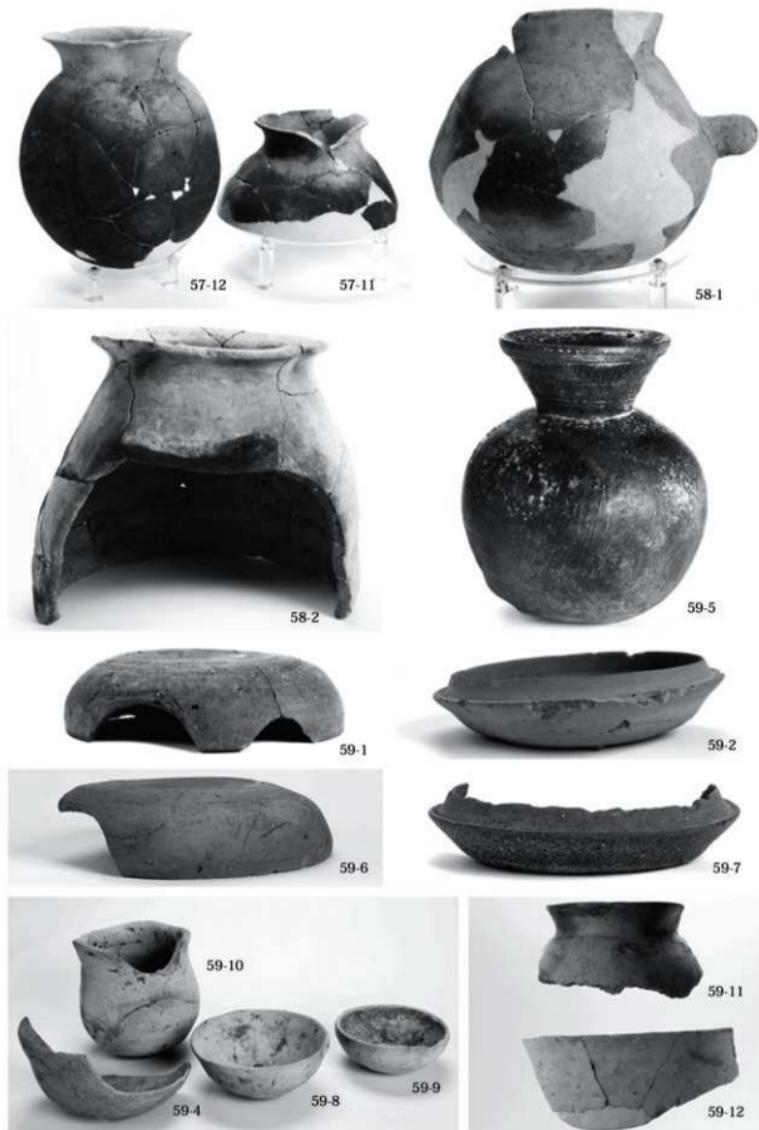
1. SDO5(古)出土遺物(2) (第45、46、47、48図)



1. SD10 出土遺物（第53図）



2. SD17 土器溜り B-1、B-2 群出土遺物（57、59図）



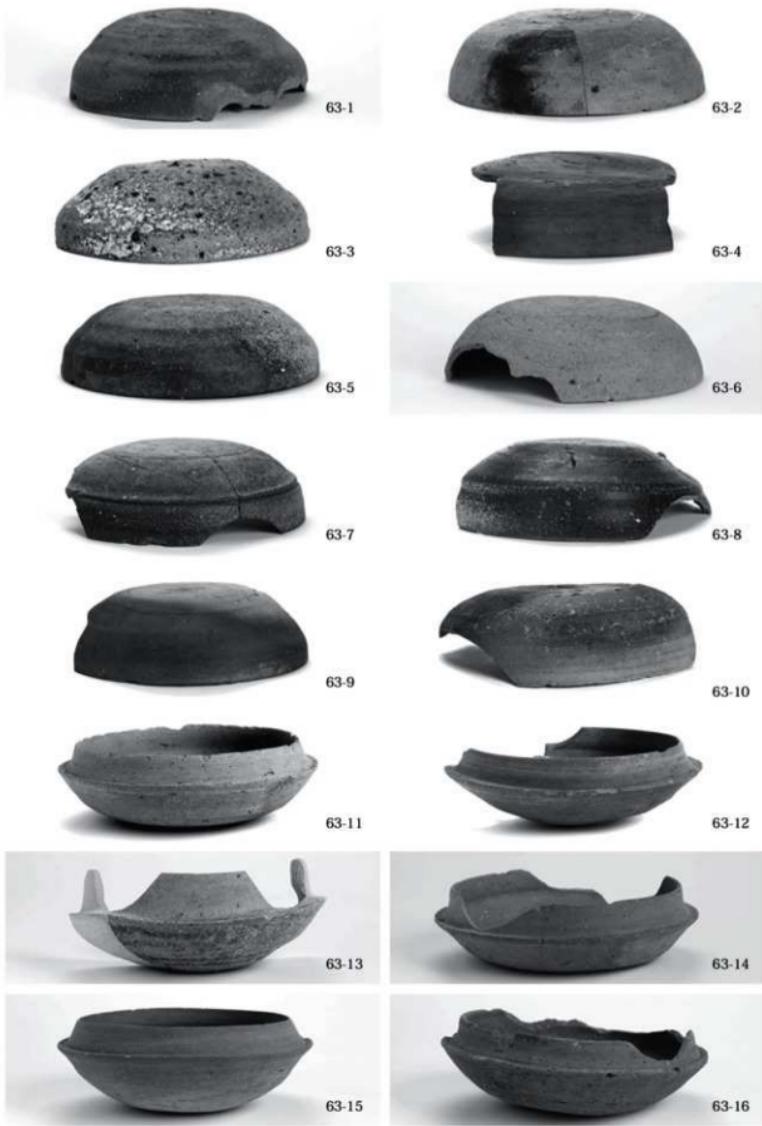
1. SD17 土器溜り B-1、B-2、B-3 群出土遺物 (第 57、58、59 図)



1. SD17 土器溜り B-4、B-5、B-6 群出土遺物（第 60、61、62 図）



1. SD17 土器漁り B-5、B-6 群出土遺物 (第 61、62、66 図)



1. SD17 土器溜り B 群出土遺物 (1) (第 63 図)



1. SD17 土器溜りB群出土遺物(2) (第63、64図)



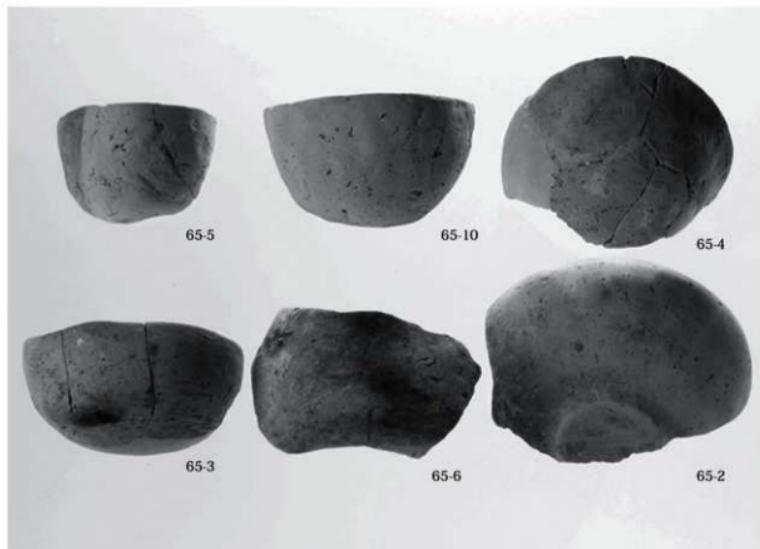
1. SD17 土器窯り B 群出土遺物 (3) (第 62、64、65、66 図)



2. SD17 土器窯り B 群出土遺物 (4) (第 65 図)



1. SD17 土器溜り B 群出土遺物(5) (第65図)



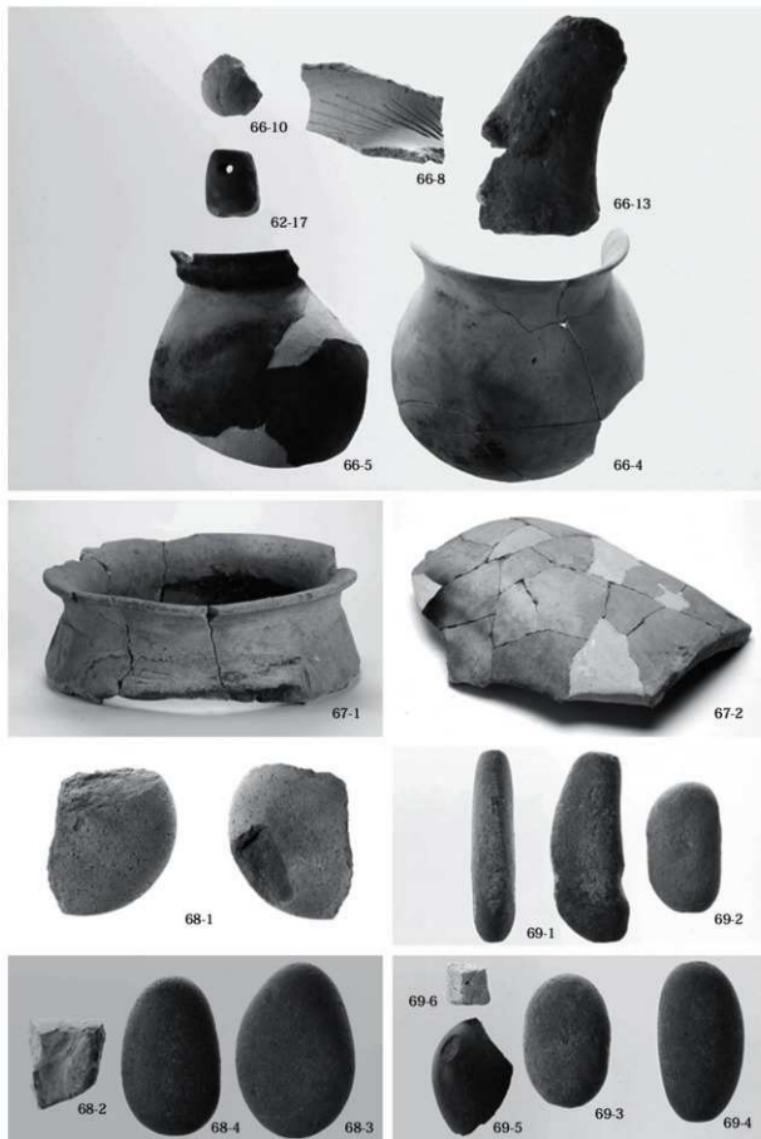
2. SD17 土器溜り B 群出土遺物(6) (第65図)



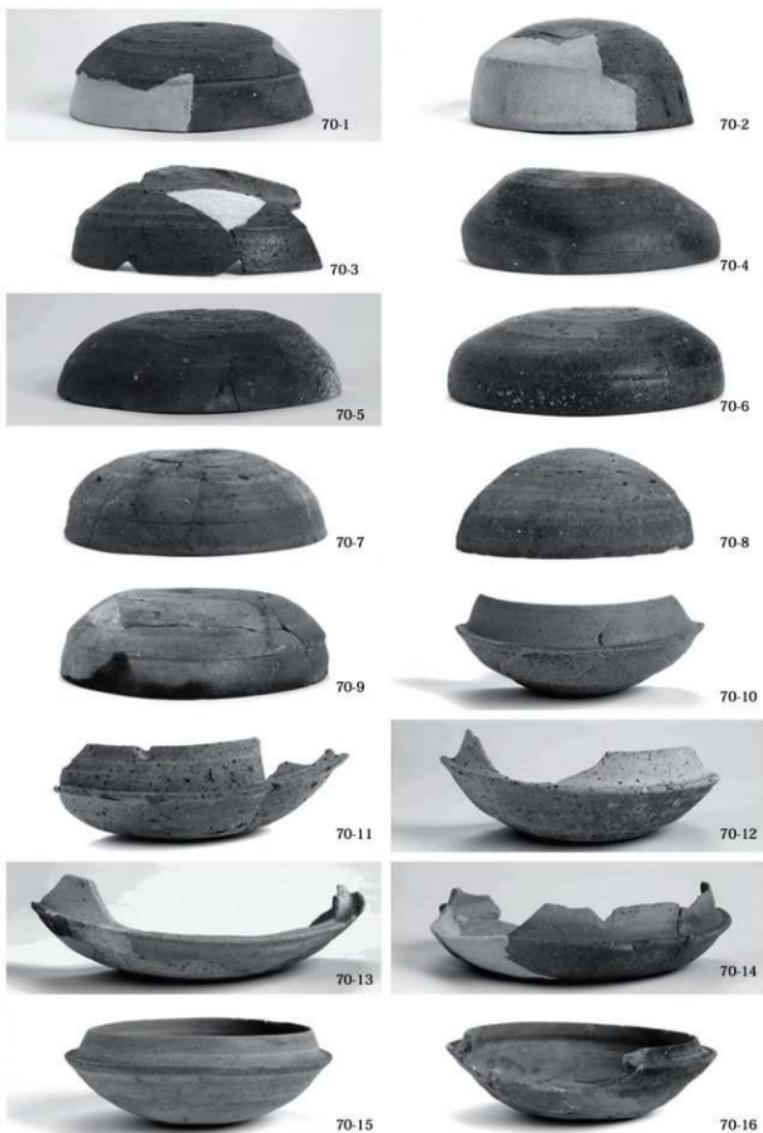
1. SD17 土器溜り B 群出土遺物 (7) (第 66 図)



2. SD17 土器溜り B 群出土遺物 (8) (第 66 図)



1. SD17 土器溜り B 群出土遺物 (9) (第 62、66、67、68、69 図)



1. SD17 土器溜り A群出土遺物(1) (第 70 図)



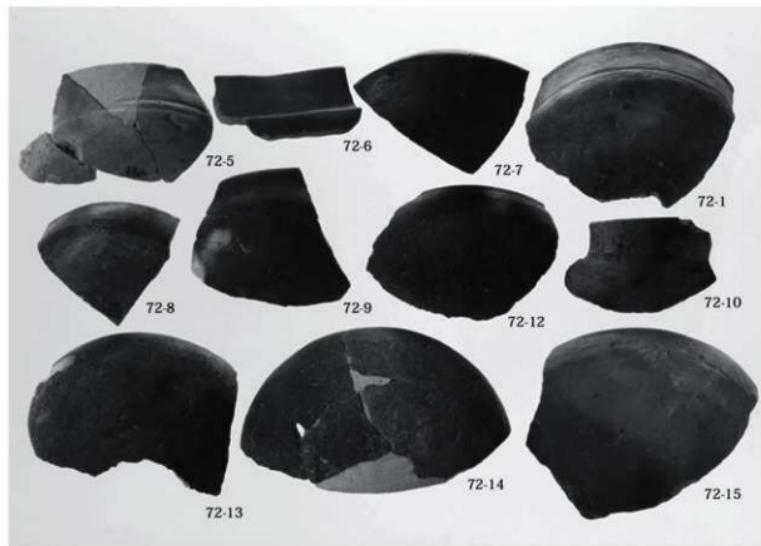
1. SD17 土器溜り A 群出土遺物 (2) (第 70、71 図)



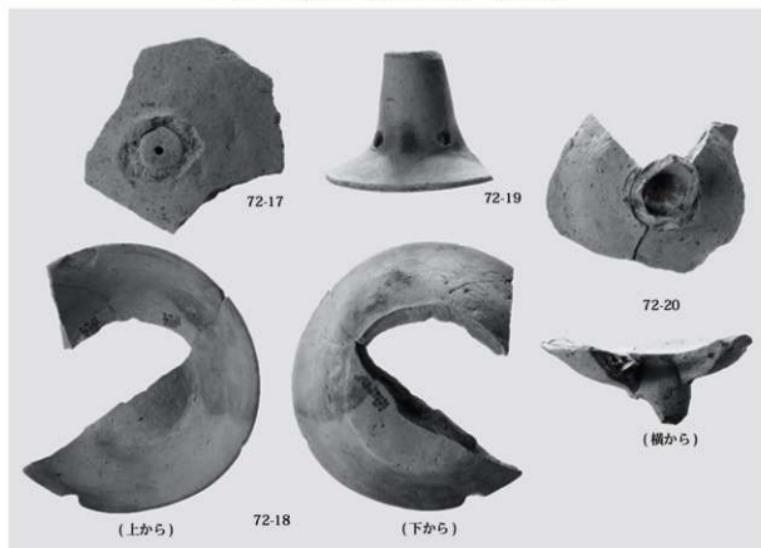
2. SD17 土器溜り A 群出土遺物 (3) (第 71 図)



1. SD17 土器溜り A群出土遺物 (4) (第 72 図)



1. SD17 土器溜り A群出土遺物(5) (第72図)



2. SD17 土器溜り A群出土遺物(6) (第72図)



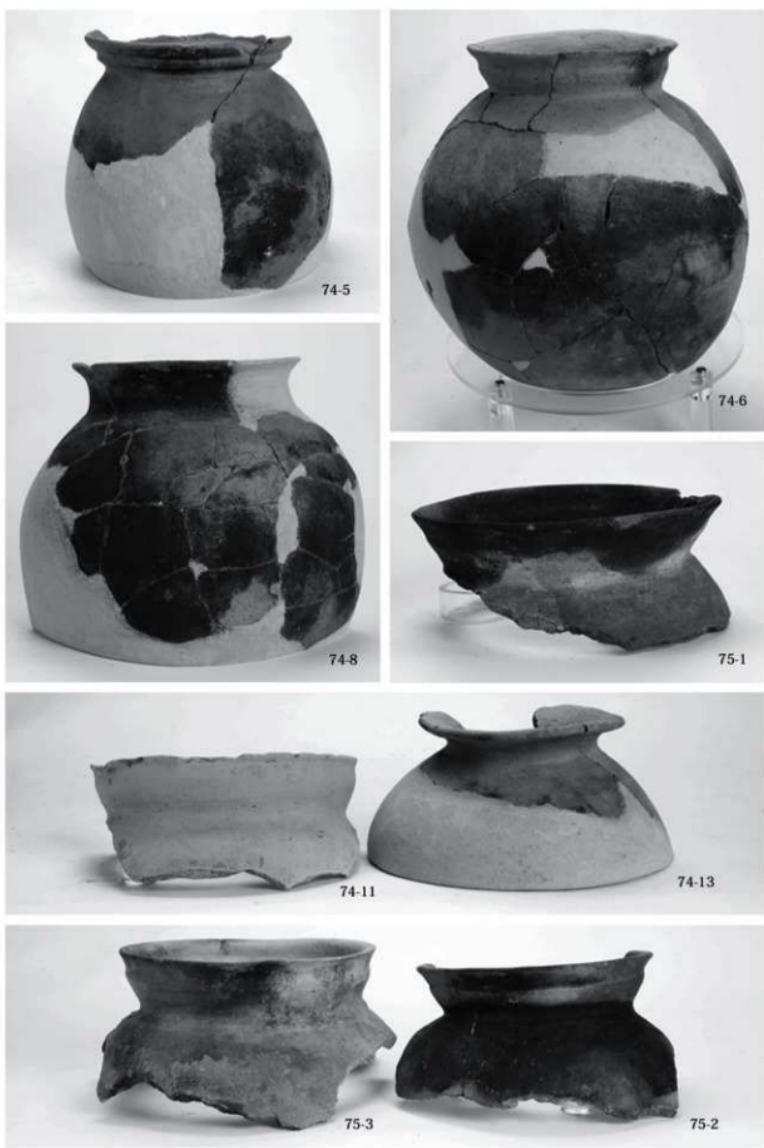
1. SD17 土器溜り A 群出土遺物(7) (第 73 図)



1. SD17 土器溜り A群出土遺物 (8) (第73図)



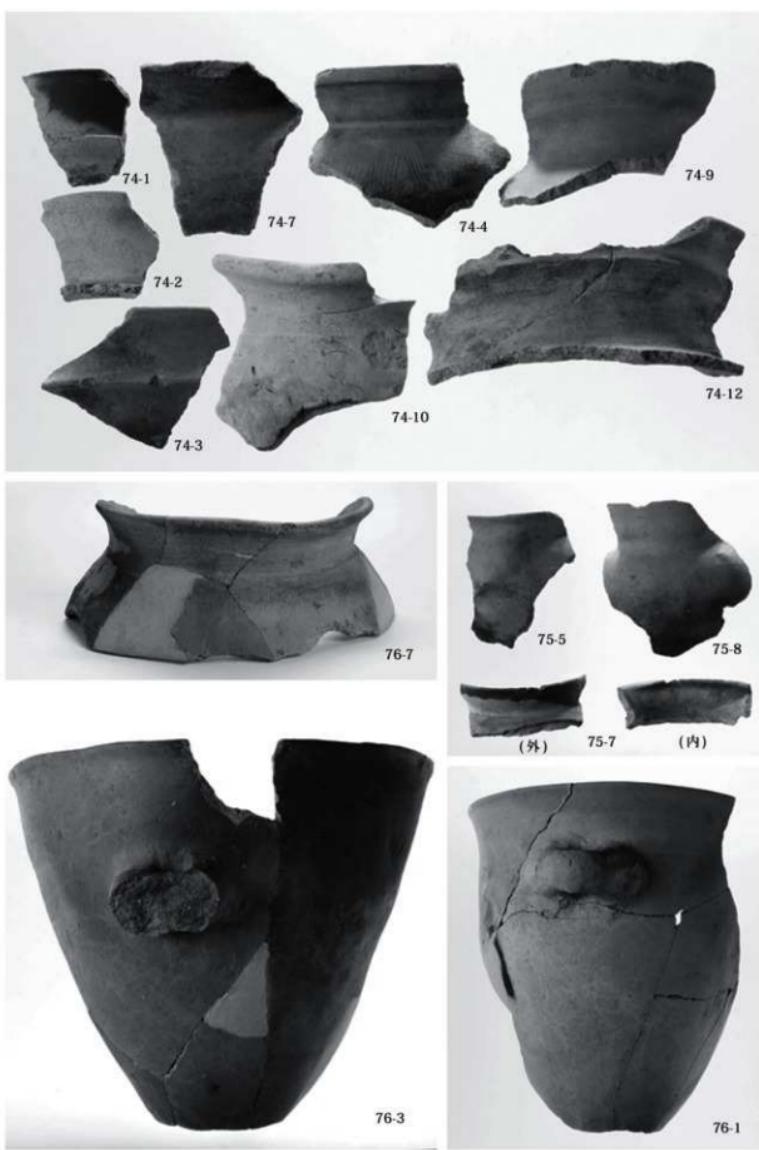
2. SD17 土器溜り A群出土遺物 (9) (第73図)



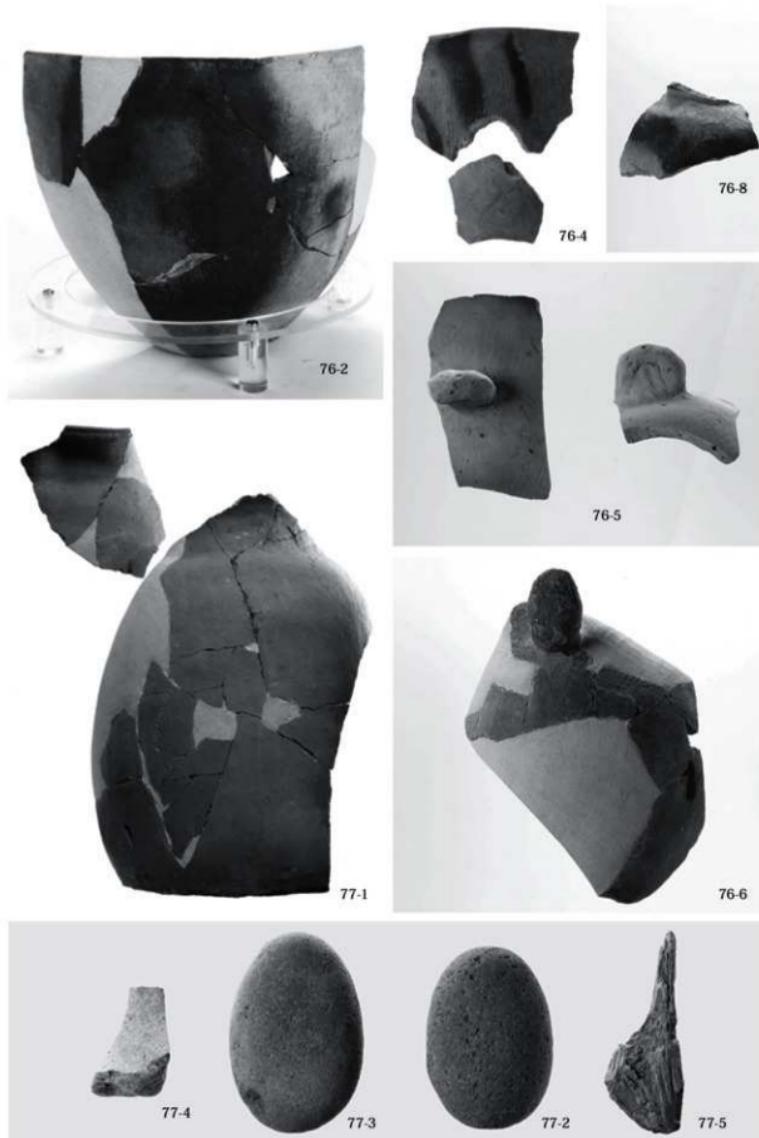
1. SD17 土器溜り A群出土遺物 (10) (第 74、75 図)



1. SD17 土器溜り A 群出土遺物 (11) (第 75 図)



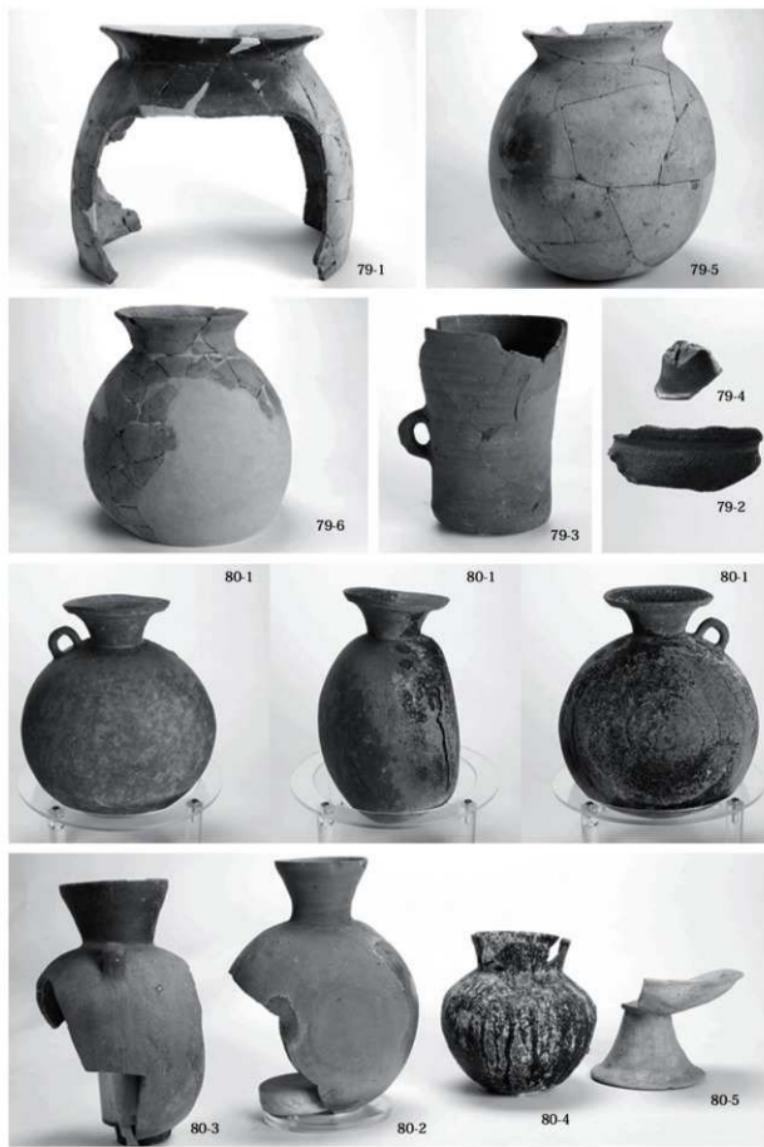
1. SD17 土器窯 A群出土遺物(12) (第74、75、76図)



1. SD17 土器溜り A群出土遺物 (13) (第 76、77 図)



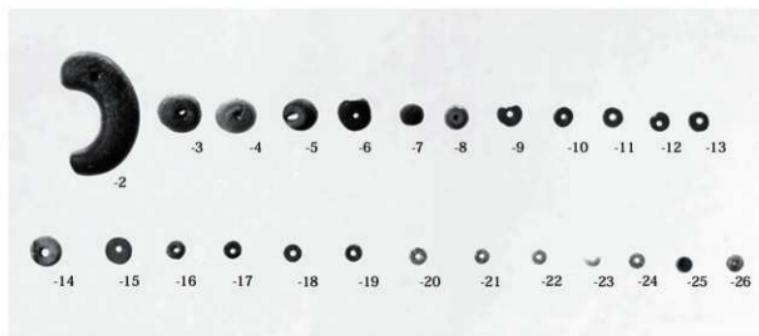
1. SD17 土器溜り C群出土遺物 (第 78 図)



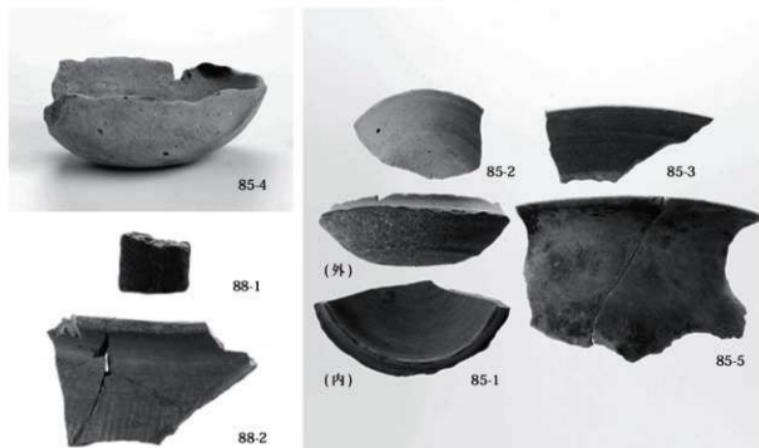
1. SD17 土器溜り C群・D群出土遺物 (第79、80図)



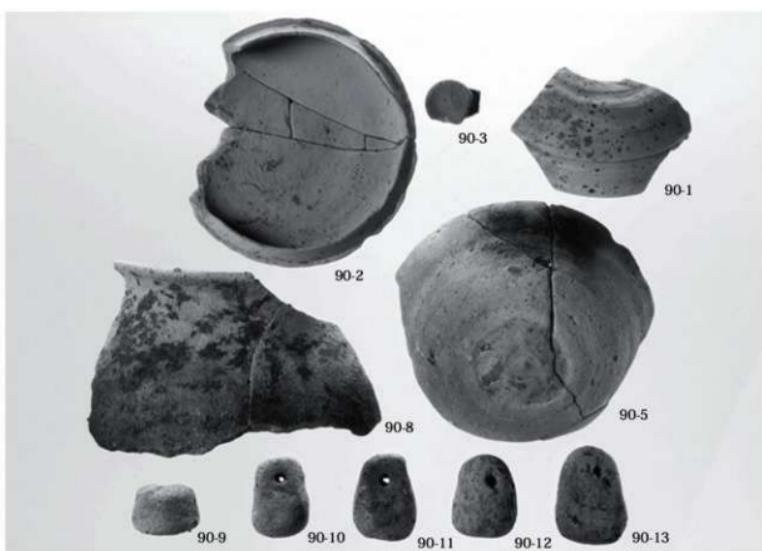
1. SD17 土器淵り B群出土金銅製歩搔付空玉 (第 81-1 図)



1. SD17 出土玉製品 (第 81 図)



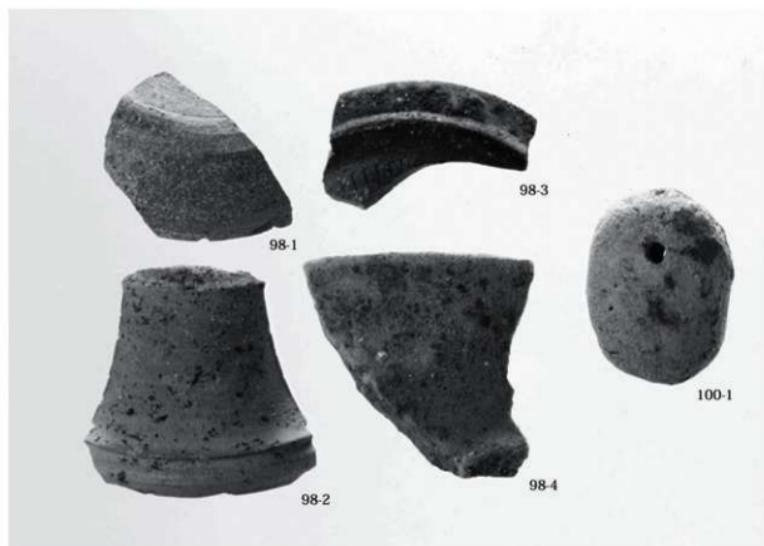
2. SD04、06、13 出土遺物 (第 85、88、90 図)



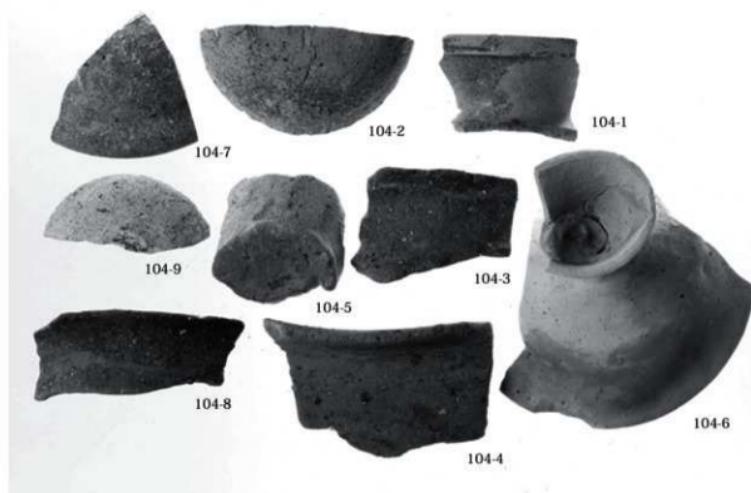
1. SD06 出土遺物 (第90図)



2. SD01、ピット316、ピット出土遺物 (第94、103、104図)



1. SK05、07 出土遺物（第 98、100 図）



2. ピット出土遺物（第 104 図）



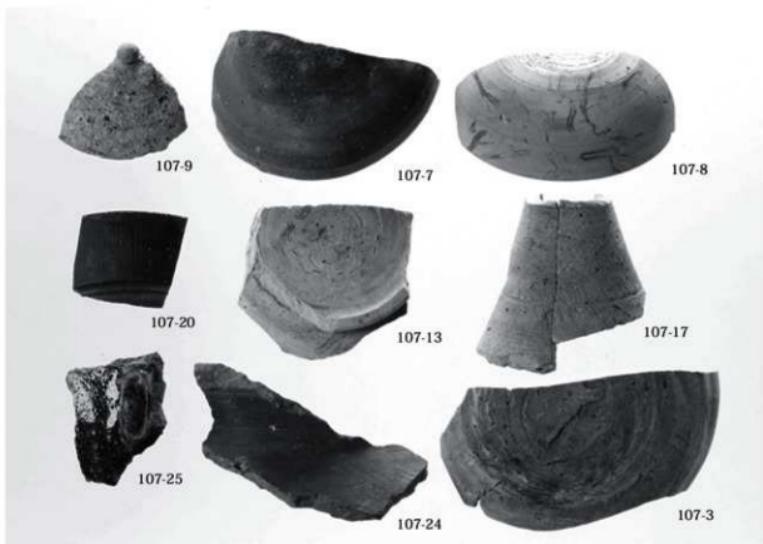
1. 第VII層より下層・第VI、VII層出土遺物(1) (第105、107図)



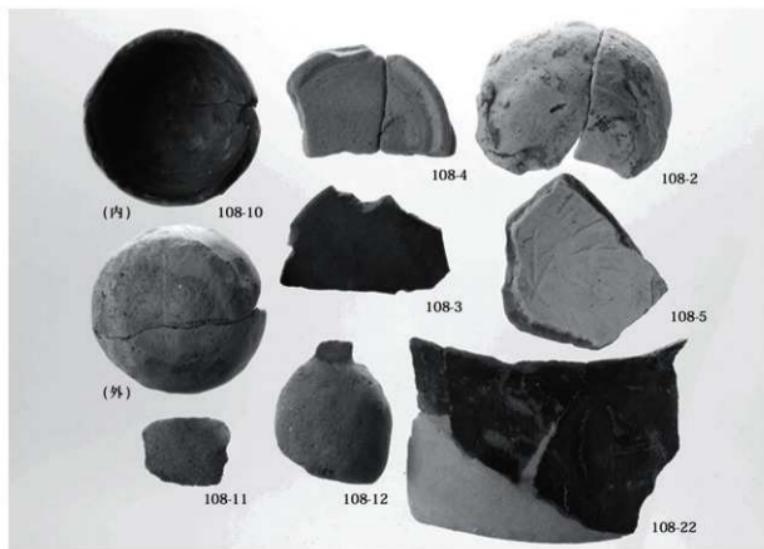
1. 第VI、VII層出土遺物(2) (第107、108図)



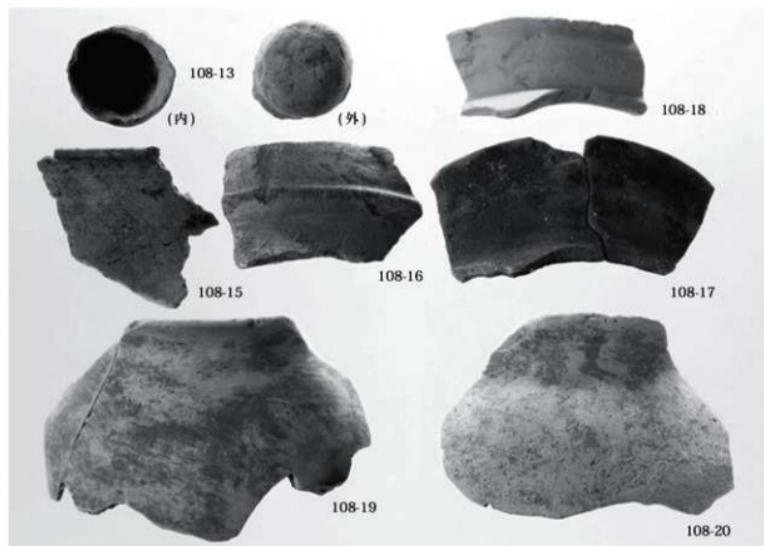
1. 第VI、VII層出土遺物(3) (第108圖)



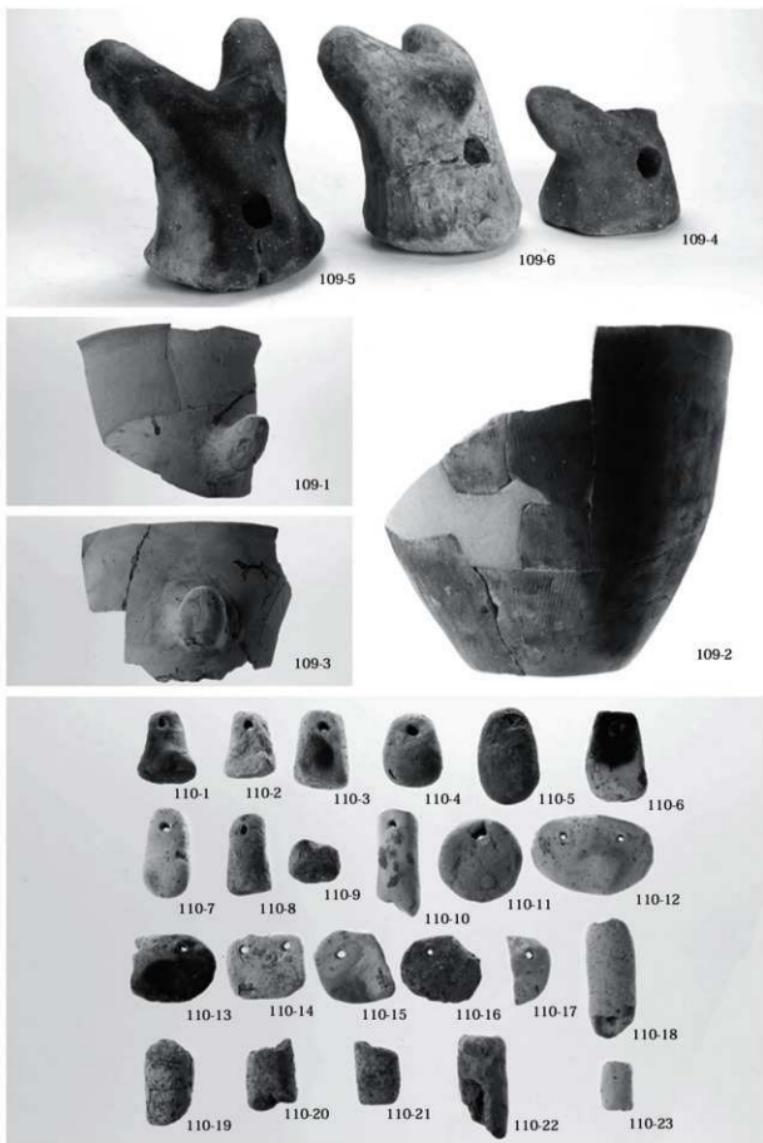
2. 第VI、VII層出土遺物(4) (第107圖)



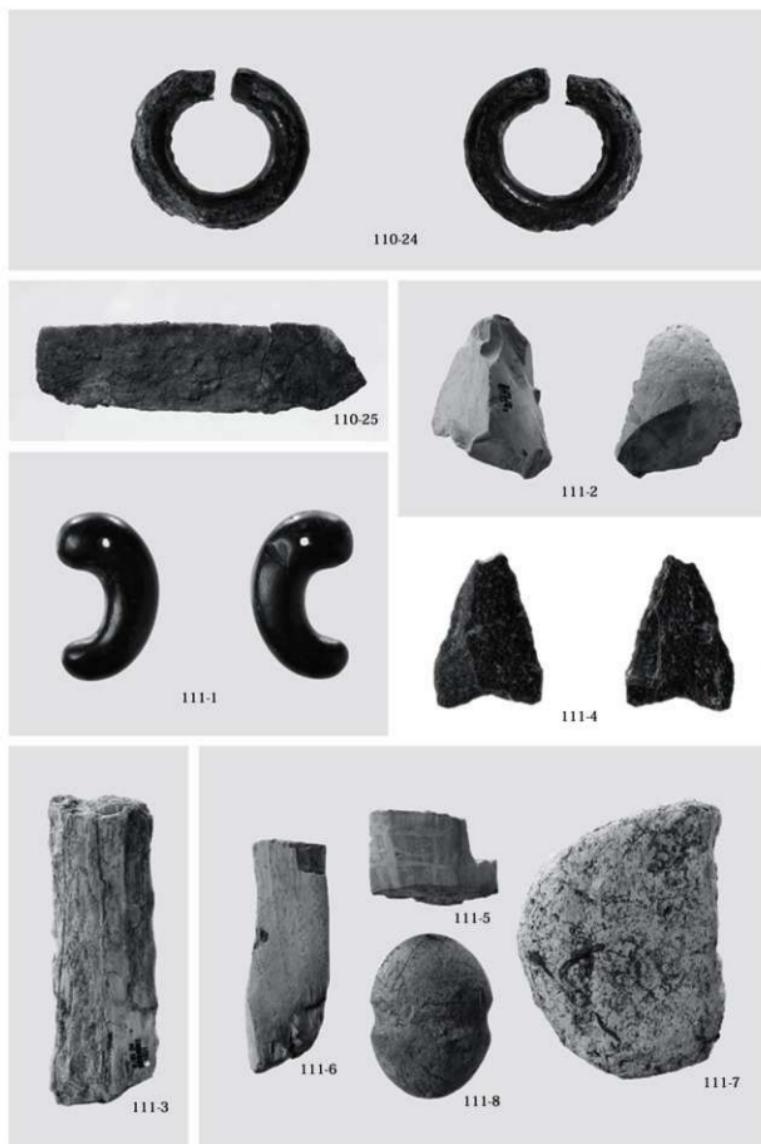
1. 第VI、VII層出土遺物(5) (第108図)



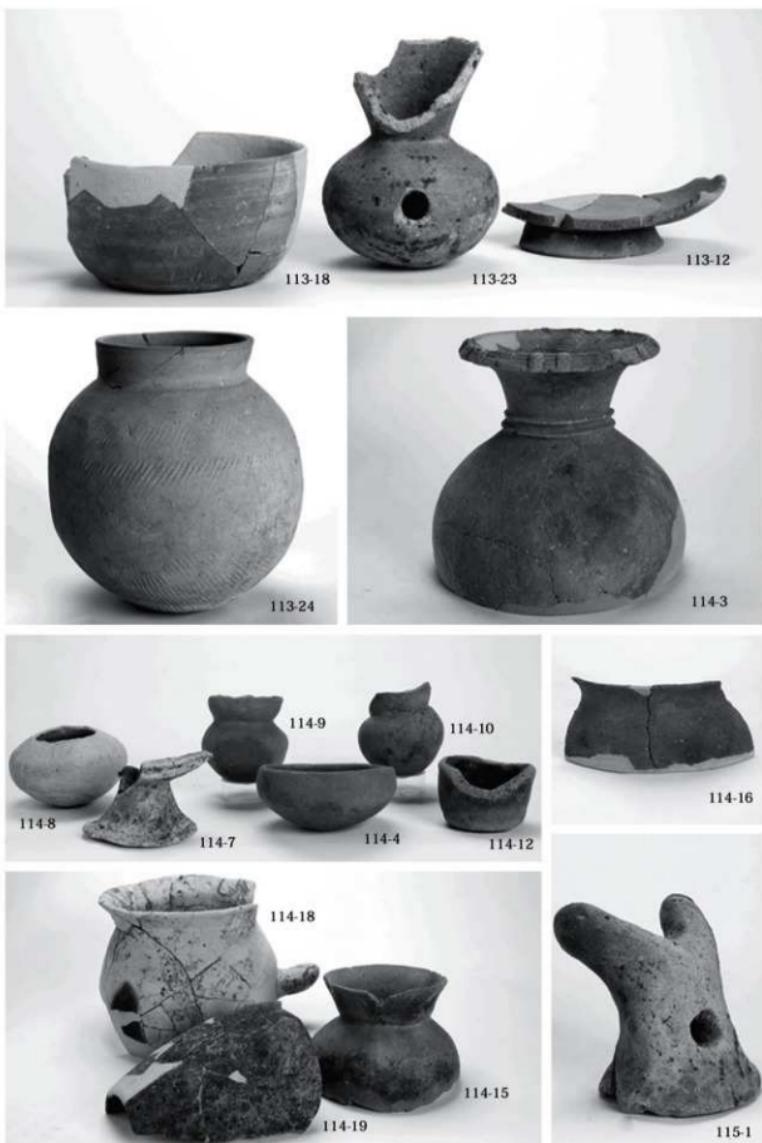
2. 第VI、VII層出土遺物(6) (第108図)



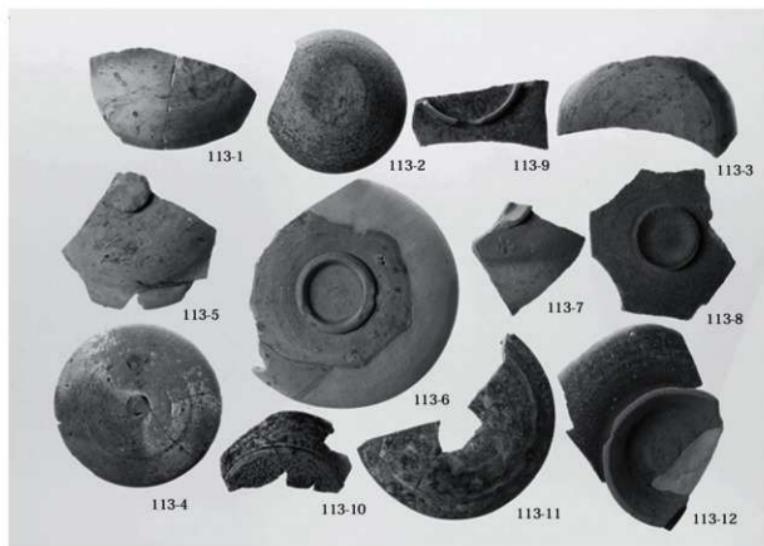
1. 第VI、VII層出土遺物(7) (第109、110図)



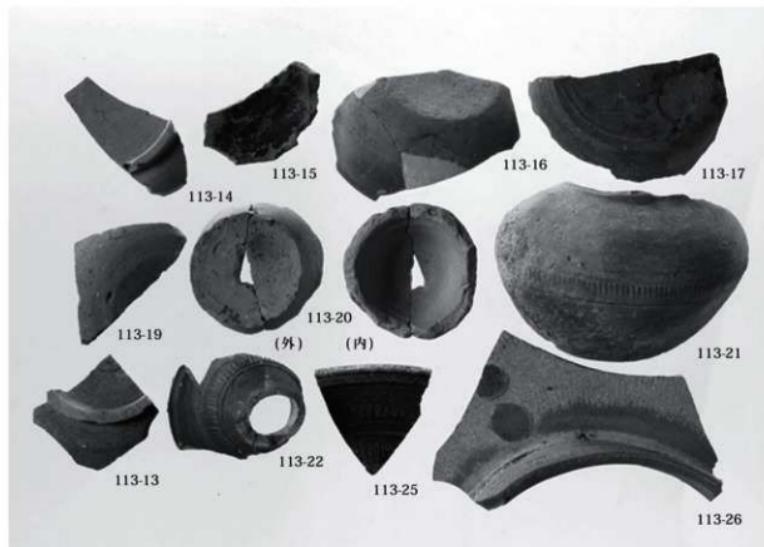
1. 第VI、VII層出土遺物(8) (第110、111図)



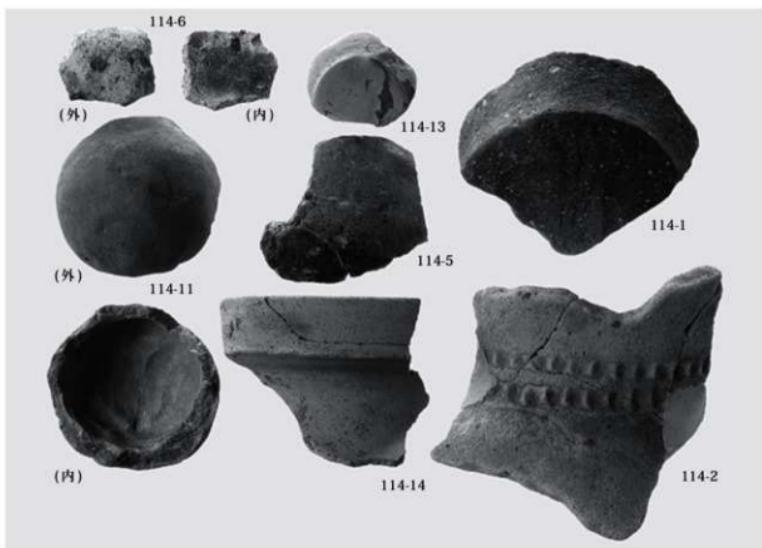
1. 第IV~VII、IX層出土遺物(1) (第113、114、115図)



1. 第IV~VII、IX層出土遺物(2) (第113図)



2. 第IV~VII、IX層出土遺物(3) (第113図)



1. 第IV～VII、IX層出土遺物(4) (第114図)



2. 第IV～VII、IX層出土遺物(5) (第114、115図)



(内)

1. 第II層出土遺物(1) (第116図)

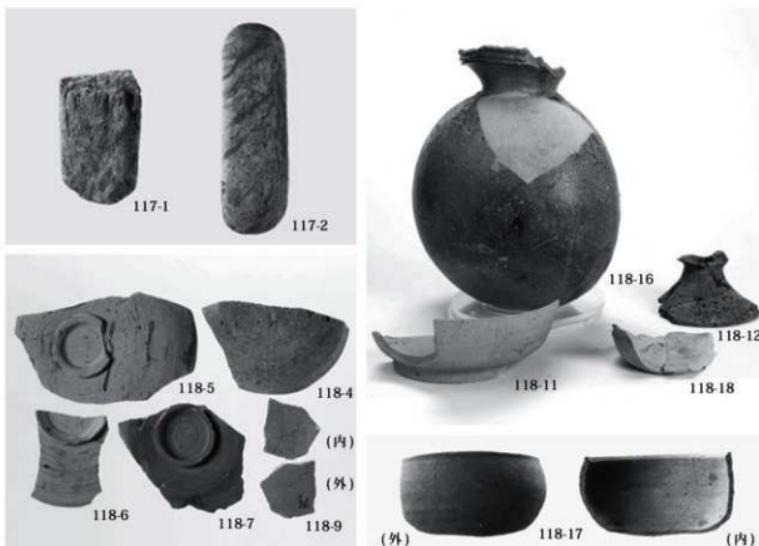


(外)

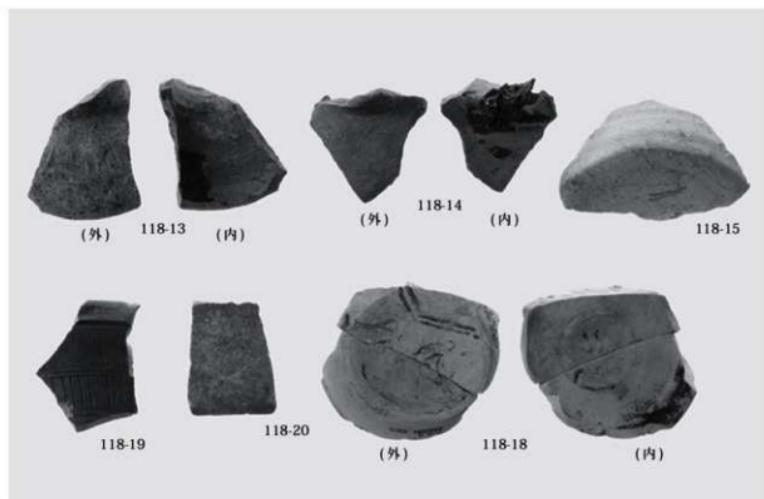
2. 第II層出土遺物(1) (第116図)



1. 第II層出土遺物(2) (第116図)



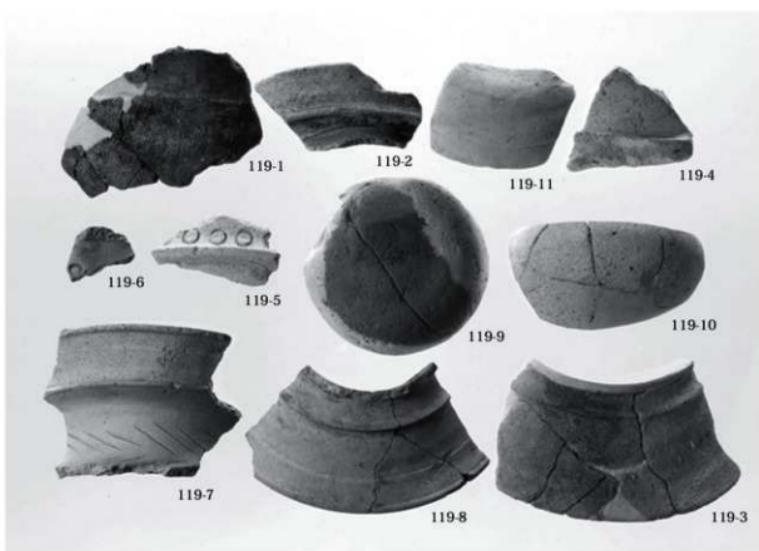
2. 第II層出土遺物(3)、出土層位不明遺物(1) (第117、118図)



1. 出土層位不明遺物(2) (第118図)



2. 出土層位不明遺物(3) (第119図)



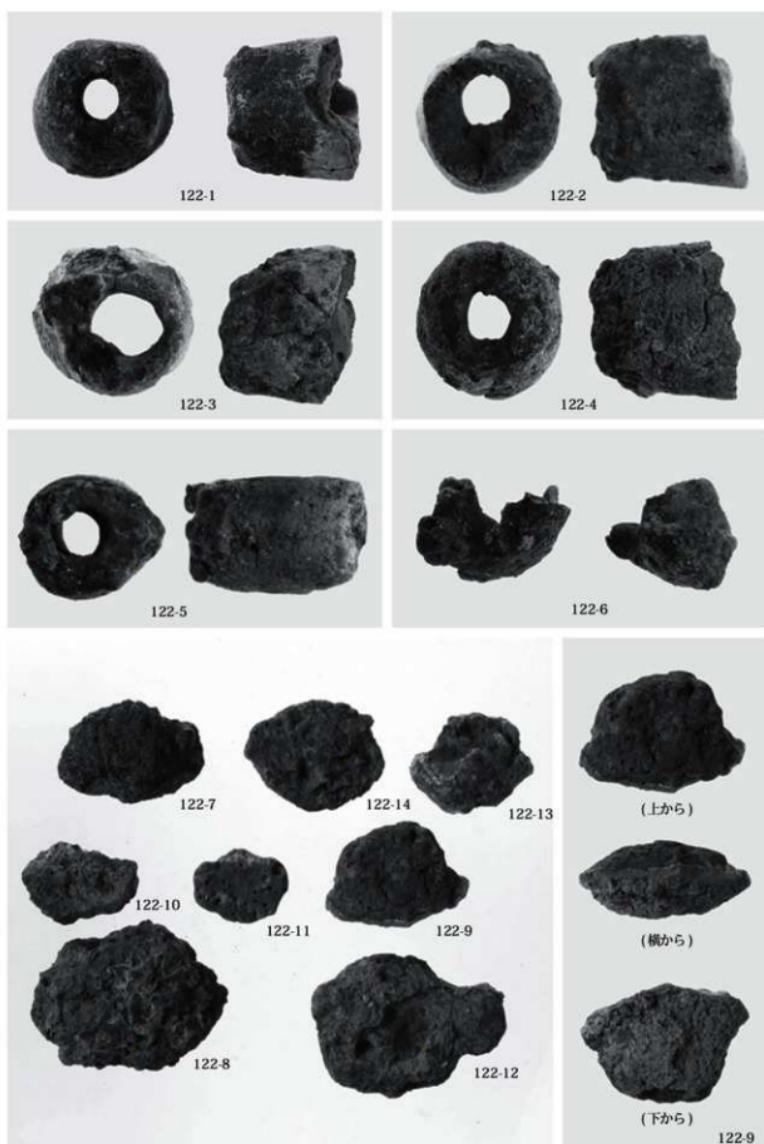
1. 出土層位不明遺物(4) (第119図)



2. 出土層位不明遺物(5) (第119図)



1. 出土層位不明遺物 (6) (第 120、121 図)



1. 生産関係遺物(鍛冶) (第122図)



(A面)

1. 生産関係遺物(玉作)(1) (第123図)

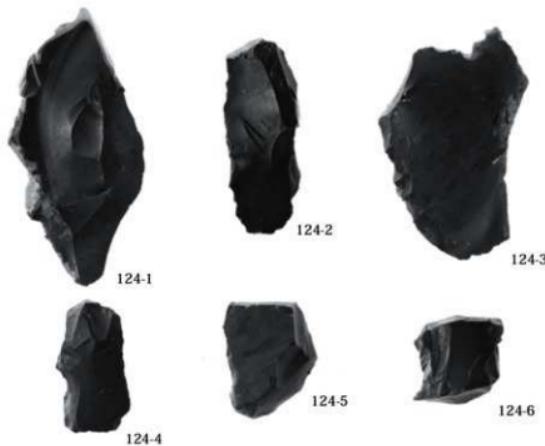


(B面)

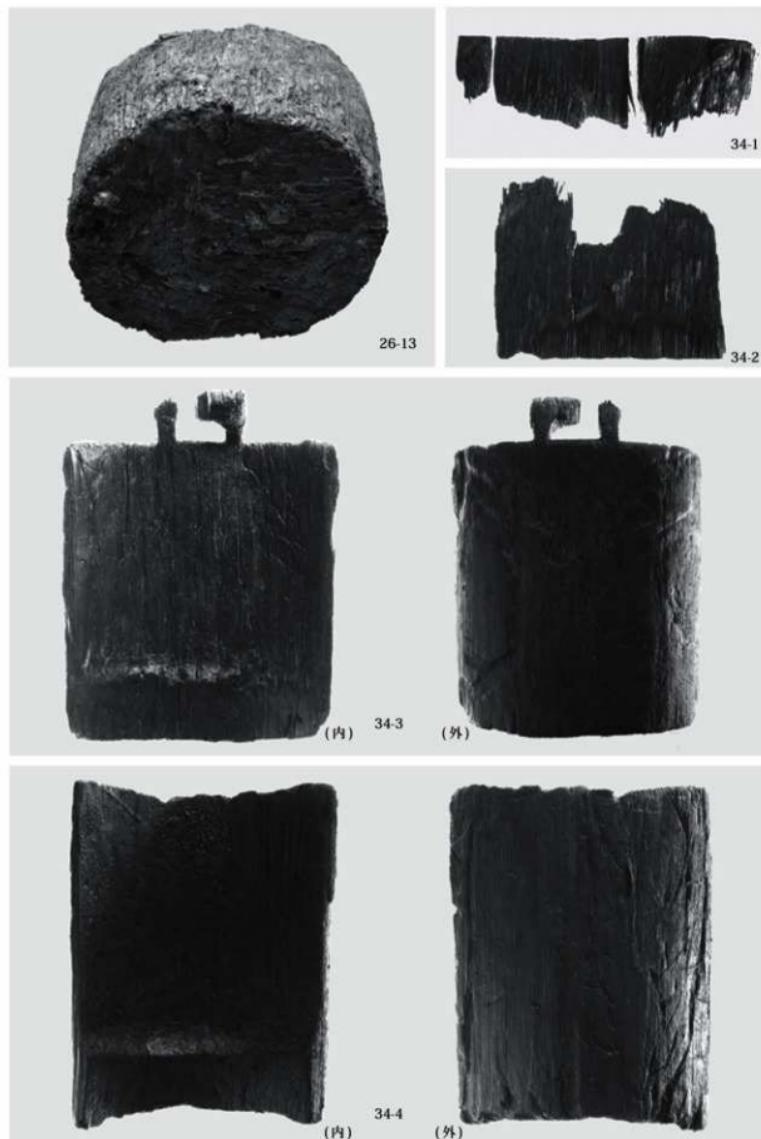
2. 生産関係遺物(玉作)(1) (第123図)



1. 生産関係遺物(玉作)(2) (第124図)



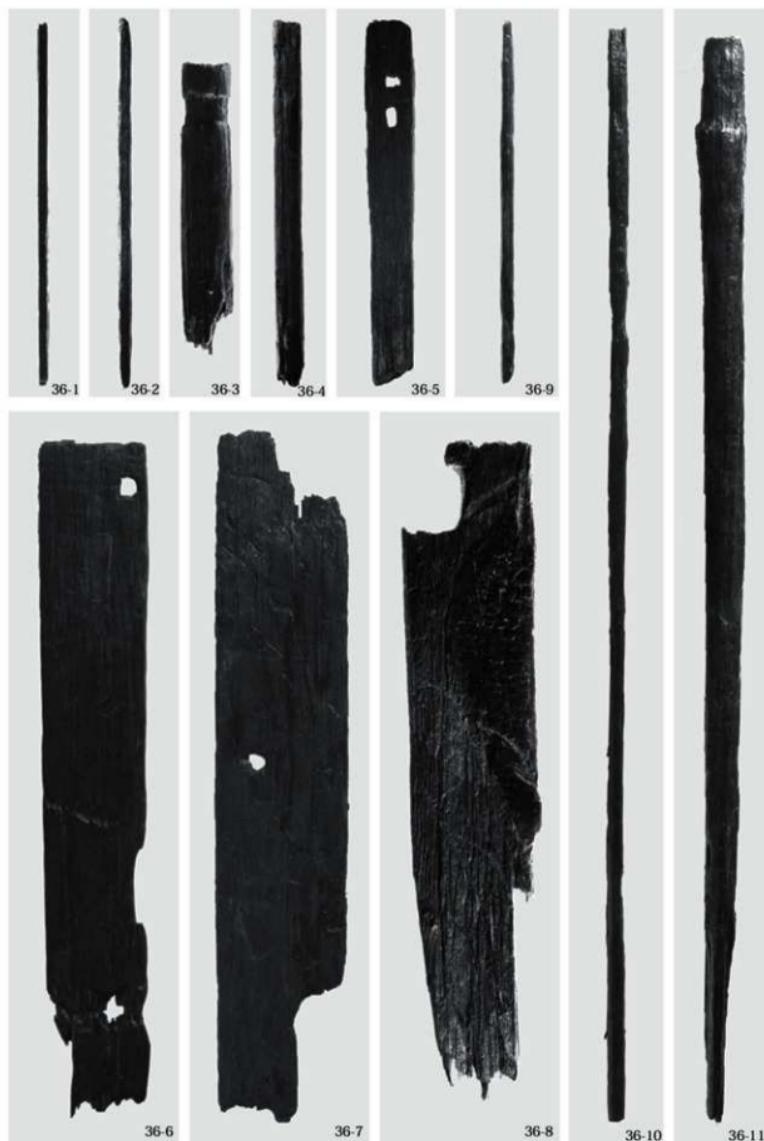
2. 生産関係遺物(玉作)(2) (第124図)



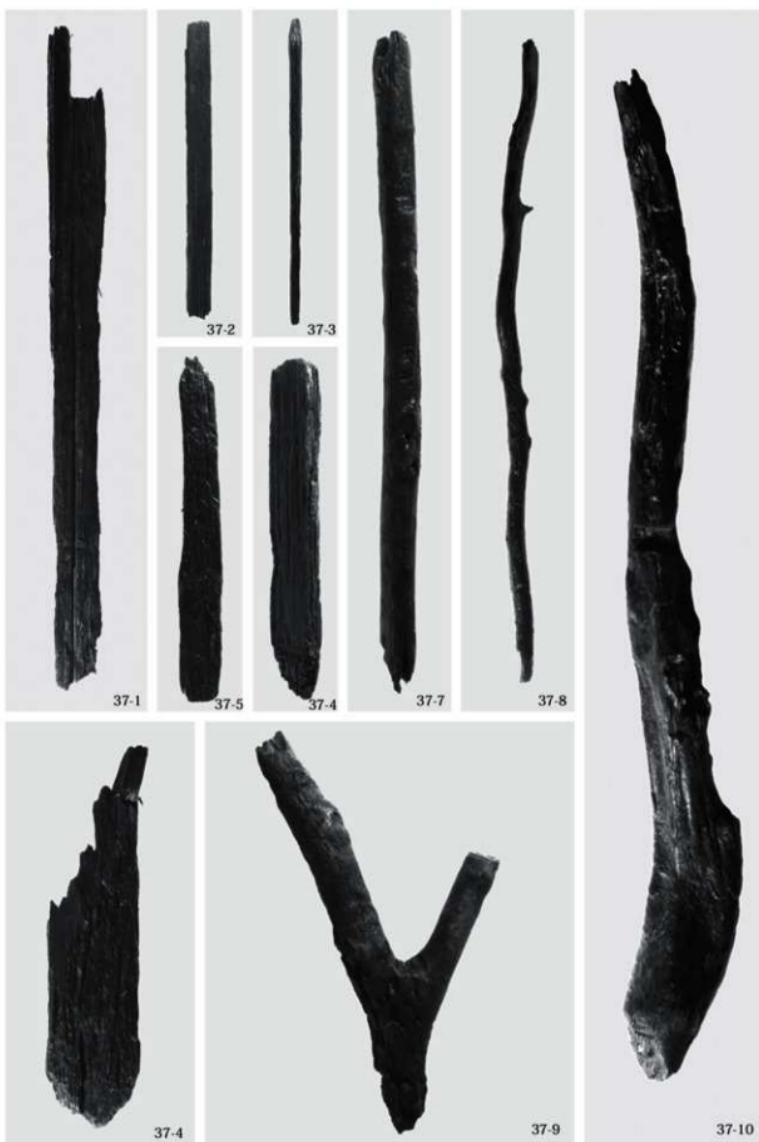
1. 掘立柱建物、SD05(新)出土遺物(1) (第26、34図)



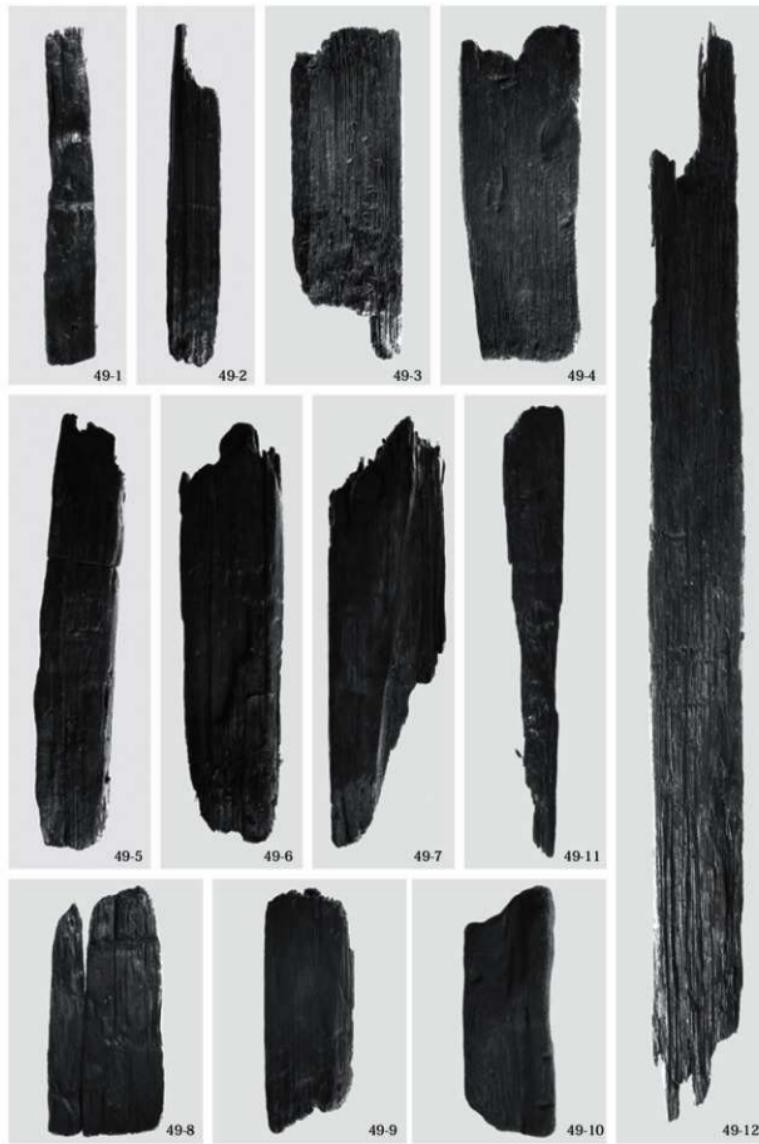
1. SD05(新) 出土遺物(2) (第34、35図)



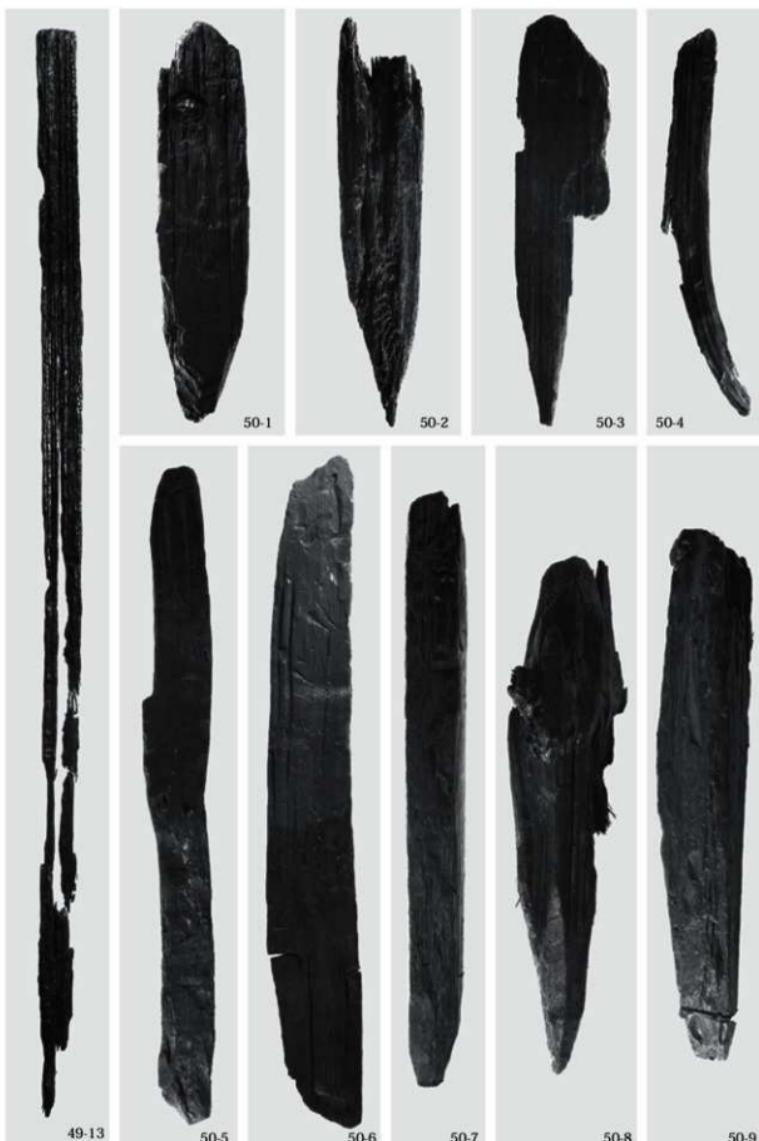
1. SD05(新) 出土遺物(3) (第36図)



1. SD05(新)出土遺物(4) (第37図)



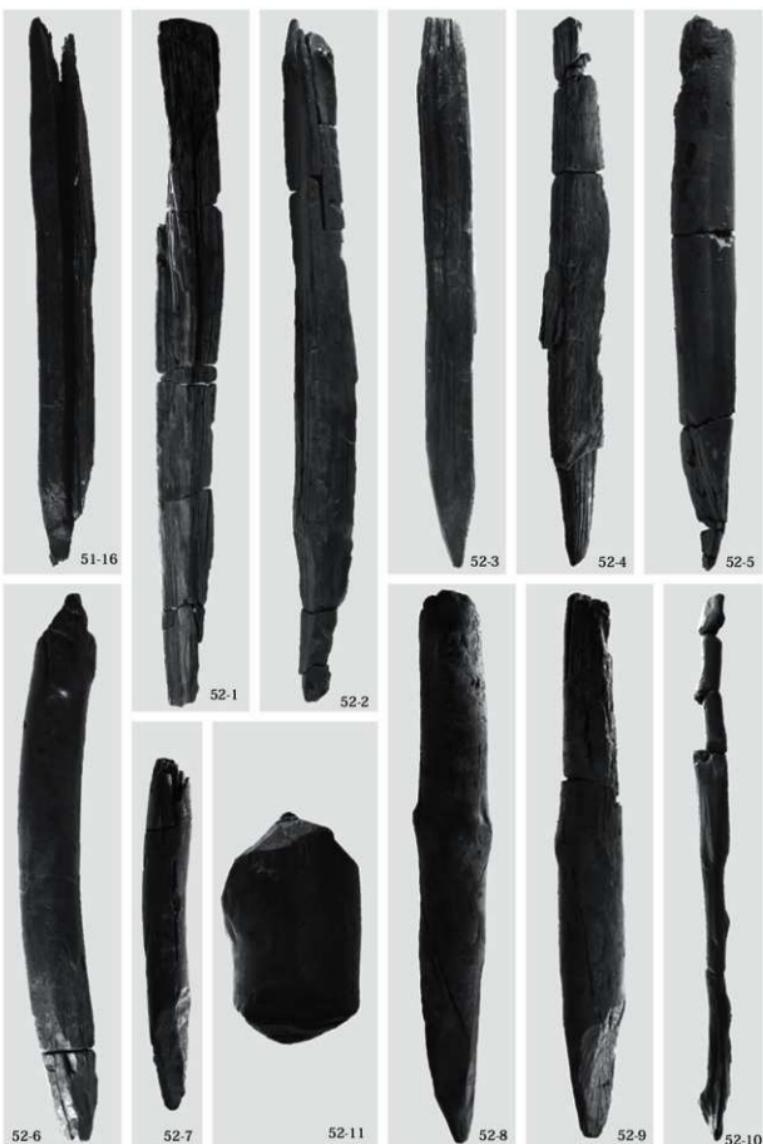
1. SD05(古)出土遺物 (1) (第49図)



1. SD05(古)出土遺物(2) (第49、50図)



1. SD05(古)出土遺物(3) (第51図)



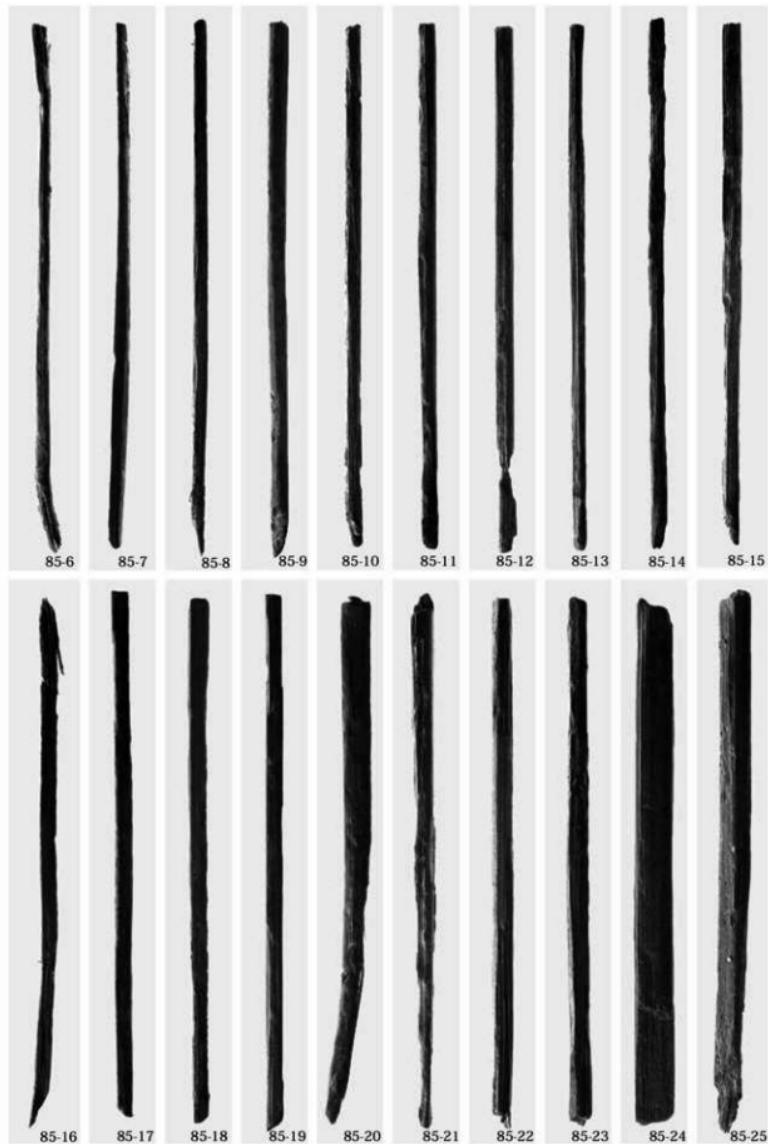
1. SDO5(古)出土遺物(4) (第51、52図)



1. SD17 出土遺物(1) (第82図)



1. SD17 出土遺物 (2) (第83図)



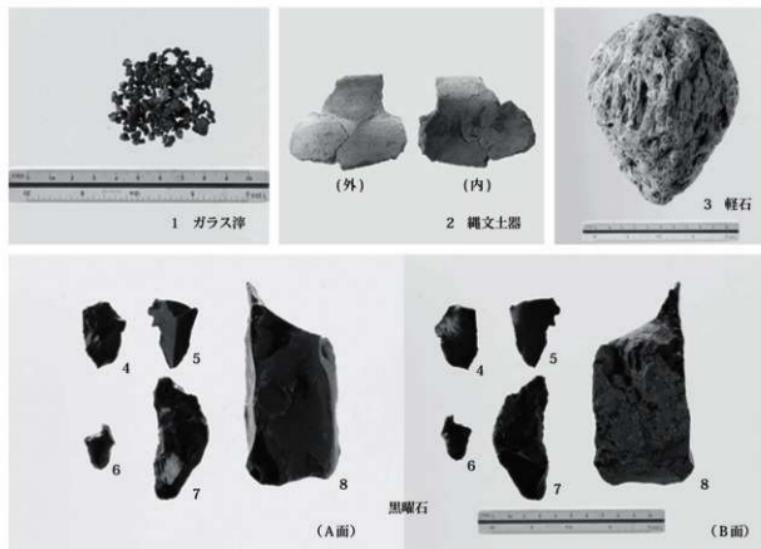
1. SDO4 出土遺物 (1) (第 85 図)



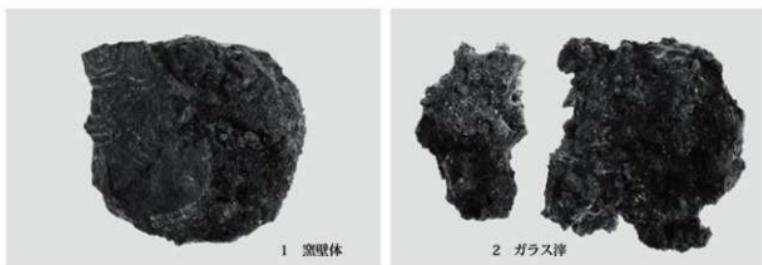
1. SD04 出土遺物 (2) (第86図)



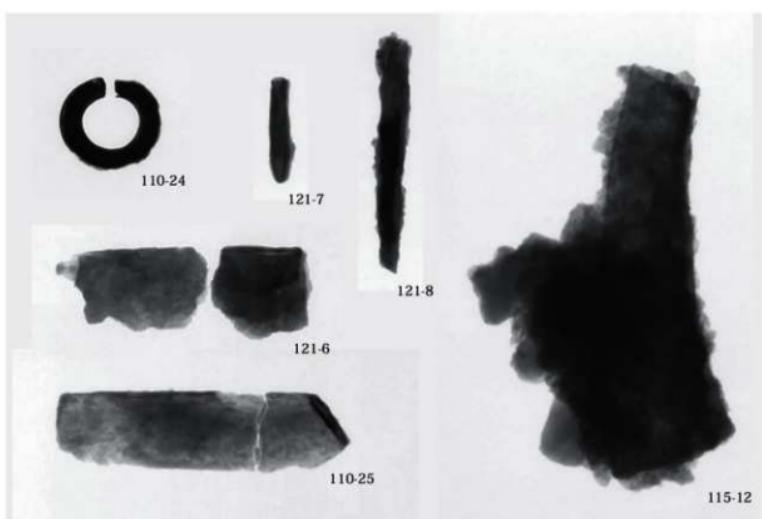
1. 第VII層より下層・第VI、VII層出土遺物（第106、112図）



2. 写真掲載のみ出土遺物(1)



1. 写真掲載のみ出土遺物 (2)



2. 出土金属製品X線透過画像 (第81、110、115、121図)

報告書抄録

印刷仕様

紙 質 表 紙 レザック四六判 220kg
本 文 上質紙 A 判 57.5kg
写真図版 上質コート紙 A 判 70.5kg
D T P Windows 10
Adobe InDesignCC InDesignCS5.5
PhotoShopCC PhotoShopCS5.1
IllustratorCC IllustratorCS5.1
画像原稿 階調画像線数 175 線 (AM スクリーン)

平ノ前遺跡

一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

発 行：2019 年（平成 31 年）3 月

発行者：島根県教育委員会

編 集：島根県教育厅埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地

Tel 0852-36-8608 E-mail : maibun@pref.shimane.lg.jp

印 刷：有限会社 高浜印刷